茨城県教育財団文化財調査報告第293集

羽黒山遺跡2
大戸富士山遺跡2

やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う
埋蔵文化財調査報告書Ⅷ

平成20年3月

茨城県
財団法人　茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第293集

羽黒山遺跡2
大戸富士山遺跡2

やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う
埋蔵文化財調査報告書Ⅷ

平成20年3月

茨城県
財団法人　茨城県教育財団

序

茨城県は，子どもからお年寄り，そして障害をもつ方々が安心して暮らせるやさしいまちづくりを推進しております。その具体的な施策の一つとして，保健・医療・福祉サービスや世代間の交流などが充実したまちづくりのモデルである，やさしさのまち「桜の郷」整備事業を推進しています。

この事業予定地内には羽黒山遺跡・大戸富士山遺跡をはじめ，宮後遺跡，石原遺跡，大塚遺跡，綱山遺跡など数多くの遺跡が所在します。

財団法人茨城県教育財団は，茨城県高齢福祉課から埋蔵文化財発掘調査についての委託を受け，平成18年４月から同年８月，平成19年４月から同年５月まで羽黒山遺跡・大戸富士山遺跡の発掘調査を実施しました。

本書は，羽黒山遺跡・大戸富士山遺跡の調査成果を収録したものです。学術的な研究資料としてはもとより，郷土の歴史に対する理解を深めるために活用されることによりまして，教育・文化の向上の一助となれば幸いです。

最後になりますが，発掘調査から報告書の刊行に至るまで，委託者である茨城県高齢福祉課から多大な御協力を賜りましたことに対し，厚く御礼申し上げますとともに，茨城県教育委員会，茨城町教育委員会をはじめ，関係各位からいただいた御指導，御協力に対し深く感謝申し上げます。

平成20年３月

財団法人　茨城県教育財団
理事長　人　見　實　徳

例　　言

1　本書は，茨城県の委託により，財団法人茨城県教育財団が平成18年度及び平成19年度に発掘調査を実施した，茨城県東茨城郡茨城町大字大戸字宿ノ内2013番地ほかに所在する羽黒山遺跡，平成19年度に実施した，同町大字大戸字原前3287番地の24ほかに所在する大戸富士山遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査期間及び整理期間は，以下のとおりである。

調　査

羽黒山遺跡	平成18年４月１日～平成18年８月31日
	平成19年４月１日～平成19年５月31日
大戸富士山遺跡	平成19年４月１日～平成19年５月31日
整　理	平成19年７月１日～平成20年１月31日

3　発掘調査は，平成18年度は調査課長川井正一，平成19年度は調査課長瓦吹堅のもと，以下の者が担当した。

羽黒山遺跡

平成18年度

首席調査員兼班長	樫村　宣行
主　任　調　査　員	田原　康司
主　任　調　査　員	小野　政美

平成19年度

首席調査員兼班長	藤田　哲也
主　任　調　査　員	寺内　久永
調　査　員	作山　智彦

大戸富士山遺跡

首席調査員兼班長	藤田　哲也
主　任　調　査　員	寺内　久永
調　査　員	作山　智彦

4　整理及び本書の執筆・編集は，整理課長村上和彦のもと，主任調査員田原康司が担当した。

5　本書の作成にあたり，遺物包含層から出土した縄文土器については，財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社課長補佐兼文化財調査事務所長鈴木素行氏に御指導いただいた。また，羽黒山遺跡から出土した炭化材の放射性炭素年代測定と樹種同定については，株式会社吉田生物研究所に委託し，考察は付章として巻末に掲載した。なお，石鏃・剥片の実測については，株式会社アルカに委託した。

凡　　例

1　地区設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系座標を原点とし，X＝＋36,240m，Y＝＋52,080mの交点を基準点（A１a1）とした。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し，さらに，この大調査区を東西・南北に各々10等分し，４m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用い，北から南へA，B，C…，西から東へ１，２，３…とし，「A１区」，「B２区」のように呼称した。さらに小調査区は，北から南へa，b，c…j，西から東へ1，2，3…0と小文字を付し，名称は，大調査区の名称を冠して「A１a1区」，「B２b2区」のように呼称した。

2　実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構　ＳＩ－住居跡　ＳＢ－掘立柱建物跡　ＳＡ－柵跡　ＳＫ－土坑　ＳＥ－井戸跡　ＳＤ－溝跡
ＳＦ－道路跡　ＳＹ－炭焼窯跡　Ｐ－ピット　ＰＧ－ピット群　Ｋ－撹乱　Ｗ・Ｔ－修復痕
ＳＳ－旧石器調査区

遺物　Ｐ－土器　ＴＰ－拓本記録土器　ＤＰ－土製品　Ｑ－石器・石製品　Ｍ－金属製品・古銭
Ｇ－ガラス製品

土層　Ｋ－撹乱

3　遺構・遺物実測図の作成方法については，次のとおりである。

(1) 遺構全体図は縮尺800分の１とし，各遺構の実測図は縮尺60分の１を基本とし，80分の１，100分の１，120分の１で掲載した。

(2) 遺物は原則として３分の１の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は，個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は，次のとおりである。

焼土・赤彩・施釉・漆　炉・火床面・火熱痕・繊維土器断面
竈材・粘土・炭化材・黒色処理・道路跡硬化面　柱痕跡・煤・油煙
●土器　○土製品　□石器・石製品　△金属製品　-･-･-･-･- 硬化面

(4) 石器集中地点の表示については，個々の実測図に凡例を記載した。

4　土層観察と遺物における色調の判定は，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。

5　遺構一覧表・遺物観察表の表記は次のとおりである。

(1) 計測値の（　）内の数値は現存値を，［　］内の数値は推定値を示した。計測値の単位は，m，cm，mm，gである。

(2) 遺物観察表の備考の欄は，残存率，写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

6　「主軸」は，竈（炉）を持つ竪穴住居跡については竈を通る軸線とし，他の遺構については長軸（径）を主軸とみなした。「主軸・長軸（径）方向」は主軸が座標北からみて，どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例　N－10°－E）。

抄　　録

ふりがな	はぐろやまいせき　　おおどふじやまいせき
書名	羽黒山遺跡2　大戸富士山遺跡2
副書名	やさしさのまち『桜の郷』整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻次	Ⅷ
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告
シリーズ番号	第293集
編著者名	田原　康司
編集機関	財団法人　茨城県教育財団
所在地	〒310－0911　茨城県水戸市見和1丁目356番地の2　　TEL 029（225）6587
発行年月日	2008（平成20）年3月24日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
羽黒山遺跡	茨城県東茨城郡 茨城町大字大戸字 宿ノ内2013番地ほか	08302 － 186	36度 19分 16秒	140度 24分 59秒	25～ 30m	20060401～ 20060831 20070401～ 20070531	15,324m² 1,134m²	やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う事前調査
大戸富士山遺跡	茨城県東茨城郡茨城町大字大戸字原前 3287番地の24ほか	08302 － 224	36度 19分 16秒	140度 24分 59秒	24～ 29m	20070401～ 20070531	1,000m²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
羽黒山遺跡	包含層	縄文	遺物包含層　1か所 陥し穴　5基 集石遺構　1か所 炉穴跡　2基	縄文土器，石器（有舌尖頭器・削器・石鏃・剥片・磨製石斧・敲石・磨石）	
	集落跡	古墳	竪穴住居跡　2軒	土師器，土製品	
		奈良・平安	竪穴住居跡　19軒 掘立柱建物跡　1棟 土坑　1基	土師器，須恵器，土製品（土鈴・支脚），鉄製品（鎌・刀子・釘）	
		中・近世	掘立柱建物跡　2棟 土坑　2基 溝跡　6条 井戸跡　1基 道路跡　1条	陶磁器，土師質土器，古銭（熙寧元寶・寛永通寶）	
	生産跡	近代	井戸跡　1基 炭焼窯跡　1基 土坑　3基	陶磁器，ガラス瓶，鉄製品（鎌）	
	その他	時期不明	竪穴住居跡　1軒 溝跡　1条 道路跡　1条 土坑　28基 ピット群　4か所	陶器，瓦質土器	
大戸富士山遺跡	狩猟場	縄文	陥し穴　2基		
	集落跡	奈良・平安	竪穴住居跡　5軒 掘立柱建物跡　1棟	土師器，須恵器，鉄製品（刀子）	
		中・近世	溝跡　1条	陶器（甕）	
	その他	時期不明	土坑　5基 柵跡　1列	陶磁器	

要約	両遺跡は小橋川左岸の同じ台地上に位置し，羽黒山遺跡は，縄文時代から近代にかけての複合遺跡で，遺物包含層から多量の縄文土器片が出土している。古墳時代から平安時代にかけては，竪穴住居跡，掘立柱建物跡が確認されている。大戸富士山遺跡も羽黒山遺跡と同様の遺構が確認されており，隣接する二つの遺跡は，縄文時代は狩猟の場，古墳時代前期と平安時代は小橋川から延びる小支谷を取り囲むように集落が形成されていたものと考える。

目　　次

序
例言
凡例
抄録
目次
第１章　調査経緯 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査経過 …… 1
第２章　位置と環境 …… 3
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3
第３章　羽黒山遺跡 …… 9
　第１節　遺跡の概要 …… 9
　第２節　基本層序 …… 9
　第３節　遺構と遺物 …… 11
　　１　旧石器時代の遺物 …… 11
　　２　縄文時代の遺構と遺物 …… 11
　　(1) 遺物包含層 …… 11
　　(2) 集石遺構 …… 41
　　(3) 炉穴跡 …… 44
　　(4) 陥し穴 …… 45
　　３　古墳時代の遺構と遺物 …… 48
　　竪穴住居跡 …… 48
　　４　奈良・平安時代の遺構と遺物 …… 52
　　(1) 竪穴住居跡 …… 52
　　(2) 掘立柱建物跡 …… 92
　　(3) 土坑 …… 93
　　５　中・近世の遺構と遺物 …… 93
　　(1) 掘立柱建物跡 …… 93
　　(2) 土坑 …… 96
　　(3) 井戸跡 …… 98
　　(4) 溝跡 …… 98
　　(5) 道路跡 …… 104
　　６　近代の遺構と遺物 …… 104
　　(1) 井戸跡 …… 104
　　(2) 炭焼窯跡 …… 106
　　(3) 土坑 …… 107
　　７　その他の遺構と遺物 …… 109
　　(1) 竪穴住居跡 …… 109
　　(2) 溝跡 …… 110
　　(3) 道路跡 …… 111
　　(4) その他の土坑 …… 113
　　(5) ピット群 …… 117
　　(6) 遺構外出土遺物 …… 122
　　(7) 調査K区のトレンチ調査 …… 122
第４章　大戸富士山遺跡 …… 123
　第１節　遺跡の概要 …… 123
　第２節　基本層序 …… 123
　第３節　遺構と遺物 …… 125
　　１　縄文時代の遺構と遺物 …… 125
　　陥し穴 …… 125
　　２　奈良・平安時代の遺構と遺物 …… 126
　　(1) 竪穴住居跡 …… 126
　　(2) 掘立柱建物跡 …… 137
　　３　中・近世の遺構と遺物 …… 138
　　溝跡 …… 138
　　４　その他の遺構と遺物 …… 139
　　(1) 柵跡 …… 139
　　(2) 土坑 …… 140
　　(3) 遺構外出土遺物 …… 141
第５章　まとめ …… 142
付章 …… 157
写真図版

第1章　調　査　経　緯

第1節　調査に至る経緯

茨城県は，福祉・医療・健康増進・生きがいづくり等の機能を備えた高齢化社会に対応できる総合的な「人にやさしいまちづくり」のモデルとなる新しいまちづくりとして，茨城県の中央に位置する茨城町にやさしさのまち「桜の郷」整備事業を推進している。

平成９年１月20日，茨城県知事は茨城県教育委員会教育長に対して，やさしさのまち「桜の郷」整備事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は，平成14年８月23日，平成17年２月２日に現地踏査を，平成14年９月３～５日，９・10日，平成15年３月３～５日，11・12日，12月９日，平成17年３月15～18日，９月27～30日，10月17日，平成18年９月28日に試掘調査を実施し，遺跡の所在を確認した。平成14年９月27日，平成15年３月27日，12月25日，平成17年３月31日，10月21日，平成18年10月31日茨城県教育委員会教育長は，茨城県知事あてに，事業地内に羽黒山遺跡・大戸富士山遺跡が所在すること及び別途協議が必要であることを回答した。

平成14年12月24日，平成17年２月18日，茨城県知事は茨城県教育委員会教育長に対して，文化財保護法第57条の３第１項（現　第94条）の規定に基づき，土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は現況保存が困難であることから，記録保存のための発掘調査が必要であると決定し，平成15年１月15日，平成17年２月25日，茨城県知事あてに，工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成15年２月４日，平成17年３月16日，平成18年２月20日，平成19年２月26日，茨城県知事は茨城県教育委員会教育長に対して，やさしさのまち「桜の郷」整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議した。

平成15年２月10日，平成17年３月23日，平成18年２月23日，平成19年２月26日，茨城県教育委員会教育長は，茨城県知事あてに，羽黒山遺跡・大戸富士山遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し，併せて埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は，茨城県知事から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け，平成15年６月１日から平成15年12月31日，平成17年４月１日から平成18年３月31日，平成18年４月１日から平成18年８月31日，及び平成19年４月１日から平成19年５月31日まで羽黒山遺跡・大戸富士山遺跡の発掘調査を実施することとなった。

第2節　調　査　経　過

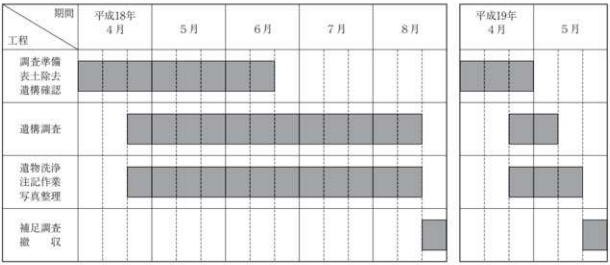
羽黒山遺跡は，第１次調査として平成15年６月１日から平成15年12月31日まで調査を実施した。なお，平成15年９月15日，調査の進捗から，当初の調査面積9,829m^{2}に1,444m^{2}が追加となる契約変更がなされた。第２次調査として平成17年４月１日から平成18年３月31日まで，8,134m^{2}の調査を実施した。なお，平成17年10月18日，調査の進捗から，7,722m^{2}が第２次調査分として追加となる契約変更がなされた。平成18年１月18日，第２次調査分のうち，調査に入れない一部を除いた6,588m^{2}において，業務量が予定より大きく上回ったため，東部の3,031m^{2}を17度調査分とし，西部の3,557m^{2}を次年度送りとした。第３次調査は，平成18年４月１日から平成18年８月31日まで実施され，前年度から繰り越された面積と合わせた16,458m^{2}が調査された。第４次調査

は，平成19年４月１日から平成19年５月31日まで実施され，1,134m²が調査された。

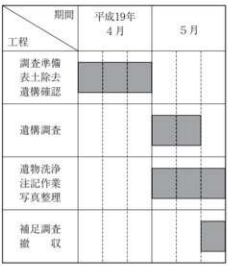
大戸富士山遺跡は，第１次調査として平成17年９月１日から平成18年１月31日まで調査を実施した。なお，調査の進捗から，平成17年９月12日当初の調査面積11,724m²に加えて1,630m²を追加する契約変更がなされている。第２次調査として平成19年４月１日から平成19年５月31日まで，1,000m²の調査を実施した。

以下調査の経緯については概要を表で記載する。

羽黒山遺跡



大戸富士山遺跡



第2章　位置と環境

第1節　地理的環境

羽黒山遺跡及び大戸富士山遺跡[1]は，東茨城郡茨城町大字大戸に所在している。

茨城町は，北東側に水戸市，西側は旧内原町と隣接しており，南側には涸沼前川，東側には赤穂川，西側には小橋川がそれぞれ東流して涸沼川に注ぎ込んでいる。これらの河川流域の沖積低地には水田地帯が広がり，台地上は畑地・樹園地として利用されている。

台地を形成している最も古い地層は，新生代第三紀の水戸層と呼ばれる泥岩質層である。水戸層の上には第四紀の地層が不整合に堆積し，さらに粘土・砂からなる見和層，礫からなる上市層，灰褐色の常総粘土層，関東ローム層が連続して堆積しており，最上部は腐食土層となっている[2]。

羽黒山遺跡及び大戸富士山遺跡は，水戸市中心部から南西に約８kmの茨城町大戸地区に位置し，涸沼前川の支流である小橋川と赤穂川に開析された，標高25～30mの西に延びる舌状台地上の中央部に立地している。羽黒山遺跡は，西は小橋川が開析した低地に下る斜面部，東から南には涸沼前川まで延びる台地の平坦部に位置している。大戸富士山遺跡は，羽黒山遺跡の北側に位置し，北から南西にかけては小橋川に下る小谷津によって形成された斜面部に，東側は台地上の平坦部に広がっている。調査前現況は，いずれも山林，畑地である。

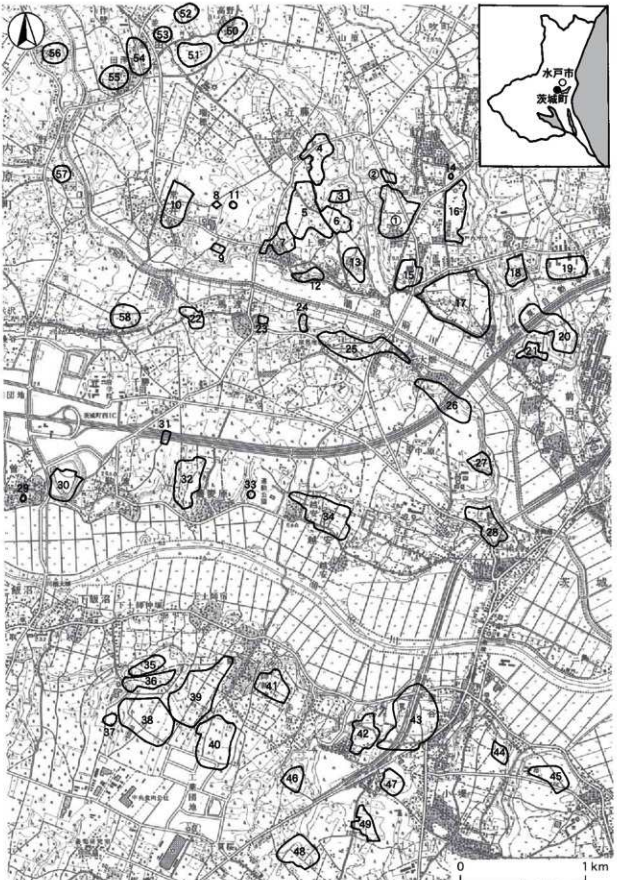
第2節　歴史的環境

羽黒山遺跡及び大戸富士山遺跡周辺からは，分布調査や発掘調査により多数の遺跡が確認されている[3]。特に，涸沼川・涸沼前川に面する台地及び台地縁辺部には各時代の遺跡が集中しており，この地域が原始・古代から生活に適していたことがうかがえる（第１図）。とりわけ，涸沼前川の支流である小橋川を挟んで当地域と対峙している鋼山遺跡[4]〈３〉，宮後遺跡[5]〈４〉，大塚遺跡[6]〈５〉，石原遺跡[7]〈６〉，木戸遺跡[8]〈７〉は，平成10年度から16年度にかけて発掘調査が実施され，地理的環境や時期・様相などから，それぞれが密接に関連する遺跡である。

ここでは，羽黒山遺跡及び大戸富士山遺跡に関連する主な遺跡を中心に時代を追って述べる。

旧石器時代の遺跡は，瑪瑙，安山岩のナイフ形石器などの製品や剥片が多量に出土し，石器製作の場所であることが確認された大畑遺跡[9]〈26〉をはじめ，東山遺跡〈24〉，南小割遺跡[10]〈30〉が涸沼前川やその支流に面する台地の舌状地に見られる。羽黒山遺跡及び大戸富士山遺跡においても平成15・17年度の調査で石核，製品，剥片などが出土した石器製作跡が確認されている。

縄文時代の遺跡は，涸沼，涸沼川，涸沼前川に面した台地上に多数確認されており，それらは中期を中心にほぼ全期にわたっている。特に宮後遺跡からは前期前半から生活の痕跡が確認され，涸沼川北岸の越安貝塚〈33〉からはマガキやハマグリがみられ，涸沼前川南岸のシッペイ沢遺跡〈22〉では，汽水性のヤマトシジミが多量に出土している[11]。このことから，この時期は縄文海進の絶頂期であり，遺跡の南に広がる涸沼前川流域の低地は汽水域，涸沼川岸流域の低地には海水が侵入していたと想定され，当地域は食料獲得の場として好環境であったと考えられる。これらの遺跡のほかに前期では，小鶴遺跡[12]〈28〉，東山遺跡，奥谷遺跡[13]〈43〉など小規模な集落，越安貝塚や南小割遺跡では地点貝塚が確認されている。中期では，平成10・11年度に発掘調査



第1図　羽黒山遺跡・大戸富士山遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院1：25,000「小鶴」）

表1　羽黒山遺跡・大戸富士山遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代 旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中近世	番号	遺跡名	時代 旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中近世
①	羽黒山遺跡	○	○	○	○	○	○	30	南小割遺跡	○	○		○	○	○
②	大戸富士山遺跡	○	○		○	○	○	31	大作遺跡	○	○		○		
3	綱山遺跡		○	○	○	○	○	32	宮上遺跡		○	○	○	○	
4	宮後遺跡	○	○	○	○	○	○	33	越安貝塚		○				
5	大塚遺跡		○	○	○	○	○	34	中畑遺跡		○	○	○	○	
6	石原遺跡		○	○	○	○		35	小山台古墳群				○		
7	木戸遺跡			○		○		36	小山台遺跡		○		○	○	
8	近藤前遺跡		○		○	○		37	高山遺跡		○		○	○	
9	八幡山遺跡		○		○	○		38	面山遺跡		○		○	○	
10	杢山遺跡			○		○		39	下土師遺跡		○		○	○	
11	近藤前古墳				○			40	面山東遺跡					○	
12	猫崎遺跡		○	○	○			41	下土師東遺跡		○		○	○	
13	稲荷宮遺跡			○	○	○		42	赤坂南坪遺跡		○		○	○	
14	神宮前古墳				○			43	奥谷遺跡		○	○	○	○	○
15	寺坪遺跡		○	○	○	○		44	小堤遺跡		○	○	○		○
16	大戸神宮寺遺跡		○		○	○		45	三ツ塚遺跡		○	○	○	○	
17	大戸下郷遺跡		○	○	○	○	○	46	仲丸遺跡		○		○		
18	平須館跡						○	47	冨士山遺跡		○		○	○	
19	山中遺跡		○	○	○			48	小幡北山埴輪製作遺跡				○		
20	矢倉遺跡		○	○	○	○		49	北山東遺跡		○			○	
21	圷戸遺跡			○	○			50	台遺跡		○		○	○	
22	シッペイ沢遺跡		○		○			51	高田館跡						○
23	東畑遺跡		○	○	○	○		52	西遺跡		○				
24	東山遺跡	○	○	○	○	○		53	後原遺跡					○	○
25	上の前遺跡		○	○	○	○		54	後遺跡						○
26	大畑遺跡	○	○	○	○	○	○	55	表遺跡					○	○
27	蔵作遺跡		○		○			56	涸池遺跡		○				○
28	小鵜遺跡		○	○				57	大谷原遺跡		○			○	
29	宝塚古墳				○			58	出兵沢遺跡		○			○	

が実施され，環状集落であることが明らかになった宮後遺跡をはじめ，塚越遺跡，天古崎遺跡，赤坂南坪遺跡〈42〉などが分布している。羽黒山遺跡及び大戸富士山遺跡からも該期の土器片が出土しており，当時の人々の生活領域に含まれていたと考えられる。後・晩期は気温が低下し，自然環境が変化したことから集落の規模が縮小する傾向がみられる。当地域の遺跡としては，小堤貝塚[4]〈44〉，下土師遺跡〈39〉などをあげることができる。

弥生時代は，後期後半（十王台式期）の遺跡が涸沼川及び涸沼前川流域を中心に多く確認されている。特に涸沼前川流域では調査例が多く，矢倉遺跡[15]〈20〉，大畑遺跡，石原遺跡，宮後遺跡，大塚遺跡，綱山遺跡，大戸下郷遺跡[16]〈17〉などがあげられる。該期に先行する遺跡としては長岡式土器が出土している長岡遺跡や奥谷遺跡，小鶴遺跡などがあり，涸沼川流域を中心とする弥生時代後半の小文化圏が形成されていたことが想定されている。また，壺形土器では，頸部文様の施文法や施文範囲などに違いが見られるなど，系譜差などや遺跡間の継続的なつながりも想起される。また，これらの遺跡からは樽式土器や二軒屋式土器など，群馬県や栃木県を中心に分布する土器群も出土しており，他地域との交流や流通経路も想定できる。

弥生時代から古墳時代への過渡期の遺跡では，綱山遺跡をはじめ弥生土器と土師器が共伴する住居跡が確認されており，弥生時代終末期から古墳時代へと移行する当地域の様相を知る手がかりとなっている。涸沼前川の下流に位置する奥谷遺跡からは，古墳時代前期の豪族居館跡や住居跡が確認され，4世紀末から5世紀初頭に比定される宝塚古墳〈29〉を勘案すると[17]，支配者層の存在が想定される。また，当町域には宝塚古墳に後続する中期から後期にかけての古墳61基や小幡北山埴輪製作遺跡[18]〈48〉があり，同じ時期の集落は，河川に近い台地上に形成された奥谷遺跡，南小割遺跡，綱山遺跡，大戸下郷遺跡などがあげられる。

奈良・平安時代の町域は，那賀郡八部郷，茨城郡島田郷・安候郷・白川郷及び鹿島郡宮前郷に属しており，大戸地区は，那賀郡八部郷に比定されている[19,20]。この時期の遺跡も数多く確認されており，奥谷遺跡，宮後遺跡，大塚遺跡，綱山遺跡などは代表的な遺跡帀ある。奥谷遺跡では，百数十点の墨書土器のほか円面硯や刀子が出土している。特に墨書の「曹ヵ司」は，官衙などの庁舎・宿直所・局・部屋などの建物を意味し，奥谷遺跡が公共的な施設を有する集落であったことを示唆している。このほかの遺跡からも数多くの墨書土器が出土しており，宮後遺跡と大塚遺跡から出土した「南主」や面山遺跡〈38〉から出土した「土師神主」などは注目される。宮後遺跡・大塚遺跡・綱山遺跡は墨書土器の出土量の多さも注目されるが，奥谷遺跡と同様に円面硯や灰釉陶器の出土量，さらに腰帯具などの出土から，この地域一帯が官衙的な施設を内包する集落であると想定される。また，大塚遺跡からは，倉庫群と考えられる掘立柱建物跡群が「ロ」の字状に整然と並んで確認されており，律令体制下にある地方の末端支配機構を考える上で重要な遺跡である。

中世の遺跡は主に城館跡で，小幡城跡をはじめとする城館跡が涸沼川を中心に，台地突端部を利用して築かれ，その周辺部からは，溝跡や地下式壙，方形竪穴遺構，井戸跡の遺構や土師質土器や陶器類などの遺物が出土している。常陸大掾氏系大戸氏一族の所領であった大字前田の万東山地区からは，13世紀前半と考えられる「青白磁蓮牡丹文梅瓶」が出土しており，中世においても涸沼川・涸沼前川沿岸に有力氏族が居住していたことがうかがえる。

近世になると，町の中心部を南北に走る水戸街道に沿った長岡や小幡が宿駅として発展し，涸沼南岸の網掛，宮ヶ崎，海老沢の地は水上交通の要衝として栄え，水戸藩をはじめ，仙台藩など奥州諸藩と江戸を結ぶ物資輸送の中継地として重要な役割を果たしていた。

※　文中の〈　〉内の番号は，表1及び第1図の該当番号と同じである。

註

1）石川義信・小室弘毅「羽黒山遺跡上巻　大戸富士山遺跡下巻　やさしさのまち『桜の郷』整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅶ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第279集　2007年３月

2）日本の地質『関東地方』編集委員会『日本の地質３　関東地方』共立出版　1986年10月

3）茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図（地名表編・地図編）』茨城県教育委員会　2001年３月

4）荒蒔克一郎・田中幸夫「鋼山遺跡　やさしさのまち『桜の郷』整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅵ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第243集　2005年３月

5）a　川又清明・野田良直・吹野富美夫・浅野和久「宮後遺跡１　やさしさのまち『桜の郷』整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第188集　2005年３月

b　和田清典・吹野富美夫・浅野和久・荒蒔克一郎・駒沢悦郎「宮後遺跡２　やさしさのまち『桜の郷』整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第240集　2005年３月

c　川又清明・浅野和久「宮後遺跡３　やさしさのまち『桜の郷』整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第241集　2005年３月

6）a　長谷川聡・田中幸夫・小野克敏「大塚遺跡１　やさしさのまち『桜の郷』整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第242集　2005年３月

b　井上琢也・小林健太郎「大塚遺跡２　木戸遺跡　主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告Ⅴ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第258集　2006年３月

7）村上和彦「石原遺跡　やさしさのまち『桜の郷』整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第163集　2000年３月

8）註6）bに同じ

9）長谷川聡「北関東自動車道（友部～水戸）建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ　大作遺跡・大畑遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第136集　1998年３月

10）中村敏治・江幡良夫「茨城中央工業団地造成工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ　南小割遺跡・権現堂遺跡・親塚古墳・後原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第129集　1998年３月

11）茨城町史編さん委員会「茨城町史　通史編」茨城町教育委員会　1995年２月

12）鯉渕和彦「一般国道6号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書　奥谷遺跡・小鵜遺跡」「茨城県教育財団文化財調査報告」第50集　1989年３月

13）註12）に同じ

14）井上義安「小堤貝塚」茨城町史編さん委員会　1986年11月

15）飯島一生「北関東自動車道（友部～水戸）建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ　矢倉遺跡・後口原遺跡」「茨城県教育財団文化財調査報告」第135集　1998年３月

16）a　近藤恒重「大戸下郷遺跡　主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」「茨城県教育財団文化財調査報告」第216集　2004年３月

b　鈴引英樹・松本直人「大戸下郷遺跡２　主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」「茨城県教育財団文化財調査報告」第257集　2006年３月

17）註11）に同じ

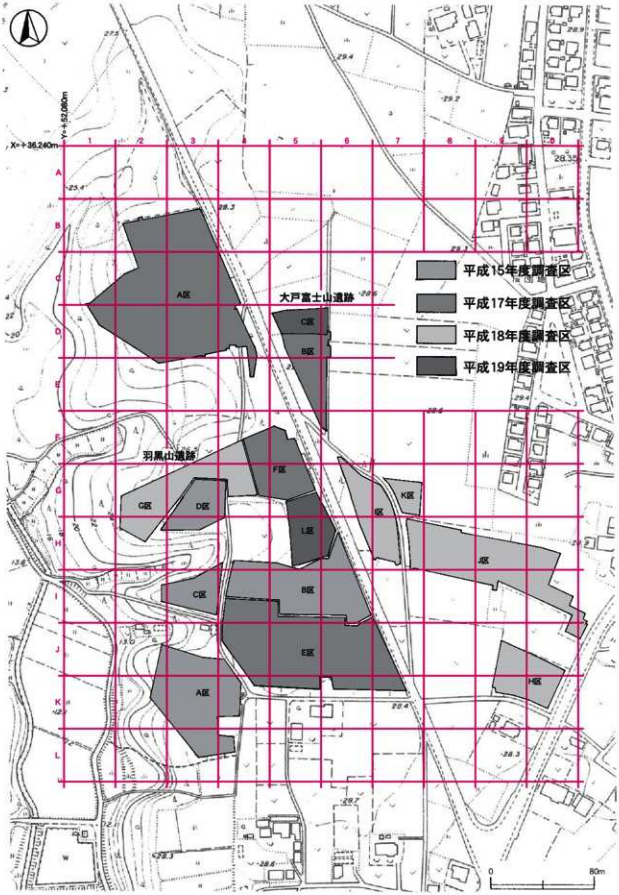
18）大塚初重・井上義安ほか「小幡北山埴輪製作遺跡」茨城町　1986年２月

19）茨城町史編さん委員会「茨城町史　地誌編」茨城町教育委員会　1995年２月

20）中山信名（栗田寛補訂）「宮崎報恩会版　新編常陸国誌」崙書房　1979年12月

参考文献

・茨城県立歴史館「茨城県史料　考古資料編　弥生時代」茨城県　1991年３月
・茨城町史編さん委員会「茨城町史　通史編」茨城町教育委員会　1995年２月



第２図　羽黒山遺跡・大戸富士山遺跡調査区設定図

第3章　羽黒山遺跡

第1節　遺跡の概要

羽黒山遺跡は，東茨城郡茨城町の北西部に位置し，涸沼前川の支流である小橋前川の左岸，標高25～30mの舌状台地上に立地している。平成15年度には11,273m^2，平成17年度には11,165m^{2}が調査され，調査の結果，竪穴住居跡66軒（縄文時代１，古墳時代14，奈良・平安時代48，時期不明３），方形竪穴遺構１基（時期不明），掘立柱建物跡17棟（奈良・平安時代16，中・近世１），柱穴列跡３列，陥し穴11基，井戸１基，大形円形土抗１基，土坑197基，土坑墓７基，炭焼窯跡１基，溝跡13条，道路跡２条，ピット群８か所，旧石器時代の石器集中地点３か所などが確認され，奈良・平安時代を中心とした旧石器時代から近世にわたる複合遺跡であることが確認された。主な遺物は，縄文土器片，土師器片（坏・高台付坏・高台付皿・甕・甑），須恵器片（坏・高台付坏・蓋・鐙・高鐙・短頸壺・甕），土製品（球状土錘・紡錘車），石器・石製品（ナイフ形石器・細石刃・石核・剥片・石鏃・磨石・敲石・砥石），鉄製品（刀子・鎌・釘），古銭などである。特に旧石器時代の石器集中地点から出土した石核や細石刃が注目されている。

今回の調査面積は，平成18年度調査分の15,324m^{2}と平成19年度調査分の1,134m^{2}を合わせた16,458m^{2}である。調査前現況は山林・畑地で，調査範囲の一部が平成15・17年度の範囲内に位置し，その他は平成15・17年度調査分の東側に位置している。確認された遺構は，縄文時代の陥し穴５基，集石遺構１か所，炉穴跡２基，遺物包含層１か所，竪穴住居跡22軒（古墳時代２，奈良・平安時代19，時期不明１），掘立柱建物跡３棟（奈良・平安時代１，中・近世２），井戸２基（近世・近代），土坑34基（平安時代１，中・近世２，近代３，時期不明28），炭焼窯跡１基（近代），溝跡７条（中・近世６，時期不明１），道路跡２条（中・近世１，時期不明１），ピット群４か所などである。遺物は，遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に24箱出土しており，大半は遺物包含層から出土した縄文時代早・前期の土器片である。主な遺物は，縄文土器片（深鉢），土師器片（坏・高台付坏・甕・甑），須恵器片（坏・高台付坏・蓋・長頸壺・双耳付瓶・甕），陶磁器（おろし皿・碗・瓶子・壺），土師質土器（小皿・火鉢），土製品（土鈴・支脚），石器・石製品（磨製石斧・削器・有舌尖頭器・石鏃・剥片・磨石・敲石），鉄製品（刀子・鎌・釘），古銭（熙寧元寶・寛永通寶）などである。なお，調査年度の順に従い，便宜上G～L区に分けている。

第2節　基本層序

調査H区北東部のＪ０h2区にテストピットを設定し，深さ2.0mまで掘り下げて基本土層（第３図）の観察を行った。テストピットの土層は，色調・構成粒子・含有物・粘性・しまりなどから11層に分層され，第５層に黒色を呈していることが確認された。以下，テストピットの観察から，層序について記述する。

第１層は黒褐色を呈する耕作土層で，ロームブロックを少量含んでいる。層厚は22～36cmである。

第２層は暗褐色を呈するソフトローム層で，層厚は７～29cmである。

第３層は褐色を呈するソフトローム層で，層厚は３～22cmである。

第４層は褐色を呈するハードローム層で，粘性・締まりともやや強い。層厚は19～50cmである。

第５層はにぶい褐色を呈するハードローム層で，層厚は13～40cmである。第二黒色帯（BBⅡ）と考える。

第６層はにぶい褐色を呈するハードローム層で，層厚は13 ～ 33cmである。

第７層は明褐色を呈する鹿沼パミス層への漸移層で，ローム粒子及び鹿沼パミス粒子を中量含み，粘性は普通で，締まりは強い。層厚は２～ 13cmである。

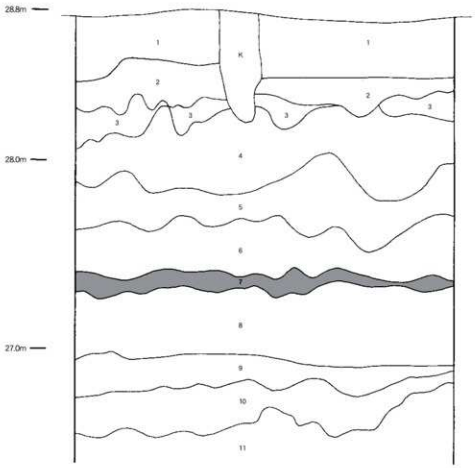
第８層は黄褐色を呈する鹿沼パミス純層で，粘性が弱く，締まりは強い。層厚は28 ～ 45cmである。

第９層は褐色を呈するハードローム層で，粘性・締まりが強い。層厚は４～ 22cmである。

第10層は褐色を呈するハードローム層で，粘性・締まりが強い。層厚は５～ 27cmである。

第11層は明褐色を呈するハードローム層で，粘土粒子を少量含んでいる。下層は未掘のため本来の層厚は不明である。

遺構は，第２層上面で確認している。

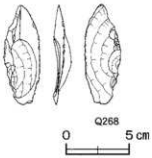


第３図　基本土層図（Ｊ０h2）

第3節　遺構と遺物

1　旧石器時代の遺物

平成18年度の調査H区内から，後期旧石器時代のものと考えられる遺物が1点出土している。出土した遺物は横長剥片を利用した石器(Q268)で，石材は珪質頁岩である。この遺物は表土中からの出土で，原位置を特定することができなかった。そこで，Q268が確認された地点付近に調査区を設定し，ロームの掘り下げを行った。調査の結果，旧石器時代の文化層や石器等の出土は認められず，調査区域内には石器製作跡や生活の痕跡は希薄であると判断した。ここでは，出土した2次加工を有する剥片について，観察表と実測図を記載する。



第4図　調査H区出土遺物実測図

調査H区出土遺物観察表（第4図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q268	2次加工を有する剥片	7.9	2.8	1.4	16.9	珪質頁岩	比較的薄い横長剥片を素材　表面の上部には連続した調整　側縁には微細な調整痕　主要調整面には自然面を残した表面と同方向の調整痕と2次加工を施した際に生じたスナップフラクチャー	H区表土中	PL26

2　縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は，遺物包含層1か所，集石遺構1か所，炉穴跡2基，陥し穴5基が確認された。以下，遺構の特徴について記述する。

(1) 遺物包含層（第5～23図）

調査の方法　調査区西側（G区），標高24.5～27.6mの斜面部に縄文土器片，チャートの剥片が集中して出土していることから調査区を設定し，確認面から遺物包含層の掘り下げ調査を行った。調査面積は400m^{2}で，東から西方向へ低くなる地形である。掘り込みの手順は，遺物が集中しているG2j9区から始め，遺物の出土状況を確認しながら掘り込む範囲を拡大した。また，掘り下げた深さはソフトローム上面までである。

G2h8	G2h9	G2h0	G3h1	G3h2
G2i8	G2i9	G2i0	G3i1	G3i2
G2j8	G2j9	G2j0	G3j1	G3j2
H2a8	H2a9	H2a0	H3a1	H3a2
H2b8	H2b9	H2b0	H3b1	H3b2

調査区設定概略図

調査を進めていく過程で，予想を超える縄文土器片やチャートの剥片，焼礫が出土した。このことから調査区内に遺構が検出されることを想定し，出土した遺物の原位置を保ちながら掘り下げた。調査の結果，確認された縄文時代の遺構は，集石遺構1か所，炉穴跡2基で，住居跡は確認されなかった。また，本報告書に記載した調査区は遺物が特に集中していたG2j9区を中心に，G2i8～G3i1区，G2j8～G3j1区，H2a8～H3a1区，H2b8～H3b1区である。

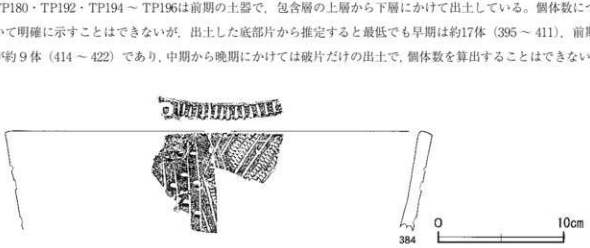
出土遺物の記載方法　遺物は設定した調査区Ｇ２j0を中心に，Ｇ２i8～Ｇ３i1区，Ｇ２j8～Ｇ３j1区，Ｈ２a8～Ｈ３a1区，Ｈ２b8～Ｈ３b1区から多量に出土している。これらの遺物は，座標と高さを計測し，各項目ごとに平面図と断面図に記載した。

遺物包含層の堆積土　遺物包含層の堆積土は２層に分層される。上層は褐色土で，炭化物や炭化粒子，ローム粒子が多量に含まれる。下層は褐色土で，焼土粒子が微量，炭化粒子，ローム粒子，ロームブロックが多量に含まれている。含有物や土の堆積状況から人為的な掘り込みや堆積を示す部分はなく，自然堆積と考える。

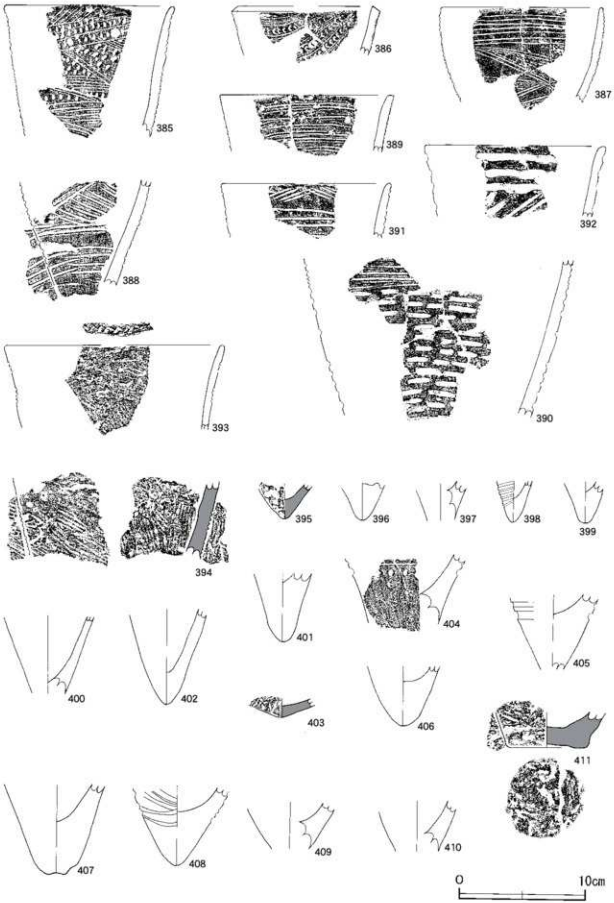
遺物出土状況（土器）　縄文土器片1,366点（早期952，前期338，中期36，後期31，晩期９），弥生土器片３点（広口壺），土師器片290点（甕類），須恵器76点（坏類40，蓋６，甕類19，壺類11），陶器片１点（椀）が出土している。出土した土器片の内，縄文時代中期，後期，晩期の土器片，土師器片と須恵器片，陶器片は表土中と標高が高い地点から出土したもので，報告した土器片は，設定された調査区の覆土中から出土した縄文時代早期と前期の土器片である。縄文時代の土器片を時期別に区別すると，早期が69.7％，前期が24.7％，中期が2.6％，後期が2.3％，晩期が0.7％となる。出土した早期，前期の土器片1,290点のうち報告する早期の土器片654点，前期の土器片240点を調査区ごとに示すと以下の表となる。

番号	調査区	早　期	割合(％)	前　期	割合(％)	番号	調査区	早　期	割合(％)	前　期	割合(％)
1	Ｇ２i9	22	2.3	12	3.6	9	Ｈ２a9	66	6.9	19	5.6
2	Ｇ２j0	60	6.3	18	5.3	10	Ｈ２a0	60	6.3	18	5.3
3	Ｇ３i1	35	3.7	17	5.0	11	Ｈ３a1	51	5.4	19	5.6
4	Ｇ２j8	20	2.1	8	2.4	12	Ｈ２b8	12	1.3	2	0.6
5	Ｇ２j9	39	4.1	27	8.0	13	Ｈ２b9	58	6.1	12	3.6
6	Ｇ２j0	69	7.2	26	7.7	14	Ｈ２b0	66	6.9	20	5.9
7	Ｇ３j1	37	3.9	15	4.4	15	Ｈ３b1	43	4.5	21	6.2
8	Ｈ２a8	16	1.7	6	1.8						

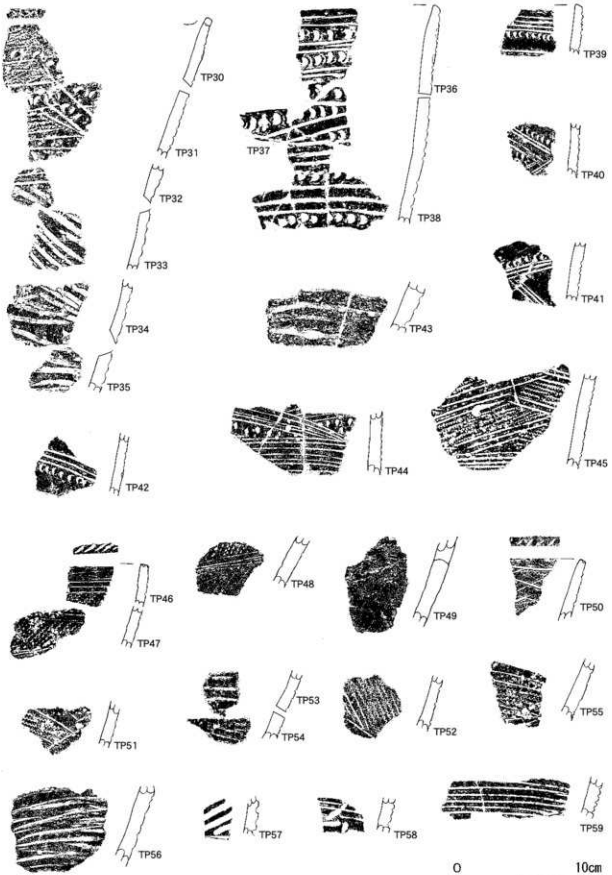
時期別にした土器片の出土状況をみてみると平面分布と垂直分布ともに集中するところはなく，時期別に分けることはできない。取り上げた土器片384～411，TP30～TP149は早期，412～422・TP150～TP174・TP180・TP192・TP194～TP196は前期の土器で，包含層の上層から下層にかけて出土している。個体数について明確に示すことはできないが，出土した底部片から推定すると最低でも早期は約17体（395～411），前期が約９体（414～422）であり，中期から晩期にかけては破片だけの出土で，個体数を算出することはできない。



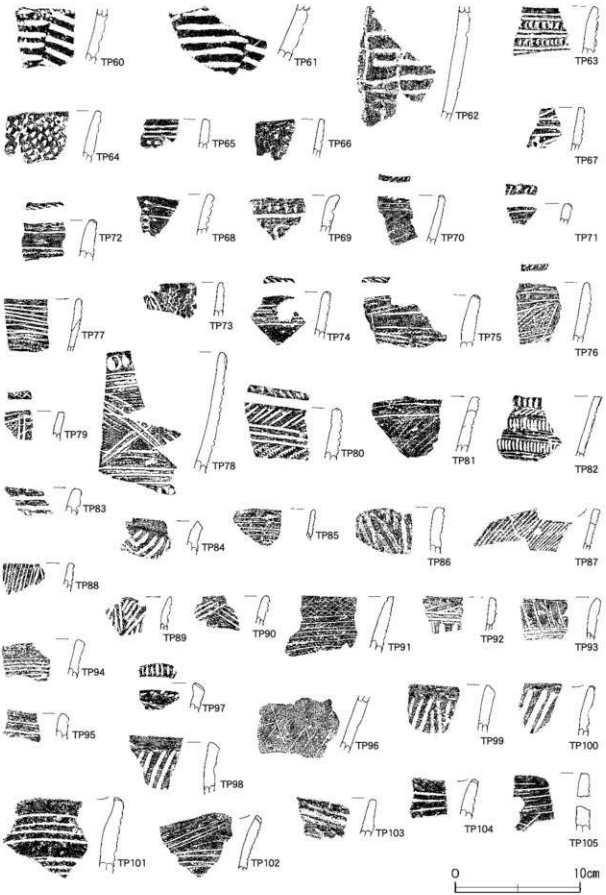
第５図　遺物包含層出土遺物実測図〔縄文時代早期〕(1)



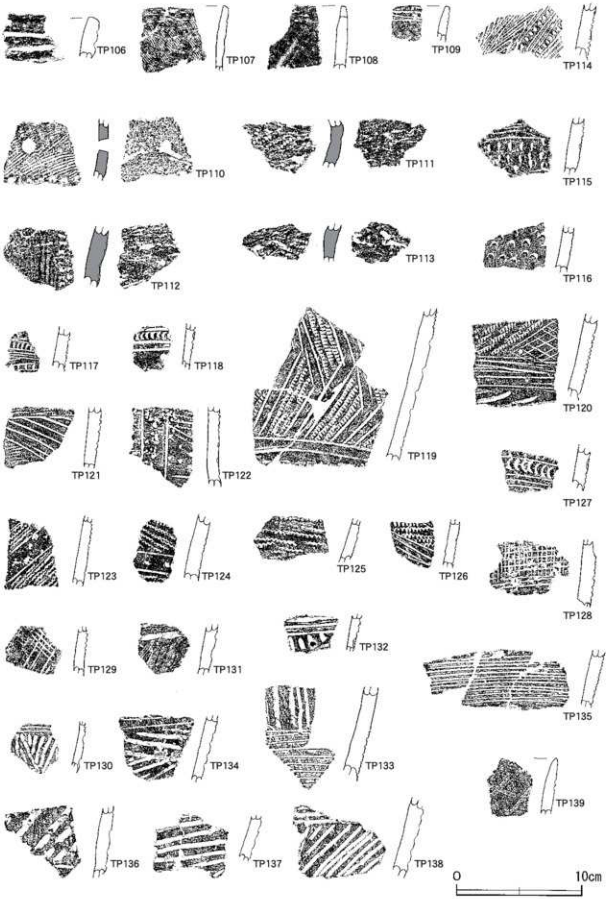
第６図　遺物包含層出土遺物実測図〔縄文時代早期〕(2)



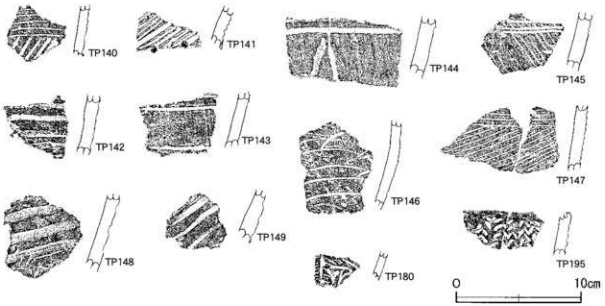
第７図　遺物包含層出土遺物実測図〔縄文時代早期〕(3)



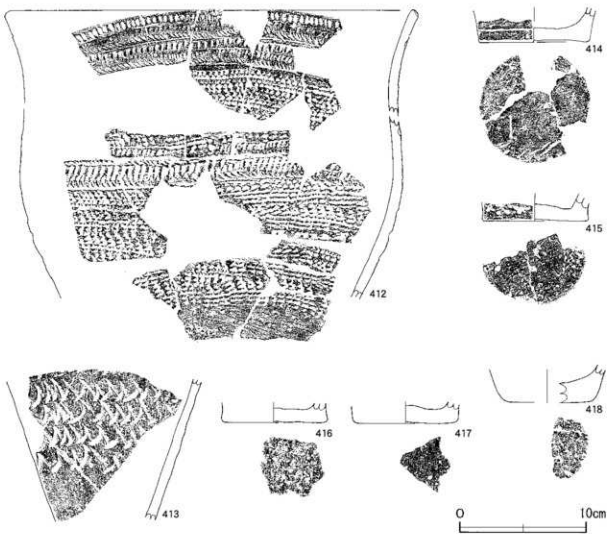
第８図　遺物包含層出土遺物実測図〔縄文時代早期・前期〕(4)



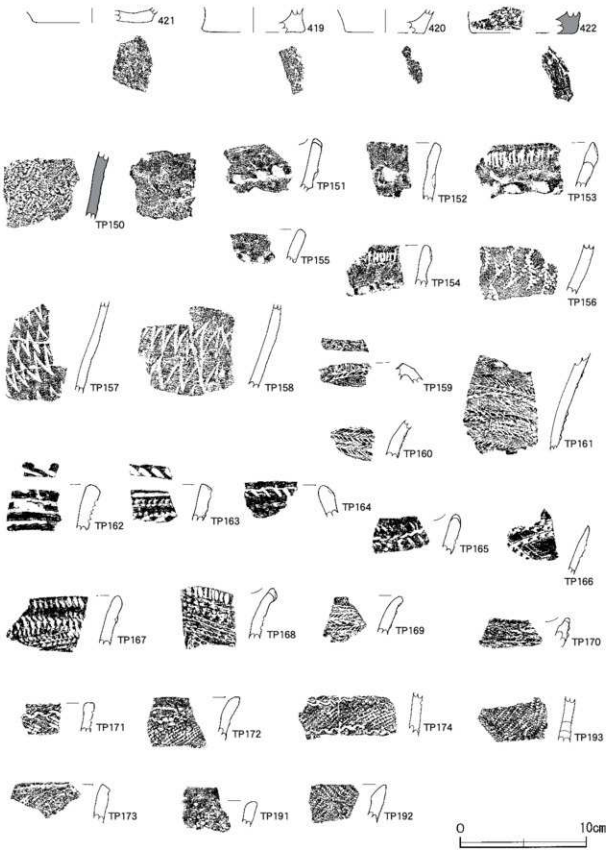
第９図　遺物包含層出土遺物実測図〔縄文時代早期〕(5)



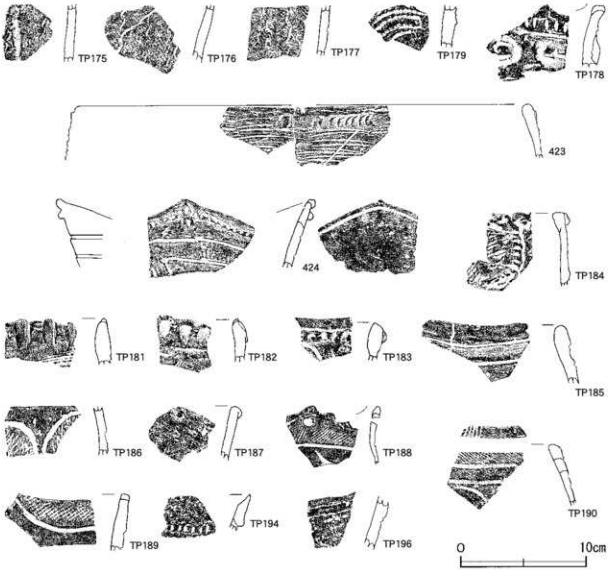
第10図　遺物包含層出土遺物実測図〔縄文時代早期・前期・中期以降〕(6)



第11図　遺物包含層出土遺物実測図〔縄文時代前期〕(7)



第12図　遺物包含層出土遺物実測図〔縄文時代前期・中期以降〕(8)



第13図　遺物包含層出土遺物実測図〔縄文時代前期・中期以降〕(9)

遺物包含層出土遺物観察表〔縄文時代早期〕(第5～10図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
384	縄文	深鉢	[32.2]	(7.9)	－	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み　細沈線文　貝殻復線文	G2i0 G2h0	早期前半 PL18
385	縄文	深鉢	[13.4]	(10.4)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	細沈線文　ヘラ状工具による刺突文	G3i1 包含層中	早期前半 PL17
386	縄文	深鉢	[11.8]	(3.9)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	細沈線文　半截竹管による刺突文	G2i0	早期前半 PL18
387	縄文	深鉢	[12.8]	(7.6)	－	長石・石英・角閃石	にぶい橙	普通	細沈線文　貝殻復線文	H2a9 H3b1	早期前半 PL17
388	縄文	深鉢	－	(8.4)	－	長石・石英・雲母・角閃石	明赤褐	普通	細沈線文　ヘラ状工具による刺突文	H3a1	早期前半 PL17
389	縄文	深鉢	[13.8]	(4.5)	－	長石・石英・雲母・角閃石・赤色粒子	にぶい橙	普通	細沈線文	G3j1	早期前半 PL18
390	縄文	深鉢	－	(12.6)	－	長石・石英・雲母・砂粒・赤色粒子	明赤褐	普通	太細沈線文　細沈線文	H2a0 H2b9 H2b0 H3b1	早期前半 PL17

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
391	縄文	深鉢	[13.0]	(4.3)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	細沈線文	G2j0 G3i1	早期前半 PL18
392	縄文	深鉢	[14.2]	(5.6)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	太細沈線文　細沈線文	H2a9 H2b9	早期前半 PL18
393	縄文	深鉢	[17.6]	(6.9)	－	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口唇部ヘラ状工具による刺突文 棒状工具による調整痕	H2b0	早期前半 PL18
394	縄文	深鉢	－	(6.2)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	繊維　表裏条痕文	包含層中	早期後半 PL18
395	縄文	深鉢	－	(2.7)	－	長石・石英	橙	普通	繊維	H2b0	早期後半
396	縄文	深鉢	－	(2.9)	－	長石・石英	にぶい赤褐	普通	無文　ヘラ状工具による調整痕	G3i1	早期前半
397	縄文	深鉢	－	(3.1)	－	長石・石英・角閃石	明赤褐	普通	無文	包含層中	早期前半
398	縄文	深鉢	－	(3.4)	－	長石・石英・角閃石	にぶい黄橙	普通	細沈線文	G3i2	早期前半
399	縄文	深鉢	－	(3.3)	－	長石・石英・角閃石	にぶい橙	普通	無文	G3h1	早期前半 PL21
400	縄文	深鉢	－	(6.1)	－	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい橙	普通	無文	G3i2	早期前半
401	縄文	深鉢	－	(5.4)	－	長石・石英・雲母・角閃石	橙	普通	無文	包含層中	早期前半 PL21
402	縄文	深鉢	－	(7.6)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	無文	包含層中	早期前半 PL21
403	縄文	深鉢	－	(1.5)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	繊維　ヘラ状工具による調整痕	G2i0	早期後半
404	縄文	深鉢	－	(5.1)	－	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	細沈線文　棒状工具による刺突文	H2a9	早期前半 PL18
405	縄文	深鉢	－	(6.0)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	太細沈線文	H2b9	早期前半 PL20
406	縄文	深鉢	－	(4.8)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	無文	H2a0	早期前半 PL21
407	縄文	深鉢	－	(7.1)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	無文	H2b9 H2b0 H3b1	早期前半 PL21
408	縄文	深鉢	－	(6.3)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	太細沈線文	G3i1	早期前半 PL21
409	縄文	深鉢	－	(3.7)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	無文ヵ（器面摩滅のため不明）	H2b0	早期前半
410	縄文	深鉢	－	(4.0)	－	長石・石英	にぶい橙	普通	無文ヵ（器面摩滅のため不明）	G3h1	早期前半
411	縄文	深鉢	－	(2.8)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	繊維	G2j0 G2i0	早期後半
TP30 ～35	縄文	深鉢	－	(28.5)	－	長石・石英・雲母	浅黄橙	普通	細沈線文　太細沈線文　ヘラ状工具による刺突文 付位復線文	G2i9 G2i0 G2j0	早期前半 PL17
TP36 ～38	縄文	深鉢	－	(17.4)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	細沈線文　太細沈線文　ヘラ状工具による刺突文	G2j0 G2i0 G3i1 包含層中	早期前半 PL17
TP39	縄文	深鉢	－	(3.8)	－	長石・石英・雲母・角閃石・赤色粒子	にぶい橙	普通	細沈線文　ヘラ状工具による刺突文	G3j1	早期前半 TP39～42 同一個体ヵ PL18
TP40	縄文	深鉢	－	(4.3)	－	長石・石英・角閃石	にぶい橙	普通	細沈線文　ヘラ状工具による刺突文	H2b0	早期前半 PL18
TP41	縄文	深鉢	－	(4.6)	－	長石・石英・雲母・角閃石・赤色粒子	にぶい橙	普通	細沈線文　ヘラ状工具による刺突文	H3a1	早期前半 PL18
TP42	縄文	深鉢	－	(5.0)	－	長石・石英・雲母・角閃石・赤色粒子	にぶい橙	普通	細沈線文　ヘラ状工具による刺突文	包含層中	早期前半 PL18
TP43	縄文	深鉢	－	(4.3)	－	長石・石英・雲母・砂粒・赤色粒子	橙	普通	太細沈線文	G2j8 G2i8	早期前半 PL18
TP44	縄文	深鉢	－	(5.0)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	細沈線文　ヘラ状工具による刺突文	H3a1	早期前半 PL18

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
TP45	縄文	深鉢	－	(7.6)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	細沈線文　貝殻復線文	G2i0 G3i1	早期前半 PL18
TP46・47	縄文	深鉢	－	(6.7)	－	長石・石英・雲母	褐灰	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み　細沈線文 貝殻復線文	包含層中	早期前半 TP46～49同一個体？ PL18
TP48	縄文	深鉢	－	(3.9)	－	長石・石英・雲母	褐灰	普通	細沈線文　貝殻復線文	包含層中	早期前半 PL19
TP49	縄文	深鉢	－	(7.2)	－	長石・石英・雲母	褐灰	普通	無文	H2b9	早期前半 PL19
TP50	縄文	深鉢	－	(4.8)	－	長石・石英	赤褐	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み　細沈線文 貝殻復線文	G2h0	早期前半 TP50～55同一個体？ PL19
TP51	縄文	深鉢	－	(3.8)	－	長石・石英	赤褐	普通	細沈線文　貝殻復線文	包含層中	早期前半 PL19
TP52	縄文	深鉢	－	(4.5)	－	長石・石英	赤褐	普通	細沈線文　貝殻復線文	包含層中	早期前半 PL19
TP53・54	縄文	深鉢	－	(5.4)	－	長石・石英	赤褐	普通	細沈線文	G2i0 包含層中	早期前半 PL19
TP55	縄文	深鉢	－	(4.9)	－	長石・石英	赤褐	普通	細沈線文　貝殻復線文		早期前半 PL19
TP56	縄文	深鉢	－	(6.3)	－	長石・石英・雲母・砂粒	明赤褐	普通	太細沈線文	H3b1	早期前半 PL19
TP57	縄文	深鉢	－	(3.1)	－	長石・石英・角閃石	にぶい褐	普通	太細沈線文	G2j8	早期前半 TP57～59同一個体？ PL19
TP58	縄文	深鉢	－	(2.8)	－	長石・石英・角閃石	にぶい褐	普通	細沈線文　太細沈線文	H2a9	早期前半 PL19
TP59	縄文	深鉢	－	(3.4)	－	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい褐	普通	細沈線文	H2a8	早期前半 PL19
TP60	縄文	深鉢	－	(4.5)	－	長石・石英・雲母	橙	普通	太細沈線文	包含層中	早期前半 TP60・61同一個体？ PL19
TP61	縄文	深鉢	－	(4.7)	－	長石・石英・雲母	橙	普通	太細沈線文	H2b8	早期前半 PL19
TP62	縄文	深鉢	－	(9.3)	－	長石・石英	にぶい橙	普通	太細沈線文	H2a9	早期前半 PL19
TP63	縄文	深鉢	－	(3.8)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	細沈線文　半截竹管による刺突文	包含層中	早期前半 PL19
TP64	縄文	深鉢	－	(4.1)	－	長石・石英・角閃石	にぶい赤褐	普通	半截竹管による刺突文	G2j9	早期前半 PL19
TP65	縄文	深鉢	－	(2.3)	－	長石・石英・雲母・角閃石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	細沈線文　細い棒状工具による刺突文	包含層中	早期前半 PL20
TP66	縄文	深鉢	－	(7.2)	－	長石・角閃石	にぶい褐	普通	半截竹管による刺突文	G3i1	早期前半 PL20
TP67	縄文	深鉢	－	(3.4)	－	長石・石英・雲母	橙	普通	細沈線文　半截竹管による刺突文	包含層中	早期前半 PL20
TP68	縄文	深鉢	－	(3.3)	－	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい橙	普通	細沈線文　半截竹管による刺突文	G2j0	早期前半 PL20
TP69	縄文	深鉢	－	(3.0)	－	長石・雲母	にぶい赤褐	普通	細沈線文　ヘラ状工具による刺突文 半截竹管による刺突文	G3i1	早期前半 PL20
TP70	縄文	深鉢	－	(4.0)	－	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい黄褐	普通	細沈線文　貝殻復線文	包含層中	早期前半 PL20
TP71	縄文	深鉢	－	(1.7)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み　細沈線文 細い棒状工具による刺突文	G2i9	早期前半 PL20
TP72	縄文	深鉢	－	(3.1)	－	長石・角閃石	にぶい褐	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み　細沈線文　貝殻復線文	H3a1	早期前半 PL20
TP73	縄文	深鉢	－	(2.7)	－	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	細沈線文　貝殻復線文	H2b0	早期前半 PL20
TP74	縄文	深鉢	－	(3.8)	－	長石・石英・角閃石	にぶい橙	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み　細沈線文　貝殻復線文	G2j0	早期前半 PL19
TP75	縄文	深鉢	－	(4.2)	－	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい黄橙	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み　細沈線文　貝殻復線文	包含層中	早期前半 PL19

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
TP76	縄文	深鉢	－	(4.9)	－	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい橙	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み　細沈線文 貝殻復線文	包含層中	早期前半 PL19
TP77	縄文	深鉢	－	(4.2)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	細沈線文　貝殻復線文	G2j0	早期前半 PL19
TP78	縄文	深鉢	－	(9.5)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口辺部ヘラ状工具による刺突文　細沈線文　貝殻復線文	G2j9	早期前半 PL18
TP79	縄文	深鉢	－	(2.3)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み　細沈線文　貝殻復線文	G3i1	早期前半 PL20
TP80	縄文	深鉢	－	(4.0)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み　細沈線文　貝殻復線文	G3i1	早期前半 PL19
TP81	縄文	深鉢	－	(4.4)	－	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい黄橙	普通	細沈線文　貝殻復線文	包含層中	早期前半 PL19
TP82	縄文	深鉢	－	(4.7)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口辺部ヘラ状工具による刺突文　細沈線文	G3i1 包含層中	早期前半 PL18
TP83	縄文	深鉢	－	(2.2)	－	長石・石英・雲母	浅黄	普通	太細沈線文	G3i1	早期前半 PL20
TP84	縄文	深鉢	－	(2.7)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	太細沈線文	H3a1	早期前半 PL20
TP85	縄文	深鉢	－	(2.7)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	細沈線文　貝殻復線文	G2i9	早期前半 PL20
TP86	縄文	深鉢	－	(3.1)	－	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい橙	普通	太細沈線文	H2b9	早期前半 PL20
TP87	縄文	深鉢	－	(3.2)	－	長石・石英・雲母	橙	普通	細沈線文	G2j0 H2a0	早期前半 PL20
TP88	縄文	深鉢	－	(2.3)	－	長石・石英・雲母	橙	普通	細沈線文	H3b1	早期前半 PL20
TP89	縄文	深鉢	－	(2.9)	－	長石・石英・雲母・角閃石	明赤褐	普通	太細沈線文	H2b0	早期前半 PL20
TP90	縄文	深鉢	－	(2.3)	－	長石・石英・角閃石	明赤褐	普通	細沈線文	包含層中	早期前半 PL20
TP91	縄文	深鉢	－	(4.5)	－	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい橙	普通	細沈線文	G2j0	早期前半 PL19
TP92	縄文	深鉢	－	(2.7)	－	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい赤褐	普通	細沈線文　太細沈線文	H2a0	早期前半 PL19
TP93	縄文	深鉢	－	(3.4)	－	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	細沈線文	包含層中	早期前半 PL19
TP94	縄文	深鉢	－	(3.1)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	細沈線文	G2j9	早期前半 PL19
TP95	縄文	深鉢	－	(2.1)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	細沈線文	包含層中	早期前半 PL19
TP96	縄文	深鉢	－	(4.5)	－	長石・石英	にぶい黄橙	普通	細沈線文	H2a9	早期前半 PL19
TP98	縄文	深鉢	－	(4.2)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	太細沈線文	H3b1	早期前半 PL20
TP99	縄文	深鉢	－	(3.8)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	太細沈線文	H2b0	早期前半 PL20
TP100	縄文	深鉢	－	(3.8)	－	長石・石英・角閃石	にぶい褐	普通	太細沈線文	包含層中	早期前半 PL20
TP101	縄文	深鉢	－	(6.0)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	細沈線文	包含層中	早期前半 PL19
TP102	縄文	深鉢	－	(4.2)	－	長石・雲母・角閃石	にぶい黄橙	普通	細沈線文	包含層中	早期前半 PL20
TP103	縄文	深鉢	－	(3.0)	－	長石・石英・雲母	灰褐	普通	内・外面ヘラ状工具による浅い削り	包含層中	早期前半 PL20
TP104	縄文	深鉢	－	(3.2)	－	長石・石英・雲母	橙	普通	細沈線文	H2a8	早期前半 PL20
TP105	縄文	深鉢	－	(4.5)	－	長石・石英・雲母・角閃石	明赤褐	普通	細沈線文　焼成後穿孔	包含層中	早期前半 PL20

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
TP106	縄文	深鉢	－	(3.4)	－	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい褐	普通	太細沈線文	包含層中	早期前半 PL20
TP107	縄文	深鉢	－	(5.2)	－	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口辺部細沈線文　貝殻背圧痕文	H2b0	早期前半 PL19
TP108	縄文	深鉢	－	(5.0)	－	長石・石英・角閃石	にぶい黄橙	普通	無文（ヘラ状工具による調整痕）	包含層中	早期前半 PL19
TP109	縄文	深鉢	－	(2.9)	－	長石・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	細沈線文　貝殻復線文　貝殻背圧痕文	G2i0	早期前半 PL20
TP110	縄文	深鉢	－	(5.0)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	繊維　貝殻条痕文　竹管による刺突文　焼成後穿孔	H2a9	早期後半 PL19
TP111	縄文	深鉢	－	(3.7)	－	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい黄橙	普通	繊維　単節縄文ＲＬ	包含層中	早期後半 PL19
TP112	縄文	深鉢	－	(4.9)	－	長石・石英・雲母	橙	普通	繊維　貝殻条痕文　棒状工具による刺突文	包含層中	早期後半 PL19
TP113	縄文	深鉢	－	(2.9)	－	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい橙	普通	繊維　単節縄文ＬＲ	包含層中	早期後半 PL19
TP114	縄文	深鉢	－	(4.2)	－	長石・石英・角閃石	にぶい褐	普通	細沈線文　へら状工具による刺突文	G2j0	早期前半 PL19
TP115	縄文	深鉢	－	(4.6)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	細沈線文　へら状工具による刺突文	H2b9	早期前半 PL19
TP116	縄文	深鉢	－	(3.8)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	半截竹管による刺突文	H3a1	早期前半 PL19
TP117	縄文	深鉢	－	(3.5)	－	長石・石英・角閃石	にぶい赤褐	普通	細沈線文　へら状工具による刺突文	包含層中	早期前半 PL20
TP118	縄文	深鉢	－	(3.6)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	細沈線文　半截竹管による刺突文	H2b0	早期前半 PL20
TP119	縄文	深鉢	－	(12.2)	－	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	細沈線文　貝殻復線文	包含層中	早期前半 PL19
TP120	縄文	深鉢	－	(6.9)	－	石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	細沈線文　貝殻復線文　太細沈線文	H2b9	早期前半 PL19
TP121	縄文	深鉢	－	(4.8)	－	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい橙	普通	細沈線文　貝殻復線文	包含層中	早期前半 PL19
TP122	縄文	深鉢	－	(6.3)	－	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい褐	普通	細沈線文　貝殻復線文	包含層中	早期前半 PL19
TP123	縄文	深鉢	－	(5.6)	－	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい黄橙	普通	細沈線文　貝殻復線文	G2j8	早期前半 PL19
TP124	縄文	深鉢	－	(5.3)	－	石英・雲母・角閃石	にぶい黄橙	普通	細沈線文　貝殻復線文	G2j9	早期前半 PL19
TP125	縄文	深鉢	－	(3.5)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄	普通	貝殻復線文	包含層中	早期前半 PL19
TP126	縄文	深鉢	－	(3.7)	－	長石・雲母・角閃石	にぶい黄橙	普通	細沈線文　貝殻復線文	G3j1	早期前半 PL19
TP127	縄文	深鉢	－	(3.6)	－	長石・石英・角閃石・赤色粒子	橙	普通	細沈線文　半截竹管による刺突文	包含層中	早期前半 PL19
TP128	縄文	深鉢	－	(4.9)	－	長石・石英・角閃石	にぶい黄橙	普通	細沈線文	G3i1	早期前半 PL18
TP129	縄文	深鉢	－	(3.8)	－	長石・石英・雲母	橙	普通	細沈線文　貝殻条痕文　貝殻復線文	H2a9	早期前半 PL20
TP130	縄文	深鉢	－	(4.0)	－	長石・石英・角閃石	明赤褐	普通	細沈線文　太細沈線文	H2a9	早期前半 PL20
TP131	縄文	深鉢	－	(4.0)	－	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	浅い太細沈線文	H2b9	早期前半 PL19
TP132	縄文	深鉢	－	(2.9)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	細沈線文　太細沈線文	H2a0	早期前半 PL20
TP133	縄文	深鉢	－	(7.5)	－	長石・石英・角閃石	明赤褐	普通	細沈線文　太細沈線文	包含層中	早期前半 PL19
TP134	縄文	深鉢	－	(5.1)	－	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい橙	普通	細沈線文　太細沈線文	H2b0	早期前半 PL19
TP135	縄文	深鉢	－	(4.5)	－	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい褐	普通	細沈線文	G3j1	早期前半 PL19

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
TP136	縄文	深鉢	－	(5.7)	－	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい褐	普通	太細沈線文	G3i2	早期前半 PL19
TP137	縄文	深鉢	－	(4.0)	－	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい黄橙	普通	太細沈線文	H3a1	早期前半 PL19
TP138	縄文	深鉢	－	(6.4)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	太細沈線文	G3j1	早期前半 PL19
TP139	縄文	深鉢	－	(4.5)	－	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい黄橙	普通	浅い太細沈線文	包含層中	早期前半 PL20
TP140	縄文	深鉢	－	(4.1)	－	長石・石英	橙	普通	細沈線文　太細沈線文	H2a0	早期前半 PL20
TP141	縄文	深鉢	－	(3.4)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	浅黄	普通	細沈線文　太細沈線文	包含層中	早期前半 PL20
TP142	縄文	深鉢	－	(4.8)	－	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	太細沈線文	包含層中	早期前半 PL20
TP143	縄文	深鉢	－	(4.4)	－	長石・石英・角閃石	にぶい橙	普通	太細沈線文	包含層中	早期前半 PL20
TP144	縄文	深鉢	－	(5.0)	－	長石・石英・雲母・角閃石	暗赤褐	普通	太細沈線文	H2b8	早期前半 PL20
TP146	縄文	深鉢	－	(4.6)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	細沈線文	H2a9	早期前半 PL20
TP147	縄文	深鉢	－	(5.3)	－	長石・石英・雲母	橙	普通	細沈線文	G2i0	早期前半 PL20
TP148	縄文	深鉢	－	(6.1)	－	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい橙	普通	浅い太細沈線文	包含層中	早期前半 PL20
TP149	縄文	深鉢	－	(4.2)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	浅い太細沈線文	H2b9	早期前半 PL20

遺物包含層出土遺物観察表〔縄文時代前期〕（第11・12図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
412	縄文	深鉢	[31.8]	(23.1)	－	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口唇部棒状工具による刻み　ヘラ状工具による刻み　状縄文　波状貝殻文　ヘラ状工具による刺突文　貝殻腹縁文	包含層中	前期後半
413	縄文	深鉢	－	(11.3)	－	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい橙	普通	波状貝殻文	G3h2	前期後半
414	縄文	深鉢	－	(27)	8.6	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	無文	H2a8 H2b9	前期後半
415	縄文	深鉢	－	(22)	[8.2]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	無文	G2i9	前期後半
416	縄文	深鉢	－	(16)	[8.2]	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい橙	普通	無文	包含層中	前期後半
417	縄文	深鉢	－	(18)	[8.2]	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	無文	包含層中	前期後半
418	縄文	深鉢	－	(28)	[6.2]	長石・石英・角閃石	にぶい橙	普通	無文	包含層中	前期後半
419	縄文	深鉢	－	(20)	[7.6]	長石・石英・雲母・角閃石	橙	普通	無文	包含層中	前期後半
420	縄文	深鉢	－	(19)	[6.2]	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	無文	包含層中	前期後半ヵ
421	縄文	深鉢	－	(12)	[9.4]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	無文	包含層中	前期後半ヵ
422	縄文	深鉢	－	(17)	[8.2]	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい黄橙	普通	繊維	包含層中	前期前半
TP147	縄文	深鉢	－	(22)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み　口辺部ヘラ状工具による削り	H3b1	前期後半 PL20　第8図
TP150	縄文	深鉢	－	(5.4)	－	長石・石英	にぶい橙	普通	繊維　縄文単節結節文	G3j1	前期前半 PL21
TP151	縄文	深鉢	－	(3.9)	－	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	凹凸文	G2j8	前期後半 PL21
TP152	縄文	深鉢	－	(4.7)	－	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい橙	普通	凹凸文	G2j9	前期後半 PL21

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
TP153	縄文	深鉢	－	(3.6)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口辺部ヘラ状工具による刻み　凹凸文	H2a0	前期後半
TP154	縄文	深鉢	－	(3.2)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口辺部ヘラ状工具による刻み　凹凸文	H2b9	前期後半
TP155	縄文	深鉢	－	(2.5)	－	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい橙	普通	凹凸文	H3b1	前期後半
TP156	縄文	深鉢	－	(4.1)	－	長石・石英・雲母・角閃石	橙	普通	波状貝殻文	H2b8	前期後半 PL21
TP157	縄文	深鉢	－	(7.2)	－	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい赤褐	普通	波状貝殻文	G2j0 G2j9 H3a1	前期後半 PL21
TP158	縄文	深鉢	－	(6.8)	－	長石・石英・雲母・角閃石	橙	普通	波状貝殻文	G2j0 包含層中	前期後半
TP159	縄文	深鉢	－	(1.6)	－	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい黄橙	普通	浮線文に刺み	H2b0	前期後半
TP160	縄文	深鉢	－	(3.0)	－	長石・石英・角閃石	にぶい黄褐	普通	浮線文に刺み	H2a9	前期後半
TP161	縄文	深鉢	－	(7.7)	－	長石・石英・角閃石	にぶい黄橙	普通	浮線文に刺み	G3j2	前期後半 PL21
TP162	縄文	深鉢	－	(3.7)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	褐	普通	口唇部に太い刻み　沈線文	包含層中	前期後半
TP163	縄文	深鉢	－	(2.9)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口辺部ヘラ状工具による刻み　太細沈線文 櫛歯状工具による波状文　棒状工具による刺突文	H3a1	前期後半
TP164	縄文	深鉢	－	(2.5)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口辺部ヘラ状工具による刻み　波状貝殻文	包含層中	前期後半
TP165	縄文	深鉢	－	(3.2)	－	長石・石英	にぶい黄橙	普通	波状貝殻文	H3b1	前期後半
TP166	縄文	深鉢	－	(3.9)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	半截竹管による押し引き文　沈線文	包含層中	前期前半
TP167	縄文	深鉢	－	(3.9)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	浅黄	普通	口唇部に刻み　波状貝殻文　刺突文	H2b9	前期後半 PL21
TP168	縄文	深鉢	－	(4.0)	－	長石・雲母	灰黄褐	普通	口唇部に刻み　半截竹管による刺突文と平行沈線	包含層中	前期後半 PL21
TP169	縄文	深鉢	－	(3.1)	－	長石	にぶい黄橙	普通	浮線文に刺み	H2b0	前期後半
TP170	縄文	深鉢	－	(1.6)	－	長石・角閃石	にぶい黄橙	普通	浮線文に刺み	H2b0	前期後半
TP171	縄文	深鉢	－	(2.5)	－	長石・石英・角閃石	にぶい褐	普通	単節縄文ＬＲ　結節文	H2b9	前期後半
TP172	縄文	深鉢	－	(3.5)	－	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	単節縄文ＬＲ　結節文	G2j9	前期後半
TP173	縄文	深鉢	－	(3.0)	－	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	単節縄文ＬＲ	包含層中	前期後半
TP174	縄文	深鉢	－	(3.5)	－	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	単節縄文ＬＲ　結節文	G2j0 G3i1	前期後半 PL21
TP180	縄文	深鉢	－	(2.3)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	細沈線文　刺突文	包含層中	前期 第10図
TP182	縄文	深鉢	－	(3.0)	－	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい赤褐	普通	単節縄文ＲＬ	包含層中	前期後半ｃ
TP184	縄文	深鉢	－	(4.7)	－	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい橙	普通	折り返し口縁　刻み	H3b1	前期後半 第13図
TP185	縄文	深鉢	－	(3.4)	－	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい橙	普通	刺突文	包含層中	前期後半 PL18　第10図
TP186	縄文	深鉢	－	(4.2)	－	長石・石英・雲母	橙	普通	撚り糸圧痕文　単節縄文圧痕文	包含層中	前期ｃ 第13図

遺物包含層出土遺物観察表［縄文時代中期以降］（第13図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
TP175	縄文	深鉢	－	(3.2)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	単節縄文ＬＲ　結節文　沈線文	H2a0	中期前半 TP146～148 同一個体ｂ

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
TP126	縄文	深鉢	－	(3.9)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	単節縄文ＬＲ　結節文	H3b1	中期前半 PL21
TP127	縄文	深鉢	－	(3.9)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	単節縄文ＬＲ　結節文	H2a9	中期前半
TP128	縄文	深鉢	－	(4.9)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	隆帯　沈線文　刺突文	G3i1	中期前半 PL21
TP129	縄文	深鉢	－	(3.3)	－	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	隆帯　押引文	包含層中	中期中葉
TP131	縄文	深鉢	－	(3.0)	－	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい赤褐	普通	単節縄文側面圧痕	H2b9	中期前半 第12図
423	縄文	深鉢	[35.6]	(4.3)	－	長石・石英・雲母・角閃石	明赤褐	普通	押圧を付した縦線文　条線文	G3i1 G3j2	後期後半 PL21
424	縄文	深鉢	[20.6]	(5.4)	－	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい橙	普通	口縁内部に沈線　押圧を付した縦線文 貼付文に刺突　沈線文	包含層中	後期前半 PL21
TP146	縄文	深鉢	－	(7.1)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	沈線文	H2a0	後期後半 PL20　第10図
TP261	縄文	深鉢	－	(3.8)	－	長石・石英・角閃石	にぶい橙	普通	ヘラ状工具による口辺部削り　沈線文	H2a0	後期後半 PL21
TP262	縄文	深鉢	－	(3.4)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	折り返し口縁　棒状工具による刺突文 ヘラ状工具による　押引文	H2a0	後期後半
TP263	縄文	深鉢	－	(2.9)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	縦線文に沈線	包含層中	後期後半
TP264	縄文	深鉢	－	(5.8)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	縦線文　隆帯に刻み　無節縄文ＬＲ	H2a9 H2a0	後期後半 PL21
TP265	縄文	深鉢	－	(4.7)	－	長石・雲母・角閃石	にぶい黄橙	普通	沈線文	H3b1	後期後半 PL21
TP266	縄文	深鉢	－	(3.8)	－	長石・雲母・角閃石	にぶい黄橙	普通	沈線文　無節縄文	H2b0	晩期
TP267	縄文	深鉢	－	(4.3)	－	長石・石英・雲母	黄橙	普通	無文　貼瘤	H2a0	晩期
TP268	縄文	深鉢	－	(4.6)	－	長石・石英・雲母・角閃石	明赤褐	普通	口縁部に突起　単節縄文ＬＲ　細沈線文 外面赤彩　焼成前に穿孔	包含層中	晩期 PL21
TP269	縄文	深鉢	－	(4.1)	－	長石・雲母・角閃石	にぶい黄橙	普通	地文単節縄文ＬＲ　磨消縄文　沈線文	H2b9	晩期 PL21
TP270	縄文	深鉢	－	(5.0)	－	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部に刻み　細沈線文　沈線文	H2b0	晩期 PL21
TP271	縄文	深鉢	－	(3.0)	－	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい赤褐	普通	単節縄文側面圧痕	H2a9	晩期 第12図

遺物出土状況（石器）　チャートを中心とする石器類が772点（石鏃・石核・剥片・削器・掻器・有舌尖頭器）出土している。出土量が多量であった調査区はＧ２j0区・Ｈ２a0区・Ｈ３b1である。以下，調査区ごとに表で示す。

番号	調査区	石　鏃	石　核	剥　片	長さ(mm)	幅(mm)	総重量(ｇ)
1	Ｇ２i9	0	2（チャート）	16（チャート13，安山岩１，砂岩２）	8～31	2～21	40.2
2	Ｇ２i0	0	0	8（チャート６，安山岩２）	20～32	2～21	36.4
3	Ｇ３i1	0	3（チャート）	13（チャート13）	8～49	4～17	46.6
4	Ｇ２j8	1（チャート）	2（チャート）	14（チャート13，砂岩１）	11～39	2～15	56.1
5	Ｇ２j9	0	10（チャート）	63（チャート52，安山岩１，頁岩１，流紋岩５，石英斑岩１，鳳凰３）	8～31	2～21	244.0
6	Ｇ２j0	1（チャート）	13（チャート）	82（チャート74，安山岩１，頁岩２，流紋岩５）	5～54	3～28	380.8

番号	調査区	石　鏃	石　核	剥　片	長さ(mm)	幅(mm)	総重量(g)
7	G 3j1	2（チャート）	1（チャート）	31（チャート23，安山岩4，頁岩1，流紋岩3）	5～40	1～12	93.77
8	H 2 a8	1（チャート）	0	22（チャート14，安山岩4，頁岩2，凝灰岩1，砂岩1）	10～30	2～15	30.7
9	H 2 a9	1（チャート）	6（チャート）	43（チャート36，砂岩3，瑪瑙1，粘板岩1，ホルンフェルス2）	6～47	2～26	305.9
10	H 2 a0	0	7（チャート）	107（チャート94，安山岩2，頁岩1，凝灰岩1，流紋岩4，砂岩1，粘板岩1，黒曜石1，ホルンフェルス2）	3～57	2～22	302.09
11	H 3 a1	0	0	22（チャート17，流紋岩3，砂岩1，ホルンフェルス1）	8～60	2～31	149.1
12	H 2 b8	1（瑪瑙）	0	16（チャート12，安山岩2，砂岩1，泥岩1）	10～58	2～10	43.1
13	H 2 b9	1（チャート）	2（チャート）	30（チャート24，安山岩3，石英斑岩1，黒曜石2）	8～30	3～27	58.3
14	H 2 b0	2（黒曜石）	0	50（チャート48，安山岩1，石英斑岩1）	7～30	2～21	55.2
15	H 3 b1	1（チャート）	0	117（チャート108，安山岩1，頁岩3，凝灰岩3，砂岩1，黒曜石1）	4～54	2～11	111.3

出土したチャート製(石鏃，石核，剥片等)の総数は672点で，総重量1,833.78g，平均2.73gである。報告したチャート製(石鏃，石核，剥片等)の数は595点である。次に，調査区ごとに表で示す。

番号	調査区	総　数	総重量(g)	平均(g)
1	G 2i9	15点（石核2，剥片13）	33.5	2.23
2	G 2i0	6点（剥片6）	17.7	2.95
3	G 3i1	16点（石核3，剥片13）	46.6	2.91
4	G 2j8	16点（石核2，剥片13，石鏃1）	55.1	3.67
5	G 2j9	62点（石核10，剥片52）	192.3	3.10
6	G 2j0	85点（石核13，剥片71，石鏃1）	324.63	3.82
7	G 3j1	26点（石核1，剥片24，石鏃1）	85.57	3.29
8	H 2 a8	14点（剥片13，石鏃1）	16.3	1.16
9	H 2 a9	42点（石核6，剥片36）	261.4	6.22
10	H 2 a0	101点（石核7，剥片94）	284.89	2.82
11	H 3 a1	17点（剥片17）	146.8	8.63
12	H 2 b8	12点（剥片12）	8.1	0.675
13	H 2 b9	27点（石核2，剥片24，石鏃1）	55.8	2.07
14	H 2 b0	48点（剥片48）	53.7	1.12
15	H 3 b1	108点（剥片107，石鏃1）	89.8	0.83

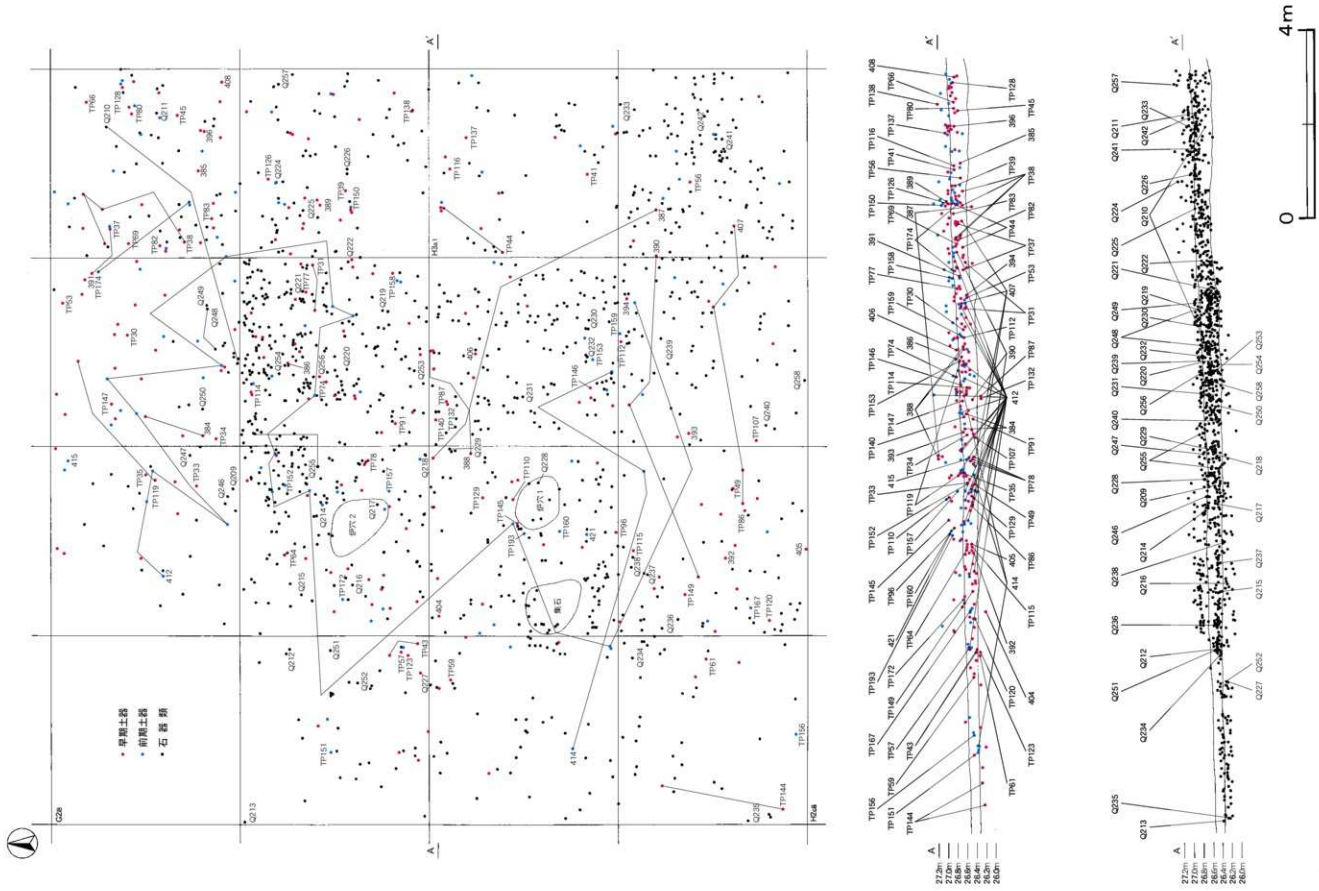
出土しているチャート製の石鏃や石核等は，G 2 j0区・H 2 a0区・H 3 b1区を中心に，調査区全体に広がりが見られ，これらを観察すると，早期，または前期の時期と判断できる。Q213・Q222・Q225 ～ Q227・Q234・Q237・Q239 ～ Q241・Q244は石鏃で，Q234とQ244が前期で，それ以外は早期である。また，Q243は未製品の可能性がある。Q209・Q211・Q212・Q214 ～ Q217・Q219・Q220・Q223・Q224・Q228・Q229・Q236・Q238は石核で，前述した理由から早期と考えられる。Q218・Q230・Q232・Q233・Q242は剥片で，Q242が前期，それ以外は，早期である。Q231は楔形石器，Q235・Q245は削器で早期である。これらのほとんどが遺物包含層の中層から下層の出土である。特にQ219 ～ Q223は加工具・礫の出土が最も多いG 2 j0区から出土し，Q230 ～ Q232は石核・剥片の出土量が多く，加工具や礫などの出土量が少ないH 2 a0区から出土している。Q241・Q242は加工具，礫や石核の出土量が少ないH 3 b1区から出土し，剥片は他の調査区より小形で軽い剥片が目立つ地点である。また，G 2 i0区から出土している有舌尖頭器（Q210）は，草創期の時期である。

遺物出土状況(加工具)　石英斑岩や砂岩を中心とする礫は，設定調査区及びその周辺部から501点出土し，第１号集石遺構から229点出土している。集石跡を除いて出土した礫の総重量は45,318.3gで，平均90.4gである。報告した礫の総数は444点である。出土した礫を調査区ごとに表で示す。

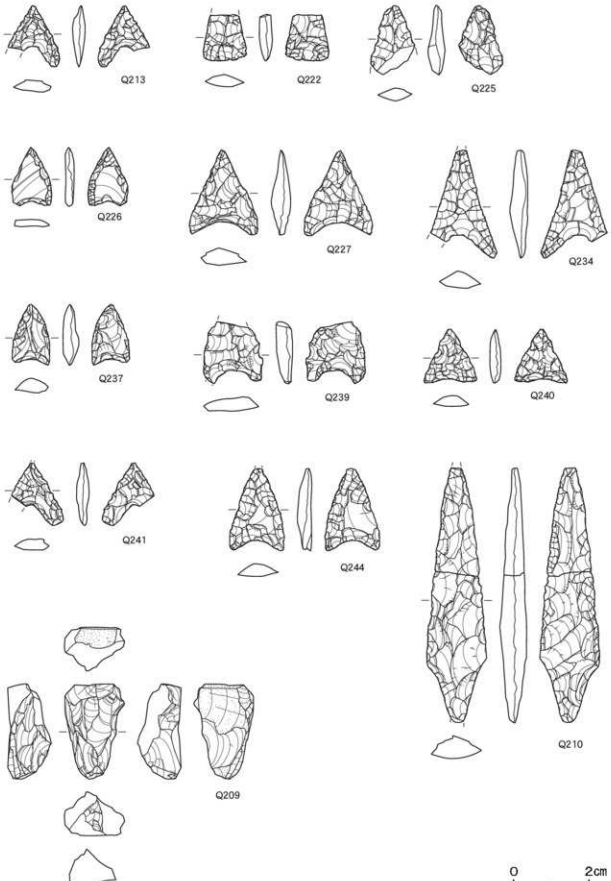
	調査区	総数	長径(cm)	重さ(g)	総重量(g)	平均(g)	被熱(有:全・上・下，無)	加工具
1	G 2 i9	4	4.1 ～ 9.7	53 ～ 229	596	149.0	有（全），無	
2	G 2 i0	10	3.1 ～ 8.9	6 ～ 157	540	54.0	有（全・下），無	3
3	G 3 i1	21	3.4 ～ 10.6	10 ～ 403	1182.3	56.3	有（全）	
4	G 2 j8	13	2.8 ～ 9.5	10 ～ 296	1006	77.4	有（全），無	2
5	G 2 j9	44	2.1 ～ 13.6	4 ～ 1120	4243	96.4	有（全）	
6	G 2 j0	137	1.7 ～ 12.9	3 ～ 1100	9512	69.4	有（全），無	4
7	G 3 j1	28	2.3 ～ 11.3	7 ～ 1120	3566	127.4	有（全・下）	1
8	H 2 a8	33	2.3 ～ 12.0	5 ～ 809	3634	110.1	有（全・下）	
9	H 2 a9	60	2.6 ～ 8.8	3 ～ 485	4604	76.7	有（全・上・下），無	
10	H 2 a0	19	2.2 ～ 10.3	5 ～ 567	1913	100.7	有（全・下），無	
11	H 3 a1	13	2.0 ～ 10.4	4 ～ 811	2176	106.3	有（全・下），無	
12	H 2 b8	16	3.2 ～ 13.2	6 ～ 609	1845	115.3	有（下），無	
13	H 2 b9	19	2.3 ～ 10.0	3 ～ 487	1623	85.4	有（全・下），無	
14	H 2 b0	17	2.4 ～ 9.6	7 ～ 290	1422	83.6	有（全・下），無	1
15	H 3 b1	10	3.8 ～ 7.7	8 ～ 332	1063	106.3	有（全・下），無	

出土した礫等は，Ｈ２a9区で確認された第１号集石遺構や第１号炉穴跡を取り囲むように調査区全体に広がりを示している。特に，Ｇ２j0区から出土した礫は，137点と他の区よりも多く，平均重量は69.4gと比較的軽量のものが多い。これらの礫は，割れていないものと割れているもの，火を受けているものと受けていないものとに分けることができ，さらに分別すると割れ方の大きいものと小さいもの，火を全面に受けているものと一部のみ受けているものに分けることができる。一部だけ火を受けているものは，火を受けた部分が上・下に見られ，火を受けた原位置をすでに離れているものと判断できる。石鏃を製作するために使用した加工具(敲石・凹石等）と考えられるQ246 ～ Q258，Q261，Q265，Q266は，包含層の覆土上層から下層で出土し，これらの中にも火を受けたものと受けないものとに分類できる。これらの加工具はＧ２i0区，Ｇ２j0区を中心に出土しており，礫の出土が多い地点と石核や剥片が多量に出土した地点と重複していることが確認された。また，遺物包含層の上面（表土）から，Q260・Q262 ～ Q264が出土している。

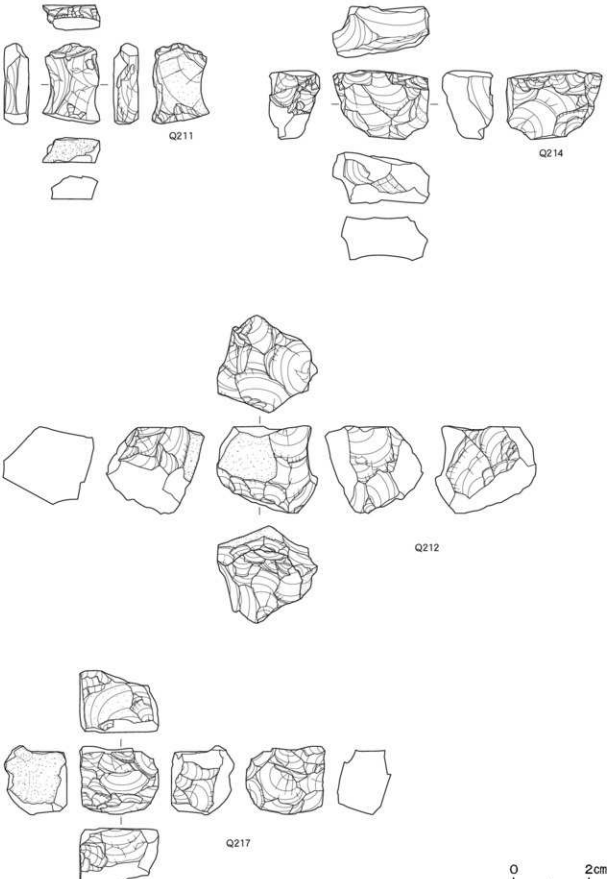
所見　早期の土器片が主体になるのは，遺物包含層から東へ約８mの地点（Ｇ３j4区，Ｇ３g9区）に早期の土器片が出土している時期不明の住居跡（平成17年度報告）が２軒確認されており，これらの住居跡を当該期の遺構と想定し，斜面部より上部の平坦部に居住域があり，斜面部も当時の生活領域の一部であったと考えられ，早期土器片の多出が生活領域であったと認定できる。また，出土した石鏃や石核等の主体が当該期の遺物と想定でき，遺物包含層の周辺に石器製作の場があったことも想定できる。



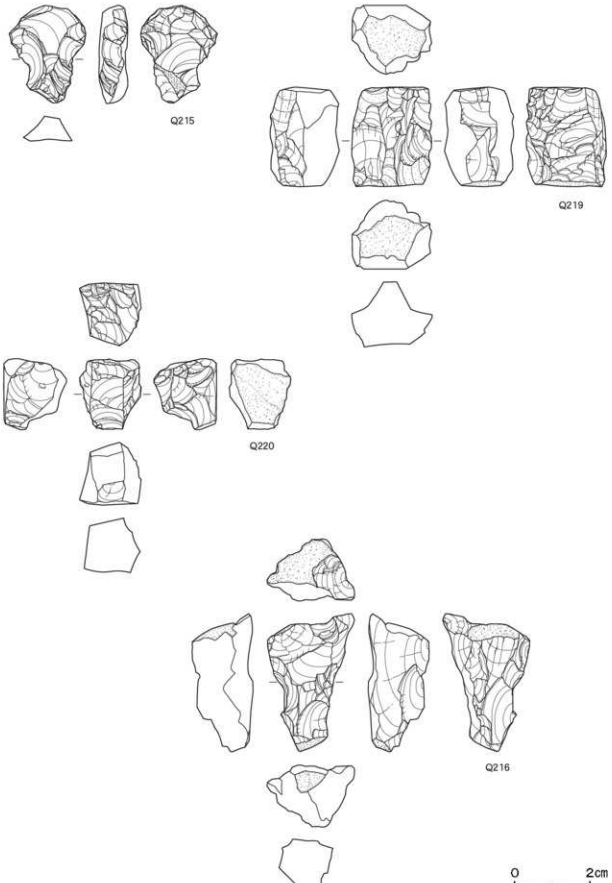
第14図　遺物包含層早・前期土器片,石器類出土状況実測図



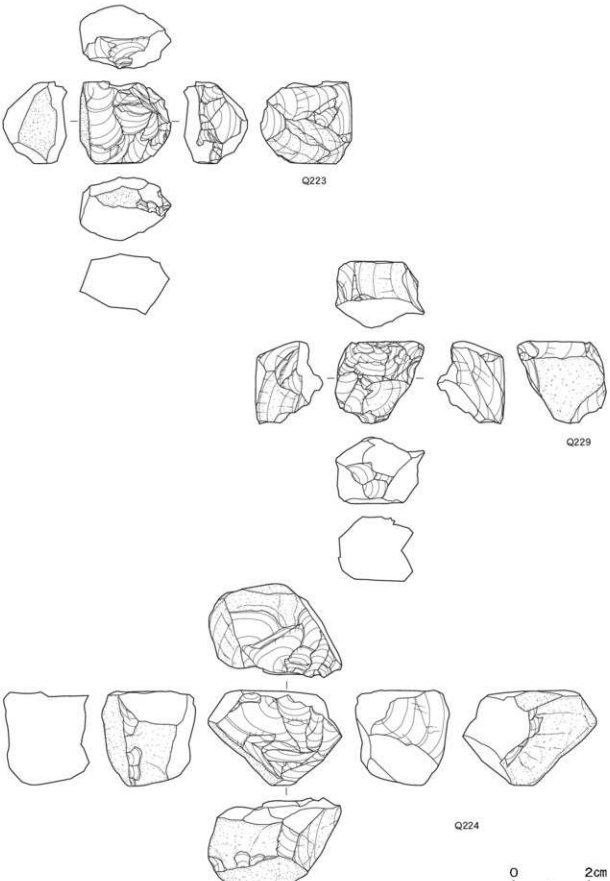
第15図　遺物包含層出土遺物実測図〔石鏃・石核・尖頭器〕(1)



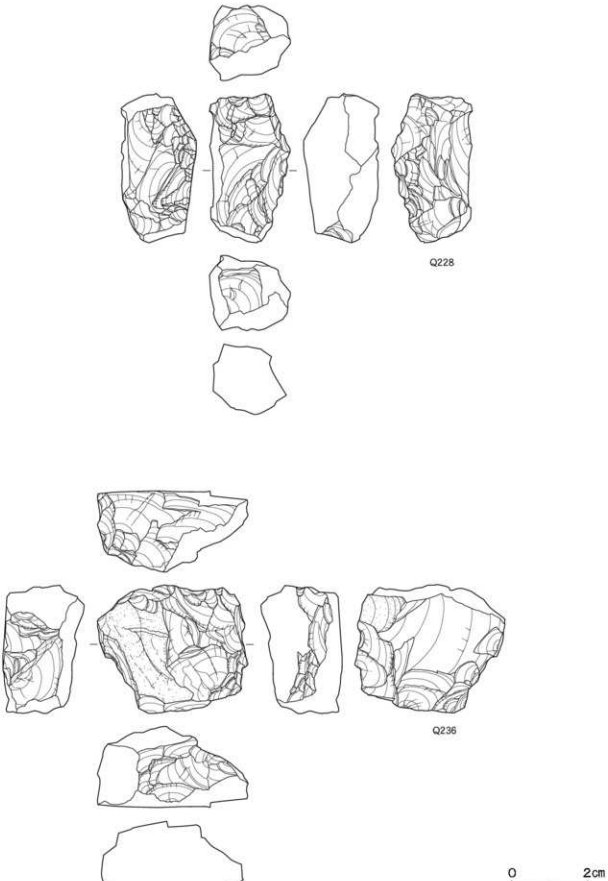
第16図　遺物包含層出土遺物実測図〔石核〕(2)



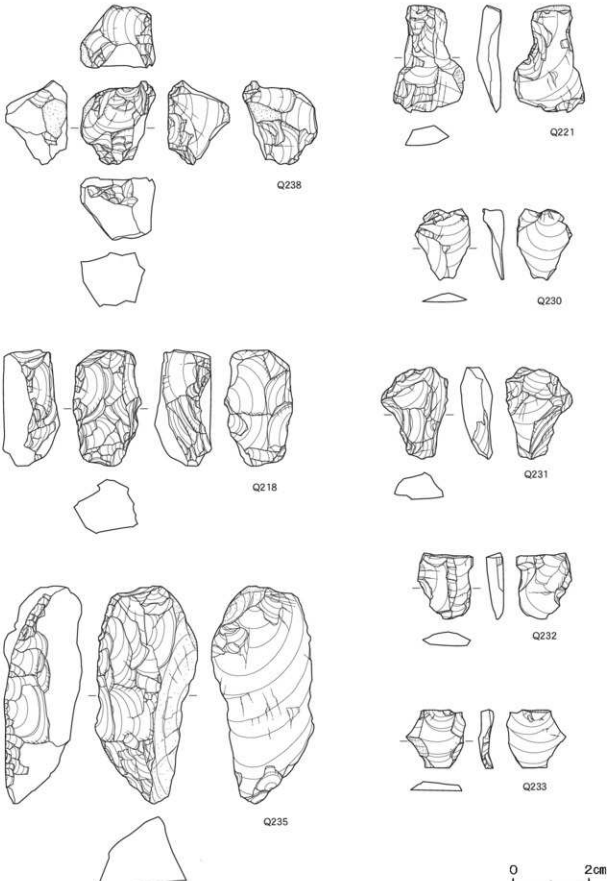
第17図　遺物包含層出土遺物実測図〔石核〕(3)



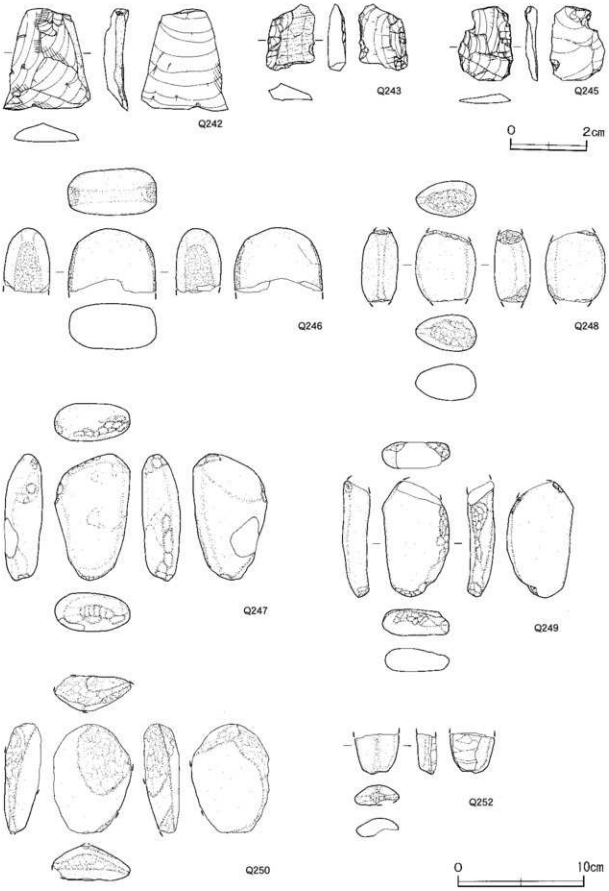
第18図　遺物包含層出土遺物実測図〔石核〕(4)



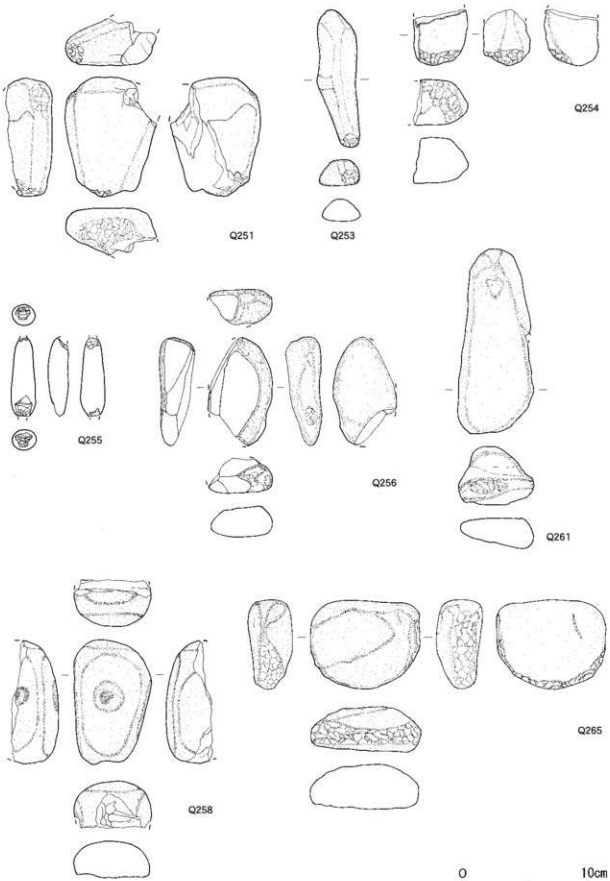
第19図　遺物包含層出土遺物実測図〔石核〕(5)



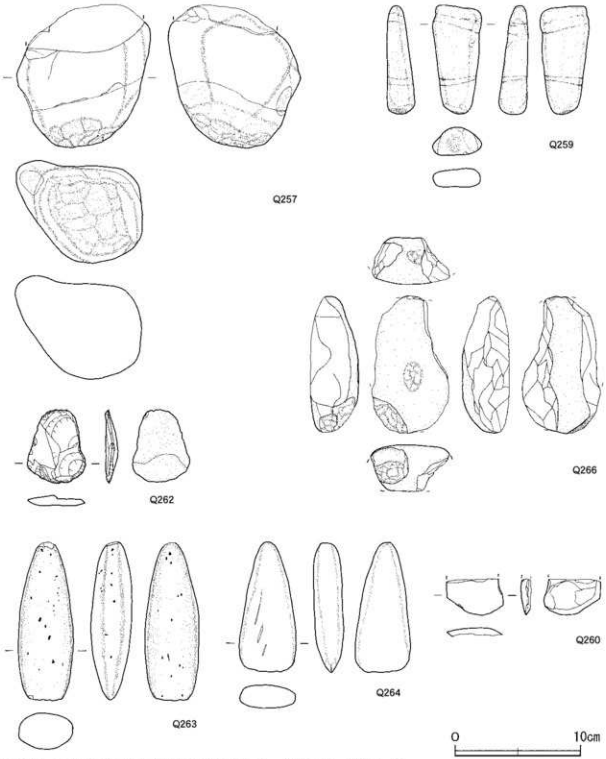
第20図　遺物包含層出土遺物実測図〔石核・剥片・削器・楔形石器〕(6)



第21図　遺物包含層出土遺物実測図〔剥片・削器・加工具〕(7)



第22図　遺物包含層出土遺物実測図〔加工具〕(8)



第23図　遺物包含層出土遺物実測図〔加工具・摩製石斧・掻器〕(9)

遺物包含層出土遺物「石鏃・石核・剥片・削器・楔形石器・尖頭器」(第15・16図)

番号	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	材質	特徴	出土位置(区)	備考
Q209	石核	25.3	15.8	11.6	4.4	チャート	節理面で剥落した素材　垂直打撃で剥離を加えている	G299	早期
Q210	尖頭器	67.3	15.9	7.3	1.5	安山岩	押圧剥離で全体を成形　縁辺は鋸歯状　有舌尖頭器	G290	草創期 PL.25
Q211	石核	21.4	15.2	6.8	3.0	チャート	節理面で剥落した素材　垂直打撃で剥離を加えている	G341	早期

番号	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	材質	特　　徴	出土位置(区)	備　考
Q212	石核	23.1	26.7	26	16.1	チャート	小さな分割礫を素材　垂直打撃で小形の貝殻状剥片を剥離	G2j8	早期
Q213	石鏃	16.3	13.8	3.4	4.0	チャート	押圧剥離　縁辺がやや急角度で鋸歯状を呈す　器体の成形は平坦	G2j8	早期 PL25
Q214	石核	18.3	25.5	13.6	7.1	チャート	石鏃の素材を剥離した石核ヵ　垂直打撃　打面が小さい剥片	G2j9	早期
Q215	石核	25.9	20.3	7.8	3.8	チャート	剥片素材の石核　主要剥離面側から貝殻状剥片を剥離	G2j9	早期
Q216	石核	36.4	23.2	16.5	9.5	チャート	小さな分割礫を素材　垂直打撃　小形の貝殻状剥片を剥離	G2j9	早期
Q217	石核	18.2	20	16.5	8.5	チャート	小さな分割礫を素材　垂直打撃小形の貝殻状剥片を剥離　周囲部に小さな剥離	G2j9	早期
Q218	剥片	30.8	18.2	15.2	9.9	チャート	表裏両側辺に作業面が展開　貝殻状の小形剥片を剥離	G2j9	早期
Q219	石核	26.5	21.2	18.3	13.7	チャート	小さな分割礫を素材　垂直打撃　小形の貝殻状剥片を剥離	G2j0	早期
Q220	石核	18.8	16.3	16.5	6.2	チャート	石核素材　直接打撃　小さな分割礫の周囲を細かく剥離	G2j0	早期
Q221	削器	28.3	18.9	6.4	2.8	チャート	横長剥片　鋭い側辺を刃部にし、素材剥片の主要剥離面のバルブを平坦な二次加工で除去	G2j0	早期
Q222	石鏃	12.4	11.5	3.6	0.6	チャート	小さな両面加工　押圧剥離は不規則　剥離の開始部が曲げタイプ　脚部が形成されていないため未製品の可能性有り	G2j0	早期
Q223	石核	21.8	24.2	16.9	10.4	チャート	小さな分割礫を素材　垂直打撃　小形の貝殻状剥片を剥離	G2j0	早期
Q224	石核	24.8	35.4	25.3	24.8	チャート	小さな分割礫を素材　垂直打撃　小形の貝殻状剥片を剥離	G3j1	早期
Q225	石鏃	18.4	11.8	4.8	0.7	チャート	両面加工　正面右側辺は、やや急角度の押圧剥離でコーンタイプの剥離開始部	G3j1	早期
Q226	石鏃	15.5	10.7	2.6	0.4	チャート	周縁加工　押圧剥離は刃潰し状　素材剥片は小形の垂直打撃による剥片	G3j1	早期 PL25
Q227	石鏃	22.6	18.2	5.4	1.3	チャート	両面加工　押圧剥離はやや不規則で貝殻状の剥離面	H2a8	早期 PL25
Q228	石核	39.5	21.6	20	20.1	チャート	小さな分割礫　表裏両側辺に作業面が展開　貝殻状の小形剥片を剥離	H2e9	早期
Q229	石核	21.9	23.6	17.9	9.6	チャート	小さな分割礫を素材　垂直打撃で小形の貝殻状剥片を剥離	H2e9	早期
Q230	剥片	18.9	14.7	5.6	0.9	チャート	節理面打面の剥片　剥離の開始部はコーンタイプ	H2e0	早期
Q231	楔形石器	24.4	17.7	8.5	3.1	チャート	剥片素材　素材の打面側からハンマーで垂直打撃　剥片の末端部に対象物が当てられ、末端から小さな剥片が剥がれている	H2e0	早期 PL25
Q232	二次加工剥片	17.6	14.8	4.6	1.3	チャート	横長剥片　裏面に押圧剥離が不規則に施されている二次加工剥片　石鏃の未製品の可能性有り	H2e0	早期
Q233	剥片	15.5	15.7	4.1	0.6	チャート	節理面打面の剥片　剥離の開始部はコーンタイプ	H3a1	早期
Q234	石鏃	28.6	17.5	4.9	1.2	瑪瑙	両面加工　規則的な押圧剥離で加工　押圧剥離の剥離の開始部は曲げタイプ　やや大形の石鏃	H2e8	前期 PL25
Q235	削器	57.6	27.3	20.8	30.6	瑪瑙	強い力で剥離した分厚い剥片が素材　左側辺に直接打撃で刃部を形成	H2e8	早期 PL25
Q236	石核	34.1	40.1	21.6	34.6	チャート	小さな分割礫を素材にして、垂直打撃で小形の貝殻状剥片を剥離	H2f9	早期
Q237	石鏃	16	10	4.4	0.6	チャート	垂直打撃の剥片を素材に不規則な押圧剥離で加工　小形の石鏃	H2f9	早期 PL25
Q238	石核	22.2	19.7	16.5	6.6	チャート	小さな分割礫を素材　垂直打撃で小形の貝殻状剥片を剥離	H2f9	早期
Q239	石鏃	16.5	15.8	4.6	0.9	黒曜石	両面加工　押圧剥離はコーンタイプの剥離開始部をもつやや不規則な剥離	H2f0	早期 PL25
Q240	石鏃	14.2	14.1	3.0	0.4	黒曜石	両面加工　押圧剥離はコーンタイプの剥離開始部をもつ規則的な剥離	H2f0	不明 PL25
Q241	石鏃	16.6	13.7	3.5	0.5	チャート	両面加工　押圧剥離はコーンタイプの剥離開始部をもつやや不規則な剥離	H3b1	早期 PL25
Q242	剥片	27.1	22.9	6.7	2.6	黒曜石	黒曜石の剥片　打面は折れている　背面は剥離軸に対してほぼ真横からの剥離面	H3b1	前期ヵ
Q243	二次加工剥片	17.7	12.9	4.8	1.0	石英斑岩ヵ	横長剥片のバルブ部分を押圧剥離で加工　石鏃の未製品の可能性が高い	H3a2	早期
Q244	石鏃	21.8	14.6	3.9	1.0	チャート	半周面加工　押圧剥離の剥離開始部はソフトハンマーによるコーンタイプと推定　剥離面はやや規則的	包含層中	前期 PL25
Q245	削器	19.7	14.4	3.2	0.9	チャート	薄い礫長剥片　左側辺にやや不規則な押圧剥離で加工	包含層中	早期

遺物包含層出土遺物「加工具・摩製石斧・掻器」（第21 ～ 23図）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	特　　徴	出土位置(区)	備　考
Q246	磨石	(5.1)	7.0	3.6	(185.3)	安山岩	自然礫を素材　磨痕２か所	G29	
Q247	敲石	10.0	5.9	3.0	230.0	安山岩	自然礫を素材　敲打痕４か所	G29	焼礫
Q248	敲石	5.7	4.8	2.9	105.5	砂岩	自然礫を素材　敲打痕２か所	G29	焼礫
Q249	敲石	(9.2)	5.3	2.1	(141.0)	砂岩	自然礫を素材　敲打痕３か所	G29	焼礫
Q250	敲石	8.7	6.1	2.8	157.5	砂岩	自然礫を素材　敲打痕３か所	G29	焼礫 PL25
Q251	敲石	9.4	(7.2)	3.7	(296.0)	石英斑岩	自然礫を素材　敲打痕２か所	G28	焼礫
Q252	敲石	(3.4)	(3.6)	(1.6)	(19.4)	砂岩	自然礫を素材　敲打痕１か所	G28	焼礫
Q253	敲石	10.9	3.2	2.1	97.5	安山岩	自然礫を素材　敲打痕１か所	G29	焼礫 PL25
Q254	敲石	(4.5)	(4.3)	(3.7)	(84.2)	砂岩	自然礫を素材　敲打痕１か所	G29	焼礫
Q255	敲石	6.3	1.9	1.6	28.3	安山岩	自然礫を素材　敲打痕２か所	G29	PL25
Q256	敲石	(8.6)	(5.1)	2.8	(130.0)	砂岩	自然礫を素材　敲打痕１か所	G29	焼礫
Q257	敲石	(11.4)	10.6	8.2	(1120.0)	花崗岩	自然礫を素材　敲打痕１か所	G31	焼礫 PL25
Q258	凹石	9.9	(6.1)	(3.7)	(290.0)	花崗岩	自然礫を素材　凹痕２か所	H29	焼礫 PL26
Q259	磨石	8.7	3.9	2.3	104.8	流紋岩	自然礫を素材　磨痕１か所	包含層中	
Q260	磨製石斧	(2.9)	(4.5)	(0.7)	(14.3)	流紋岩	刃部及び基部欠損	包含層中	
Q261	敲石	14.7	6.0	4.7	430.0	砂岩	自然礫を素材　敲打痕１か所	包含層中	焼礫
Q262	掻器	5.8	4.6	0.8	25.7	ホルンフェルス	薄い縦長剥片を素材　下端部に腹面側から急角度の調整　背面に礫面を残す	包含層中	
Q263	磨製石斧	(12.6)	4.3	3.3	(261.0)	安山岩	定角式	包含層中	PL26
Q264	磨製石斧	10.3	4.4	2.4	180.0	蛇紋岩？	定角式	包含層中	PL26
Q265	敲石	7.1	8.6	3.6	321.0	砂岩	自然礫を素材　敲打痕両側縁・下端部	包含層中	PL26
Q266	凹石	10.8	(6.2)	3.8	(293.0)	石英斑岩	自然礫を素材　凹痕１か所	包含層中	焼礫

（2）集石遺構

第１号集石遺構（第24・25図）

位置　調査Ｇ区西側のＨ２a9区で，標高約26mの斜面部に位置している。

規模と形状　長径2.70m，短径2.15mの不整楕円形で，深さは43cmである。壁は外傾して緩やかに立ち上がり，底面は平坦である。長径方向はN－38°－Wである。

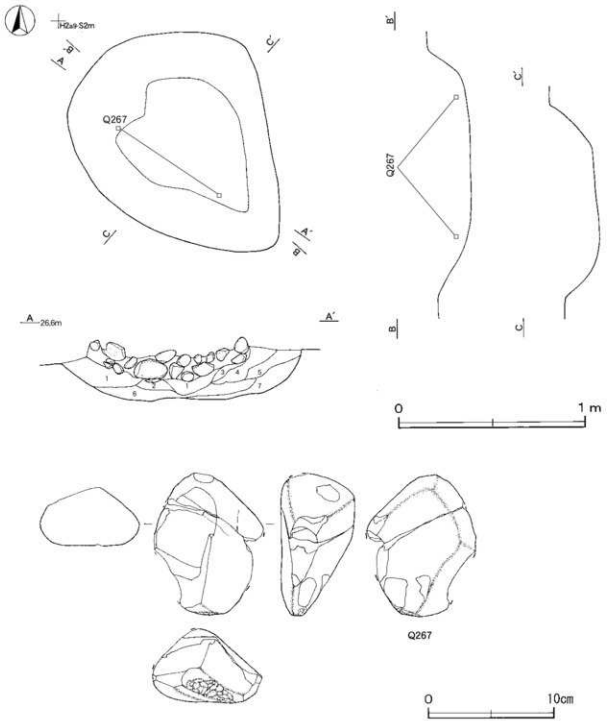
覆土　７層からなる。確認面から深さ32.9cmまで礫が詰め込まれたような状態で出土しており，覆土はその下面に堆積している状況である。含有物はローム粒子，炭化粒子を含んだ褐色を基調とする土層で，ローム粒子は赤変しているものはないが，火を受けて硬化している。堆積状況は，周囲からの土砂の流入を示していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
2　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
3　暗　色　ローム粒子・炭化粒子微量
4　褐　色　ローム粒子中量
5　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
6　褐　色　ローム粒子中量，炭化物微量
7　暗褐色　ローム粒子少量，炭化粒子微量

遺物出土状況　確認面から深さ32.9cmまで229点の礫が出土している。石材はほとんどが石英斑岩と砂岩である。大きさは長さ１～ 23cm，幅１～ 13cmで，重さ１～ 1,930g，総重量30,187g，平均131.8gで，出土した礫のほとんどが全面に火を受けている割礫である。少量であるが一部だけ火を受けているものがあり，火を受けて

いる方向が一定でない状況を読み取ることができる。また，比較的大きく自然面を多く残している礫は覆土上層から出土し，小さい礫は覆土下層から出土する状況が確認された。

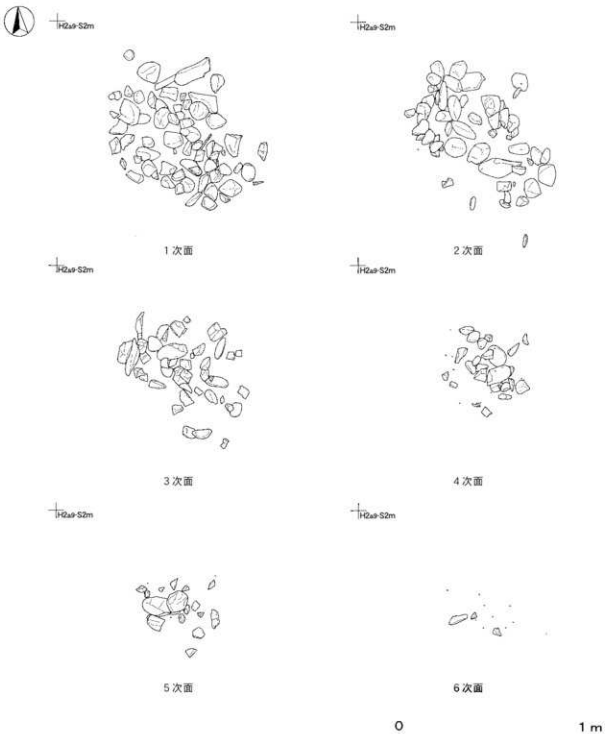
所見　本跡の底面や壁には火を受けて赤変してた部分や硬化した部分は確認されなかったことから，他の場所で火を受け持ち込まれたか，廃棄された可能性がある。また，本跡から出土した礫と周辺部から出土した礫に接合関係があることや包含層から出土した加工具（敲石・凹石等）に火を受けた痕跡が確認できることから，本跡の時期は縄文時代早期と考えられる。



第24図　第１号集石遺構・出土遺物実測図

第１号集石遺構　（第24図）

番号	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	材質	特徴	出土位置 (区)	備考
Q267	敲石	(113)	(87)	(48)	(474.0)	砂岩	自然礫を素材　敲打痕１か所	一次面	焼礫



第25図　第１号集石遺構礫出土状況図

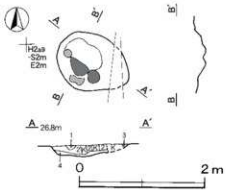
(3) 炉穴跡

第１号炉穴跡（第26図）

位置　調査Ｇ区西側のＨ２a9区で，標高約26mの斜面部に位置している。第１号集石遺構が西側1.2mの地点に位置する。

確認状況　確認面では捉えることはできず，遺物包含層を掘り下げていく過程で確認された。その確認面は，遺物包含層の最終面である。

規模と形状　長径1.20m，短径0.90mの楕円形で，長径方向はN－52°－Wである。深さは10cmほどの浅い炉穴である。炉床の南西部が赤変している。



第26図　第１号炉穴跡実測図

覆土　4層に分層され，焼土と炭化物をわずかに含んでいる。

土層解説

1	赤　褐	色	焼土ブロック・炭化物・ローム粒子少量
2	褐	色	ローム粒子中量，焼土ブロック・炭化物微量
3	褐	色	ローム粒子少量，炭化粒子微量
4	褐	色	ローム粒子少量，炭化粒子微量

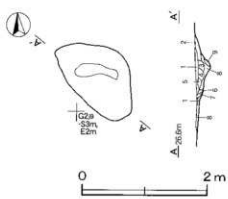
所見　出土した炭化材を加速器質量分析法で，放射性炭素年代測定を実施した。結果，暦年較正用年代1200±20（約1200年前）という年代値が測定された。第１号集石遺構との関連を想定して分析したが，考古学的に時期を特定する要素がないため明確な時期判断はできない。

第２号炉穴跡（第27図）

位置　調査Ｇ区西側のＧ２j9区で，標高約26mの斜面部に位置している。

確認状況　確認面では捉えることはできず，遺物包含層を掘り下げていく過程で確認された。その確認面は，遺物包含層の最終面である。

規模と形状　長径1.56m，短径0.94mの楕円形で，深さは25cmである。長径方向はN－50°－Wである。



第27図　第２号炉穴跡実測図

覆土　９層に分層され，焼土と炭化物を微量含んでいる。

土層解説

1	褐	色	ローム粒子少量，焼土ブロック・炭化物微量
2	灰　褐	色	ローム粒子・炭化物微量
3	黒　褐	色	ローム粒子・焼土ブロック・炭化物微量
4	褐	色	ローム粒子中量，炭化物微量
5	褐	色	ローム粒子多量，炭化粒子微量
6	褐	色	ローム粒子少量，炭化粒子微量
7	褐	色	ローム粒子中量，炭化粒子微量
8	褐	色	ローム粒子少量，炭化物微量
9	暗　褐	色	ローム粒子・炭化粒子微量

所見　時期は，第１号集石遺構や第１号炉穴跡との関連から縄文時代早期と推定できるが，明確ではない。

表２　炉穴跡一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模（m）（長径×短径）	深さ（cm）	壁面	炉床面	覆土	出土遺物	備　考 新旧関係（旧→新）
1	Ｈ２a9	N－52°－W	楕円形	1.20×0.90	10	皿状	凹凸	自然		縄文時代早期ｎ
2	Ｇ２j9	N－50°－W	楕円形	1.56×0.94	25	皿状	凹	自然		縄文時代早期ｎ

(4) 陥し穴

第12号陥し穴（第308号土坑）（第28図）

位置　調査Ｊ区のＩ９c9区，標高約28mの平坦部に位置している。

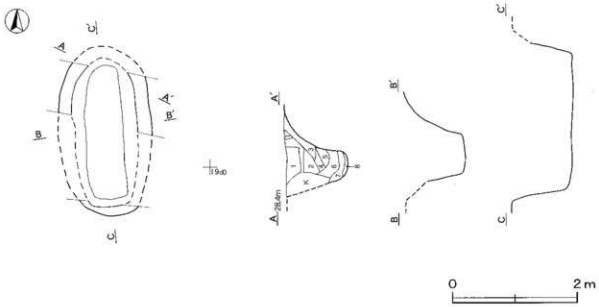
規模と形状　長径2.71m，短径1.45mの楕円形で，深さは95cmである。東壁と西壁は外傾して立ち上がり，断面はＵ字状で，底面は平坦である。南壁と北壁はほぼ直立している。長径方向はＮ－３°－Ｗで，傾斜部と平行している。

覆土　８層からなる。周囲からの土の流入を示す堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　黄　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量
2　にぶい黄褐色　ローム粒子多量，炭化粒子微量
3　黄　褐　色　ローム粒子中量
4　褐　　色　ローム粒子少量
5　褐　　色　ローム粒子多量，ロームブロック微量
6　褐　　色　ローム粒子多量，ロームブロック少量，鹿沼パミスブロック微量
7　暗　褐　色　ロームブロック・ローム粒子中量，鹿沼パミスブロック少量
8　明 黄 褐 色　鹿沼パミスブロック多量

所見　時期は，規模や形状から縄文時代と考えられるが，遺物が出土していないため明確な時期判断は困難である。



第28図　第12号陥し穴実測図

第13号陥し穴（第310号土坑）（第29図）

位置　調査Ｊ区のＨ９j3区，標高約28mの平坦部に位置している。

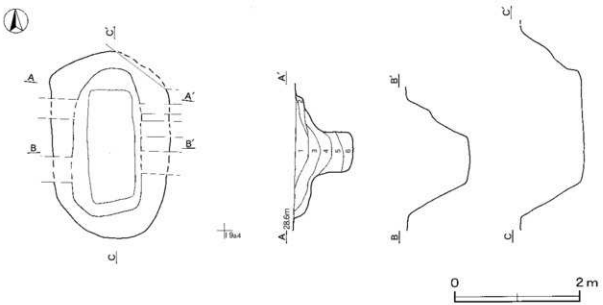
規模と形状　長径2.98m，短径1.89mの楕円形で，深さは95cmである。壁は外傾して立ち上がり，断面は逆台形状で，底面は平坦である。長径方向はＮ－２°－Ｗで，傾斜部と直行している。

覆土　６層からなる。周囲からの土の流入を示す堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　褐　　色　ローム粒子多量
2　明　褐　色　ローム粒子多量，ロームブロック微量
3　褐　　色　ローム粒子少量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
4　黄　褐　色　ローム粒子中量
5　褐　　色　ローム粒子少量
6　暗　褐　色　鹿沼パミスブロック少量，ローム粒子微量

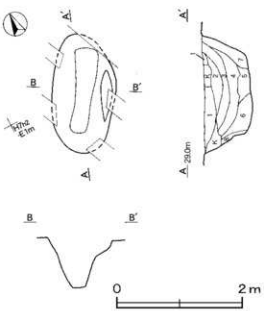
所見　時期は，規模や形状から縄文時代と考えられるが，遺物が出土していないため明確な時期判断は困難である。



第29図　第13号陥し穴実測図

第14号陥し穴（第327号土坑）（第30図）

位置　調査Ⅰ区のＨ７h2区，標高約29mの平坦部に位置している。



第30図　第14号陥し穴実測図

規模と形状　長径1.92m，短径1.04mの楕円形で，深さは79cmである。壁は外傾して立ち上がり，断面はＵ字状で，底面は平坦である。長径方向はＮ－27°－Ｅで，傾斜部と直行している。

覆土　８層からなる。周囲からの土の流入を示す堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　黒　　色　ローム粒子微量
2　極暗褐色　炭化材・ローム粒子微量
3　暗　褐　色　ローム粒子少量，炭化物微量
4　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
5　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化材微量
6　暗　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
7　褐　　色　ローム粒子中量，炭化物微量
8　褐　　色　ローム粒子多量，炭化粒子微量

所見　時期は，規模や形状から縄文時代と考えられるが，遺物が出土していないため明確な時期判断は困難である。

第15号陥し穴（第330号土坑）（第31図）

位置　調査L区のH５d0区，標高約29m台地の肩部に位置している。

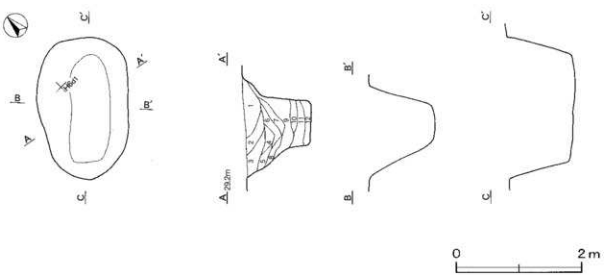
規模と形状　長径2.25m，短径1.42mの楕円形で，深さは106cmである。南東壁と北西壁は外傾して立ち上がり，断面はU字状で，底面は平坦である。南西壁と北東壁はほぼ直立している。長径方向はN－44°－Eで，傾斜部と平行している。

覆土　12層からなる。周囲からの土砂の流入を示す堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説

1	黒	褐	色	ローム粒子少量
2	黒		色	ローム粒子微量
3	黒	褐	色	ローム粒子少量，ロームブロック微量
4	暗	褐	色	ローム粒子少量
5	暗	褐	色	ロームブロック少量
6	褐		色	ローム粒子中量
7	褐		色	ロームブロック中量
8	褐		色	ローム粒子多量
9	褐		色	ロームブロック中量，鹿沼パミス粒子微量
10	褐		色	ロームブロック多量，鹿沼パミス粒子微量
11	褐		色	ロームブロック多量，鹿沼パミス粒子少量
12	極	暗 褐	色	ローム粒子少量，鹿沼パミス粒子中量

所見　時期は，規模や形状から縄文時代と考えられるが，遺物が出土していないため明確な時期判断は困難である。



第31図　第15号陥し穴実測図

第16号陥し穴（第332号土坑）（第32図）

位置　調査L区のH６a1区，標高約29mの台地の肩部に位置している。

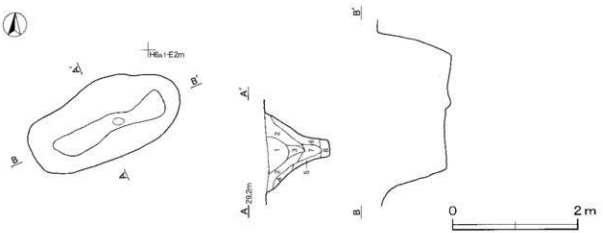
規模と形状　長径2.54m，短径1.26mの楕円形で，深さは100cmである。南東壁と北西壁は外傾して立ち上がり，断面はV字状を呈している。底面は平坦で，逆茂木の跡と想定されるピットが1か所確認された。南西壁と北東壁はほぼ直立している。長径方向はN－66°－Eで，斜面部に直行している。

覆土　８層からなる。周囲からの土砂の流入を示す堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説

1	黒		色	ローム粒子少量，焼土粒子微量
2	黒	褐	色	ローム粒子・焼土粒子微量
3	黒	褐	色	ローム粒子少量，焼土粒子微量
4	暗	褐	色	ローム粒子中量
5	黒	褐	色	ローム粒子多量
6	褐		色	ローム粒子多量（粘性が弱い）
7	暗	褐	色	ローム粒子多量
8	褐		色	ローム粒子多量

所見　時期は，規模や形状から縄文時代と考えられるが，遺物が出土していないため明確な時期判断は困難である。



第32図　第16号陥し穴実測図

表3　陥し穴一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模（m）（長径×短径）	深さ（cm）	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係（旧→新）
12	I 9c9	N－3°－W	楕円形	2.71×1.45	95	U字状	平坦	自然		IIISK308　縄文時代
13	H 9j3	N－2°－W	楕円形	2.98×1.89	95	逆台形	平坦	自然		IIISK310　縄文時代
14	H 7h2	N－27°－E	楕円形	1.92×1.04	79	U字状	平坦	自然		IIISK327　縄文時代
15	H 5d0	N－44°－E	楕円形	2.25×1.42	106	U字状	平坦	自然		IIISK330　縄文時代
16	H 6a1	N－66°－E	楕円形	2.54×1.26	100	V字状	平坦	自然		IIISK332　縄文時代

3　古墳時代の遺構と遺物

古墳時代前期の竪穴住居跡2軒を確認した。以下，遺構の特徴と遺物について記述する。

第68号住居跡（第33・34図）

位置　調査G区のG 4 d5区，標高28mの台地平坦部に位置している。

規模と形状　長軸5.28m，短軸5.26mの方形で，主軸方向はN－25°－Wである。壁高は17～23cmで，外傾して立ち上がっている。

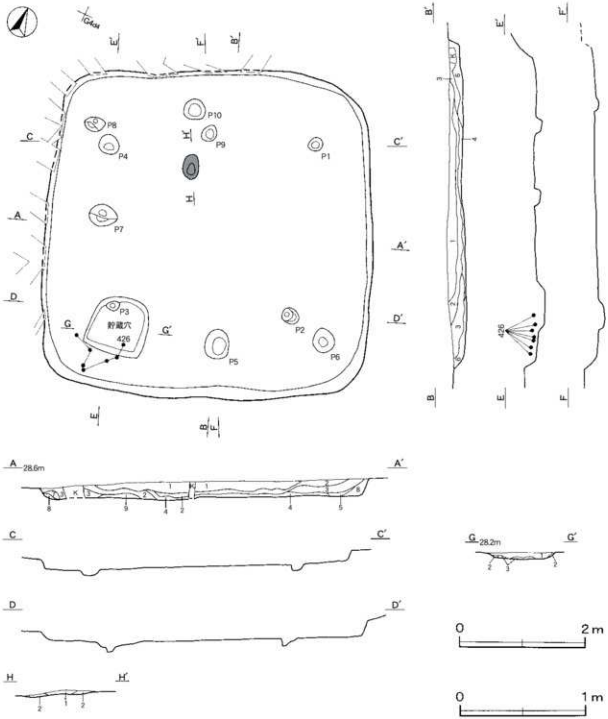
床　ほぼ平坦である。全体的に軟質で，硬化面は確認できなかった。

炉　中央部から北西寄りに位置している。長径40cm，短径26cmの楕円形で，掘り込みの極めて浅い地床炉である。炉床は火を受けてわずかに赤変している。

炉土層解説

1　にぶい赤褐色　焼土ブロック・ローム粒子中量，ロームブロック・焼土粒子少量

2　明赤褐色　ローム粒子多量，焼土ブロック少量，炭化粒子微量



第33図　第68号住居跡実測図

ピット　10か所。P1～P4は深さ10～16cmで，主柱穴と考えられる。P5は深さ10cmで，出入口施設に伴うピットと考えられる。P6～P10は深さ7～19cmで，性格は不明である。

貯蔵穴　南コーナーに位置し，長軸94cm，短軸90cmの方形で，深さは10cmである。底面は平坦で，壁は外傾し立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説
1　褐　　色　ローム粒子多量
2　明　褐　色　ローム粒子中量
3　明　褐　色　ローム粒子多量

覆土　9層からなる。全体的に周囲から土が流入した状況を示しており，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　黒　　色　ローム粒子少量，炭化物微量
2　黒　褐　色　ローム粒子中量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量
4　褐　　色　ローム粒子多量
5　褐　　色　ローム粒子中量
6　黒　褐　色　ローム粒子多量
7　褐　　色　ローム粒子少量
8　にぶい褐色　ロームブロック中量
9　明　褐　色　ローム粒子多量

遺物出土状況　土師器片16点（甕14，壺1，広口壺1）が出土している。426は南西コーナーの覆土下層から出土した破片が接合したものである。425・TP197は覆土中からの出土である。

所見　時期は，出土土器から4世紀前半と考えられる。

第34図　第68号住居跡出土遺物実測図

第68号住居跡出土遺物観察表（第34図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
425	土師器	小形壺	[4.6]	(5.8)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	内・外面ナデ　ヘラナデ	覆土中	15%
426	土師器	甕	－	(13.0)	[5.4]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き　内面摩滅調整不明　底部ヘラ削り	覆土下層	30%
TP197	土師器	壺	－	(4.2)	－	長石・石英・雲母	橙	普通	頸部ハケ目調整	覆土中	

第72号住居跡（第35図）

位置　調査G区のG3h4区，標高27mの台地端部に位置している。

規模と形状　長軸4.26m，短軸4.10mの方形で，主軸方向はN－84°－Wである。壁高は14～16cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦である。全体的に軟質で，硬化面は確認できなかった。

炉　中央部よりやや西壁寄りに位置している。長径36cm，短径25cmほどの楕円形で，掘り込みの極めて浅い地床炉である。炉床は火を受けてわずかに赤変している。

炉土層解説

1　暗　赤　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量
2　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量

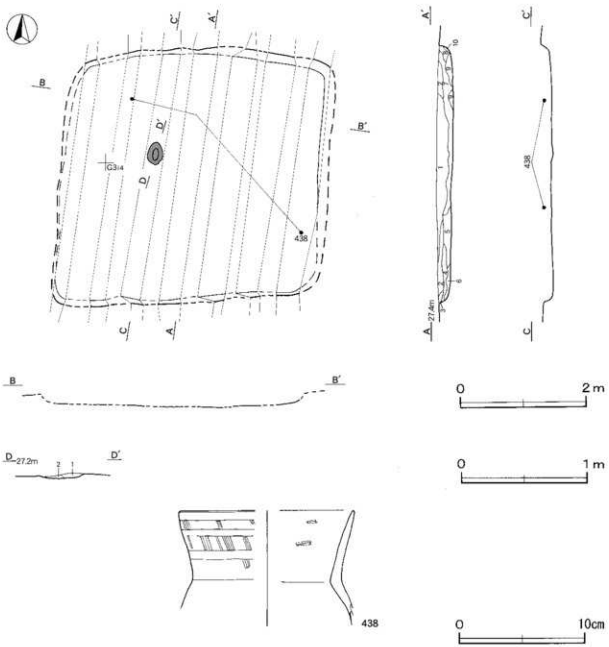
覆土　10層からなる。全体的に周囲から土が流入した状況を示しており，自然堆積と考えられる。

土層解説

1	黒		色	ローム粒子中量
2	暗	褐	色	ローム粒子中量，炭化粒子微量
3	褐		色	ローム粒子多量，炭化粒子少量
4	黒	褐	色	ローム・ブロック・炭化物少量
5	褐		色	ローム粒子多量，炭化粒子微量
6	黒	褐	色	ローム粒子中量，炭化物微量
7	暗	褐	色	ローム粒子少量，炭化粒子微量
8	褐		色	ローム粒子多量
9	暗	褐	色	ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
10	暗	褐	色	ローム粒子中量

遺物出土状況　土師器片83点（甕72，壺11）が出土している。また，混入した縄文土器片も出土している。438は東壁と中央部から北西コーナー寄りの覆土上層から出土した破片が接合したもので，住居廃絶後に廃棄されたものと考える。

所見　時期は，出土土器から４世紀前半と考えられる。



第35図　第72号住居跡・出土遺物実測図

第72号住居跡出土遺物観察表（第35図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
438	土師器	壺	[13.8]	(9.1)	－	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口辺部内・外面ハケ目調整後ナデ	覆土上層	20% PL22

表４　古墳時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模（m）（長軸×短軸）	壁高（cm）	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	新旧関係（旧→新）
								主柱穴	出入口	ピット	竈・炉	貯蔵穴				
68	G４d5	N－25°－W	方形	5.28×5.26	17～23	平坦	－	4	1	5	炉1	1	自然	土師器	４世紀前半	
72	G３h4	N－84°－W	［方形］	［4.26］×4.10	14～16	平坦	－	－	－	－	炉1	－	自然	土師器	４世紀前半	

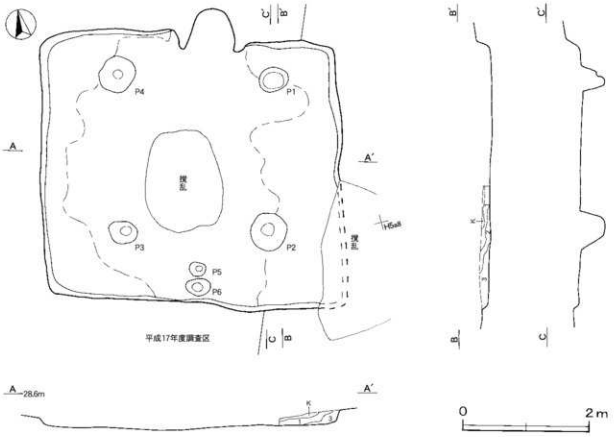
４　奈良・平安時代の遺構と遺物

奈良・平安時代の竪穴住居跡19軒，掘立柱建物跡１棟，土坑１基を確認した。以下，遺構の特徴と遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第62号住居跡（第36図）

位置　調査Ｆ区のＧ５j7区，標高約28mの緩斜面部に位置しており，平成17年度未調査部分である。



第36図　第62号住居跡実測図

規模と形状　長軸4.72m，短軸4.30mの方形で，主軸方向はN－17°－Eである。壁高は10～25cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦である。

ピット　1か所確認され，平成18年度に報告された5か所を含めると6か所となる。確認されたピットは深さ35cmで，規模と配置から主柱穴と考えられる。

覆土　3層に分層される。壁際からの土の流入を示した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ロームブロック少量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量

所見　本跡の西部は平成17年度調査され，今回は東部の調査を実施した。時期は，今回の調査で遺物はほとんどないが『文化財調査報告書第279集』で9世紀前葉と時期判断されており，今回の調査はそれを裏付けるものである。

第69号住居跡（第37・38図）

位置　調査G区のG4e4区，標高約28mの平坦部に位置している。

規模と形状　長軸3.88m，短軸3.27mの長方形で，主軸方向はN－8°－Eである。壁高は54～59cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，竈前から南東部にかけて踏み固められている。壁溝が巡っている。また，焼土塊と炭化材が中央部からやや浮いた状態で検出され，炭化材は，直径5～17cmで丸材や角材（「付章」参照）である。

焼土塊1土層解説

1　赤　褐　色　焼土ブロック多量，炭化粒子中量
2　赤　黒　色　焼土ブロック中量
3　黒　　色　ローム粒子・焼土粒子少量

焼土塊2土層解説

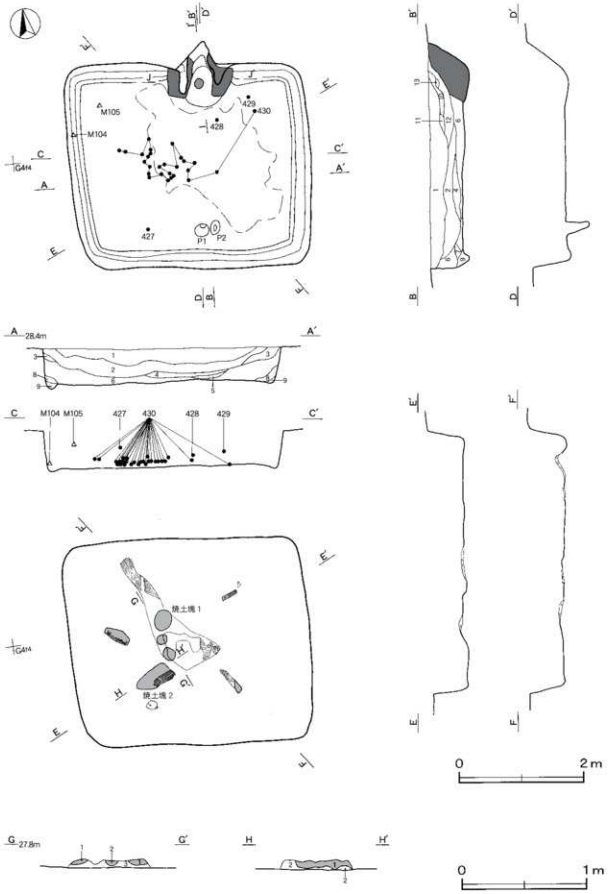
1　暗　赤　褐　色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

竈　北壁中央部に付設されている。規模は，焚口部から煙道部まで103cm，袖部幅102cmほどである。袖部は床面と同じ高さを基部とし，砂質粘土で構築されている。火床部は床面を7cm掘りくぼめ，火床面は火により赤変硬化している。煙道部は壁外へ34cm掘り込み，火床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。

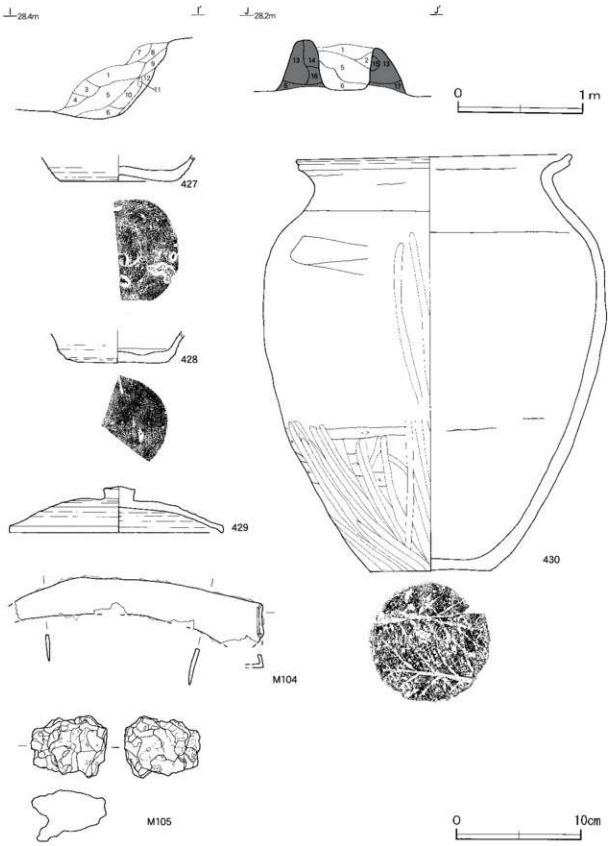
竈土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック・炭化物・焼土粒子・砂粒微量
2　暗　赤　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・砂粒少量，炭化粒子・粘土粒子微量
3　暗　褐　色　焼土ブロック多量，炭化物・粘土粒子中量，ローム粒子・砂粒少量
4　褐　　色　ローム粒子中量，炭化材・焼土粒子微量
5　暗　赤　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
6　暗　赤　褐　色　焼土ブロック・炭化粒子少量，ローム粒子・砂粒微量
7　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
8　褐　　色　炭化物・ローム粒子・砂粒微量
9　暗　褐　色　砂粒少量，焼土ブロック・炭化物微量
10　暗　赤　褐　色　焼土ブロック・炭化物・粘土粒子少量，ローム粒子微量
11　暗　赤　褐　色　焼土ブロック中量，炭化物少量，砂粒微量
12　暗　褐　色　焼土粒子・砂粒少量，ローム粒子・炭化粒子微量
13　オリーブ褐色　粘土粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量
14　にぶい赤褐色　焼土粒子中量，炭化粒子・粘土粒子少量
15　にぶい赤褐色　粘土粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
16　褐　　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
17　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子微量

ピット　2か所。P1は深さ38cmで，南壁際に位置し，出入り口施設に伴うピットと考えられる。P2の性格は不明である。



第37図　第69号住居跡実測図



第38図　第69号住居跡・出土遺物実測図

覆土　13層からなる。壁際からの土の流入を示す堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子少量，焼土粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　褐　　色　ローム粒子・砂粒・粘土粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　暗　褐　色　炭化粒子中量，ローム粒子少量，焼土粒子微量
5　明 赤 褐 色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化材少量
6　褐　　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量
7　明　褐　色　ローム ブロック多量，炭化粒子微量
8　極 暗 褐 色　ローム ブロック・焼土粒子・炭化物微量
9　褐　　色　ローム粒子中量
10　極 暗 褐 色　ローム ブロック・焼土粒子・炭化物・砂粒・粘土粒子微量
11　暗　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
12　黒　褐　色　ローム ブロック・焼土粒子・炭化物微量
13　黄　橙　色　砂粒・粘土ブロック中量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片100点（坏１，甕類99），須恵器片37点（坏類30，高台付坏１，蓋２，甕類４），鉄製品１点（鎌），鉄滓１点が出土している。427は中央部から南西コーナー部寄り，428・429は中央部から北壁寄りの覆土中層からそれぞれ出土し，430は中央部の覆土中層から炭化材上面にかけて出土した破片が接合したものである。M104は西壁の壁溝から，M105は北西コーナー部寄りの覆土中層からそれぞれ出土している。

所見　本跡からは炭化材と焼土塊が検出している。これらは住居の部材として使用されていたもので，床面からやや浮いた状態で検出されている。炭化材の出土量は少量である。出土した遺物のほとんどが焼土塊及び炭化材の上面からの出土であることから，住居廃絶後に廃棄されたものと考えられる。時期は，出土土器から８世紀中葉と考えられる。

第69号住居跡出土遺物観察表（第38図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
427	須恵器	坏	－	(21)	9.4	長石・石英	灰黄	普通	ロクロナデ　底部回転ヘラ切り後ナデ	覆土中層	20% PL22
428	須恵器	坏	－	(26)	8.0	長石・石英・雲母	灰	普通	ロクロナデ　底部回転糸切り	覆土中層	20%
429	須恵器	蓋	17.0	3.6	－	長石・石英	灰	普通	天井部回転ヘラ削り　内・外面ロクロナデ　つまみ貼付	覆土中層	60%
430	土師器	甕	21.8	33.2	9.6	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	頸部輪積痕　外面上位横ナデ　下位横位のヘラ削り後縦位のヘラ磨き　内面輪積痕	覆土中層	70% PL23

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M104	鎌	(19.9)	(5.3)	0.35	(63.0)	鉄	切先部・刃部・柄付部一部欠損	西壁溝	PL24
M105	鉄滓	5.0	6.0	4.1	144.0	滓	表面は暗赤褐色　凹凸有り	覆土中層	

第70号住居跡（第39・40図）

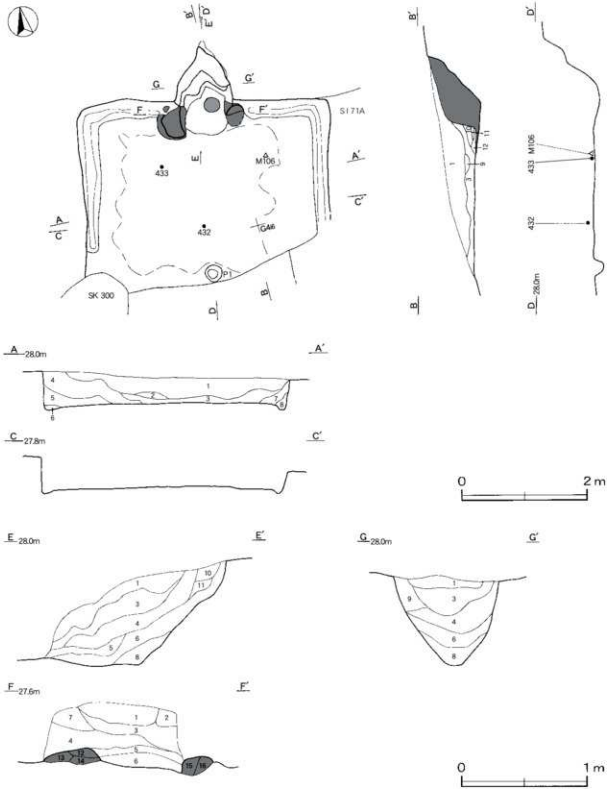
位置　調査Ｇ区のＧ４h5区，標高約28mの斜面部に位置している。

重複関係　第71A号住居跡を掘り込み，第300号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　長軸4.04m，短軸3.03mの長方形と推定され，主軸方向はN－４°－Eである。南壁は撹乱のため確認できなかったが，現存の壁高は54～59cmで直立している。

床　ほぼ平坦で，全体的によく踏み固められている。壁溝は，南壁を除く壁際で確認されている。

竈　北壁中央部に付設されている。規模は，焚口部から煙道部まで148cm，右袖部の遺存状況が不良であるが袖部幅は推定で135cmほどである。袖部は床面をやや掘りくぼめて基部とし，砂質粘土で構築されている。火床部は床面を６cm掘りくぼめ，火床面は火により赤変硬化している。煙道部は壁外へ95cm掘り込み，火床面から外傾して立ち上がっている。



第39図　第70号住居跡実測図

竈土層解説

1　黒　褐　色　粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物・鹿沼パミス粒子微量

2　暗　褐　色　ローム粒子少量、炭化物・粘土粒子微量

3　極暗褐色　ロームブロック・炭化物・焼土粒子・粘土粒子微量
4　黒　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
5　黄　褐　色　粘土ブロック多量，焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量
6　黒　褐　色　焼土粒子・炭化粒子中量，ローム粒子微量
7　褐　　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量
8　赤　黒　色　炭化物中量，焼土ブロック少量，ローム粒子微量
9　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化物・焼土粒子微量
10　暗　褐　色　粘土ブロック中量，ローム粒子・炭化物・焼土粒子微量
11　暗赤褐色　焼土ブロック少量，ロームブロック・炭化物微量
12　にぶい黄褐色　粘土粒子中量，炭化物・焼土粒子微量
13　にぶい黄褐色　粘土粒子多量，炭化物・焼土粒子微量
14　褐　　色　ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・鹿沼パミス粒子少量，炭化物粒子微量
15　褐　　色　粘土粒子少量，焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量
16　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土ブロック少量，炭化粒子・粘土粒子微量

ピット　深さ13cmで，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

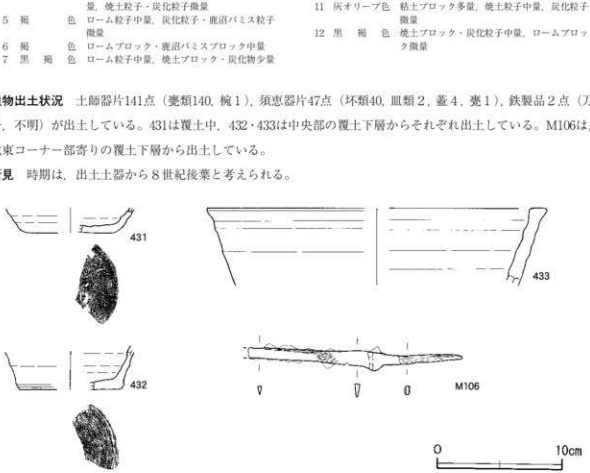
覆土　12層からなる。壁際からの土の流入を示す堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子微量
2　黒　褐　色　ロームブロック中量
3　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
4　暗　褐　色　ロームブロック中量，鹿沼パミスブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
5　褐　　色　ローム粒子中量，炭化粒子・鹿沼パミス粒子微量
6　褐　　色　ロームブロック・鹿沼パミスブロック中量
7　黒　褐　色　ローム粒子中量，焼土ブロック・炭化物少量
8　褐　　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
9　黒　褐　色　粘土粒子中量，ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
10　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
11　灰オリーブ色　粘土ブロック多量，焼土粒子中量，炭化粒子微量
12　黒　褐　色　焼土ブロック・炭化粒子中量，ロームブロック微量

遺物出土状況　土師器片141点（甕類140，椀１），須恵器片47点（坏類40，皿類２，蓋４，甕１），鉄製品２点（刀子，不明）が出土している。431は覆土中，432・433は中央部の覆土下層からそれぞれ出土している。M106は，北東コーナー部寄りの覆土下層から出土している。

所見　時期は，出土土器から８世紀後葉と考えられる。



第40図　第70号住居跡出土遺物実測図

第70号住居跡出土遺物観察表（第40図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
431	須恵器	坏	－	(20)	[6.8]	長石・角閃石	灰黄	普通	体部内・外面ロクロナデ　底部回転ヘラ切り後ナデ	覆土中	20%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
432	須恵器	坏	－	(3.4)	[8.0]	長石	褐灰	普通	体部内・外面ロクロナデ　底部回転ヘラ切り後ナデ	覆土下層	20%
433	須恵器	鉢	[27.0]	(6.1)	－	長石・雲母	黄灰	普通	口辺部内・外面ロクロナデ	覆土下層	10%

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特　　徴	出土位置	備考
M106	刀子	(8.5)	(1.4)	0.3～0.4	(18.0)	鉄	切先部欠損　木質遺存　綿金具残存	覆土下層	PL.24

第71A号住居跡（第41～44図）

位置　調査G区のG4h6区，標高約28mの斜面部に位置している。

重複関係　第71B住居跡を掘り込み，第70号住居に掘り込まれている。

規模と形状　南壁は撹乱のため確認できなかった。長軸4.54m，短軸3.80mの長方形と推定され，主軸方向はN－8°－Wである。壁高は56～76cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，第71B号住居跡の底面にロームを主体とする埋土で貼り床を構築し，壁溝が南部を除いて確認されている。

竈　北壁中央部に付設されている。規模は，焚口部から煙道部まで101cm，袖部幅150cmである。袖部は床面と同じ高さを基部とし，砂質粘土とローム土で構築されている。火床部は床面を楕円形に14cm掘りくぼめて，褐色土を埋め戻して構築されている。火床面は火熱により赤変硬化している。煙道部は壁外へ三角形状に26cm掘り込み，火床面から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

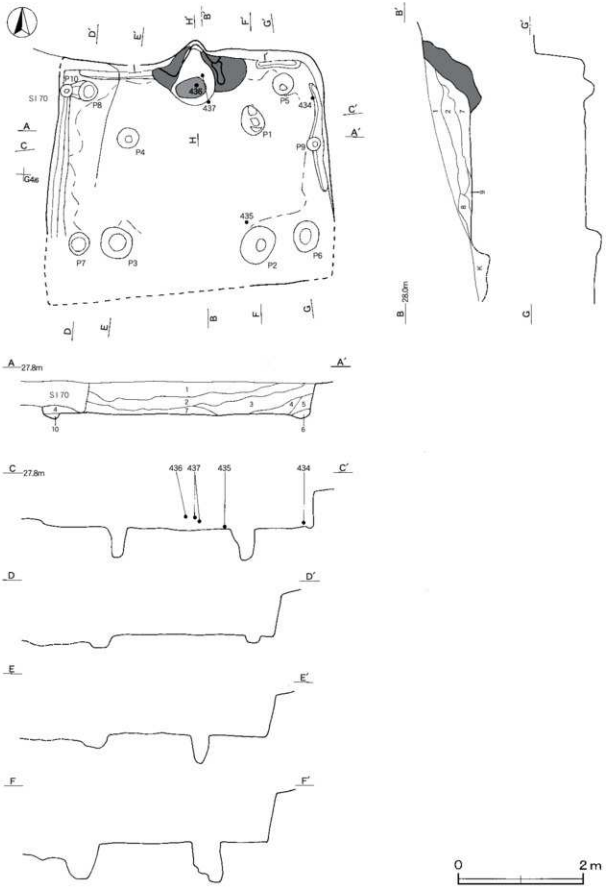
1　暗　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　にぶい赤褐色　焼土粒子・砂質粘土粒子少量，炭化物・ローム粒子微量
3　褐　色　炭化物・砂質粘土粒子少量，ロームブロック・焼土粒子・細礫微量
4　褐　色　砂質粘土粒子多量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
5　褐　色　砂質粘土粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
6　褐　色　粘土粒子少量，焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
7　暗 赤 褐 色　焼土ブロック中量，炭化粒子・砂粒少量
8　暗 赤 褐 色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子少量
9　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
10　にぶい赤褐色　焼土粒子少量，炭化物微量
11　暗 赤 褐 色　ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子少量，炭化物微量
12　黒　褐　色　焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
13　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
14　にぶい褐色　ローム粒子中量，焼土ブロック少量，炭化粒子微量
15　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
16　褐　色　砂質粘土粒子多量，ロームブロック・炭化粒子微量
17　暗 赤 褐 色　焼土粒子中量，ローム粒子少量，炭化粒子微量
18　にぶい黄褐色　砂質粘土粒子少量，炭化粒子微量
19　褐　色　ローム粒子多量，粘土ブロック・炭化粒子微量
20　暗 赤 褐 色　焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子微量
21　暗　褐　色　鹿沼パミス粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
22　褐　色　ローム粒子・鹿沼パミス粒子少量，炭化物微量

ピット　10か所。P1～P4は深さ47～58cmで，位置と配置から主柱穴と考えられる。P5～P8は深さ10～25cmで位置と配置から支柱と考えられる。P9は深さ9cm，P10は深さ13cmで，性格は不明である。

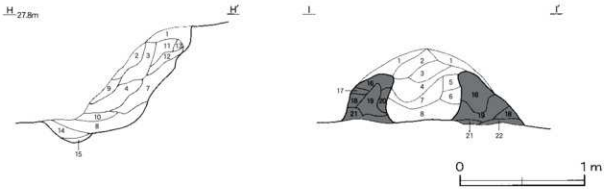
覆土　10層からなる。レンズ状の堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
2　暗　褐　色　ローム粒子少量，焼土ブロック・炭化物・鹿沼パミスブロック微量
3　暗　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・鹿沼パミス粒子微量
4　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・鹿沼パミス粒子微量
5　褐　色　ローム粒子中量，鹿沼パミス微量
6　黒　褐　色　ローム粒子・鹿沼パミス粒子微量
7　暗 赤 褐 色　焼土粒子少量，ロームブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
8　暗　褐　色　ローム粒子少量，鹿沼パミスブロック・炭化粒子微量
9　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
10　褐　色　ローム粒子・粘土粒子・鹿沼パミスブロック少量



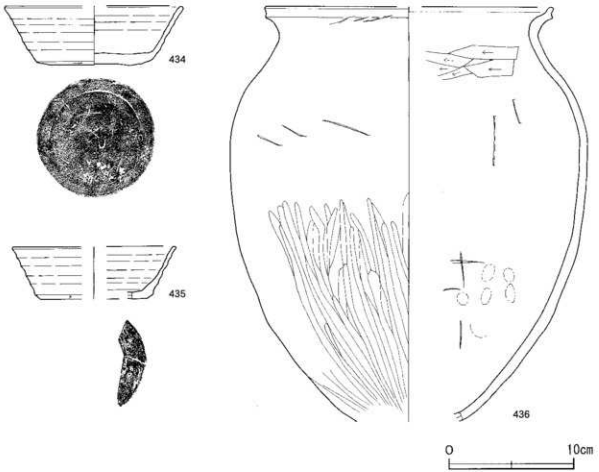
第41図　第71A号住居跡実測図（1）



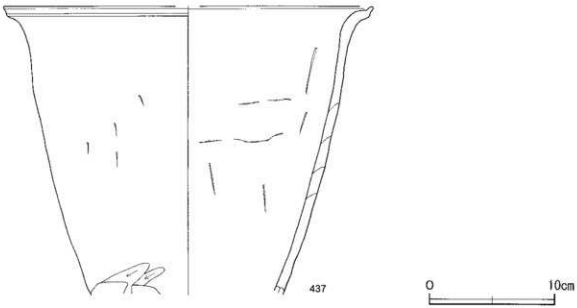
第42図　第71A号住居跡実測図（2）

遺物出土状況　土師器片245点（甕類242，甑３），須恵器片36点（坏類24，高台付坏１，蓋３，瓶１，甕類７）が出土している。434は北東コーナ部寄り，435はP２北側の覆土下層からそれぞれ出土している。436・437は竈の覆土下層から出土している。

所見　本跡は，第71B号住居跡を掘り込み構築されているが，主柱穴とするP２・P３が第71B号住居跡と同位置で，主軸方向も同方向であることから，時期差のある遺構ではなく，拡張あるいは建て替えられた可能性がある。時期は，出土土器から８世紀中葉と考えられる。



第43図　第71A号住居跡出土遺物実測図（1）



第44図　第71A号住居跡出土遺物実測図（2）

第71A号住居跡出土遺物観察表（第43・44図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
434	須恵器	坏	[14.0]	4.7	7.5	長石・石英・雲母	灰黄	普通	体部内・外面ロクロナデ　体部下端手持ちヘラ削り　底部回転ヘラ切り後ナデ	覆土下層	65% PL22 ヘラ書き「丈」
435	須恵器	坏	[13.0]	4.2	[8.4]	長石・石英	黄灰	普通	体部内・外面ロクロナデ　体部下端手持ちヘラ削り　底部回転ヘラ切り後回転ヘラ削り	覆土下層	15%
436	土師器	甕	[23.0]	(33.1)	－	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	内・外面横位の横ナデ　外面工具痕　縦位のヘラ磨き　内面ヘラ削り工具痕　指頭痕	覆土下層	35% PL23
437	土師器	甑	[29.4]	(22.9)	－	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	内・外面横位の横ナデ　内・外面工具痕　下位ヘラ削り　輪積痕	覆土下層	30%

第71B号住居跡（第45・46図）

位置　調査G区のG４h6区，標高約28mの斜面部に位置している。

重複関係　第70・71A号住居に掘り込まれている。

規模と形状　第71A号住居に掘り込まれているため，正確な形状を明記することはできないが，長軸3.84m，短軸3.28mの長方形と推定される。壁高は20～28cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向はN－８°－Wである。

床　第71A号住居に掘り込まれているため確認されなかった。

竈　北壁に煙道部を掘り込んでいる痕跡と覆土中に粘土ブロックが含まれていることから，北壁中央部に付設されていたと考えられる。確認された煙道部は壁外へ30cm掘り込まれ，外傾して立ち上がっている。

ピット　本跡に伴うと考えられるピットは５か所で，P２･P３は第71A号住居のP２･P３と同位置であり，P１･P４・P５が検出された。これらのピットは，第71A号住居の床面からは確認できず，第71B号住居跡の掘り方面まで掘り下げた段階で確認された。P１は深さ40cm，P４は深さ46cmで，位置と配置から主柱穴と考えられる。P５は，竈と向かい合う位置にあることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

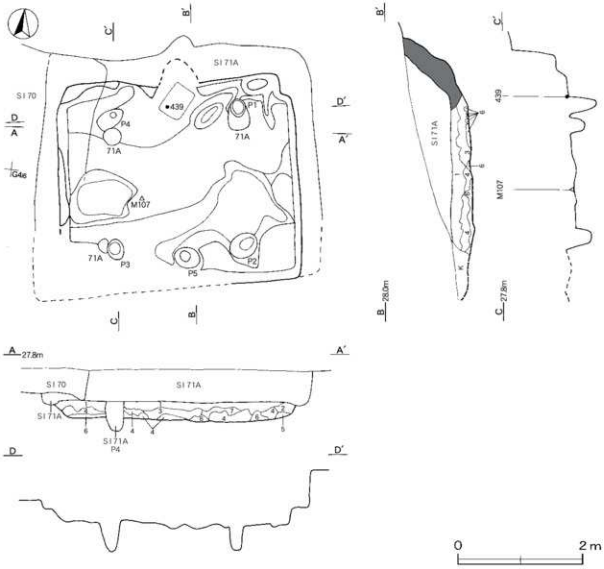
覆土　7層からなる。確認された覆土上面が第71A号住居の床面である。ロームブロックを含み，埋め戻した状況を示していることから人為堆積と考える。

土層解説

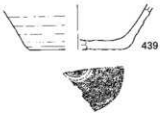
1	褐　色	ロームブロック中量，鹿沼パミスブロック少量，焼土ブロック・炭化粒子微量	
2	黒　褐　色	ロームブロック・鹿沼パミスブロック・炭化粒子少量	
3	赤　褐　色	ロームブロック中量，焼土ブロック少量，炭化物・鹿沼パミスブロック微量	
4	褐　色	ロームブロック中量，焼土ブロック・鹿沼パミスブロック・炭化粒子微量	
5	褐　色	ローム粒子多量，鹿沼パミス粒子少量，炭化粒子微量	
6	褐　色	ローム粒子多量，鹿沼パミスブロック・炭化粒子・鹿沼パミスブロック微量	
7	褐　色	ローム粒子多量，炭化粒子・鹿沼パミス粒子微量	

遺物出土状況　土師器片２点（坏），須恵器片２点（坏），鉄製品１点（刀子）が出土している。439は北壁寄りの掘り方面，M107は中央部の掘り方面からそれぞれ出土している。

所見　時期は，8世紀前葉から中葉と考えられる。



第45図　第71B号住居跡実測図



第46図　第71B号住居跡出土遺物実測図

第71B号住居跡出土遺物観察表（第46図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
439	須恵器	坏	－	(3.6)	[7.6]	長石・石英・角閃石	灰白	普通	体部内・外面ロクロナデ　底部回転ヘラ切り後ヘラ削り	掘り方	10%

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特　徴	出土位置	備考
M107	刀子	(3.9)	(1.8)	0.2～0.3	(2.9)	鉄	切先部・茎部欠損	掘り方	

第74号住居跡（第47・48図）

位置　調査H区のＪ０j7区，標高約29mの平坦部に位置している。

重複関係　中央部が第304号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　北コーナー部の一部が調査区域外で確認できないが，長軸3.67m，短軸3.40mの方形で，主軸方向はN－43°－Eである。壁高は41cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，北コーナー部から中央部にかけて踏み固められている。壁溝は，東コーナー部を除いて確認されている。

竈　北東壁中央部に付設されている。規模は，焚口部から煙道部まで105cm，袖部幅135cmである，袖部は床面とほぼ同じ高さを基部とし，ローム土と砂質粘土で構築されている。火床部は床面から７cm掘りくぼめており，火床面は火により赤変硬化している。煙道部は壁外へ35cm掘り込み，火床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
2　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック多量
4　黒　褐　色　ローム粒子中量
5　にぶい赤褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化粒子少量
6　暗　褐　色　粘土ブロック多量，ロームブロック少量
7　黒　褐　色　焼土粒子中量，ロームブロック少量，炭化粒子微量
8　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
9　黒　褐　色　ローム粒子中量，粘土粒子少量，焼土粒子微量
10　褐　　色　砂質粘土粒子多量，ローム粒子微量
11　暗　褐　色　砂質粘土粒子中量，ローム粒子極微量
12　暗　褐　色　ロームブロック・砂質粘土粒子少量，焼土ブロック・炭化粒子微量
13　暗　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
14　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土ブロック少量，炭化粒子微量

ピット　５か所。Ｐ１～Ｐ４は深さ13～20cmで，位置と配置から主柱穴と考えられる。Ｐ５は深さ16cmで竈と向かい合う位置にあることから，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

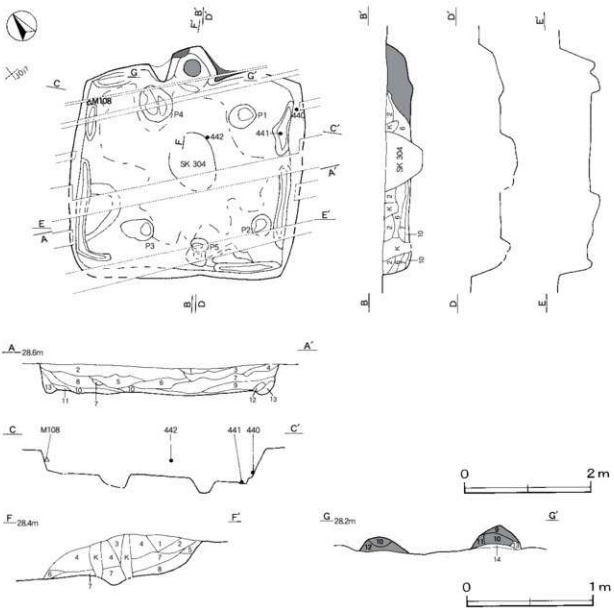
覆土　13層からなる。壁際からの土の流入を示す堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説

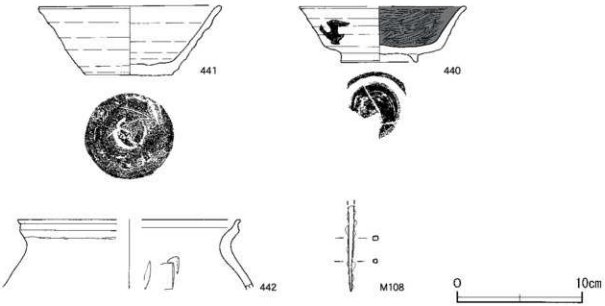
1	黒	褐	色	ローム粒子少量，焼土ブロック・炭化物微量
2	黒	褐	色	ロームブロック・炭化物少量，焼土粒子微量
3	褐		色	ロームブロック少量，炭化粒子微量
4	暗	褐	色	ロームブロック少量，炭化粒子微量
5	暗	褐	色	ローム粒子少量，焼土粒子微量
6	褐		色	ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量
7	暗	褐	色	粘土ブロック中量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
8	黒	褐	色	ロームブロック微量
9	暗	褐	色	ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量
10	黒	褐	色	ローム粒子少量，焼土粒子微量
11	褐		色	ロームブロック多量
12	褐		色	ロームブロック・炭化粒子中量
13	暗	褐	色	ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片８点（高台付坏３，甕類５），須恵器片21点（坏類８，甕類13），鉄製品１点（釘）が出土している。440は墨書土器で，北東コーナー部壁際の覆土下層から正位で出土している。441は東壁際の床面から斜位，442は中央部の覆土中層からそれぞれ出土している。M108は北西コーナー部壁際の覆土中層から出土している。

所見　時期は，出土土器から９世紀中葉と考えられる。



第47図　第74号住居跡実測図



第48図　第74号住居跡出土遺物実測図

第74号住居跡出土遺物観察表（第48図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
440	土師器	高台付坏	[13.2]	4.2	[6.2]	長石・石英・雲母・角閃石	橙	普通	内面ヘラ磨き　底部回転ヘラ切り後高台貼付	覆土下層	50%墨書［□］ヘラ記号 PL22・23
441	須恵器	坏	14.4	5.6	6.8	長石・石英	黄灰	普通	体部内・外面ロクロナデ　底部回転ヘラ切り後一方向のヘラ削り	床面	95% PL22
442	土師器	甕	[17.8]	(5.5)	－	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	内・外面横位のナデ	覆土中層	10%

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特　　徴	出土位置	備考
M108	釘	(6.8)	0.6	0.4	(3.6)	鉄	断面は方形の棒状　角釘カ	覆土中層	PL24

第75号住居跡（第49・50図）

位置　調査H区のＫ０d4区，標高約28mの平坦部に位置している。

規模と形状　長軸3.37m，短軸3.35mの方形で，主軸方向はN－14°－Eである。壁高は47～54cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，壁際とコーナー部を除いて広く踏み固められている。壁溝は，竈側の壁を除く壁際から確認されている。

竈　北東壁中央部に付設されている。耕作による攪乱のため遺存状況は不良であるが，規模は焚口部から煙道部まで98cm，袖部幅104cmである。袖部は地山を削り出して基部とし，砂質粘土で構築されている。火床部は床面を８cm掘りくぼめており，火床面は火により赤変している。煙道部は壁外へ41cm掘り込み，火床面から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック少量
2　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量，焼土ブロック・粘土粒子微量
3　暗　褐　色　砂質粘土ブロック中量，焼土粒子微量
4　黒　褐　色　焼土ブロック中量，炭化粒子少量，ローム粒子微量

5　暗　褐　色　炭化粒子中量，ロームブロック・焼土ブロック少量
6　にぶい赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子・砂質粘土粒子少量，炭化粒子微量
7　灰　褐　色　砂質粘土粒子少量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

ピット　深さ17cmで，竈と向かい合う位置にあることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

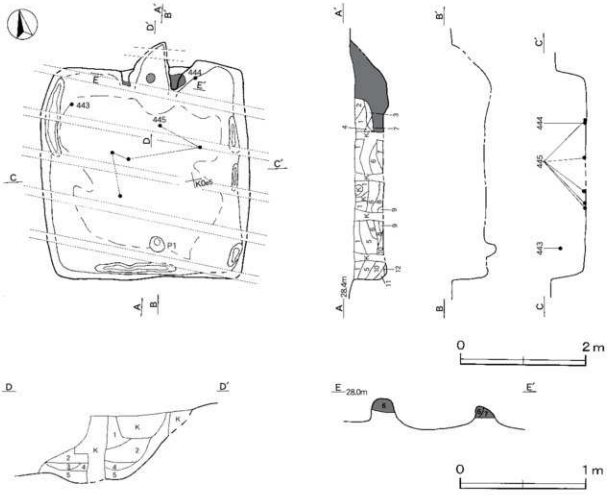
覆土　12層からなる。不規則な堆積状況から，人為堆積と考えられる。

土層解説

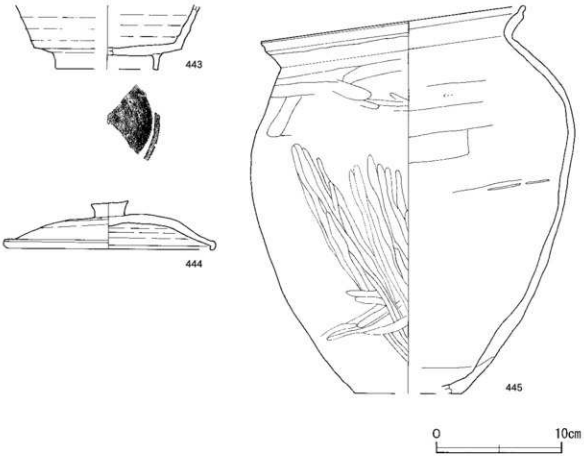
1　極　暗　褐　色　ロームブロック・炭化物中量，焼土粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量
3　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量，粘土粒子微量
4　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子少量，焼土粒子微量
5　灰　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子少量
6　暗　褐　色　ロームブロック中量，粘土粒子微量
7　褐　色　焼土ブロック・粘土ブロック中量，ロームブロック・炭化粒子微量
8　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
9　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子少量，焼土粒子微量
10　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
11　明　褐　色　ロームブロック多量
12　暗　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック多量

遺物出土状況　土師器片１点（甕），須恵器片32点（坏類11，高台付坏４，蓋３，甕14）が出土している。443は北西コーナー部の覆土中層，444は竈東側の床面からそれぞれ出土している。445は中央部の床面から出土した破片が接合したものである。

所見　時期は，出土土器から９世紀前葉と考えられる。



第49図　第75号住居跡実測図



第50図　第75号住居跡出土遺物実測図

第75号住居跡出土遺物観察表（第50図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
443	土師器	高台付坏	－	(5.1)	[8.2]	長石・石英	にぶい黄	普通	体部内・外面ロクロナデ　底部回転ヘラ切り後高台貼付	覆土中層	20%
444	須恵器	蓋	16.4	3.9	－	長石・石英	にぶい黄橙	普通	天井部回転ヘラ削り　内・外面ロクロナデ　つまみ貼付	床面	98% PL22
445	土師器	甕	21.0	31.0	[8.4]	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	内・外面横位のナデ　外面上位ヘラナデ　縦位のヘラ磨き　内面ヘラナデ　輪積痕	床面	40% PL23

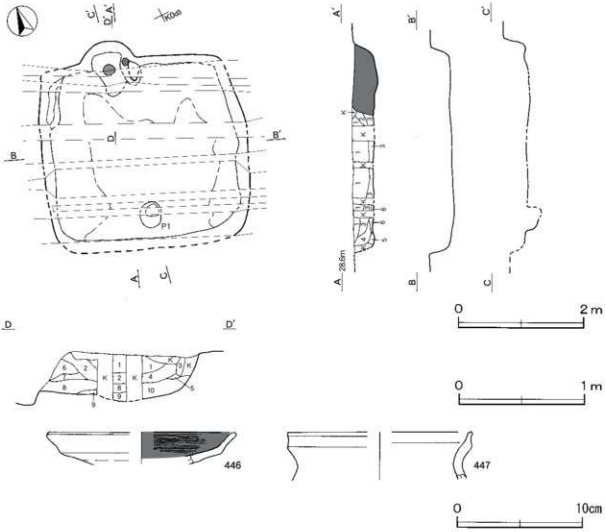
第76号住居跡（第51図）

位置　調査H区のＫ０d2区，標高約28mの平坦部に位置している。

規模と形状　耕作による撹乱のため南壁を明確に確認することができなかったが，長軸3.25m，短軸3.05mの方形と推定される。主軸方向はN－11°－Eである。壁高は28～31cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，中央部から南壁にかけて踏み固められている。

竈　北壁の北西コーナー部寄りに付設されているが，耕作による撹乱のため遺存状況は不良である。規模は，焚口部から煙道部まで90cmと推定され，砂質粘土で構築されている。火床部は床面を６cm掘りくぼめており，火床面は火により赤変硬化している。煙道部は壁外へ30cmほど掘り込み，火床面から外傾して立ち上がっている。



第51図　第76号住居跡・出土遺物実測図

竈土層解説

1　黒　　色　ローム粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子・焼土ブロック少量，炭化物微量
3　極暗褐色　ローム粒子・炭化粒子微量
4　黒　褐　色　砂質粘土粒子多量，焼土ブロック少量，ロームブロック微量
5　暗赤褐色　砂質粘土粒子多量，焼土ブロック中量，ローム粒子少量
6　暗　褐　色　焼土ブロック・砂質粘土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子微量
7　黒　褐　色　焼土ブロック・ローム粒子少量
8　黒　　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
9　黒　褐　色　焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
10　暗赤褐色　焼土ブロック多量，ロームブロック・炭化粒子微量

ピット　耕作による撹乱のため明確にすることができないが，深さは23cmで，竈と向かい合う位置にあることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　6層からなる。壁際からの土の流入を示す堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　黒　　色　ローム粒子中量，焼土ブロック・炭化物少量
2　黒　褐　色　焼土粒子中量，ローム粒子少量，粘土ブロック微量
3　黒　　色　ロームブロック・炭化粒子少量，焼土粒子・粘土粒子微量
4　極暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
5　褐　　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量
6　褐　　色　ローム粒子中量

遺物出土状況　土師器片10点（坏1，甕類9），須恵器片40点（坏類18，高台付坏1，高台付皿2，蓋2，甕17）が出土している。また，混入した陶器片も出土している。446・447は覆土中から出土している。

所見　時期は，出土土器から９世紀前葉と考えられる。

第76号住居跡出土遺物観察表（第51図）

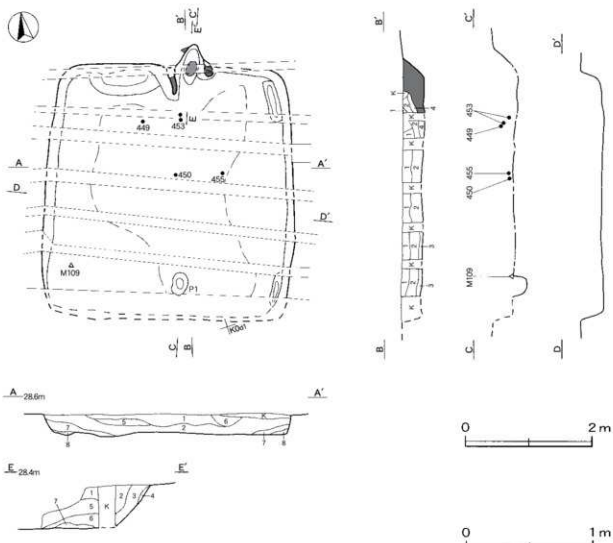
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
446	土師器	高台付皿	[14.8]	(2.5)	－	長石・石英・雲母	橙	普通	ロクロナデ　内面ヘラ磨き	覆土中	
447	土師器	甕	[14.6]	(3.8)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	内・外面横位のナデ	覆土中	

第77号住居跡（第52・53図）

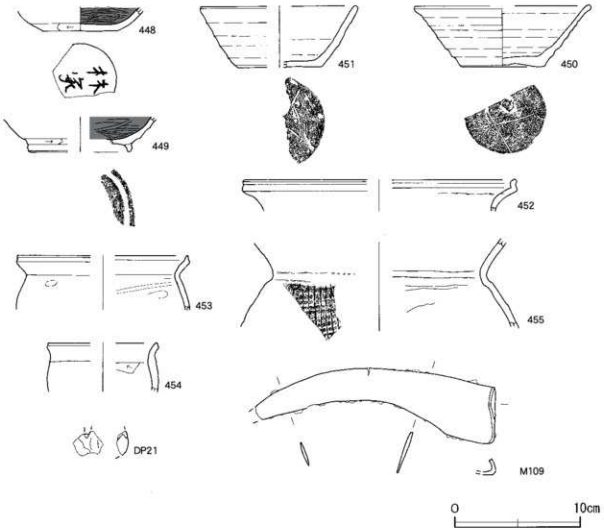
位置　調査Ⅱ区のＫ０c1区，標高約28mの平坦部に位置している。

規模と形状　耕作による撹乱のため，南・北壁を明確にすることができなかったが，長軸4.10m，短軸3.96mの方形と推定される。主軸方向はN－22°－Eである。壁高は32～36cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，南西コーナー部を除いて踏み固められている。壁溝は東壁際に確認されている。



第52図　第77号住居跡実測図



第53図　第77号住居跡出土遺物実測図

竈　北壁中央部に付設され，耕作による撹乱で遺存状況が不良である。規模は焚口部から煙道部まで86cmで，砂質粘土で構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さで，火床面は火により赤変している。煙道部は壁外へ29cm掘り込み，火床面から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1　黒　褐　色　砂質粘土ブロック・ローム粒子少量
2　にぶい黄褐色　砂質粘土粒子多量，ローム粒子少量
3　褐　色　焼土粒子中量，ロームブロック・炭化粒子少量
4　明　褐　色　ローム粒子多量，炭化粒子微量
5　黒　褐　色　ロームブロック・砂質粘土粒子少量，焼土ブロック・炭化粒子微量
6　黒　褐　色　焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量
7　褐　色　ローム粒子中量，焼土ブロック・細礫微量

ピット　深さは21cmで，竈と向かい合う位置にあることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　8層からなる。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2　極暗褐色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・砂質粘土粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック・炭化物・焼土粒子・砂質粘土粒子微量
4　黒　褐　色　炭化物・砂質粘土ブロック少量，ローム粒子・焼土粒子微量
5　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
6　黒　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
7　暗　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
8　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片233点（坏類34，甕類199），須恵器片80点（坏類42，高盤１，蓋５，甕32），不明土製品１点，鉄製品１点（鎌），鉄滓１点が出土している。449・453は中央部から竈よりの覆土中層，450・455は中央部の覆土下層からそれぞれ出土している。448・451・452・454・DP21は覆土上層から中層にかけて出土し，448は墨書土器である。M109は南西コーナー部の覆土下層から出土している。

所見　時期は，出土土器から９世紀中葉と考えられる。

第77号住居跡出土遺物観察表（第53図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
448	土師器	坏	－	(19)	[54]	長石・石英・雲母・角閃石	橙	普通	ロクロナデ　体部下端ヘラ削り　内面ヘラ磨き	覆土上層	15%墨書［林家］PL23
449	土師器	高台付坏	－	(28)	[78]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部内・外面ロクロナデ　内面ヘラ磨き　底部回転ヘラ切り後高台貼付	覆土中層	10%
450	須恵器	坏	[137]	4.9	6.4	長石	灰	普通	体部内・外面ロクロナデ　底部回転ヘラ切り後ヘラナデ	覆土下層	45%底部ヘラ記号 PL22
451	須恵器	坏	[12.4]	4.9	[6.4]	長石・石英・雲母	灰黄	普通	体部内・外面ロクロナデ　底部回転ヘラ切り後ヘラ削り	覆土上層	20%底部ヘラ記号
452	土師器	甕	[21.4]	(25)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	内・外面横位のナデ　輪積痕	覆土上層	
453	土師器	甕	[13.4]	(4.3)	－	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	内・外面横位のナデ　外面指頭痕　内面ヘラ磨き	覆土中層	
454	土師器	小形甕	[8.2]	(39)	－	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	内・外面横位のナデ　内面ヘラ削り	覆土上層	
455	須恵器	甕	－	(7.1)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	外面擬格子目叩き　内面輪積痕	覆土下層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP21	不明	(1.9)	(2.4)	(1.0)	(1.98)	土（長石・石英・赤色粒子）	上部一方向からの穿孔　内・外面指頭によるナデ	覆土上層	土鈴ヵ
M109	鎌	(19.0)	6.1	0.4	(79.0)	鉄	切先部欠損	覆土下層	PL24

第78号住居跡（第54・55図）

位置　調査Ｈ区のＫ０a6区，標高約28mの平坦部に位置している。

規模と形状　長軸3.28m，短軸2.94mの長方形で，主軸方向はＮ－30°－Ｗである。壁高は44～48cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，南西壁側と北東壁側を除いて踏み固められている。壁溝が巡っている。

竈　北西壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで88cm，袖部幅が120cmである。袖部は床面をわずかに掘り込んで基部とし，ローム粒子を混ぜた砂質粘土で構築されている。火床部は床面を４cm掘りくぼめており，火床面は火により赤変硬化している。煙道部は壁外へ47cm掘り込み，火床面から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土ブロック微量
2　灰　褐　色　砂質粘土粒子中量，焼土ブロック・炭化物微量
3　灰 赤 褐 色　焼土ブロック中量，炭化粒子少量
4　にぶい赤褐色　焼土粒子少量，砂質粘土粒子微量
5　暗　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
6　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
7　褐　　色　砂質粘土粒子中量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
8　にぶい黄褐色　砂質粘土粒子多量，焼土粒子微量
9　褐　　色　ローム粒子中量，砂質粘土粒子少量
10　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
11　褐　　色　ロームブロック中量，炭化物微量
12　暗　褐　色　ロームブロック・砂質粘土粒子少量，炭化物・焼土粒子微量

ピット　５か所。Ｐ１～Ｐ４は深さ12～18cmで，位置と配置から主柱穴と考えられる。Ｐ５は深さ20cmで，竈と向かいあう位置にあり，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

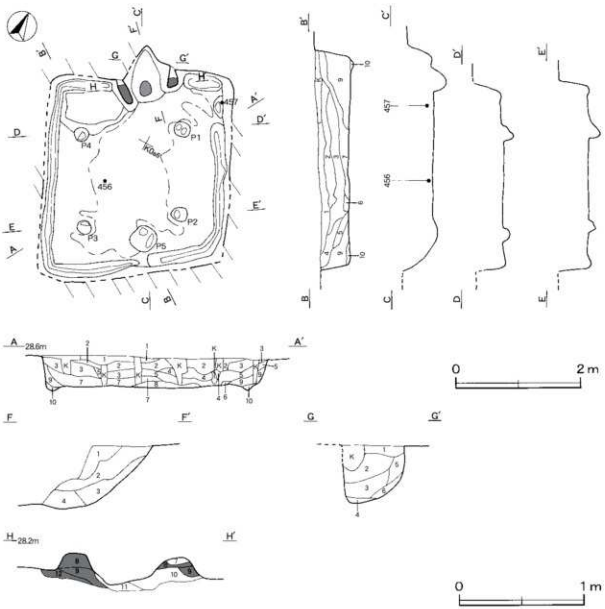
覆土　10層に分層される。壁際からの土の流入を示す堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説

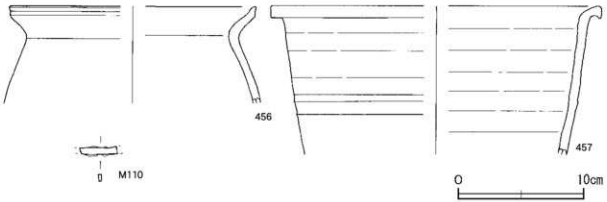
1　暗　褐　色　ロームブロック中量
2　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック中量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子少量
4　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子中量
5　黒　褐　色　ローム粒子多量，炭化物微量
6　褐　　色　ロームブロック多量
7　黒　褐　色　ローム粒子中量，炭化物少量
8　褐　　色　ローム粒子多量，炭化粒子微量
9　黒　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子少量，鹿沼パミスブロック微量
10　褐　　色　ローム粒子多量

遺物出土状況　土師器片86点（高台付坏１，甕85），須恵器片24点（坏15，盤１，甕７，瓶１），不明鉄製品１点が出土している。456は中央部の床面，457は北東コーナー部壁際の覆土下層から出土している。M110は覆土下層から出土している。

所見　時期は，出土土器から８世紀後葉と考えられる。



第54図　第78号住居跡実測図



第55図　第78号住居跡出土遺物実測図

第78号住居跡出土遺物観察表（第55図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
456	土師器	甕	[19.5]	(7.7)	－	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	内・外面横位のナデ	床面	10%
457	須恵器	瓶	[26.2]	(11.8)	－	長石・石英・角閃石	灰黄褐	普通	内・外面ロクロナデ	覆土下層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M110	不明	(3.0)	0.7	0.2	(1.3)	鉄	両端部欠損	覆土下層	

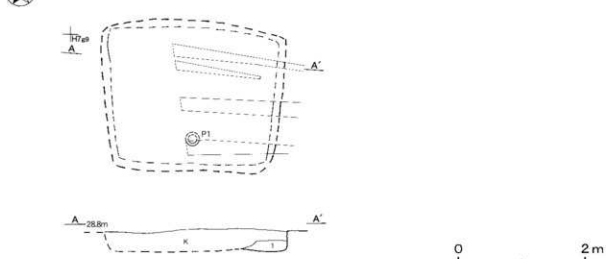
第79号住居跡（第56・57図）

位置　調査Ｊ区のＨ７g9区，標高約28mの平坦部に位置している。

規模と形状　耕作による撹乱のため全体を確認できなかった。確認できた範囲は長軸2.90m，短軸2.42mで，平面形は長方形と推定され，主軸方向はN－４°－Wである。壁高は30～33cmで，直立している。

床　軟弱で平坦である。

ピット　深さ８cmで，南壁際の中央部に位置にすることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。



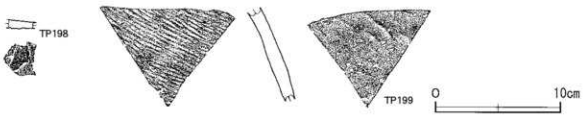
第56図　第79号住居跡実測図

覆土　耕作による撹乱で１層だけが確認されただけである。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子微量

遺物出土状況　土師器片７点（坏類２，高台付坏１，甕４），須恵器片23点（坏６，高台付坏２，蓋１，甕14）が出土している。TP198・TP199は覆土下層から出土している。

所見　出土遺物が少なく，竈や硬化面も明確ではないが，時期は出土土器から9世紀代と想定される。



第57図　第79号住居跡出土遺物実測図

第79号住居跡出土遺物観察表（第57図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP198	須恵器	坏	－	(0.7)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	覆土下層	
TP199	須恵器	甕	－	(7.6)	－	長石・石英・角閃石	にぶい黄橙	普通	外面斜位の平行叩き　内面指頭によるナデ	覆土下層	

第80号住居跡（第58図）

位置　調査Ｊ区のＨ７h0区，標高約28mの平坦部に位置している。

規模と形状　耕作による撹乱のため全体は確認できなかった。確認できた範囲は長軸3.75m，短軸3.60mで，平面形は方形もしくは長方形と推定される。主軸方向はＮ－７°－Ｅである。壁高は26～36cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，南壁から竈付近まで踏み固められている。

竈　北壁中央部に付設され，遺存状況は不良であり，砂質粘土で構築されていたと考えられる。焚口部から煙道部まで142cm，袖部幅122cmで，火床部は床面を10cm掘りくぼめており，火床面は火により赤変している。煙道部は壁外へ60cm掘り込み，火床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。

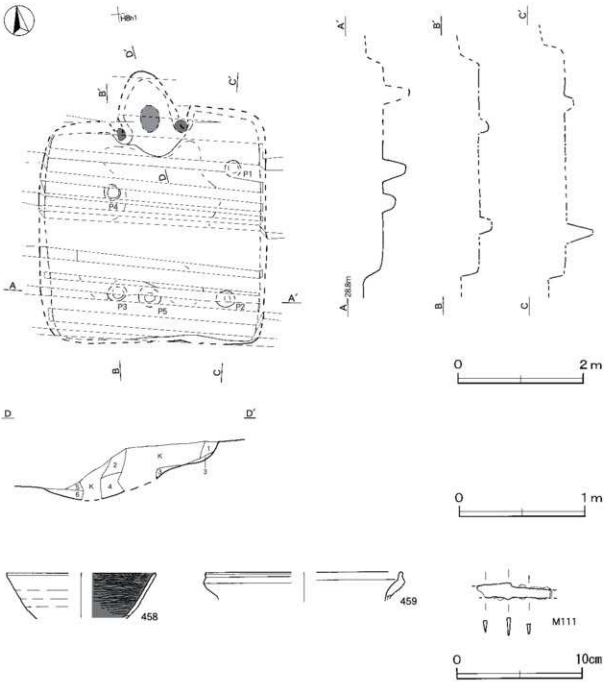
竈土層解説
1　暗 赤 褐 色　焼土粒子多量，ローム粒子・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック微量
3　明 赤 褐 色　ロームブロック・焼土粒子中量
4　にぶい赤褐色　焼土粒子多量，炭化物・ローム粒子微量
5　灰　褐　色　焼土粒子少量，炭化物・ローム粒子微量
6　にぶい赤褐色　ロームブロック中量，焼土粒子少量

ピット　５か所。Ｐ１～Ｐ４は深さ16～42cmで，配置や深さは不規則であるが主柱穴と考えられる。Ｐ５は深さ37cmで，竈と向かい合う位置にあることから出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　耕作による撹乱のため，堆積状況を明確にできなかった。

遺物出土状況　土師器片166点（坏類13，高台付皿２，甕類151），須恵器片79点（坏類62，高台付坏４，蓋４，甕類９），鉄製品２点（刀子，不明）が出土している。458は覆土中層，459・M111は竈の覆土中からそれぞれ出土している。

所見　耕作による撹乱のため遺構全体を明確にできなかったが，時期は出土土器から９世紀代と想定される。



第58図　第80号住居跡・出土遺物実測図

第80号住居跡出土遺物観察表（第58図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
458	土師器	坏	[11.8]	(3.6)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄	普通	ロクロナデ　内面ヘラ磨き	覆土中層	
459	土師器	甕	[15.4]	(2.3)	－	長石・石英・雲母	橙	普通	内・外面横位のナデ	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M111	刀子	(5.9)	(1.3)	0.3	(6.5)	鉄	刃部・茎部一部欠損	覆土中	

第81号住居跡（第59・60図）

位置　調査Ｊ区のＨ７i9区，標高約28mの平坦部に位置している。

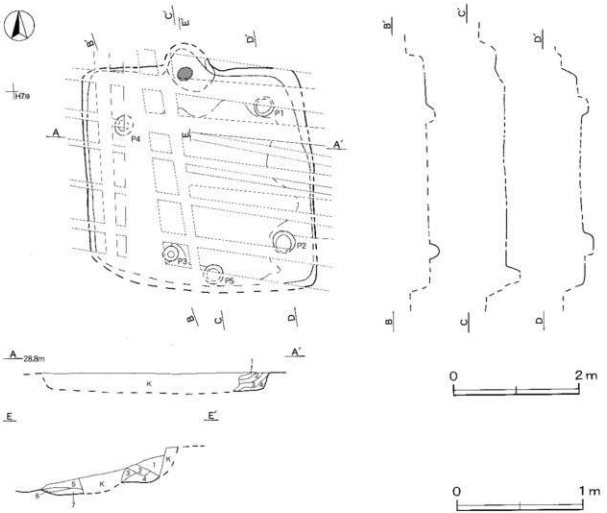
規模と形状　耕作による攪乱のため全体を確認できなかったが，確認した床面や壁の立ち上がりから，長軸3.60m，短軸3.55mの方形と推定され，主軸方向はN－８°－Wである。（柱穴を軸として考えると更に西に傾いている可能性がある。）壁高は29～32cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，中央部が踏み固められていたと考えられる。

竈　北壁中央部に付設され，遺存状況は不良であるが，砂質粘土で構築されていたと考えられる。焚口部から煙道部まで102cm，袖部は残存していない。火床部は床面を４cm掘りくぼめており，火床面は火により赤変している。煙道部は壁外へ39cm掘り込み，火床面から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
3　黒　褐　色　焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量，ローム粒子・細礫微量
4　黒　褐　色　焼土ブロック・炭化粒子少量，ローム粒子・砂質粘土粒子微量
5　黒　　色　炭化物少量，ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子微量
6　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子・細礫微量
7　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土ブロック・炭化物・砂質粘土粒子・細礫微量



第59図　第81号住居跡実測図

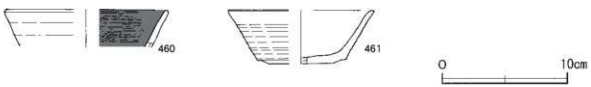
ピット　5か所。P1～P4は深さ12～15cmで，主柱穴と考えられる。P5は深さ23cmで，竈と向かい合う位置にあることから出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　耕作による攪乱のため明確にできなかった。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック微量
2　黒　褐　色　焼土ブロック・ローム粒子微量
3　極　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
4　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化物微量

遺物出土状況　土師器片127点（坏類4，高台付坏8，甕類115），須恵器片48点（坏類32，高台付坏2，蓋1，鉢1，甕12），鉄製品1点（釘）が出土している。460は覆土中層，461は覆土上層からそれぞれ出土している。

所見　耕作による攪乱のため遺構全体を明確に捉えることができず，遺物も少ないが，時期は9世紀代と想定される。



第60図　第81号住居跡出土遺物実測図

第81号住居跡出土遺物観察表（第60図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
460	土師器	坏	[12.8]	(3.0)	－	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい橙	普通	ロクロナデ　内面ヘラ磨き	覆土中層	10%
461	須恵器	坏	[11.4]	4.3	[5.2]	長石・雲母	黄灰	普通	ロクロナデ　体部下端ナデ　底部手持ちヘラ削り	覆土上層	20%

第82号住居跡（第61・62図）

位置　調査J区のI7b9区，標高約28mの平坦部に位置している。

重複関係　中央部から南部が第83号住居に掘り込まれている。

規模と形状　西部が調査区域外に延び，南部は第83号住居に掘り込まれているため，遺構全体を捉えることができなかった。確認できた範囲は長軸4.50m，短軸3.10mで，平面形は方形もしくは長方形と推定される。主軸方向はN－10°－Eである。壁高は32～46cmで，外傾して立ち上がっている。

床　中央部が壁際よりやや高く踏み固められている。壁溝が北東コーナー部と南東コーナー部に確認されている。

竈　北壁のほぼ中央に付設されている。規模は，焚口部から煙道部まで129cm，袖部幅112cmで，砂質粘土で構築されている。火床部は床面を15cm掘りくぼめており，火床面は火によりわずかに赤変硬化している。煙道部は壁外へ25cmほど掘り込み，火床面から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説
1　黒　褐　色　砂質粘土ブロック中量，焼土粒子少量，細礫微量
2　褐　色　焼土粒子中量，砂質粘土粒子少量，ロームブロック微量
3　赤　褐　色　焼土粒子多量，炭化粒子微量
4　黒　褐　色　焼土粒子中量，炭化粒子少量
5　暗　褐　色　焼土ブロック・炭化物・砂質粘土粒子少量，細礫微量
6　暗　赤　褐　色　焼土粒子多量，ローム粒子少量，炭化粒子微量

7　暗 赤 褐 色　焼土粒子多量，炭化物・細礫微量
8　にぶい黄褐色　砂質粘土粒子多量，細礫微量
9　にぶい黄褐色　砂質粘土粒子中量
10　黒　褐　色　砂質粘土粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
11　灰 黄 褐 色　砂質粘土粒子少量，焼土ブロック・細礫微量

ピット　2か所。P1は深さ65cm，P2は第83号住居跡に掘り込まれているため明確ではないが，確認された面からの深さは54cmで，位置と配置から主柱穴と考えられる。

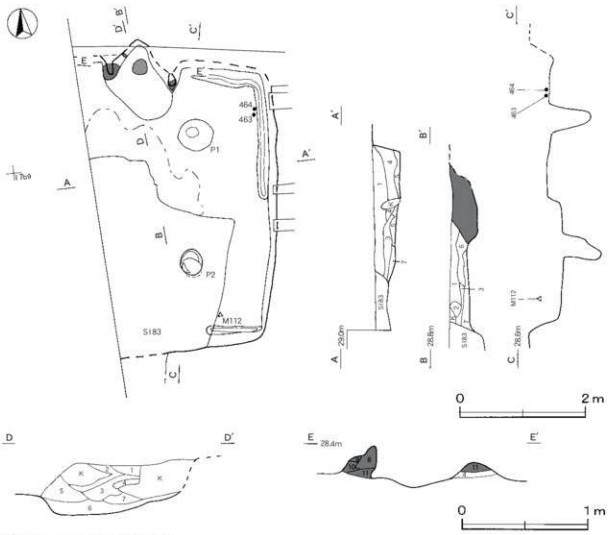
覆土　7層からなる。壁際から土の流入を示した自然堆積である。

土層解説

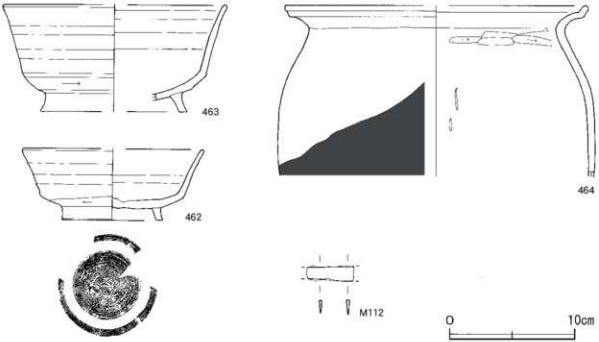
1　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量，焼土ブロック微量
2　にぶい赤褐色　焼土粒子多量，ロームブロック少量，炭化物微量
3　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化粒子微量
4　黒　褐　色　ロームブロック・炭化物・焼土粒子少量
5　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土ブロック少量，炭化物微量
6　暗　褐　色　砂質粘土粒子多量，焼土ブロック少量，炭化粒子微量
7　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子少量，炭化物微量

遺物出土状況　土師器片117点（坏類3，甕類114），須恵器片61点（坏類40，高台付坏3，高盤3，蓋1，甕14），石器2点（砥石），鉄製品2点（刀子）が出土している。463・464は北東コーナー部壁際の覆土下層，462は覆土中からそれぞれ出土している。M112は南東コーナー部の覆土下層から出土している。

所見　時期は，出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第61図　第82号住居跡実測図



第62図　第82号住居跡出土遺物実測図

第82号住居跡出土遺物観察表（第62図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
462	須恵器	高台付坏	[14.3]	5.7	8.0	長石・石英	暗灰黄	普通	体部内・外面ロクロナデ　体部下端回転ヘラ削り　底部回転ヘラ切り後高台貼付	覆土中	70% PL22
463	須恵器	高台付坏	[17.6]	8.5	[11.2]	長石・石英・角閃石	暗灰黄	普通	体部内・外面ロクロナデ　体部下端回転ヘラ削り　高台貼付	覆土下層	30%
464	土師器	甕	[24.0]	(13.6)	－	長石・石英・雲母	橙	普通	体部内・外面横位ナデ　内面頸部ヘラ削り　工具痕　輪積痕	覆土下層	15% PL23

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M112	刀子	(3.8)	1.2	0.2～0.3	(3.5)	鉄	切先・茎欠損	覆土下層	

第83号住居跡（第63・64図）

位置　調査Ｊ区のＩ７b9区，標高約28mの平坦部に位置している。

重複関係　第82号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　西部と南部が調査区域外に延びているため遺構全体を捉えることができなかった。確認できた範囲は長軸2.08m，短軸2.06mで，平面形は方形もしくは長方形と推定される。主軸方向はN－10°－Eである。壁高は52～58cmで，外傾して立ち上がっている。

床　確認された部分はほぼ平坦に踏み固められている。

竈　北東壁のほぼ中央に付設されている。規模は，焚口部から煙道部まで128cmで，砂質粘土で構築されている。袖部幅は，西部が調査区域外に延びているため明確でない。火床部は床面とほぼ同じ高さで，火床面には土師器甕が逆位で支脚に転用し設置されており，火により赤変している。煙道部は壁外へ73cmほど掘り込み，火床面から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1 暗赤褐色 焼土粒子多量，炭化物少量，ロームブロック微量
2 にぶい赤褐色 焼土粒子少量，炭化物微量
3 暗赤褐色 焼土ブロック中量，炭化粒子・砂質粘土粒子少量，ロームブロック微量
4 暗赤褐色 焼土ブロック少量，ロームブロック・炭化物微量
5 褐色 ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化物微量
6 明褐色 ロームブロック多量
7 にぶい赤褐色 焼土ブロック中量，炭化物微量
8 暗赤褐色 ロームブロック少量，焼土ブロック微量
9 にぶい赤褐色 焼土ブロック中量，ロームブロック微量
10 にぶい黄褐色 ローム粒子・砂質粘土粒子少量，炭化物・焼土粒子・細礫微量
11 にぶい赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子少量，炭化粒子微量
12 暗褐色 ローム粒子少量，焼土ブロック・炭化物微量
13 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
14 褐色 ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 3か所。P1は深さ32cmで，位置から主柱穴と考えられる。深さは，P2は38cm，P3は42cmで，北東壁際に位置することから壁柱穴と考えられる。

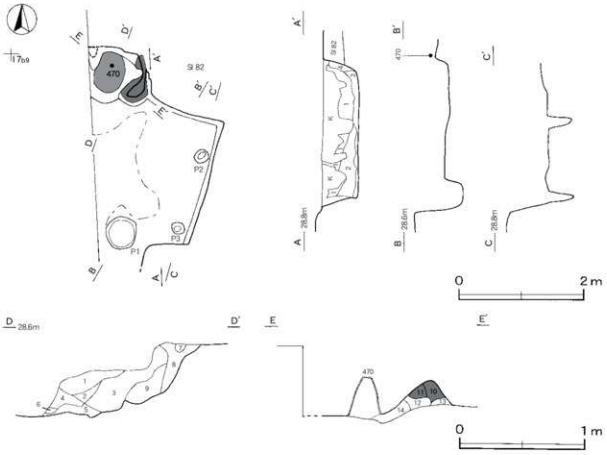
覆土 4層からなる。壁際から土の流入を示した自然堆積である。

土層解説

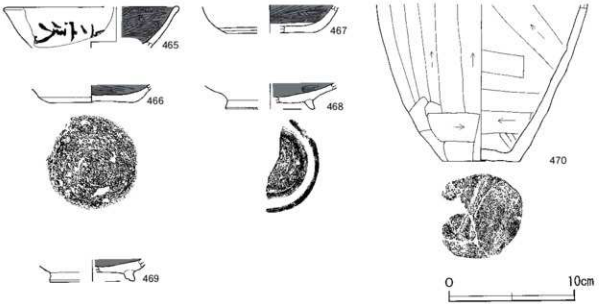
1 暗褐色 ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化物微量
2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化物微量
3 黒褐色 ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化物微量
4 暗褐色 ロームブロック多量，細礫微量

遺物出土状況 土師器片98点（坏類6，高台付坏2，甕類90），須恵器片47点（坏類22，高台付坏1，高盤2，蓋1，甕20，甑1）が出土している。470は竈から出土した転用支脚であり，465は覆土中から出土した墨書土器である。466・467・468・469は竈の覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は，出土土器から9世紀後葉と考えられる。



第63図 第83号住居跡実測図



第64図　第83号住居跡出土遺物実測図

第83号住居跡出土遺物観察表（第64図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
465	土師器	坏	[13.8]	(3.2)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ　内面ヘラ磨き	覆土中	墨書［真家ヵ］PL23
466	土師器	坏	－	(1.4)	6.6	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	内面ヘラ磨き　体部下端回転ヘラ削り　底部回転ヘラ削り	竈覆土中	15%
467	土師器	坏	－	(2.2)	[7.0]	長石・石英・角閃石	橙	普通	内面ヘラ磨き	竈覆土中	20%
468	土師器	高台付坏	－	(2.1)	[7.1]	長石・石英・角閃石	にぶい黄橙	普通	内面ヘラ磨き　底部回転ヘラ削り後高台貼付	竈覆土中	20%底部ヘラ記号
469	土師器	高台付坏	－	(1.8)	[6.6]	長石・石英・角閃石	明赤褐	普通	内面ヘラ磨き　底部回転ヘラ削り後高台貼付	竈覆土中	10%
470	土師器	甕	－	(12.5)	6.0	長石・石英・角閃石	明赤褐	普通	外面２次焼成　体部内・外面ヘラ削り　底部棒状痕２条	竈	40%転用支脚

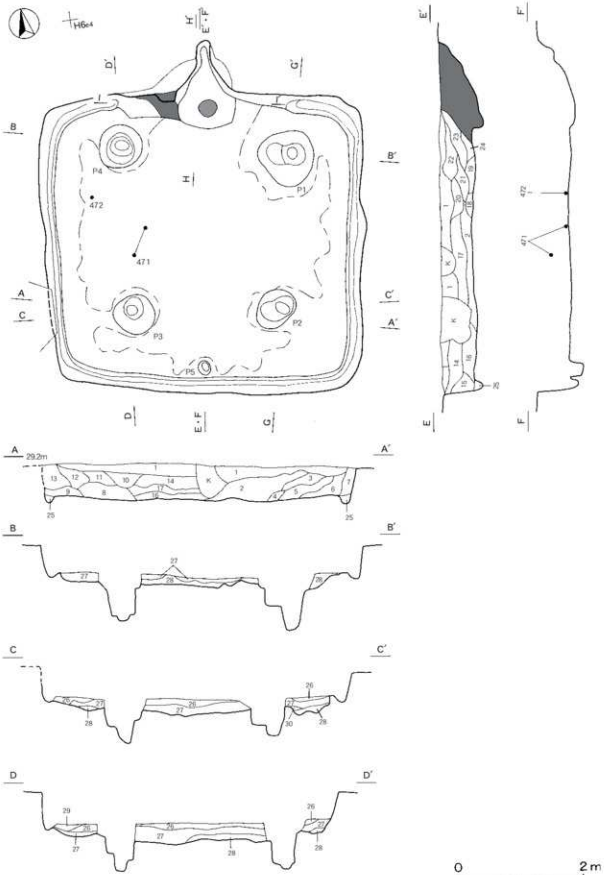
第84号住居跡（第65・66図）

位置　調査Ｌ区のＨ６e4区，標高約28mの平坦部に位置している。

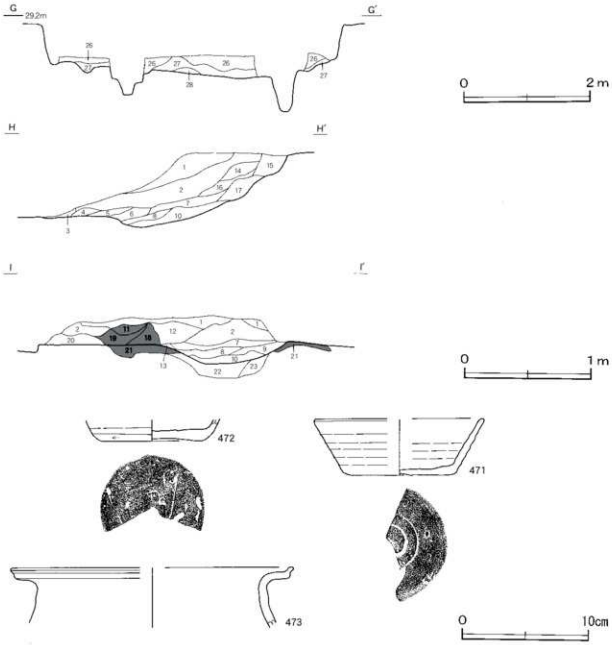
規模と形状　長軸5.13m，短軸4.75mの方形で，主軸方向はN－８°－Eである。壁高は38～52cmで，直立している。

床　ほぼ平坦であるが，竈東側に床面より３cmほど高い部分が確認でき，壁際とコーナー部を除いて踏み固められ，壁溝が壁際を巡っている。貼床は壁際を深く掘り込み，ローム土を主体とする埋土で構築している。

竈　北壁のほぼ中央に付設されている。規模は，焚口部から煙道部まで138cm，袖部幅は遺存状況が不良で明確にできないが，床面を掘り込んでおり，170cm前後と推定される。残存部は砂質粘土で構築されており，火床部は床面を８cm掘りくぼめ，火床面は火によって赤変硬化している。煙道部は壁外へ83cm掘り込み，火床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。



第65図　第84号住居跡実測図



第66図　第84号住居跡・出土遺物実測図

竈土層解説

1　暗　褐　色　ローム粒子・砂質粘土粒子少量，焼土粒子微量
2　オリーブ褐色　砂質粘土ブロック多量，焼土粒子少量
3　暗　褐　色　ローム粒子・砂質粘土粒子中量，焼土粒子中量，炭化粒子微量
4　暗　褐　色　砂質粘土粒子中量，焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量
5　黒　褐　色　焼土粒子・砂質粘土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量
6　黒　褐　色　焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
7　暗 赤 褐 色　焼土粒子・砂質粘土粒子中量，炭化物・ローム粒子微量
8　暗 赤 褐 色　焼土粒子中量，砂質粘土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量
9　暗 赤 褐 色　焼土粒子中量，ロームブロック少量，炭化粒子微量
10　暗 赤 褐 色　焼土粒子中量，ローム粒子少量，炭化粒子・砂質粘土粒子微量
11　暗　褐　色　砂質粘土ブロック少量，焼土粒子微量
12　オリーブ褐色　砂質粘土ブロック多量，焼土粒子微量
13　極暗赤褐色　焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
14　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・砂質粘土粒子少量
15　褐　色　ローム粒子中量
16　極暗赤褐色　砂質粘土粒子中量，ローム粒子少量
17　極暗赤褐色　焼土粒子中量，ロームブロック・砂質粘土粒子少量

18 にぶい黄橙色 砂質粘土粒子多量，ロームブロック・炭化粒子中量，焼土粒子少量
19 黒　褐　色 ロームブロック・砂質粘土粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
20 暗　褐　色 ロームブロック・砂質粘土粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
21 黒　褐　色 砂質粘土粒子多量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
22 暗　褐　色 ローム粒子・焼土粒子多量，炭化粒子中量
23 黒　褐　色 ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子中量

ピット　5か所。P1～P4は深さ58～80cmで，位置と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ22cmで，竈と向かい合う位置にあることから，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　30層からなる。第2・8・10～12層は，不規則な堆積状況と含有物から人為堆積と考えられ，その他の層は壁際からの土の流入を示した自然堆積と考えられる。第26～30層は貼床の構築土である。

土層解説

1 黒　褐　色 ローム粒子微量
2 暗　褐　色 ロームブロック中量（しまりが弱い）
3 暗　褐　色 ローム粒子・炭化粒子少量
4 暗　褐　色 ロームブロック中量
5 黒　褐　色 ロームブロック少量，砂質粘土ブロック微量
6 暗　褐　色 ローム粒子少量
7 褐　　色 ロームブロック中量
8 暗　褐　色 ロームブロック中量，炭化粒子少量
9 黒　褐　色 ロームブロック中量
10 黒　褐　色 ローム粒子中量
11 黒　褐　色 ロームブロック中量（彩度が高い）
12 暗　褐　色 ロームブロック中量，ローム粒子微量
13 暗　褐　色 ローム粒子中量
14 黒　褐　色 ローム粒子少量
15 暗　褐　色 ローム粒子中量（しまりが弱い）
16 黒　褐　色 ローム粒子中量，炭化粒子少量
17 暗　褐　色 ローム粒子中量，ロームブロック少量
18 にぶい黄褐色 焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子少量
19 褐　　色 砂粒多量，焼土粒子中量，ローム粒子・炭化材少量
20 黒　褐　色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
21 暗　褐　色 ローム粒子少量（しまりが弱い）
22 黒　褐　色 ローム粒子少量，焼土粒子微量
23 暗　褐　色 ローム粒子中量，粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂質少量
24 暗　褐　色 焼土粒子・砂質粘土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子少量
25 暗　褐　色 ローム粒子中量，ロームブロック微量
26 褐　　色 ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
27 黒　褐　色 ローム粒子多量，焼土粒子微量
28 暗　褐　色 ロームブロック多量
29 黒　褐　色 ローム粒子少量，焼土粒子微量
30 褐　　色 ローム粒子中量

遺物出土状況　土師器片177点（甕類165，甑12），須恵器片30点（坏類18，蓋1，甕11）が出土している。471は中央部の覆土中層と床面から出土した破片が接合したもので，472は西壁寄りの床面から出土し，473は覆土中から出土している。

所見　時期は，出土土器から9世紀前葉と考えられる。

第84号住居跡出土遺物観察表（第66図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴		出土位置	備考
471	須恵器	坏	[13.2]	4.5	[7.6]	長石・石英・雲母・角閃石	浅黄	普通	ロクロナデ	底部回転ヘラ切り	床面	25%
472	須恵器	坏	－	(1.7)	7.8	長石	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り後一方向のヘラ削り		床面	20%
473	土師器	甕	[22.2]	(4.8)	－	長石・石英・雲母	橙	普通	内・外面横ナデ		覆土中	

第85号住居跡（第67・68図）

位置　調査L区のH6i3区，標高約29mの平坦部に位置している。

規模と形状　長軸3.40m，短軸2.98mの長方形で，主軸方向はN－14°－Eである。壁高は44～51cmで，ほぼ直立している。

床　ほぼ平坦である。コーナー部を除いて踏み固められている。

竈　2基が確認され，竈1は北壁中央部，竈2は東壁のほぼ中央部にそれぞれ付設されている。竈1の規模は，焚口部から煙道部まで98cm，袖部幅109cmである。袖部は地山を掘り込み黒褐色土で埋め戻して基部とし，砂質粘土で構築されている。火床部は床面を8cm掘りくぼめ，暗褐色土で埋め戻して構築されている。火床面

は火を受け赤変している。煙道部は壁外へ51cm掘り込み，火床面から外傾して立ち上がっている。竈２の規模は，焚口部から煙道部まで100cm，袖部幅は111cmである。袖部は地山を僅かに掘り残して基部とし，砂質粘土で構築されている。火床部は床面を楕円形に７cm掘りくぼめて暗褐色土を埋め戻して構築されている。火床面は火を受け僅かに赤変している。煙道部先端は撹乱のため明確でないが，壁外へ58cm掘り込んでいたと推定され，ほぼ直立している。竈の新旧関係は，竈１の遺存状況は良好で，竈２の遺存状況が竈１に比べてやや不良であるが，覆土中に竈２の部材と考えられる砂質粘土が含まれていることや，袖部が完全に除去されていないことから，同時に使用されていたと考えられる。

竈１土層解説

1 黒 褐 色 ローム粒子・焼土粒子微量
2 黒 褐 色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
3 黒 褐 色 ローム粒子・砂質粘土粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
4 黒 褐 色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
5 暗 褐 色 砂質粘土粒子中量，焼土ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量
6 黒 褐 色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
7 黒 褐 色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
8 褐 色 ローム粒子多量
9 極暗赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子・砂質粘土粒子少量
10 極暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子微量
11 極暗赤褐色 焼土ブロック少量，ローム粒子・砂質粘土粒子微量
12 黒 褐 色 ローム粒子・砂質粘土ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
13 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子少量，炭化粒子微量
14 黒 褐 色 ローム粒子・砂質粘土粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
15 黒 褐 色 ロームブロック・砂質粘土粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
16 黒 褐 色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
17 黒 褐 色 焼土粒子多量，炭化粒子・砂質粘土粒子中量，ロームブロック少量
18 黒 褐 色 ローム粒子・焼土粒子多量，炭化粒子・砂質粘土粒子中量
19 暗 褐 色 ロームブロック・焼土粒子多量，炭化粒子中量
20 暗 褐 色 炭化粒子中量，ロームブロック・焼土ブロック少量
21 黒 褐 色 ロームブロック多量，焼土粒子少量
22 にぶい黄褐色 砂質粘土粒子多量，焼土粒子・炭化粒子中量，ローム粒子少量
23 暗 褐 色 砂質粘土粒子多量，焼土粒子中量，ローム粒子少量，炭化粒子微量
24 暗 褐 色 焼土粒子・砂質粘土粒子中量，ローム粒子少量，炭化粒子微量
25 黒 褐 色 ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
26 暗 褐 色 焼土粒子・砂質粘土粒子多量，炭化粒子中量，ローム粒子少量

竈２土層解説

1 黒 褐 色 ローム粒子微量
2 暗 褐 色 ローム粒子少量，砂質粘土粒子微量
3 暗 褐 色 ローム粒子・砂質粘土粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
4 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子微量
5 黒 褐 色 焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子中量，ローム粒子少量
6 黒 褐 色 焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
7 黒 褐 色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子中量，砂質粘土粒子少量
8 褐 色 ローム粒子中量，焼土粒子・砂質粘土粒子少量，炭化粒子微量
9 暗 褐 色 ローム粒子・砂質粘土粒子多量
10 褐 色 砂質粘土粒子多量，焼土粒子・炭化粒子中量，ローム粒子少量
11 暗 褐 色 焼土粒子・砂質粘土粒子多量，ローム粒子・炭化粒子少量
12 黒 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子中量，炭化粒子少量

ピット　深さ８cmで，竈１と向かい合う位置にあることから，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　12層からなる。壁際からの土の流入を示した自然堆積である。

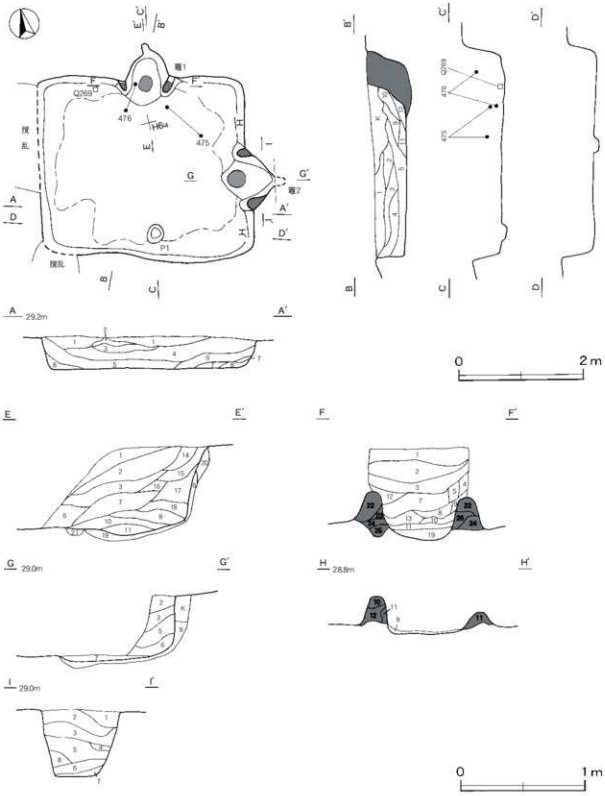
土層解説

1 黒 褐 色 ローム粒子少量
2 極暗褐色 ローム粒子少量，ロームブロック微量
3 黒 褐 色 ローム粒子微量
4 極暗褐色 ローム粒子少量
5 暗 褐 色 ロームブロック微量
6 暗 褐 色 ロームブロック少量
7 暗 褐 色 ローム粒子少量，粘土粒子微量
8 暗 褐 色 ローム粒子・砂質粘土粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
9 暗 褐 色 ローム粒子・砂質粘土粒子少量，焼土粒子微量
10 暗 褐 色 砂質粘土ブロック少量，ローム粒子・焼土粒子微量
11 暗 褐 色 ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量
12 暗 褐 色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

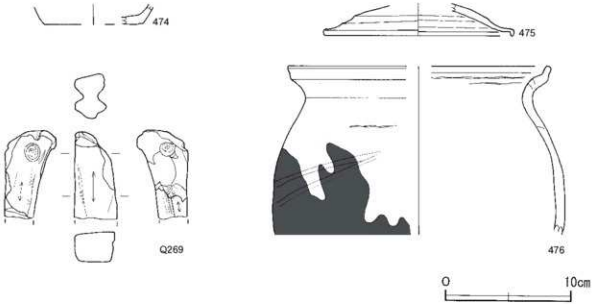
遺物出土状況　土師器片34点（坏類３，甕類31），須恵器片31点（坏類20，高台付坏１，蓋５，甕５），土製品１点（支脚），石器１点（砥石），鉄製品１点（刀子）が出土している。また，混入した縄文土器片も出土して

いる。475は北東コーナー部の覆土中層から下層，476は竈手前の覆土下層と竈の覆土中から出土した破片がそれぞれ接合したものである。474は覆土中，Q269は竈西側の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器から９世紀前葉と考えられる。



第67図　第85号住居跡実測図



第68図　第85号住居跡出土遺物実測図

第85号住居跡出土遺物観察表（第68図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
474	須恵器	坏	－	(1.7)	[7.8]	長石・石英・雲母	褐灰	普通	底部回転ヘラ削り　内・外面ロクロナデ	覆土中	
475	須恵器	蓋	15.0	(2.6)	－	長石・石英	灰	普通	天井部回転ヘラ削り　内・外面ロクロナデ	覆土下層	45%
476	土師器	甕	[20.8]	(13.3)	－	長石・石英・雲母	橙	普通	内・外面横ナデ　輪積痕	竈覆土中	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q269	砥石	(7.0)	(3.4)	4.1	(97.3)	凝灰岩	砥面３面　凹状砥部２か所	覆土下層	

第86号住居跡（第69図）

位置　調査Ｌ区のＨ６j3区，標高約29mの平坦部に位置している。

重複関係　東壁から南西コーナーを第６号溝に掘り込まれている。

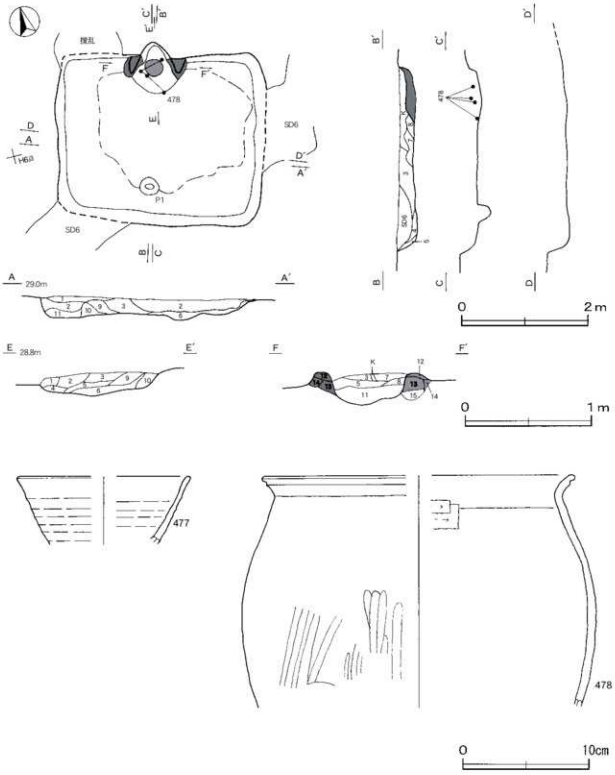
規模と形状　長軸3.19m，短軸2.71mの長方形で，主軸方向はＮ－16°－Ｅである。壁高は22～32cmで，外傾して立ち上がっている。

床　確認できた部分はほぼ平坦で，竈手前からＰ１まで踏み固められている。

竈　北壁中央部に付設されている。規模は，焚口部から煙道部まで80cm，袖部幅94cmである。袖部は地山を掘り残して基部とし，砂質粘土で構築されている。火床部は床面を16cm掘りくぼめており，火により赤変硬化している。煙道部は壁外へ23cm掘り込み，火床面から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1　にぶい黄褐色　砂質粘土粒子多量，焼土粒子少量，ローム粒子微量
2　極暗褐色　焼土粒子中量，砂質粘土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量
3　極暗赤褐色　砂質粘土粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
4　暗褐色　砂質粘土粒子中量，ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量
5　極暗赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子・砂質粘土粒子少量，炭化粒子微量
6　極暗赤褐色　焼土ブロック・炭化粒子少量，砂質粘土粒子微量
7　オリーブ褐色　砂質粘土粒子多量，ローム粒子微量
8　極暗赤褐色　焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量，ローム粒子微量
9　にぶい黄褐色　砂質粘土粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量



第69図　第86号住居跡・出土遺物実測図

10　極暗赤褐色　焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
11　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子多量，砂質粘土粒子微量
12　暗　褐　色　砂質粘土粒子多量，焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子中量
13　暗　褐　色　焼土ブロック・砂質粘土粒子多量，ローム粒子・炭化粒子中量
14　褐　色　ローム粒子・砂質粘土粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
15　黒　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量

ピット　深さ11cmで，位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　11層からなる。西壁際から中央部の中層から下層は人為堆積で，その他は壁際からの土の流入を示した自然堆積である。

土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子少量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
3　褐　　色　ローム粒子・砂質粘土ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量
4　暗　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子中量
5　黒　褐　色　ローム粒子少量（粘性が弱い）
6　暗　褐　色　ローム粒子多量
7　暗　褐　色　砂粒多量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子中量
8　暗　褐　色　砂粒多量，ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子中量
9　褐　　色　ローム粒子中量
10　黒　褐　色　ロームブロック中量，砂質粘土粒子微量
11　極　暗　褐　色　ローム粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況　土師器片51点（甕類），須恵器片13点（坏類），石器２点（砥石）が出土している。また，混入した土師質土器片，陶器片も出土している。478は竈の覆土中と竈手前の床面から出土した破片が接合したものである。477は覆土中から出土している。

所見　時期は出土土器から，９世紀前半と考えられる。

第86号住居跡出土遺物観察表（第69図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
477	須恵器	坏	[13.5]	(5.4)	－	長石・石英	灰	普通	内・外面ロクロナデ	覆土中	10%
478	土師器	甕	[24.4]	(18.8)	－	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ　外面体部ヘラ磨き　内面頸部ヘラ削り	床面	10%

第87号住居跡（第70図）

位置　調査Ｌ区のＧ６j2区，標高約29mの平坦部に位置している。

重複関係　第88号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　西部だけ確認され，遺構全体を捉えることができなかった。確認できた範囲は長軸4.63m，短軸は0.73mで，平面形は方形もしくは長方形と推定される。主軸方向はN－27°－Wである。壁高は45cmで，外傾して立ち上がっている。

床　平坦である。

ピット　２か所。深さは，Ｐ１は12cm，Ｐ２は14cmで，覆土は床面から流れ込んだ状況を示しているピットと考えられる。

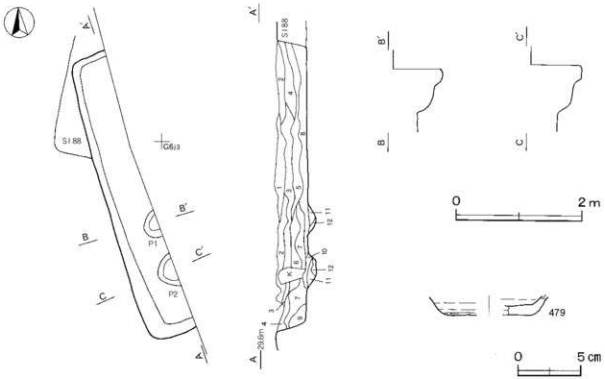
覆土　12層からなる。壁際からの土の流入を示した自然堆積である。

土層解説

1　黒　　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量
3　黒　　色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
4　黒　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子微量
5　黒　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子微量
6　黒　　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量（粘性が弱い）
7　黒　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
8　黒　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
9　暗　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量
10　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量
11　暗　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量
12　褐　　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況　土師器片12点（甕類），須恵器片８点（坏類４，甕類４）が出土している。479は覆土中から出土している。

所見　東部が調査区域外に延びているため全体の形状を明確にすることができなかったが，時期は出土土器から８世紀代と考えられる。



第70図　第87号住居跡・出土遺物実測図

第87号住居跡出土遺物観察表（第70図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
479	須恵器	坏	－	(1.5)	[6.8]	長石・石英	灰	普通	ロクロナデ　体部下端手持ちヘラ削り　底部回転ヘラ削り	覆土中	

表5　奈良・平安時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模（m）（長軸×短軸）	壁高（cm）	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	新旧関係（旧→新）
								主柱穴	出入口	ピット	竈	貯蔵穴				
62	G 5 j7	N－17°－E	方形	4.72×4.30	10～25	平坦	－	4	2	－	1	－	自然		9世紀前葉	
69	G 4 e4	N－8°－E	長方形	3.88×3.27	54～59	平坦	全周	－	1	1	1	－	自然	土師器、須恵器、鉄製品	8世紀中葉	
70	G 4 h5	N－4°－E	［長方形］	[4.04×3.03]	54～59	平坦	一部	－	1	－	1	－	自然	土師器、須恵器、鉄製品	8世紀後葉	SI71A→本跡→SK300
71A	G 4 h6	N－8°－W	［長方形］	[4.54×3.80]	56～76	平坦	一部	4	－	6	1	－	自然	土師器、須恵器	8世紀中葉	SI71B→本跡→SI70
71B	G 4 h6	N－8°－W	［長方形］	[3.84×3.28]	20～28	－	－	4	1	－	1	－	人為	土師器、須恵器、鉄製品	8世紀前葉～8世紀中葉	本跡→SI71A→SI70
74	J 0 j7	N－43°－E	方形	3.67×3.40	41	平坦	一部	4	1	－	1	－	自然	土師器、須恵器、鉄製品	9世紀中葉	本跡→SK304
75	K 0 d4	N－14°－E	方形	3.37×3.35	47～54	平坦	一部	－	1	－	1	－	人為	土師器、須恵器	9世紀前葉	
76	K 0 d2	N－11°－E	［方形］	[3.25×3.05]	28～31	平坦	－	－	1	－	1	－	自然	土師器、須恵器	9世紀前葉	
77	K 0 e1	N－22°－E	［方形］	[4.10×3.96]	32～36	平坦	一部	－	1	－	1	－	自然	土師器、須恵器、鉄製品、土製品	9世紀中葉	
78	K 0 a6	N－30°－W	長方形	3.28×2.94	44～48	平坦	全周	4	1	－	1	－	自然	土師器、須恵器、鉄製品	8世紀後葉	
79	H 7 g9	N－4°－W	［長方形］	[2.90×2.42]	30～33	平坦	－	－	1	－	－	－	－	土師器、須恵器	9世紀代	

番号	位置	主軸方向	平面形	規模（m）（長軸×短軸）	壁高（cm）	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	新旧関係（旧→新）
								主柱穴	出入口	ピット	竈	貯蔵穴				
80	H 7 h0	N－7°－E	［方形・長方形］	[3.75×3.60]	35～36	平坦	—	—	1	4	1	—	—	土師器，須恵器，鉄製品	9 世紀代	
81	H 7 i9	N－8°－W	［方形］	[3.60×3.55]	29～32	平坦	—	4	1	—	1	—	—	土師器，須恵器，鉄製品	9 世紀代	
82	I 7 b9	N－10°－E	［方形・長方形］	[4.50×3.10]	32～46	—	一部	2	—	—	1	—	自然	土師器，須恵器，鉄製品	8 世紀後葉	本跡→SI83
83	I 7 b9	N－10°－E	［方形・長方形］	[2.08×2.06]	52～58	平坦	—	1	—	2	1	—	自然	土師器，須恵器	9 世紀前葉	SI82→本跡
84	H 6 e4	N－8°－E	方形	5.13×4.75	38～52	平坦	全周	4	1	—	1	—	人為自然	土師器，須恵器	9 世紀前葉	
85	H 6 i3	N－14°－E	長方形	3.40×2.98	44～51	平坦	—	—	1	—	2	—	自然	土師器，須恵器，鉄製品，石製品	9 世紀前葉	
86	H 6 j3	N－16°－E	長方形	3.19×2.71	22～32	平坦	—	—	1	—	1	—	人為自然	土師器，須恵器，石器	9 世紀前半	本跡→SD 6
87	G 6 j2	N－27°－W	［方形・長方形］	[4.63×0.73]	45	平坦	—	—	—	2	—	—	自然	土師器，須恵器	8 世紀代	SI88→本跡

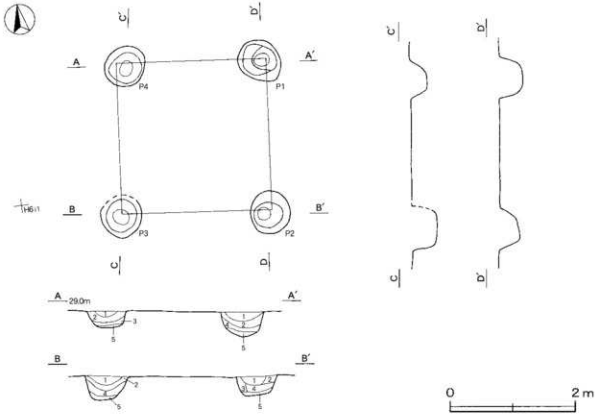
（2）掘立柱建物跡

第20号掘立柱建物跡（第71図）

位置　調査Ｌ区のＨ６i1区，標高29mの台地上の平坦部に位置している。

規模と構造　桁行１間，梁行１間の側柱建物跡と考えられる。桁行方向をＮ－12°－Ｅとする南北棟で，柱間寸法は桁行，梁行とも2.40mを基調としており，面積は5.76m²である。柱筋はおおむね通っている。

柱穴　４か所。平面形は円形を基調とし，深さは14～40cmである。覆土は，いずれも柱抜き取り痕で，黒色・黒褐色を基調としたやや締まりのある土層である。



第71図　第20号掘立柱建物跡実測図

土層解説
1 黒　　色 ローム粒子少量
2 黒　褐 色 ローム粒子少量
3 黒　褐 色 ローム粒子中量（しまりが強い）
4 黒　　色 ローム粒子少量（粘性が強い）
5 黒　褐 色 ローム粒子中量

遺物出土状況　土師器片２点（甕類）が出土している。土器はいずれも細片のため図示できるものはない。

所見　時期は，本跡の東側に位置する第84号住居跡と軸線がほぼ同方向であることから，９世紀前半と考えられる。

(3) 土坑

第300号土坑（第72図）

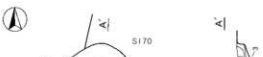
位置　調査Ｇ区のＧ4i5区，標高約27mの斜面部に位置している。

重複関係　第70号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　南部が攪乱を受けているため形状を明確にすることができなかったが，径1.0mの円形と推定され，深さは20cmである。底面は中央部にやや高まりがある皿状を呈しており，長径方向は，Ｎ－４°－Ｅで，壁は外傾している。

覆土　３層からなる。堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説
1 暗　褐 色 ローム粒子・炭化粒子少量，焼土粒子・鹿沼パミス粒子微量
2 暗　褐 色 焼土ブロック・鹿沼パミスブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
3 褐　　色 鹿沼パミスブロック・焼土粒子少量，炭化物微量



第72図　第300号土坑実測図

遺物出土状況　土師器片10点（坏類２，甕類８），須恵器片２点（坏，蓋）が覆土中から出土している。また，焼土や炭化材が含まれた粘土塊が西壁際から出土している。

所見　少量であるが土師器片や須恵器片とともに焼土，炭化物，粘土塊が出土しており，当該期の廃棄土坑と考えられる。覆土中から出土した土器片は細片のため図化することができないが，土師器坏等の細片が含まれていることから，時期は９世紀後半以降と考えられる。

５　中・近世の遺構と遺物

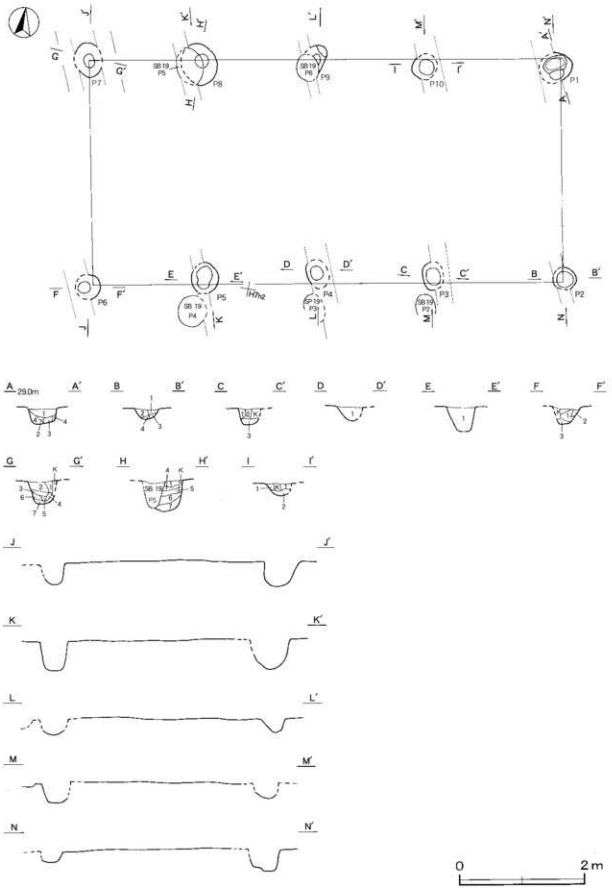
中・近世の掘立柱建物跡２棟，土坑２基，井戸跡１基，溝跡６条，道路跡１条を確認した。以下，遺構の特徴と遺物について記述する。

(1) 掘立柱建物跡

第18号掘立柱建物跡（第73図）

位置　調査区のＨ７g1区，標高約29mの平坦部に位置している。

重複関係　第19号掘立柱建物に掘り込まれている。



第73図　第18号掘立柱建物跡実測図

規模と構造　桁行４間，梁行１間の側柱建物跡で，桁行方向をN－82°－Eとする東西棟で，規模は桁行7.50m，梁行3.60mである。柱間寸法は，桁行1.80mを基調としているが，Ｐ１・P10間とＰ２・Ｐ３間は2.10mと広い。梁行は3.60mを基調とし，面積は27.0m²である。柱筋はおおむね通っている。

柱穴　10か所。耕作による攪乱のため明確に形状を捉えることができない部分があるが，平面形は円形，もしくは楕円形で，深さは23～50cmである。土層はいずれも柱抜き取り後埋め戻し土である。

土層解説

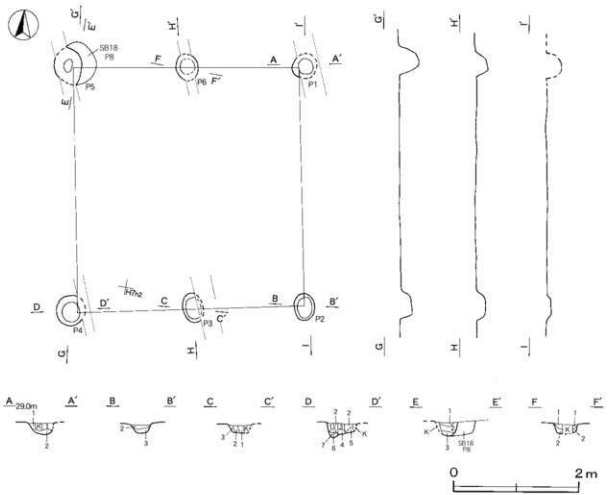
1　黒　褐　色　ロームブロック中量，炭化物少量
2　褐　色　ローム粒子多量，炭化物微量
3　褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量
4　褐　色　ロームブロック少量
5　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
6　暗　褐　色　ロームブロック微量
7　明　褐　色　ローム粒子多量

所見　時期は遺物が出土していないため明確でないが，規模と構造から中世以降と考えられ，機能的には倉庫的な建物跡と推定される。

第19号掘立柱建物跡（第74図）

位置　調査区のＨ７g2区，標高約29mの平坦部に位置している。

重複関係　第18号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。



第74図　第19号掘立柱建物跡実測図

規模と構造　桁行２間，梁行１間の側柱建物跡である。桁行方向が^{g}N－80゜－Eの東西棟で，規模は桁行3.60m，梁行3.90mである。柱間寸法は，東部は１間であるが，桁行，梁行は1.80mを基調と考えられ，面積は14.04m^{2}である。柱筋はおおむね通っている。

柱穴　６か所。耕作による攪乱のため形状を捉えることができない部分があるが，平面形は円形，もしくは楕円形で，深さは28～40cmである。土層は，いずれも柱抜き取り後の埋め戻し土で，やや締まりがある。

土層解説

1　暗　褐　色　炭化粒子中量，ロームブロック少量
2　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
3　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
4　暗　褐　色　ロームブロック・炭化物微量
5　褐　色　ローム粒子・炭化粒子少量
6　褐　色　ロームブロック中量，炭化物微量
7　褐　色　ロームブロック少量，炭化物微量

所見　時期は遺物が出土していないため明確でないが，規模と構造から中世以降と考えられ，機能的には倉庫的な建物跡と推定される。また，本跡は第18号掘立柱建物跡より小規模であるが，ほぼ同軸であり，建て替えの可能性がある。

表６　中・近世掘立柱建物跡一覧表

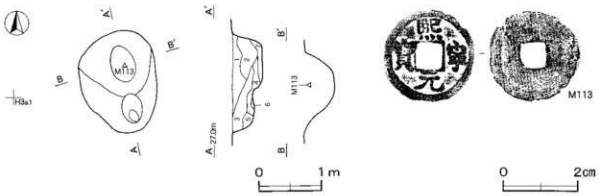
番号	位置	桁行方向	柱間数 桁×梁（間）	規模 桁×梁（m）	面積（m²）	桁行柱間（m）	梁行柱間（m）	柱穴 構造	柱穴 柱穴数	柱穴 平面形	柱穴 深さ（cm）	主な出土遺物	備考（新旧関係・時期など）
18	H７g1	N－82゜－E	４×１	7.50×3.60	27.00	1.8・2.1	3.6	側柱	10	円楕	23～50		本跡→SB19　中世
19	H７g2	N－80゜－E	２×１	3.60×3.90	14.04	1.8	3.9	側柱	6	円楕	28～40		SB18→本跡　中世

（2）土坑

第301号土坑（第75図）

位置　調査Ｇ区のＧ３j1区，標高約27mの斜面部に位置している。

規模と形状　長径1.60m，短径1.20mの楕円形で，北西部は南東部より深く掘り込まれている。深さは，北西部が42cm，南東部35cmである。底面はいずれも平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。長径方向はN－11゜－Wである。



第75図　第301号土坑・出土遺物実測図

覆土　7層に分層される。ロームブロックを含む人為堆積である。

土層解説
1　褐　　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
2　褐　　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
3　にぶい褐色　ロームブロック中量
4　褐　　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
5　明　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
6　明　褐　色　ロームブロック多量，ローム粒子少量
7　明　褐　色　ロームブロック多量

遺物出土状況　古銭１点（熙寧元寶）が出土している。また，混入したチャートの剥片2点も出土している。M113は中央部から北西寄りの覆土上層から出土している。

所見　時期は，出土遺物から中世と考えられる。

第301号土坑出土遺物観察表（第75図）

番　号	銭　名	径	孔　径	重さ	初鋳年	特　　徴	出土位置	備　考
M113	熙寧元寶	2.4	0.7	2.8	1068年	北宋銭　無背文　錆化が激しい	覆土上層	PL24

第302号土坑（第76図）

位置　調査Ｇ区のＨ３a1区，標高約27mの台地斜面部に位置している。

規模と形状　長径2.12m，短径1.14mの楕円形で，北西部は南東部より深く掘り込まれている。溝さは，北西部が50cm，南東部が21cmである。底面はいずれも平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。長径方向はN－24°－Wである。

覆土　6層に分層される。ロームブロックを含む人為堆積である。

土層解説
1　褐　　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
3　明　褐　色　ロームブロック多量
4　褐　　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
5　褐　　色　ロームブロック多量，炭化粒子微量
6　暗　褐　色　ローム粒子多量，炭化粒子少量

第76図　第302号土坑実測図

遺物出土状況　混入した土師器片４点（甕），剥片１点（チャート）が出土している。

所見　本跡に伴う遺物は出土していないが，Ｇ３j1区で確認された第301号土坑と同形状であることから，時期は中世頃と考えられる。

表７　中・近世土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模（m）（長径×短径）	深さ（cm）	壁面	底面	覆土	出土遺物	備　考 新旧関係（旧→新）
301	Ｇ３j1	Ｎ－11°－Ｗ	楕円形	1.60×1.20	35～42	外傾	平坦	人為	北宋銭［熙寧元寶］	中世以降
302	Ｈ３a1	Ｎ－24°－Ｗ	楕円形	2.12×1.14	21～50	外傾	平坦	人為		中世以降

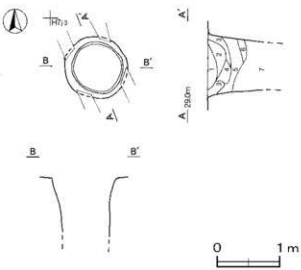
(3) 井戸跡

第３号井戸跡（第77図）

位置　調査Ｉ区のＨ７j3区，標高約28mの台地上の平坦部に位置している。

重複関係　第19号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状　上部は径1.00mほどの円形で，円筒状に掘り込まれ，下部の径は0.90mである。確認面から深さ90cmほど掘り込んだ時点で土砂崩落の危険があるため，底部までの調査は実施していない。



第77図　第３号井戸跡実測図

覆土　７層に分層される。しまりが強く，覆土中にローム ブロックや炭化材を含む人為堆積である。

土層解説

1	極暗褐色		鹿沼パミスブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2	褐色		ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3	黒褐色		ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化粒子微量
4	黄褐色		粘土粒子多量，ローム粒子微量
5	褐色		ローム粒子多量，鹿沼パミスブロック中量，炭化材微量
6	褐色		炭化材・ローム粒子中量，鹿沼パミス粒子微量
7	褐色		ローム粒子多量，炭化物・鹿沼パミス粒子微量

遺物出土状況　本跡に伴う遺物等は検出されず，混入と考えられる土師器片１点（甕）が出土している。

所見　素掘りの構造である。時期は，出土遺物がないため明確に示すことができないが，第19号溝跡を掘り込んでいることから，15世紀後半に掘削され，近世には埋め戻されていたと想定される。

(4) 溝跡

第６号溝跡（第78図・付図）

位置　調査Ｌ区のＨ６j2～Ｈ６j4区，標高約29mの台地上の平坦部に位置しており，平成17年度に調査された部分の西側にあたる。

重複関係　第86号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　Ｈ６j3区を中心に東方向（Ｎ－72°－Ｅ）と南西方向（Ｎ－36°－Ｅ）へ延び，南西部は調査区域外へ延びている。確認された長さは5.88mで，平成17年度に調査された部分を合わせると17.46mである。規模は上幅0.92～1.08m，下幅0.40～0.56m，深さ18～22cmで，断面形は底面からの壁の立ち上がり方からＵ字状と推定される。底面は皿状で，Ｈ６j4区からＨ６j2区に向かって高低差がある。

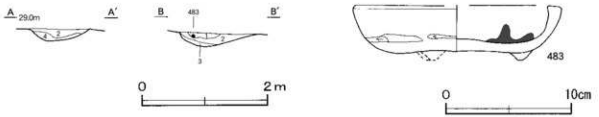
覆土　４層に分層される。含有物にロームブロックが含まれているが，堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

1	暗褐色		ローム粒子少量
2	暗褐色		ローム粒子中量
3	褐色		ロームブロック中量
4	極暗褐色		ローム粒子中量

遺物出土状況　陶器片２点（椀，擂鉢），瓦質土器８点（火鉢）が出土している。また，混入した土師器片，須恵器片も出土している。483は東部覆土中層から出土している。

所見　時期は，覆土中層から出土した483と細片のため図化できない擂鉢片が出土していることから，近世以降と考えられる。性格については不明である。



第78図　第６号溝跡・出土遺物実測図

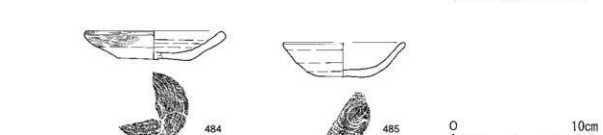
第６号溝跡出土遺物観察表（第78図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
483	瓦質土器	火鉢	[16.1]	4.4	12.3	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰黄褐	普通	体部内・外面横ナデ　三足ヵ	覆土中層	40% PL22

第14号溝跡（第79図・付図）

位置　調査Ｈ区のＪ９h0～Ｋ９f7区，標高約28mの台地上の平坦部に位置している。

規模と形状　耕作による撹乱と中央部東側が一部調査区域外であるため確認できない部分がある。Ｋ９b8区を中心に北東方向（N－22°－E）と南西方向へ延び，南西部は調査区域外へ延びている。確認された長さは34.20mで，規模は上幅0.72～1.01m，下幅0.18～0.61m，深さ44～58cmで，断面形はＵ字状である。底面は皿状で，Ｊ９h0からＫ９f7区に向かって緩やかな傾斜がみられる。



第79図　第14号溝跡・出土遺物実測図

覆土　9層に分層される。壁際からの土の流入を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
2　明　褐　色　ローム粒子多量
3　暗　褐　色　ローム粒子少量
4　暗　褐　色　ローム粒子中量
5　極 暗 褐 色　ローム粒子少量
6　褐　　色　ローム粒子中量
7　褐　　色　ロームブロック多量
8　黒　　色　ローム粒子少量
9　極 暗 褐 色　ロームブロック中量

遺物出土状況　磁器片１点（碗），土師質土器片４点（小皿３，鉢１），鉄製品２点（鎌，不明）が出土している。また，混入した土師器片，須恵器片も出土している。484・485は中央部覆土下層から出土している。

所見　時期は，出土した土器から16世紀後半から17世紀初頭と考えられる。性格については不明である。

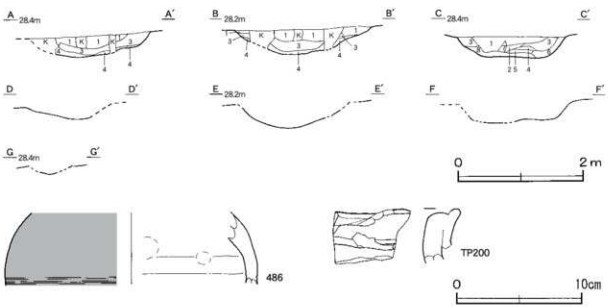
第14号溝跡出土遺物観察表（第79図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴		出土位置	備考
484	土師質土器	小皿	10.6	2.4	5.6	長石・石英・雲母	橙	普通	ロクロナデ	底部回転糸切り	覆土下層	75% PL22
485	土師質土器	小皿	[9.4]	2.8	[4.6]	長石・角閃石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ	底部回転糸切り	覆土下層	30%

第15号溝跡（第80図・付図）

位置　調査Ｊ区のＩ８b2～Ｉ９e5区，標高約28mの台地上の平担部に位置している。

規模と形状　耕作による撹乱のため形状を明確にできない部分があるが，Ｉ９d4区を中心に南東方向（N－79°－W）に直線的に延び，南東部は調査区域外に延びている。確認された長さは61.22mで，規模は上幅0.94～2.18m，下幅0.34～0.44m，深さ22～38cmで，断面形は皿状である。調査範囲で傾斜は認められない。



第80図　第15号溝跡・出土遺物実測図

覆土　８層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積で，第５層はＩ９d4区で確認された第３号道路跡の硬化面に相当する。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量
2　灰　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
3　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量
5　黒　褐　色　ロームブロック多量（しまりが強い）
6　褐　色　ローム粒子多量（彩度が高い）
7　黄　褐　色　ローム粒子・泥沼パミス粒子多量
8　褐　色　ローム粒子多量

遺物出土状況　陶器片８点（椀類６，鉢１，瓶子１），鉄製品１点（不明）が出土している。また，混入した土師器片，須恵器片も出土している。486・TP200は覆土中から出土している。

所見　本跡は，覆土中から出土した486・TP200と，細片のため図化できない陶器鉢片（唐津系）から15世紀後半には掘削され，17世紀代には埋没していたと想定される。性格については不明である。

第15号溝跡出土遺物観察表（第80図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
486	陶器	瓶子	－	(5.7)	－	緻密・灰釉	灰黄	普通	外面三筋　内面指頭痕	覆土中	瀬戸・美濃系
TP20	陶器	椀	－	(4.3)	－	角閃石・焼締	灰褐	良	口縁線帯頸部密着	覆土中	常滑系

第16号溝跡（第81図・付図）

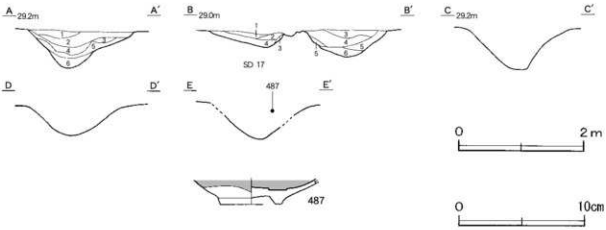
位置　調査Ⅰ区のＧ6b6～Ｈ７f1区，標高約29mの台地上の平坦部に位置している。

重複関係　第２号井戸に掘り込まれている。

規模と形状　Ｇ６j9区を中心に北西方向（N－24°－W）のＧ６d7区まで直線的に延び，その先は北東へ方向を変換して調査区域外に延びている。南東方向はＧ６j9区からＨ７e0区まで直線的に延び，さらに南西へ方向を変換し調査区域外に延びている。確認された長さは62.04mで，規模は上幅1.36～1.84m，下幅0.18～0.38m，深さ48～66cmで，断面形は逆台形状である。底面は皿状で，調査範囲に傾斜は認められない。

覆土　６層に分層される。壁際からの土の流入を示す自然堆積と考えられる。

土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック微量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
3　褐　色　ローム粒子中量
4　黒　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子少量
5　褐　色　ローム粒子多量
6　褐　色　ロームブロック少量



第81図　第16号溝跡・出土遺物実測図

遺物出土状況　陶器片２点（灯明皿，皿），磁器片１点（瓶）が出土している。また，混入した土師器片，須恵器片も出土している。487は中央部覆土上層から出土している。

所見　時期は，覆土上層から出土した487と磁器片が出土しており，近世後半から近代の遺物が出土した第２号井戸に掘り込まれていることから，近世前半に掘削され，近世後半には埋没したと考えられる。性格については不明である。

第16号溝跡出土遺物観察表（第81図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
487	陶器	中皿	－	(21)	5.0	緻密・外面灰釉内面銅緑釉	灰白	普通	見込蛇目釉ハギ　削出高台	覆土上層	40% 肥前系

第17号溝跡（第81・82図・付図）

位置　調査Ｉ区のＨ６f0～Ｈ７f1区，標高約29mの台地上の平坦部に位置している。

規模と形状　Ｈ７f1区から西方向（Ｎ－88°－Ｗ）の調査区域外に延びている。確認された長さは10.24mで，規模は上幅0.70～1.45m，下幅0.28～0.52m，深さ16～27cmである。断面形は皿状で，傾斜は認められない。

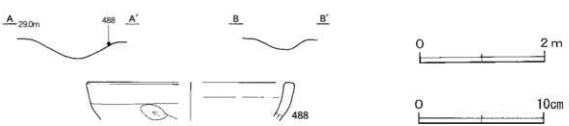
覆土　４層に分層される。壁際からの土の流入を示した自然堆積である。

土層解説

1　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
3　黒　褐　色　ローム粒子微量
4　褐　色　ロームブロック中量

遺物出土状況　陶器片１点（椀），瓦質土器片１点（鉢）が出土している。また，混入した土師器片，須恵器片も出土している。488は西部覆土上層から出土している。

所見　時期は，出土土器から近世と考えられる。性格については不明である。



第82図　第17号溝跡・出土遺物実測図

第17号溝跡出土遺物観察表（第82図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
488	瓦質土器	鉢	[15.4]	(3.0)	－	長石・石英・雲母	灰	普通	体部内・外面横ナデ	覆土上層	

第19号溝跡（第83図・付図）

位置　調査Ｉ区のＨ７i1～Ｉ７a7区，標高約28mの台地上の平坦部に位置している。

重複関係　第３号井戸に掘り込まれている。

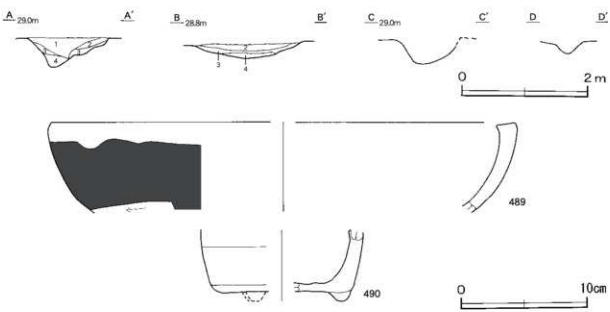
規模と形状　耕作による攪乱のため形状を明確にできない部分があるが，Ｈ７j5区を中心に北西方向（N－77°－W）と南東方向に直線的に調査区域外へ延びている。確認された長さは22.86mで，規模は上幅0.48 ～ 1.50m，下幅0.14 ～ 0.54m，深さ16 ～ 40cmで，断面形はＵ字状である。Ｈ７i1区からＩ７a7区に向かって緩やかな傾斜が認められる。

覆土　４層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。また，第１層は新たに掘り込まれた状況を呈しているが，別遺構ではないと想定される。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
2　極　暗　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
3　極　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
4　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　陶器片２点（香炉，甕（常滑）），瓦質土器片１点（鉢）が出土している。また，混入した土師器片，須恵器片，土製品（支脚），石器（石鏃）も出土している。489・490は覆土中からの出土である。

所見　時期は，出土土器から15世紀後半と考えられる。また，南東部の延長線上には，主軸方向が同じ第15号溝跡が位置しており，同一溝の可能性があるが，性格については不明である。



第83図　第19号溝跡・出土遺物実測図

第19号溝跡出土遺物観察表（第83図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
489	瓦質土器	鉢	[36.8]	(7.1)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部内・外面横ナデ　外面ヘラ削り	覆土中	
490	陶器	香炉	－	(5.7)	[10.5]	長石・雲母・黒色粒子	灰黄	普通	体部内・外面横ナデ　３足ヵ	覆土中	20% PL22

表８　中・近世溝一覧表

番号	位置	方向	形状	規模				壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考（重複関係　旧→新）
				確認長(m)	上幅（m）	下幅（m）	深さ（cm）					
6	Ｈ6j2～Ｈ6j4	N－72°－E N－36°－E	くの字状	(5.88)	0.92 ～ 1.08	0.40 ～ 0.56	18 ～ 22	緩斜	皿状	自然	陶器，瓦質土器	SI86→本跡　近世以降
14	Ｊ9h0～Ｋ9f2	N－22°－E	直線状	(34.20)	0.72 ～ 1.01	0.18 ～ 0.61	44 ～ 58	外傾 緩斜	皿状	自然	磁器，土師質土器，鉄製品	16世紀後半から17世紀初頭

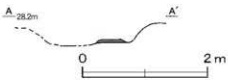
番号	位置	方向	形状	規模				壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				確認長(m)	上幅（m）	下幅（m）	深さ（cm）					（重複関係　旧→新）
15	Ⅰ8b2～Ⅰ9e5	N－79°－W	直線状	(61.22)	0.94 ～ 2.18	0.34 ～ 0.44	22 ～ 38	緩斜	皿状	自然	陶器，鉄製品	15世紀後半から17世紀代
16	G6b6～H7f1	N－24°－W	S字状	(62.04)	1.36 ～ 1.84	0.18 ～ 0.38	48 ～ 66	外傾	皿状	自然	陶器，縄器	本跡→SE2 近世前半から近世後半
17	H6f0～H7f1	N－88°－W	直線状	(10.24)	0.70 ～ 1.45	0.28 ～ 0.52	16 ～ 27	緩斜	皿状	自然	陶器，瓦質土器	近世以降
19	H7i1～Ⅰ7a7	N－77°－W	直線状	(22.86)	0.48 ～ 1.50	0.14 ～ 0.54	16 ～ 40	緩斜	皿状	自然	陶器，瓦質土器	本跡→SE3 15世紀後半から近世

(5) 道路跡

第３号道路跡（第84図・付図）

位置　調査Ｊ区のＩ９d4・Ｉ９d5区，標高約28mの台地上の平坦部に位置している。

規模と平面形　第15号溝跡の中央部で確認されている。規模は長さ4.60m，幅0.34 ～ 0.50m，硬化面の厚さは５cmで，主軸方向はN－74°－Wである。



第84図　第３号道路跡実測図

覆土　第15号溝跡の第５層に相当し，しまりが強い。

所見　本跡は，第15号溝跡が埋没する過程で道路と使用されたと考えられる。時期は，15世紀後半以降から近世と想定される。

6　近代の遺構と遺物

今回の調査で，井戸跡１基，炭焼窯跡１基，土坑３基を確認した。以下，遺構の特徴と遺物について記す。

(1) 井戸跡

第２号井戸跡（第85図）

位置　調査Ｉ区のＨ７c1区，標高約29mの平坦部に位置している。

重複関係　第16号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状　上部は，径2.60mほどの円形で円筒状に掘り込まれており，確認した下部の径は1.50mである。確認面から深さ90cmほど掘り込んだ時点で土砂崩落の危険があるため，底部までの調査は実施していない。

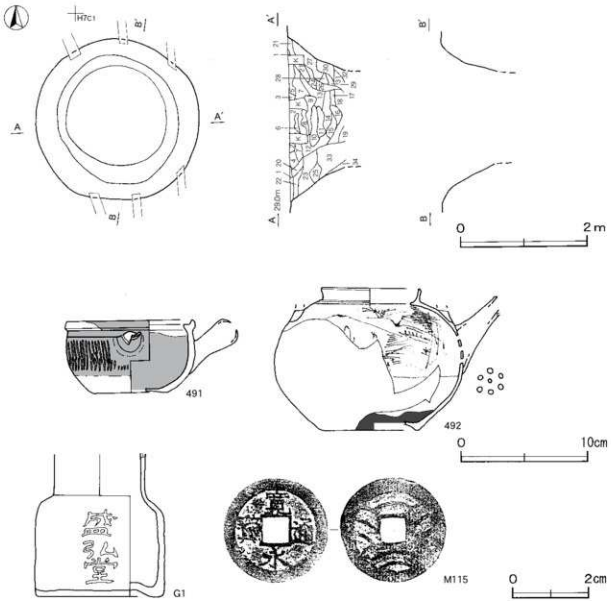
覆土　34層に分層される。しまりが弱く，不規則な堆積状況を示した人為堆積である。また，第２層から第19層までは，２度掘り込まれた様相が確認できる。

土層解説

1　褐　色　炭化物・ローム粒子少量，砂粒微量
2　極暗褐色　ローム粒子・焼土粒子微量
3　黒　褐　色　焼土粒子少量，炭化粒子微量
4　極暗褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
5　極暗褐色　焼土粒子・炭化粒子微量
6　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量
7　黒　褐　色　焼土粒子・炭化粒子微量（しまりが強い）
8　極暗褐色　ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量
9　極暗褐色　焼土大ブロック中量，炭化物少量
10　黒　褐　色　炭化物中量，ローム粒子・焼土粒子微量
11　極暗褐色　焼土中ブロック中量，炭化物少量
12　黒　褐　色　焼土粒子・炭化粒子微量
13　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
14　黒　褐　色　焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
15　黒　褐　色　焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量
16　極暗褐色　焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
17　黒　褐　色　焼土粒子微量
18　黒　褐　色　炭化材・焼土粒子・砂粒微量
19　極暗褐色　焼土粒子・砂粒微量
20　黒　褐　色　ローム粒子・砂粒少量，焼土粒子微量
21　黒　褐　色　ローム粒子少量
22　黒　褐　色　砂粒少量，ローム粒子微量
23　黒　褐　色　ローム粒子少量，炭化物・焼土粒子微量
24　黒　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
25　極暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
26　黒　褐　色　ローム粒子少量
27　暗　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量
28　黒　褐　色　ローム粒子少量
29　黒　褐　色　ローム粒子微量
30　褐　　色　ローム粒子中量（粘性が強い）
31　黒　褐　色　ローム粒子少量
32　褐　　色　ローム粒子多量
33　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子微量
34　黒　褐　色　焼土ブロック微量

遺物出土状況　陶器片５点（椀３，行平鍋１，土瓶１），磁器26点（椀14，小杯６，酒杯３，蓋３），ガラス製品３点（小瓶），瓦１点，古銭１点（寛永通寶）が覆土中から出土している。491・492・Ｇ１・M115は覆土上層から出土しており，投棄されたものと考えられる。

所見　素掘りの構造である。時期は，出土土器から19世紀後半以前に掘削され，20世紀代には埋め戻されたと考えられる。



第85図　第２号井戸跡・出土遺物実測図

第２号井戸跡出土遺物観察表（第85図）

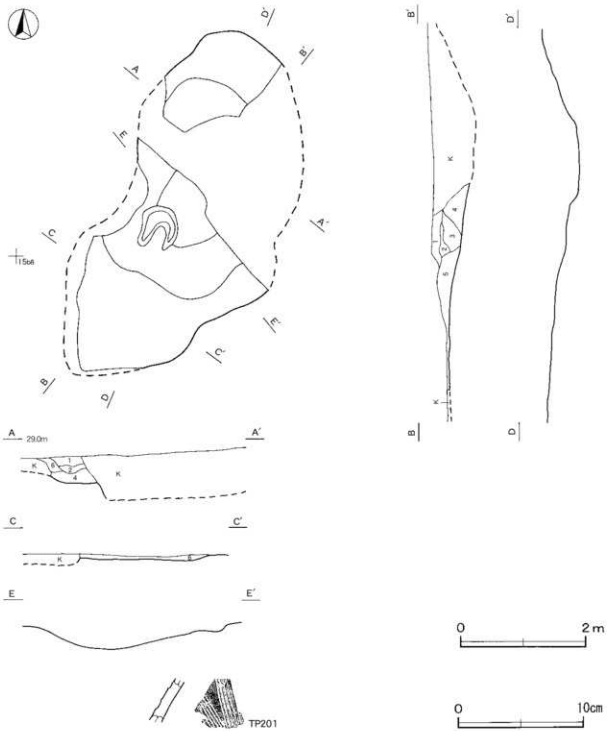
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
491	陶器	行平	10.0	5.7	5.8	緻密・鉄釉	浅黄	良	ロクロ成形　外面トビカンナ	覆土上層	90％ 瀬戸・美濃 PL24
492	陶器	土瓶	[7.6]	11.4	[7.6]	緻密・白色釉	灰白	普通	ロクロ成形　山水文	覆土上層	70％ 瀬戸・美濃 PL24
Ｇ１	ガラス製品	小瓶	－	(3.8)	3.3	気泡混入	透明	普通	上部欠損	覆土上層	薬瓶［盛弘堂］

番　号	銭　名	径	孔　径	重さ	初鋳年	特　　徴	出土位置	備　考
M115	寛永通寶	2.8	0.7	4.1	1636年	錆化が激しい	覆土上層	PL24

(2) 炭焼窯跡

第２号炭焼窯跡（第86図）

位置　調査Ｌ区のＩ５a8区，標高約28mの台地の肩部に位置している。



第86図　第２号炭焼窯跡・出土遺物実測図

規模と形状　撹乱を受けて遺存状況は不良である。確認できた範囲は推定で，長径5.97m，短径2.65mの瓢形と推定され，長径方向はN－27°－Eである。また，中央部底面には不定形な深さ17cmの凹んだ部分がみられる。

前庭部　長径（3.20）m，短径2.0mの不整楕円形で，中央部に向かって緩やかに傾斜している。

炭化室　長径2.92m，短径2.65mの楕円形で，遺存する壁高は50cmで壁は外傾して立ち上がっている。

煙道部　奥壁中央部に位置していたと想定される。

覆土　6層に分層される。撹乱を受けて大部分が不明であるが，確認できた堆積状況が不規則であるため，人為堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子中量，炭化粒子少量
3　黒　褐　色　ローム粒子中量，焼土ブロック・炭化粒子少量
4　暗　褐　色　焼土ブロック・炭化材多量，ロームブロック少量
5　黒　　色　ロームブロック・炭化粒子中量，焼土粒子少量
6　黒　褐　色　焼土ブロック多量，炭化粒子中量，ローム粒子少量

遺物出土状況　土師質土器片1点（皿），陶器片9点（皿1，灯明皿1，椀3，擂鉢1，甕2，瓶1），粘土塊166点（構築材ヵ），礫340点（大14，中202，小124）が出土している。また，混入した土師器片，須恵器片が出土している。TP201は，覆土中から出土している。

所見　時期は，出土土器から近代と考えられる。

第2号炭焼窯跡出土遺物観察表（第86図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP201	陶器	擂鉢	－	(3.5)	－	緻密・鉄釉	灰赤	普通	ロクロ成形	覆土中	瀬戸・美濃

（3）土坑

第317号土坑（第87・88図）

位置　調査Ⅰ区のⅡ7a5区，標高約29mの台地の平坦部に位置している。

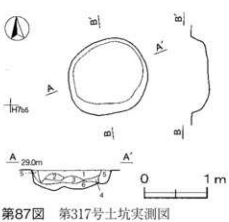
規模と形状　長径1.30m，短径1.20mの円形で，深さは27cmである。底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。長径方向はN－59°－Eである。

覆土　6層に分層される。覆土中に陶器片や磁器片を含んで，全体的にしまりが弱い堆積状況を示している人為堆積である。

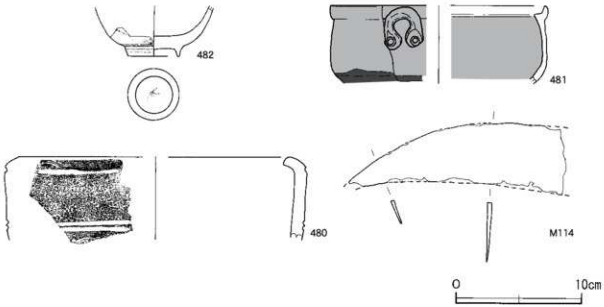
土層解説
1　黒　褐　色　焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量
2　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・細礫微量
3　暗　褐　色　ロームブロック・炭化物・細礫微量
4　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
5　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化物微量
6　褐　　色　ローム粒子多量

遺物出土状況　陶器片7点（椀2，皿1，土瓶1，擂鉢1，瓶1，行平鍋1），磁器片33点（碗25，皿1，小杯1，蓋3，急須1，瓶1，鉢1），土師質土器片7点（火鉢），ガラス製品2点（中瓶，小瓶），鉄製品1点（鎌）が出土している。また，混入した土師器片も出土している。480・481・482・M114は，覆土上層から下層にかけてそれぞれ出土している。

所見　陶磁器片が投棄された状態で出土している廃棄土坑と考えられる。時期は，出土土器から19世紀後半頃と考えられる。



第87図　第317号土坑実測図



第88図　第317号土坑出土遺物実測図

第317号土坑出土遺物観察表（第88図）

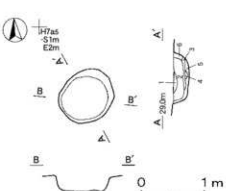
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備　考
480	土師質土器	火鉢	[21.6]	(6.6)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	櫛目地　沈線3条　彫刻文	覆土上層	
481	陶器	土鍋	[17.0]	(6.2)	－	緻密・鉛釉	浅黄橙	良	ロクロ成形　把手2か所ヵ	覆土上層	瀬戸・美濃
482	磁器	碗	－	(4.1)	4.0	精良・透明釉	灰白・明緑灰	良	ロクロ成形　削り高台　高台砂目　底部昆虫文ヵ	覆土上層	35% 肥前系

番　号	器　種	長さ	幅	厚さ	重　量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
M114	鎌	(17.2)	(5.8)	0.4	(70.0)	鉄	刃部・柄付部欠損	覆土上層	

第320号土坑（第89図）

位置　調査Ⅰ区のＨ７a5区，標高約29mの台地の平坦部に位置している。

規模と形状　長径0.92m，短径m0.80mの楕円形で，深さは24cmである。底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。長径方向はＮ－38°－Ｅである。



第89図　第320号土坑実測図

覆土　６層からなる。覆土中にロームブロックを含んだしまりの弱い堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1　暗　褐　色　焼土ブロック・ローム粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック・細礫微量
3　極　暗　褐　色　ローム粒子微量
4　にぶい黄橙　粘土ブロック多量
5　黒　褐　色　ロームブロック少量
6　暗　褐　色　ロームブロック少量

所見　遺物は出土していないが，同様の堆積状況を示した第317号土坑の北側に位置していることから，時期は19世紀後半頃と考えられる。

第328号土坑（第90図）

位置　調査Ⅰ区のＨ７f4区，標高約29mの台地の平坦部に位置している。

規模と形状　長径0.86m，短径0.72mの楕円形で，深さは15cmである。底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。長径方向はＮ－17°－Ｗである。

覆土　２層からなる。ロームブロックを含んだ堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量

所見　遺物は出土していないが，Ｈ７a5区で確認されている第317・320号土坑と形状や覆土の含有物が類似してることから，時期は19世紀後半頃と考えられる。

第90図　第320号土坑実測図

表9　近代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模（m）（長径×短径）	深さ（cm）	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係（旧→新）
317	Ｈ７a5	Ｎ－59°－Ｅ	円形	1.30×1.20	27	外傾	平坦	人為	陶器，磁器，土師質土器，ガラス製品，鉄製品	19世紀後半以降
320	Ｈ７a5	Ｎ－38°－Ｅ	楕円形	0.92×0.80	24	外傾	平坦	人為		19世紀後半以降
328	Ｈ７f4	Ｎ－17°－Ｗ	楕円形	0.86×0.72	15	外傾	平坦	人為		19世紀後半以降

7　その他の遺構と遺物

今回の調査で竪穴住居跡１軒，溝跡１条，道路跡１条，土坑28基，ピット群４か所を確認した。以下，遺構の特徴と遺物について記述し，その他の土坑については，実測図と土層解説を記載する。

(1) 竪穴住居跡

第88号住居跡（第91図）

位置　調査Ｌ区のＧ６i2区，標高約29mの平坦部に位置している。

重複関係　第87号住居に掘り込まれている。

規模と形状　南西コーナー部だけの確認で，それ以外は調査区域外に延びている。長軸は2.24m，短軸は1.10mが確認されている。平面形は方形もしくは長方形と推定され，長軸方向はＮ－10°－Ｅである。壁高は40cmで，外傾して立ち上がっている。

床　平坦である。

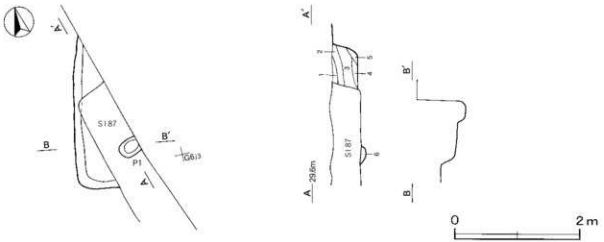
ピット　深さ７cmで，第87号住居の床下に確認されている。

覆土　６層に分層される。壁際からの土の流入を示した自然堆積である。

土層解説
1　黒　　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
3　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
5　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
6　暗　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況　土師器片４点（甕類），須恵器片２点（甕）が出土している。

所見　北東部が調査区域外に延びているため形状を明確にすることができなかった。また，第87号住居に掘り込まれているが，時期は不明である。



第91図　第88号住居跡実測図

（2）溝跡

第18号溝跡（第92図・付図）

位置　調査Ⅰ区のＧ６e7～Ｇ６g0区，標高約29mの台地上の平坦部に位置している。

規模と形状　Ｇ６f8区を中心に，北西方向（Ｎ－44°－Ｗ）はＧ６e7区まで，南東方向はＧ６g0区までそれぞれ直線的に延びている。長さは13.92mで，規模は上幅0.42～0.96m，下幅0.10～0.28m，深さ24～53cmである。断面形はＵ字状で，南東部が僅かに低い。

覆土　４層に分層される。ロームブロックを含んだ堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

1	褐	色　ロームブロック中量	3	褐	色　ロームブロック中量，炭化粒子少量
2	にぶい褐	色　ローム粒子少量	4	褐	色　ローム粒子多量，炭化粒子微量

所見　出土遺物がないため時期を明確にできない。性格も不明である。

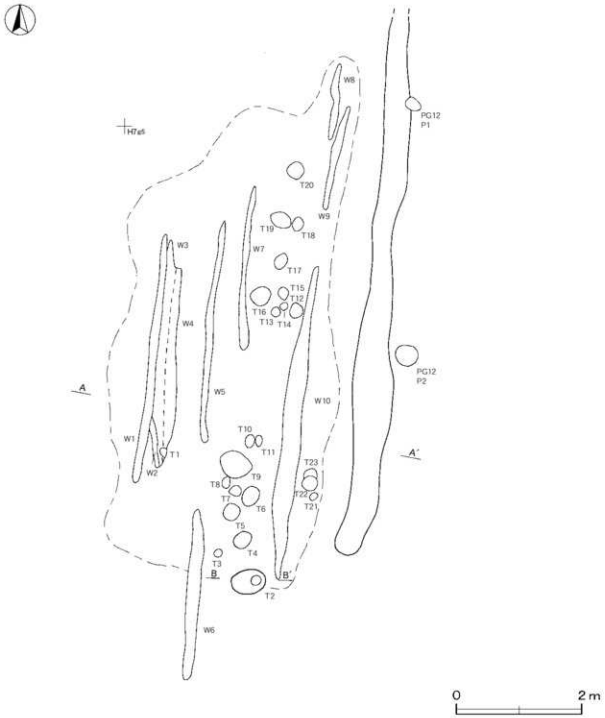
第92図　第18号溝跡実測図

(3) 道路跡

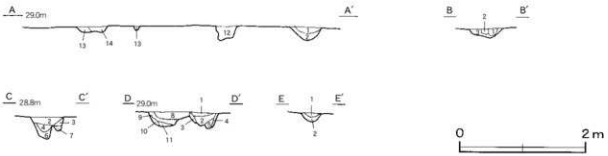
第２号道路跡（第93・94図・付図）

位置　調査区のＧ６d8 ～Ｈ７h5区，標高約29mの平坦部に位置している。

確認状況　黒色系の土で構築された硬化面がＨ７h5区からＧ６d8区まで彎曲した状態で延びており，本跡の北西方向の延長線上には，平成18年度に報告された第２号道路跡が位置している。今回の調査で確認された硬化面は大部分が１条で，２条確認できる部分はＧ６f0区からＧ６i4区の範囲であり，南東方向で狭くなる状況は，



第93図　第２号道路跡実測図（1）



第94図　第２号道路跡実測図（2）

平成18年度の報告と異なっている。側溝が部分的にしか確認できないのは，耕作による削平と思われる。また，本跡の南部では，南北約10.6m，東西約7.4mの範囲で路面と考えられる硬化面が確認されており，この範囲から轍や路面の凹みの修復跡も確認されている。

規模　規模は，Ｈ７h5区から北方向（N－4°－E）へ12.20m延び，Ｈ７d6区から彎曲しながら北西方向（N－52°－W）へ58.35m延びている。側溝の幅は0.28 ～ 0.68mで，深さ15 ～ 35cmである。側溝と轍痕・修復痕を含めた覆土は14層に分層される。第１～ 11層は側溝の覆土であり，第１～７層は第８層を掘り込んでいるため，新たに掘り込まれたものと考えられる。第12 ～ 14層は轍痕で，修復の埋土は強く突き固められている。

硬化面土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
2　極 暗 褐 色　ロームブロック・炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ローム粒子少量
4　褐　　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量
5　極 暗 褐 色　ロームブロック微量
6　褐　　色　ローム粒子少量，炭化物微量
7　褐　　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
8　極 暗 褐 色　ロームブロック・炭化粒子微量
9　黒　褐　色　炭化粒子少量
10　褐　　色　ローム小ブロック中量，炭化粒子微量
11　暗　褐　色　炭化粒子少量
12　黒　褐　色　炭化物・焼土粒子少量，ローム粒子微量
13　褐　　色　ローム中ブロック中量，炭化物微量
14　暗　褐　色　ロームブロック・炭化物微量

轍痕（W）　27条。重複している部分が認められるが長さ0.70 ～ 5.00m，幅10cm前後である。南方向から北方向に延び，凹んだ部分は修復されて強く突き固められている。また，轍痕が確認された範囲に荷車等の運搬具が走行していたことを想定すると，轍痕２条で１組となり，W６・W10，W７・W９の幅から，1.20m前後の車輪幅の荷車などが想定される。

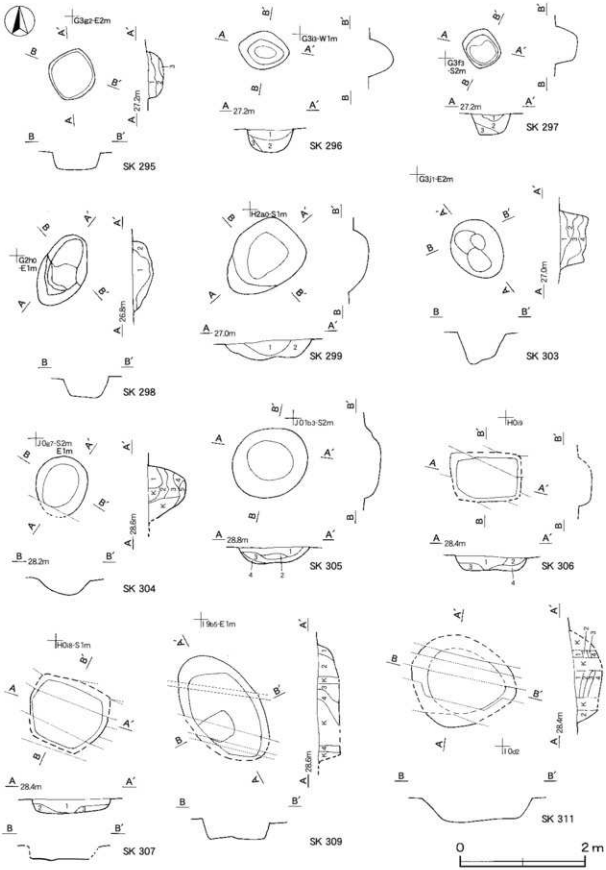
修復痕（T）　23か所。主に轍痕との間に確認されている。平面形は長径18 ～ 54cm，短径10 ～ 42cmの円形，もしくは楕円形で，重複して，規模が広がっている部分があるが，いずれもローム土を含む暗褐色系の土で修復され，強く突き固められている。

修復痕土層解説

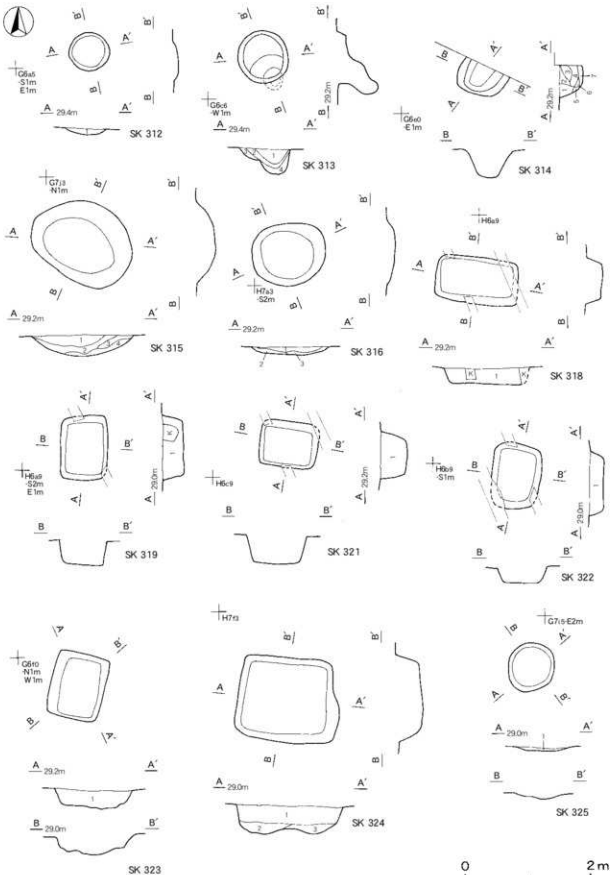
1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2　褐　　色　ローム粒子多量，炭化物微量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量

所見　本跡は，平成18年度報告の第２号道路跡と同じ遺構と考えられる。時期については，遺物が出土していないため不明である。また，本跡周辺に関連遺構は検出されていない。

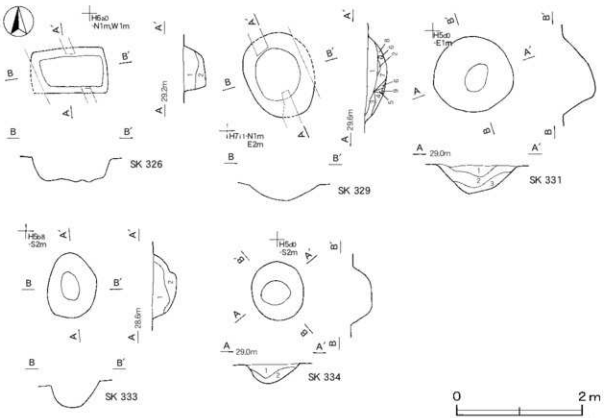
(4) その他の土坑（第95～97図）



第95図　その他の土坑実測図（1）



第96図　その他の土坑実測図（2）



第97図　その他の土坑実測図（3）

第295号土坑土層解説
1　褐　　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
2　褐　　色　ローム粒子多量，炭化物微量
3　褐　　色　ローム・ブロック中量，炭化粒子微量

第296号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量
2　褐　　色　ローム粒子多量，炭化物微量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量

第297号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子少量
2　褐　　色　ローム粒子多量，炭化物微量
3　褐　　色　ローム粒子多量

第298号土坑土層解説
1　黒　　色　ローム粒子少量
2　褐　　色　ローム粒子多量，炭化粒子微量

第299号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム・ブロック少量
2　褐　　色　ローム粒子多量，炭化粒子微量

第303号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子中量
2　明　褐　色　ローム粒子多量
3　明　褐　色　ローム粒子多量，炭化粒子少量
4　褐　　色　ローム粒子多量，炭化粒子微量

第304号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子多量，炭化粒子微量
3　黒　褐　色　ローム・ブロック中量，炭化物微量
4　極　暗　褐　色　ローム・ブロック中量，炭化物・焼土粒子微量
5　極　暗　褐　色　ローム粒子少量

第305号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子少量
2　褐　　色　ローム粒子多量
3　褐　　色　ローム粒子多量，黒色粒子少量
4　明　褐　色　ローム粒子多量，黒色粒子微量

第306号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム・ブロック中量
2　黒　褐　色　ローム・ブロック少量，炭化物微量
3　黒　褐　色　ローム粒子少量，炭化物微量
4　黒　褐　色　ローム・ブロック少量

第307号土坑土層解説
1　褐　　色　ローム・ブロック中量
2　暗　褐　色　ローム・ブロック中量
3　黒　褐　色　ローム・ブロック中量

第309号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム・ブロック多量
2　褐　　色　ローム・ブロック中量
3　明　褐　色　ローム・ブロック多量
4　橙　　色　ローム・ブロック中量

第311号土坑土層解説
1　明　褐　色　ローム・ブロック少量
2　褐　　色　ローム粒子多量
3　暗　褐　色　ローム粒子多量
4　褐　　色　ローム・ブロック多量

第312号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子少量

第313号土坑土層解説
1　明　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量
2　明　褐　色　ローム粒子多量，炭化粒子微量
3　褐　　色　ローム粒子多量，炭化粒子微量
4　明　褐　色　ローム・ブロック多量

第314号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子中量
2　褐　　色　ローム粒子中量
3　黒　褐　色　ロームブロック微量
4　暗　褐　色　ローム粒子少量
5　褐　　色　ローム粒子少量
6　暗　褐　色　ローム粒子微量
7　褐　　色　ローム粒子多量

第315号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子・炭化粒子少量
2　褐　　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　褐　　色　ローム粒子多量，炭化粒子微量
4　明　褐　色　ロームブロック多量

第316号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
2　褐　　色　ローム粒子中量
3　暗　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量

第318号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量，炭化物微量

第319号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック中量，炭化材・焼土粒子微量

第321号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量，炭化物微量

第322号土坑土層解説
1　極　暗　褐　色　ローム粒子少量，炭化物微量

第323号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック中量

第324号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量，炭化物微量
2　極　暗　褐　色　ロームブロック少量
3　褐　　色　ロームブロック中量

第325号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量，炭化物微量

第326号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量，炭化物微量
2　褐　　色　ロームブロック中量

第329号土坑土層解説
1　褐　　色　ロームブロック中量，炭化物微量
2　黒　褐　色　ローム粒子少量，炭化物微量
3　暗　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
4　褐　　色　ローム粒子少量，炭化物微量
5　褐　　色　ロームブロック多量
6　褐　　色　ロームブロック微量
7　暗　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
8　褐　　色　ロームブロック中量
9　褐　　色　ロームブロック少量

第331号土坑土層解説
1　極　暗　褐　色　ローム粒子少量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量
3　褐　　色　ローム粒子中量

第333号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子多量
2　褐　　色　ロームブロック中量

第334号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子中量
2　暗　褐　色　ローム粒子少量

表10　その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模（m）（長径×短径）	深さ（cm）	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係（旧→新）
295	G 3 g2	N－10°－E	楕円形	0.82×0.74	27	外傾	平坦	自然		
296	G 3 i2	N－80°－W	楕円形	0.82×0.60	40	緩斜	皿状	自然		
297	G 3 f3	－	円形	0.60×0.55	34	外傾	平坦	自然		
298	G 2 h0	N－33°－E	楕円形	1.24×0.72	31	緩斜	平坦	自然		
299	H 2 a9	N－41°－E	楕円形	1.36×1.04	28	緩斜	平坦	自然		
303	G 3 j1	N－38°－W	楕円形	1.00×0.80	49	緩斜	凹凸	人為		
304	J 0 g7	N－20°－E	楕円形	0.96×0.82	28	緩斜	皿状	自然 人為		
305	J 0 h2	N－12°－E	楕円形	1.25×1.09	39	緩斜	平坦	自然		
306	H 0 i8	N－70°－W	隅丸長方形	1.13×(0.75)	22	緩斜	平坦	人為		
307	H 0 i8	N－52°－W	隅丸長方形	1.26×(0.48)	24	外傾	平坦	人為		
309	I 9 b5	N－38°－W	楕円形	1.94×1.14	29	緩斜	凹凸	人為		
311	I 0 c1	N－77°－W	［楕円形］	1.70×[1.52]	36	緩斜	平坦	自然		
312	G 6 a5	－	円形	0.63×0.62	10	緩斜	平坦	自然		
313	G 6 b5	－	円形	0.84×0.84	34	外傾	凹凸	自然		
314	G 6 e0	N－29°－E	［楕円形］	0.74×(0.48)	41	緩斜	平坦	人為		
315	G 7 j3	N－66°－W	楕円形	1.64×1.28	32	緩斜	皿状	自然		
316	H 7 a3	N－82°－W	楕円形	1.18×1.02	14	緩斜	平坦	自然		
318	H 6 a8	N－83°－W	隅丸長方形	1.32×0.75	26	外傾	平坦	人為		
319	H 6 a9	N－5°－E	隅丸長方形	1.03×0.75	40	外傾	平坦	人為		
321	H 6 b9	N－18°－E	隅丸長方形	0.94×0.74	46	外傾	平坦	人為		
322	H 6 b9	N－14°－E	隅丸長方形	1.04×0.78	26	外傾	平坦	人為		
323	G 6 e0	N－13°－E	隅丸長方形	1.04×0.86	40	緩斜	凹凸	人為		

番号	位置	長径方向	平面形	規模（m）（長径×短径）	深さ（cm）	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係（旧→新）
324	H 7 f3	N－81°－W	隅丸長方形	1.64×1.35	38	外傾	平坦	自然		
325	G 7 f5	－	円形	0.81×0.76	29	緩斜	平坦	人為		
326	G 6 j9	N－85°－E	隅丸長方形	1.20×0.72	35	緩斜	凹凸	自然		
329	H 7 h1	N－24°－E	［楕円形］	1.36×［1.06］	28	緩斜	皿状	人為		
331	H 5 d0	－	円形	1.26×1.24	50	緩斜	平坦	自然		
333	H 5 b8	N－6°－W	楕円形	1.03×0.77	42	緩斜	皿状	自然		
334	H 5 d0	N－8°－E	楕円形	0.92×0.82	32	緩斜	皿状	自然		

（5）ピット群（第98～103図）

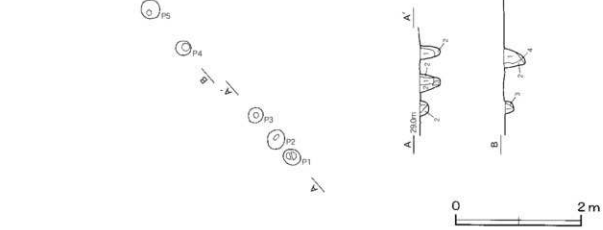
調査G区で1か所，Ⅰ区で3か所のピット群が検出されている。これらのピットは，当遺跡で確認されている掘立柱建物跡の柱穴と比べて径が小さく，配置が不規則であり，深さに統一性が認められない。また，遺物がほとんど出土していないため，時期や性格は不明である。以下，確認されたピット群について記載する。

第9号ピット群（第98図）

調査Ⅰ区のG 6 e0～G 7 f1区，標高29mほどの台地の平坦部に位置し，第2号道路跡の北側部に位置している。柱穴数は6か所で，平面形は円形を呈し，直径0.23～0.36m，深さ12～40cmである。覆土は4層に分層され，第1層は抜き取り後の堆積土で，第2～4層はローム粒子を含むしまりの強い層である。柱列は，柱間寸法に統一性は認められない。性格は不明である。

第9号ピット群土層解説

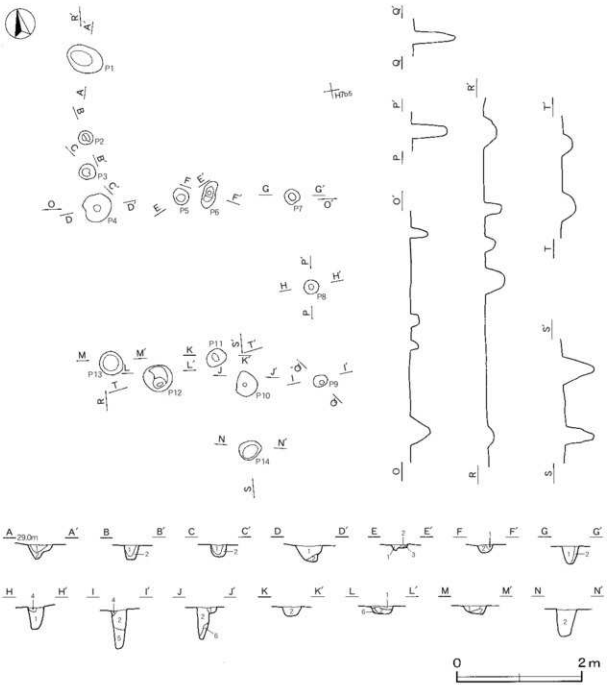
1　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
2　明　褐　色　ローム粒子多量，炭化粒子微量
3　褐　　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
4　明　褐　色　ローム粒子中量



第98図　第9号ピット群実測図

第10号ピット群（第99図）

調査Ⅰ区のＨ７b4区，標高29mの台地の平坦部に位置し，東側には第２号道路跡が位置している。柱穴数は14か所検出され，平面形は円形もしくは楕円形を呈し，長径0.24 ～ 0.60m，短径0.18 ～ 0.46m，深さ７～ 58cmである。覆土は６層に分層され，柱痕跡や強く突き固められた痕跡は認められない。柱列は，柱間寸法や形状に統一性は認められない。性格は，南側の第2号道路跡に伴う柱穴が位置していることから，本跡も同様の施設の可能性があるが，明確ではない。



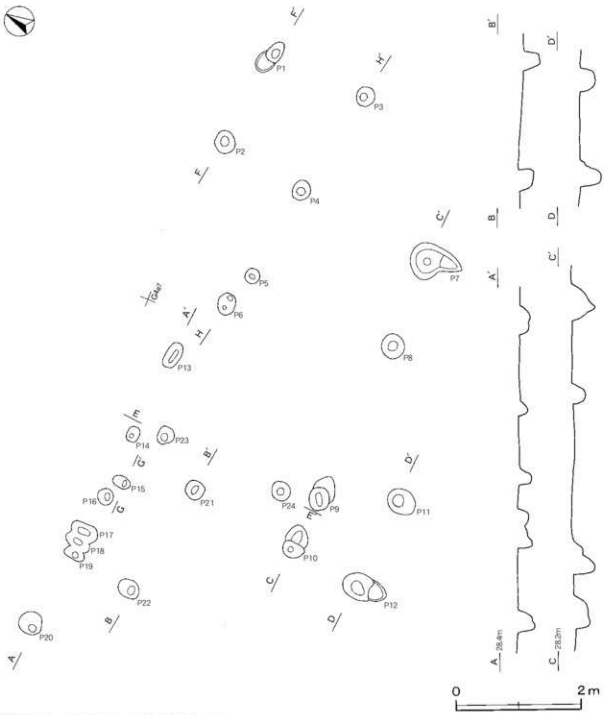
第99図　第10号ピット群実測図

第10号ピット群土層解説

1	黒　褐　色	ローム粒子・炭化粒子少量	
2	褐　　色	ロームブロック中量，炭化粒子微量	
3	褐　　色	ロームブロック少量，炭化物微量	
4	褐　　色	ローム粒子多量，炭化粒子微量	
5	褐　　色	ローム粒子中量，炭化物微量	
6	明　褐　色	ロームブロック中量，炭化物少量	

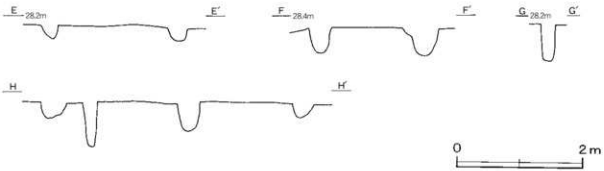
第11号ピット群（第100・101図）

調査G区のG４g5～G４h7区，標高28mの台地の端部に位置している。柱穴数は24か所であり，平面形は円形もしくは楕円形を呈し，長径0.25～0.58m，短径0.19～0.58m，深さ７～70cmである。覆土は暗褐色で，ロー



第100図　第11号ピット群実測図（1）

ム粒子・炭化粒子が中量から微量含まれている。柱列は，柱間寸法に統一性は認められない。性格は不明である。



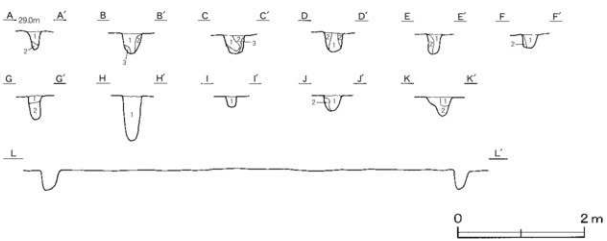
第101図　第11号ピット群実測図（2）

第12号ピット群（第102・103図）

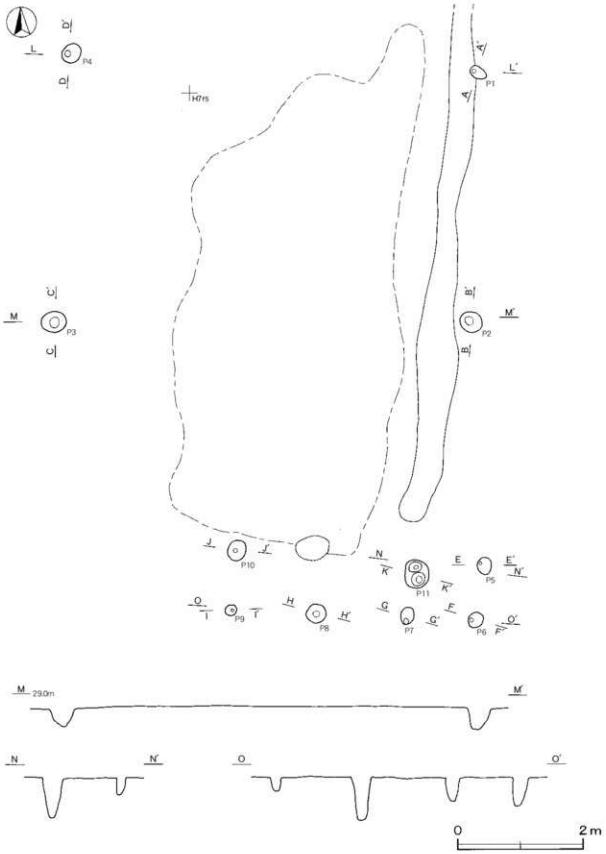
調査Ⅰ区のＨ７e4 ～Ｈ７h6区，標高約29mの平坦部に位置している。柱穴数は11か所で，北側4か所，南側７か所である。北部の柱間寸法はＰ１・Ｐ２間が3.90m，Ｐ３・Ｐ４間が4.20mで，Ｐ１・Ｐ４，Ｐ２・Ｐ３間はそれぞれ6.60mである。平面形は長径26 ～ 38cm，短径18 ～ 32cmの円形もしくは楕円形で，深さは30 ～ 34cmである。これらの柱穴は柱数と配置から建物である可能性は低い。南部の柱間寸法は，南北軸のＰ５・Ｐ６，Ｐ７・Ｐ11，Ｐ９・Ｐ10間が0.90mを基調とし，東西軸はＰ６・Ｐ７間が1.10m，Ｐ７・Ｐ８間が1.50m，Ｐ８・Ｐ９間が1.30m，Ｐ10・Ｐ11間が2.90m，Ｐ11・Ｐ５間が1.00mで柱間寸法に統一性が認められない。平面形は長径18 ～ 46cm，短径18 ～ 38cmの円形もしくは楕円形で，深さは28 ～ 70cmである。これらの柱穴も柱数と配置から，上屋構造をもつ建物ではないと考えられる。覆土は３層に分層され，第１層が柱痕跡，第２・３層は掘り方の埋土で，強く突き固められた痕跡は認められない。

第12号ピット群土層解説

1　黒　褐　色　焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ローム粒子少量，炭化物微量



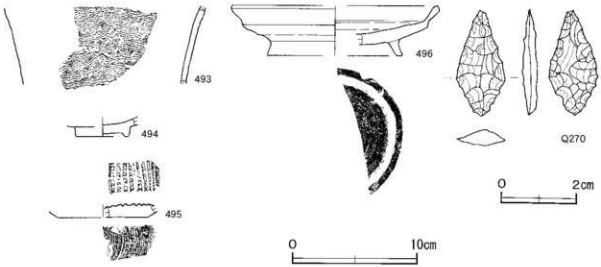
第102図　第12号ピット群実測図（1）



第103図　第12号ピット群実測図（2）

(6) 遺構外出土遺物（第104図）

遺構に伴わない主な遺物について，実測図及び出土遺物観察表で記載する。



第104図　遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表（第104図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
493	弥生土器	広口壺	－	(6.2)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口辺部に櫛歯状工具（４本）による流状文	調査G区表土中	
496	須恵器	高台付椀	[16.2]	4.0	[10.6]	長石・石英・角閃石	灰黄褐	普通	ロクロナデ　底部回転ヘラ削り後高台貼付	調査L区表土中	35% PL22
494	陶器	天目茶椀	－	(1.1)	[4.2]	緻密・内面白色釉	浅黄橙	良	削り高台	SI76覆土中	瀬戸・美濃
495	陶器	おろし皿	－	(1.1)	[7.2]	緻密	浅黄橙	良	内底格子状のおろし目　底部回転糸切り	SI76覆土中	瀬戸・美濃

番号	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	材質	特徴	出土位置	備　考
Q270	石鏃	28	13	4	13	チャート	両面加工　押圧剥離で加工　側縁はやや不規則な貝殻状の剥離面	ＳＤ19	縄文時代後期 PL26

(7) 調査K区のトレンチ調査（付図）

調査K区は本跡の北東部に位置し，削平されたため他の調査区よりも低位であり，遺構遺存の可能性が低いことからトレンチ調査だけを実施した。面積は，160m^{2}で全体（556m^2）の約28％である。結果，トレンチ範囲からは遺構が確認されなかったため，本調査は実施していない。トレンチ範囲については，全体図に記載する。

第４章　大戸富士山遺跡

第１節　遺 跡 の 概 要

大戸富士山遺跡は，東茨城郡茨城町の北西部に位置し，涸沼前川の支流である小橋川の左岸，標高24～29mの舌状台地上に立地している。調査区は小橋川左岸の平坦部で平成17年度調査区に接している。

調査の結果，縄文時代から中・近世にわたる複合遺跡であることが確認された。調査前現況は栗林で，調査面積は1,000m²である。

確認された遺構は，縄文時代の陥し穴２基，奈良・平安時代の竪穴住居跡５軒，掘立柱建物跡１棟，中・近世の溝跡１条のほか，欠跡１列，土坑５基である。

遺物は，遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に３箱分出土しており，大半は奈良・平安時代のものである。主な遺物は，土師器片（坏・高台付坏・甕），須恵器片（坏・蓋・長頸瓶），陶器片（甕），鉄製品（刀子）などである。

なお，調査区は，平成17年度調査で設定されたＡ区，Ｂ区に続き，Ｃ区とした。

第２節　基　本　層　序

調査Ａ区北西部のＣ２d6区及び調査Ｂ区北部のＤ５g0区にテストピットを設定し，地表から深さ約3.0mほど掘り下げて基本土層の堆積状況（第105図）の観察を行った。テストピットの土層は，色調・構成粒子・含有物・粘性・締まりなどから12層に分層された。調査Ａ区西部の斜面部においては男体七本桜軽石層が部分的に観察することができたが，テストピットにおいては確認されなかった。

以下，テストピットの観察から，層序について記述する。

第１層は黒褐色土層で，ローム粒子を少量含み，層厚は約40cm前後である。

第２層は暗褐色を呈し，ソフトローム粒子を含む層で，層厚は17～32cmである。

第３層は褐色を呈するソフトローム層で，層厚は36～44cmである。

第４層は褐色を呈するハードローム層で，締まりが強く，層厚は32～50cmである。

第５層は褐色を呈するハードローム層で，黒色粒子を微量含み，締まりが強く，層厚は25～35cmである。

第６層は黄褐色を呈する鹿沼パミス層への漸移層で，ローム粒子及び鹿沼パミス粒子を中量含み，粘性が弱く，締まりは強い。層厚は８～10cmである。

第７層は明黄褐色を呈する鹿沼パミス層で，粘性が弱く，締まりは強い。層厚は27～35cmである。

第８層は褐色を呈するハードローム層で，鹿沼パミス粒子を微量含み，層厚は28～30cmである。

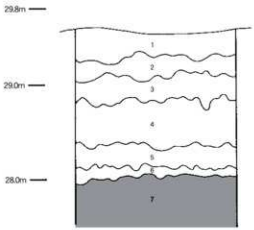
第９層は褐色を呈するハードローム層で，粘性・締まりが強く，層厚は24～34cmである。

第10層は褐色を呈するハードローム層で，黒色粒子を微量に含み，層厚は15～27cmである。

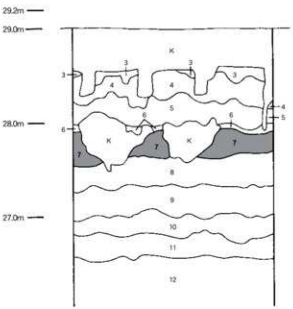
第11層はにぶい黄褐色を呈する常総粘土層の漸移層で，粘土粒子を少量含み，層厚は21～25cmである。

第12層は灰黄色を呈する常総粘土層で，粘土粒子を多量に含んでいる。下層は未掘のため本来の層厚は不明である。

なお，遺構の多くは第３・４層上面で確認されている。



C 2 d6



D 5 g0

第105図　基本土層図

第３節　遺 構 と 遺 物

1　縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は，陥し穴２基を確認した。以下，遺構の特徴について記述する。

第３号陥し穴（第106図）

位置　調査Ｃ区のＤ６e1区，標高約29mの平坦部に位置している。

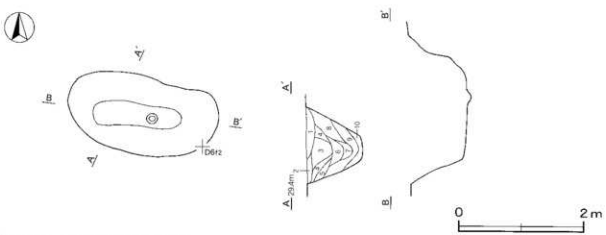
規模と形状　長径2.42m，短径1.26mの楕円形で，深さは88cmである。断面はＵ字状で，壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦で，逆茂木の跡と想定されるピットが１か所確認された。長径方向はN－78°－Wで，傾斜部と平行している。

覆土　10層からなる。周囲からの土の流入を示す自然堆積である。

土層解説

1	黒	褐	色	ローム粒子微量	6	極	暗	褐	色	ローム粒子少量
2	黒		色	ローム粒子少量	7	暗	褐		色	ロームブロック少量
3	黒		色	ローム粒子微量	8	褐			色	ロームブロック中量
4	極	暗	褐	色	ロームブロック少量	9	褐		色	ロームブロック多量
5	黒	褐	色	ローム粒子少量	10	暗	褐		色	ロームブロック中量

所見　時期は，規模や形状から縄文時代と考えられるが，遺物が出土していないため明確な時期判断は困難である。



第106図　第３号陥し穴実測図

第４号陥し穴（第107図）

位置　調査区のＤ６d2区，標高約29mの平坦部に位置している。

重複関係　第48号土坑に掘り込まれている。

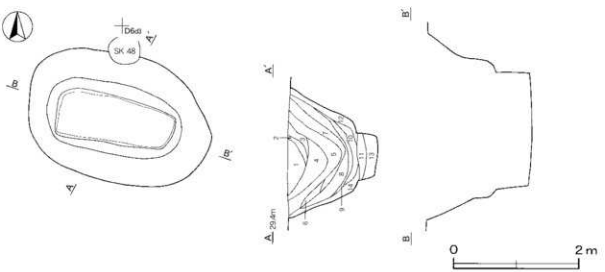
規模と形状　長径2.94m，短径2.02mの楕円形で，深さは164cmである。壁は，下位は直立し，その後外傾して立ち上がっている。断面は逆台形状で，底面は平坦である。長径方向はN－77°－Wで，傾斜部と平行している。

覆土　14層からなる。周囲からの土の流入を示す自然堆積である。

土層解説

1 黒　　色 ローム粒子・焼土粒子微量
2 黒　褐 色 ローム粒子・焼土粒子微量
3 黒　褐 色 ローム粒子・焼土粒子微量（明・彩度が低い）
4 黒　　色 ローム粒子少量，焼土粒子微量
5 極 暗 褐 色 ローム粒子少量，焼土粒子微量
6 暗　褐 色 焼土ブロック・ローム粒子少量
7 暗　褐 色 ローム粒子少量，焼土粒子微量
8 褐　　色 ローム粒子中量
9 褐　　色 ローム粒子多量，焼土粒子微量
10 褐　　色 ローム粒子多量，焼土粒子微量（明・彩度が高い）
11 褐　　色 ローム ブロック多量，鹿沼パミス粒子少量
12 褐　　色 ローム粒子多量
13 褐　　色 ローム ブロック多量，鹿沼パミス粒子微量
14 黄　褐 色 鹿沼パミス粒子多量，ローム粒子微量

所見　時期は，規模や形状から縄文時代と考えられるが，遺物が出土していないため明確な時期判断は困難である。



第107図　第４号陥し穴実測図

表11　陥し穴一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模（m）（長径×短径）	深さ（cm）	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係（旧→新）
3	D 6e1	N－78°－W	楕円形	2.42×1.26	88	U字状	平坦	自然		縄文時代
4	D 6 d2	N－77°－W	楕円形	2.94×2.02	164	逆台形	平坦	自然		本跡→SK48 縄文時代

2　奈良・平安時代の遺構と遺物

当時代の竪穴住居跡５軒，掘立柱建物跡１棟を確認した。以下，遺構の特徴と遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第30号住居跡（第108・109図）

位置　調査Ｃ区のＤ５d7区，標高約29mの平坦部に位置している。

規模と形状　長軸2.82m，短軸2.80mの方形で，主軸方向はN－20°－Eである。壁高は46～48cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。

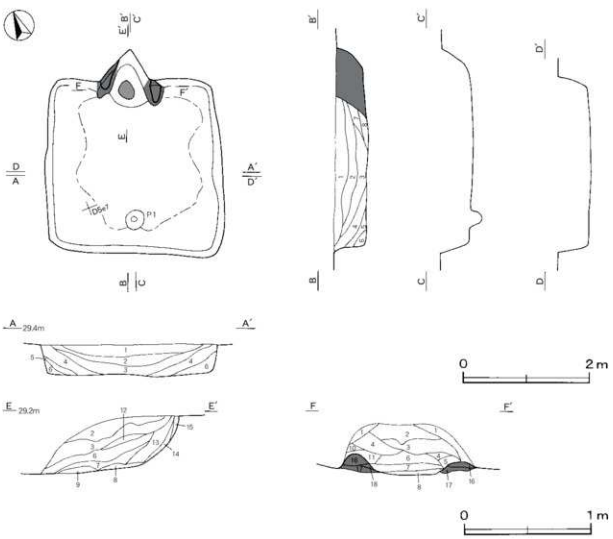
竈　北東壁中央部に付設されている。規模は，焚口部から煙道部まで90cm，袖部幅115cmほどである。袖部は床面と同じ高さを基部とし，砂質粘土で構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さで，火床面は火により赤変硬化している。煙道部は壁外へ49cm掘り込み，火床面から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子少量
2　極 暗 褐 色　砂質粘土ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
4　暗　褐　色　焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
5　にぶい黄褐色　砂質粘土粒子多量
6　灰 黄 褐 色　砂質粘土粒子中量，焼土ブロック・炭化粒子少量
7　灰 黄 褐 色　砂質粘土粒子中量，焼土ブロック・炭化粒子少量，ローム粒子微量
8　極 暗 褐 色　ロームブロック・焼土粒子・砂質粘土粒子少量
9　暗 赤 褐 色　焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量，ローム粒子微量
10　暗　褐　色　砂質粘土粒子少量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
11　にぶい黄褐色　砂質粘土ブロック中量，焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量
12　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
13　暗　褐　色　砂質粘土粒子中量，焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子微量
14　褐　　色　ロームブロック中量，焼土粒子・砂質粘土粒子少量
15　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子・砂質粘土粒子微量
16　オリーブ褐色　砂質粘土粒子多量
17　黒　褐　色　砂質粘土粒子少量
18　オリーブ褐色　砂質粘土粒子多量，焼土粒子少量，炭化粒子微量

ピット　深さ17cmで，南西壁際にあることから，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　8層からなる。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

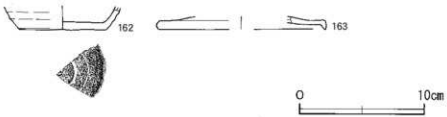


第108図　第30号住居跡実測図

土層解説
1 黒　褐　色　ロームブロック微量
2 黒　褐　色　ローム粒子少量
3 暗　褐　色　ロームブロック少量
4 褐　　色　ロームブロック中量
5 暗　褐　色　ローム粒子少量
6 褐　　色　ローム粒子多量
7 極 暗 褐 色　ローム粒子・砂質粘土粒子少量，焼土粒子微量
8 暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子微量

遺物出土状況　土師器片90点（甕），須恵器片19点（坏13，高台付坏１，蓋４，甕１）が出土している。162・163は覆土中からの出土である。

所見　時期は，覆土中から出土した162，163よりも古い段階で，８世紀後半と考えられる。



第109図　第30号住居跡出土遺物実測図

第30号住居跡出土遺物観察表（第109図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴		出土位置	備考
162	須恵器	坏	－	(19)	[68]	長石・角閃石	灰	普通	ロクロナデ	底部回転ヘラ切り後ナデ	覆土中	20%
163	須恵器	蓋	[133]	(10)	－	長石・石英	黄灰	普通	内・外面ロクロナデ		覆土中	

第31号住居跡（第110・111図）

位置　調査Ｃ区のＤ５e4区，標高約29mの平坦部に位置している。

重複関係　第２号溝に掘り込まれている。

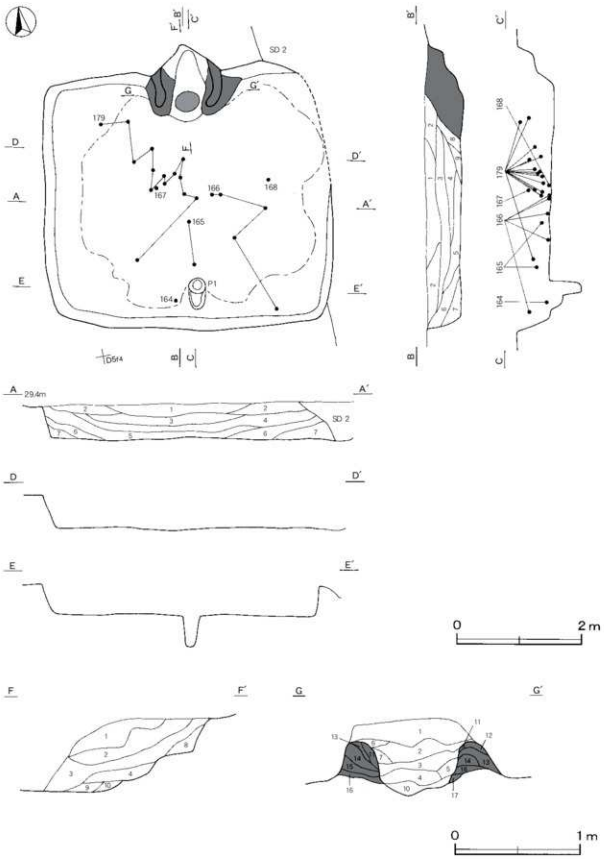
規模と形状　長軸4.64m，短軸4.20mの長方形と推定され，主軸方向はＮ－７°－Ｅである。壁高は48～54cmで直立している。

床　ほぼ平坦で，全体的によく踏み固められている。

竈　北壁中央部に付設されている。規模は，焚口部から煙道部まで123cm，袖部幅145cmほどである。袖部は地山を僅かに残して基部とし，砂質粘土で構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さで，火床面は火により赤変硬化している。煙道部は壁外へ三角形状に46cm掘り込み，火床面から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説
1 黒　褐　色　砂質粘土ブロック少量，ローム粒子微量
2 にぶい黄褐色　砂質粘土ブロック・焼土粒子少量，ローム粒子微量
3 極 暗 褐 色　焼土粒子中量，砂質粘土ブロック・炭化粒子少量，ローム粒子微量
4 暗 赤 褐 色　焼土粒子多量，炭化粒子・砂質粘土粒子少量
5 暗 赤 褐 色　焼土ブロック中量，炭化粒子・砂質粘土粒子少量
6 にぶい黄褐色　砂質粘土粒子多量，焼土粒子少量
7 にぶい黄褐色　砂質粘土粒子多量，焼土ブロック少量
8 褐　　色　ローム粒子多量，焼土粒子微量
9 極 暗 褐 色　焼土粒子多量，炭化粒子少量，ローム粒子微量
10 暗 赤 褐 色　焼土ブロック多量，炭化粒子少量，ローム粒子微量
11 にぶい赤褐色　焼土粒子多量，砂質粘土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子微量
12 にぶい黄橙色　砂質粘土粒子多量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
13 黒　褐　色　砂質粘土粒子少量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
14 にぶい黄褐色　砂質粘土粒子多量，ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
15 黒　褐　色　砂質粘土粒子中量，焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量
16 黒　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子微量
17 暗　褐　色　焼土粒子多量，ローム粒子少量

ピット　深さ51cmで，位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。



第110図　第31号住居跡実測図

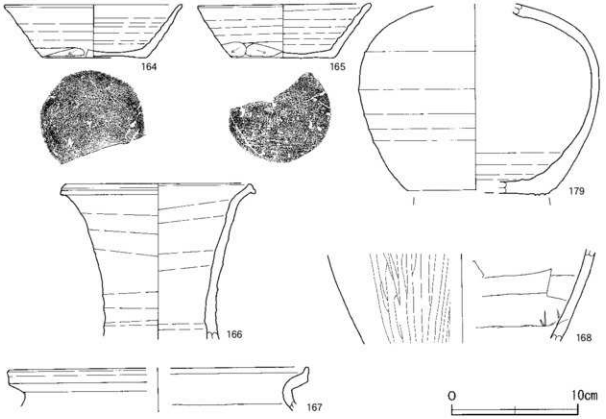
覆土　9層からなる。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

1　極　暗　褐　色　ロームブロック微量
2　黒　　褐　色　ローム粒子微量
3　暗　　褐　色　ロームブロック微量
4　暗　　褐　色　ローム粒子少量
5　暗　　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
6　褐　　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量
7　褐　　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
8　暗　　褐　色　砂質粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量
9　暗　　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子少量

遺物出土状況　土師器片153点（坏10，高台付坏1，甕類142），須恵器片32点（坏類18，高台付坏2，長頸瓶2，甕類10）が出土している。また，混入した縄文土器片1点も出土している。164は南壁際中央部床面からの出土，165は南壁と中央部寄りの床面から出土した破片が接合したものである。166は中央部の床面と南壁寄りの下層から出土した破片が接合したもので，167は中央部覆土中層，168は中央部から東壁よりの床面からそれぞれ出土している。179は中央部の覆土上層から下層にかけて出土した破片が接合したものである。

所見　本跡から出土した遺物のほとんどが中央部の覆土上層から中層にかけての出土で，これらは，住居廃絶後の埋没過程で廃棄されたものと考えられる。時期は，出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第111図　第31号住居跡出土遺物実測図

第31号住居跡出土遺物観察表（第111図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
164	須恵器	坏	14.0	4.2	8.0	長石・石英	褐灰	普通	体部内・外面ロクロナデ　体部下端手持ちヘラ削り　底部回転ヘラ切り後ヘラ削り	床面	55% PL31
165	須恵器	坏	13.6	4.4	8.0	長石・石英	黄灰	普通	体部内・外面ロクロナデ　体部下端手持ちヘラ削り　底部回転ヘラ切り後多方向のヘラ削り	床面	55% PL31
166	須恵器	長頸瓶	14.5	(124)	－	長石・雲母・角閃石	灰黄	普通	体部内・外面ロクロナデ	覆土下層から床面	20% PL31

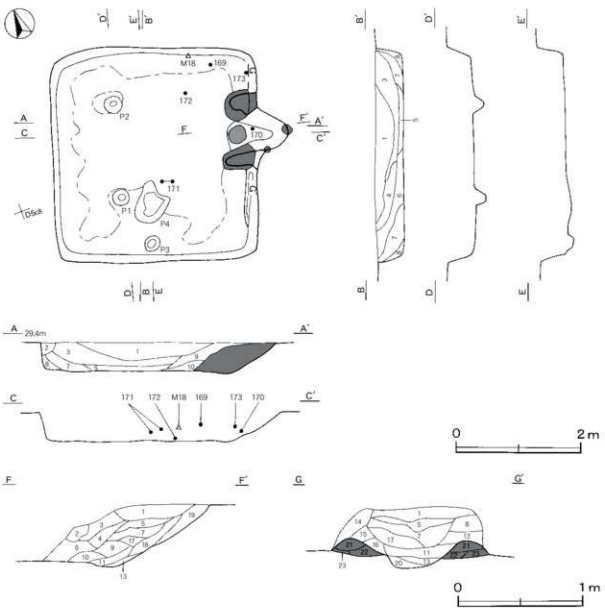
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
167	土師器	甕	[23.4]	(3.4)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	内・外面横位のナデ	覆土中層	
168	土師器	甕	－	(7.2)	－	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい橙	普通	外面体部ヘラ磨き　内面ヘラナデ　輪積痕	床面	35%
179	須恵器	長頸瓶	－	(15.0)	[10.5]	長石・石英	灰黄褐	普通	体部内・外面ロクロナデ　底部回転ヘラ切り後高台貼付	覆土上層から下層	30% PL31

第32号住居跡（第112・113図）

位置　調査C区のD５b8区，標高約29mの平坦部に位置している。

規模と形状　長軸3.44m，短軸3.30mの方形で，主軸方向はN－110°－Eである。壁高は40～44cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，全体的によく踏み固められている。壁溝が，竈南側の東壁に確認されている。



第112図　第32号住居跡実測図

竈　東壁中央部に付設されている。規模は，焚口部から煙道部まで107cm，袖部幅127cmである。袖部は床面と同じ高さを基部とし，砂質粘土で構築されている。火床部は床面を楕円形に4cm掘りくぼめており，火床面は火により赤変硬化している。煙道部は壁外へ58cm掘り込み，火床面から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

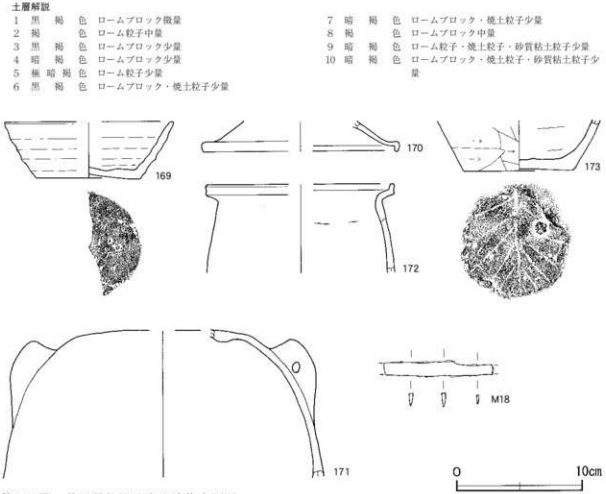
1　黒　褐　色　砂質粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量
2　オリーブ褐色　砂質粘土粒子多量
3　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子・砂質粘土粒子微量
4　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量，砂質粘土粒子微量
5　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
6　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量，砂質粘土粒子微量
7　暗　褐　色　焼土ブロック・砂質粘土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量
8　黒　褐　色　炭化粒子少量，ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子微量
9　灰　黄　褐　色　砂質粘土粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子微量
10　褐　　色　ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化粒子微量
11　極暗赤褐色　焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
12　極　暗　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子・砂質粘土粒子微量
13　極暗赤褐色　焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
14　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量
15　暗　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
16　極暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子少量
17　にぶい黄褐色　砂質粘土粒子中量，焼土ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量
18　暗　褐　色　砂質粘土粒子中量，焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子微量
19　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子少量，炭化粒子微量
20　暗　赤　褐　色　焼土ブロック・ローム粒子・砂質粘土粒子少量，炭化粒子微量
21　にぶい黄褐色　砂質粘土粒子多量，ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
22　黒　　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
23　黒　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量

ピット　4か所。深さは，P1は17cm，P2は18cmで，位置と配置から主柱穴と考えられる。深さは，P3は9cm，P4は6cmで，位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　10層からなる。周囲からの土の流入を示す自然堆積である。

土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック微量
2　褐　　色　ローム粒子中量
3　黒　褐　色　ロームブロック少量
4　暗　褐　色　ロームブロック少量
5　極暗褐色　ローム粒子少量
6　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子少量
7　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子少量
8　褐　　色　ロームブロック中量
9　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子少量
10　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・砂質粘土粒子少量



第113図　第32号住居跡出土遺物実測図

遺物出土状況　土師器片37点（甕），須恵器片13点（坏類８，蓋２，双耳付長頸瓶１，甕類２），土製品１点（支脚），鉄製品１点（刀子）が出土している。169・172・173・M18は中央部と北東コーナ部寄りの覆土中層から下層，170は竈の煙道部から，それぞれ出土している。171は中央部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。

所見　時期は，出土土器から８世紀後葉と考えられる。

第32号住居跡出土遺物観察表（第113図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
169	須恵器	坏	[13.2]	4.5	[8.4]	長石・石英	灰褐	普通	体部内・外面ロクロナデ　底部回転ヘラ切り後ヘラ削り	覆土中層から下層	30% PL31
170	須恵器	蓋	[15.4]	(2.4)	－	長石・石英	灰黄褐	普通	内・外面ロクロナデ	竈内	20%
171	須恵器	双耳付長頸瓶	－	(11.6)	－	長石・石英・角閃石	黄灰	普通	体部内・外面ロクロナデ後耳貼付	覆土下層	20%
172	土師器	甕	[14.8]	(7.0)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	内・外面横位のナデ　輪積痕	覆土下層	
173	土師器	甕	－	(4.0)	8.0	長石・石英・雲母	にぶい明赤褐	普通	外面下位ヘラ削り　内面輪積痕　底部木葉痕	覆土中層から下層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M18	刀子	(8.6)	(1.2)	0.1～0.3	(7.0)	鉄	切先部・茎部欠損	覆土下層	PL31

第33号住居跡（第114・115図）

位置　調査Ｃ区のＤ５c0区，標高約29mの平坦部に位置している。

規模と形状　長軸3.94m，短軸3.62mの長方形で，主軸方向はＮ－10°－Ｅである。壁高は58～62cmで，ほぼ直立している。

床　ほぼ平坦で，全体的によく踏み固められている。壁溝は，北東コーナーと南西コーナー，南壁を除いて確認されている。

竈　北壁中央部に付設されている。規模は，焚口部から煙道部まで138cm，袖部幅158cmである。袖部は床面から16cmほど掘り込んで基部とし，砂質粘土で構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さで，火床面は火により赤変硬化している。煙道部は壁外へ70cm掘り込み，火床面から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

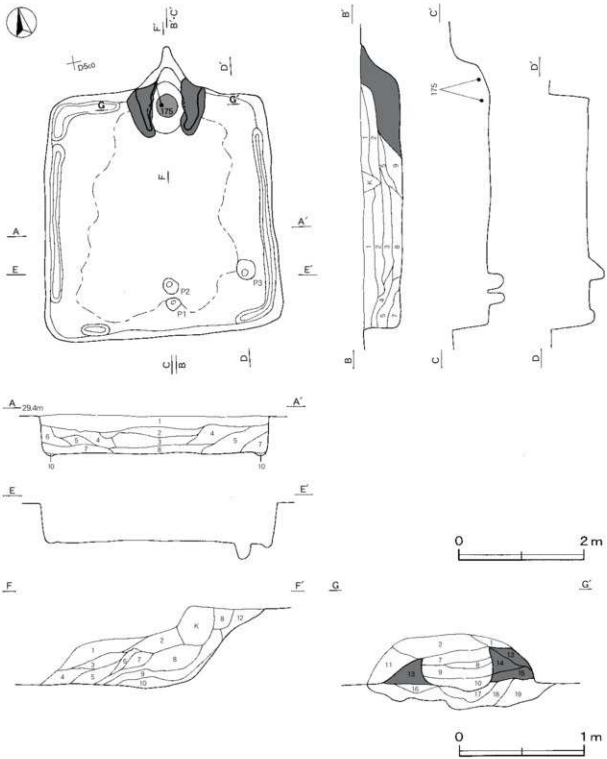
1　暗　褐　色　ローム粒子・砂質粘土粒子少量，焼土粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子・砂質粘土粒子少量
3　黒　褐　色　砂質粘土粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　暗　褐　色　焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量
5　にぶい黄褐色　砂質粘土粒子中量，焼土ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量
6　灰　黄　褐　色　砂質粘土ブロック中量，焼土ブロック少量，炭化粒子微量
7　極　暗　褐　色　ローム粒子・砂質粘土粒子少量
8　にぶい黄褐色　砂質粘土粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
9　暗灰黄褐色　砂質粘土ブロック中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
10　極暗赤褐色　焼土粒子中量，炭化粒子・砂質粘土粒子少量，ローム粒子微量
11　極暗赤褐色　ローム粒子少量，炭化粒子・砂質粘土粒子微量
12　灰　褐　色　砂質粘土粒子少量，炭化粒子微量
13　にぶい黄褐色　砂質粘土粒子多量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
14　黒　褐　色　ローム粒子・砂質粘土粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
15　褐　色　砂質粘土粒子多量，ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
16　黒　褐　色　ローム粒子・砂質粘土粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
17　黒　褐　色　焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子中量
18　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子微量
19　黒　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子微量

ピット　３か所。深さは，Ｐ１は25cm，Ｐ２は26cmで，確認された位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。Ｐ３は深さ22cmで確認された位置から主柱穴の可能性があるが，他に見られないため柱穴ではないと考えられ，性格は不明である。

覆土　10層からなる。壁際からの土の流入を示す堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説

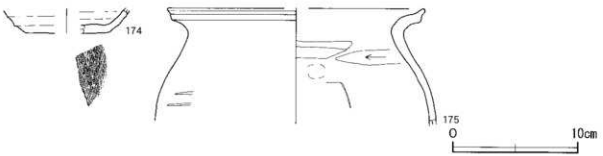
1　極暗褐色　ローム粒子中量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量
3　褐　　色　ローム粒子多量
4　暗　褐　色　ロームブロック中量
5　褐　　色　ローム粒子多量，ロームブロック少量
6　極暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
7　褐　　色　ローム粒子多量，炭化粒子微量
8　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
9　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子中量，炭化粒子少量
10　褐　　色　ロームブロック中量



第114図　第33号住居跡実測図

遺物出土状況　土師器片159点（甕），須恵器片10点（坏）が出土している。174は竈の覆土中，175は竈下層から出土した破片が接合したものである。

所見　出土遺物が僅かであることから，明確な時期を示すことができないが，出土土器から８世紀後半と考えられる。



第115図　第33号住居跡出土遺物実測図

第33号住居跡出土遺物観察表（第115図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
174	須恵器	坏	－	(20)	[6.6]	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部内・外面ロクロナデ　底部回転ヘラ切り後ヘラ削り	竈覆土中	30%
175	土師器	甕	[22.4]	(9.2)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	内・外面横位のナデ　工具痕　内面ヘラナデ　指頭痕　輪積痕	竈下層	10%

第34号住居跡（第116図）

位置　調査Ｃ区のＤ５e9区，標高約29mの平坦部に位置している。

規模と形状　長軸3.04m，短軸2.54mの長方形で，主軸方向はＮ－９°－Ｅである。壁高は28～40cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，全体的によく踏み固められている。

竈　北壁中央部に付設されている。規模は，焚口部から煙道部まで102cm，袖部幅86cmである。袖部は床面とほぼ同じ高さを基部とし，砂質粘土で構築されている。火床部は，床面を13cm掘りくぼめて，暗褐色土で埋め戻し，火床面は火により赤変硬化している。煙道部は壁外へ47cm掘り込み，火床面から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

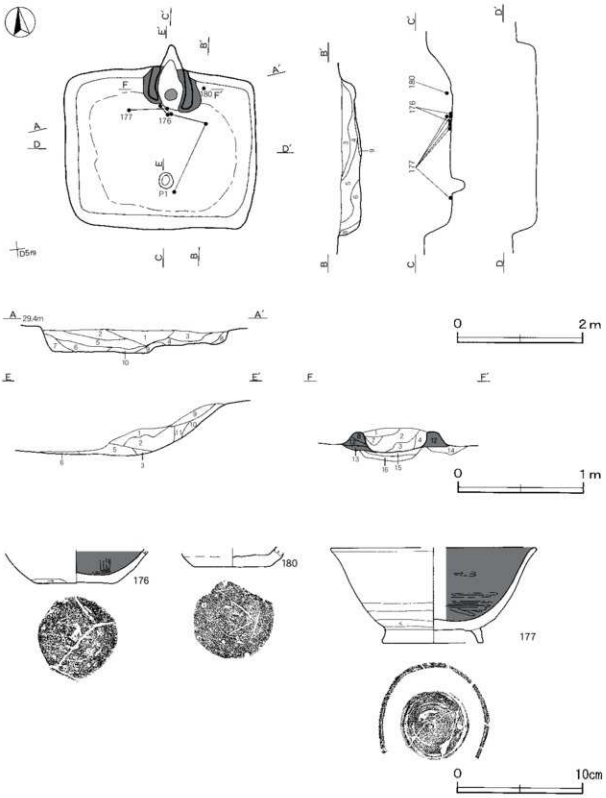
1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土粒子微量
2　にぶい黄褐色　ローム粒子中量，砂質粘土ブロック少量，焼土ブロック・炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化粒子微量
4　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量，焼土粒子微量
5　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
6　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック微量
7　暗 赤 褐 色　焼土粒子・砂質粘土粒子中量，炭化粒子微量
8　にぶい黄褐色　砂質粘土粒子多量，焼土粒子中量，炭化粒子微量
9　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
10　暗 赤 褐 色　焼土粒子・砂質粘土粒子中量，炭化粒子少量，ローム粒子微量
11　極暗赤褐色　焼土ブロック・砂質粘土粒子中量，炭化粒子少量，ローム粒子微量
12　黒　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・砂質粘土粒子少量，炭化粒子微量
13　暗 赤 褐 色　焼土粒子多量，ローム粒子・砂質粘土少量，炭化粒子微量
14　黒　褐　色　ローム粒子多量
15　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子多量，炭化粒子中量
16　黒　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子中量，炭化粒子少量

ピット　深さ27cmで，位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　10層からなる。周囲からの土の流入を示す，自然堆積である。

土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック少量
2　暗　褐　色　ローム粒子少量
3　暗　褐　色　ロームブロック微量
4　極 暗 褐 色　ローム粒子少量，焼土粒子微量



第116図　第34号住居跡・出土遺物実測図

5　極暗褐色　焼土粒子少量，ローム粒子微量
6　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量
7　褐　　色　ローム粒子中量
8　褐　　色　ロームブロック少量
9　暗　褐　色　焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
10　暗　褐　色　焼土粒子少量，砂質粘土粒子微量

遺物出土状況　土師器片104点（坏類9，高台付坏10，甕85），須恵器片21点（坏類18，蓋3）が出土している。176は竈前面の床面，177は覆土下層から床面にかけて出土した破片が接合したもので，180は竈東側の覆土下層から，それぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器から9世紀中葉と考えられる。

第34号住居跡出土遺物観察表（第116図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴		出土位置	備考
176	土師器	坏	－	(27)	6.0	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	ロクロナデ　体部下端ヘラ削り　内面ヘラ磨き　底部回転ヘラ削り後ナデ		床面	25%
177	土師器	高台付坏	[16.1]	7.6	7.8	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外面ロクロナデ　内面ヘラ磨き　底部回転ヘラ切り後高台貼付		覆土下層から床面	60% PL31
180	須恵器	坏	－	(1.5)	[6.0]	長石・石英	灰黄	普通	底部回転ヘラ切り後ヘラナデ		覆土下層	10%底部ヘラ書「下ヵ」

表12　奈良・平安時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模（m）（長軸×短軸）	壁高（cm）	床面	壁溝	内部施設						覆土	主な出土遺物	時期	新旧関係（旧→新）
								主柱穴	炉	入口ピット	竈	貯蔵穴					
30	D 5 d7	N－20°－E	方形	2.82×2.80	46～48	平坦	－	－	1	－	1	－	自然	土師器，須恵器	8 世紀後半	
31	D 5 e4	N－7°－E	[長方形]	(4.64)×4.20	48～54	平坦	－	－	1	－	1	－	自然	土師器，須恵器	8 世紀後葉	本跡→SD2
32	D 5 b8	N－110°－E	方形	3.44×3.30	40～44	平坦	一部	2	2	－	1	－	自然	土師器，須恵器，土製品，鉄製品	8 世紀後葉	
33	D 5 c0	N－10°－E	長方形	3.94×3.62	58～62	平坦	一部	1	2	－	1	－	自然	土師器，須恵器	8 世紀後半	
34	D 5 e9	N－9°－E	長方形	3.04×2.54	28～40	平坦	－	－	1	－	1	－	自然	土師器，須恵器	9 世紀中葉	

（2）掘立柱建物跡

第７号掘立柱建物跡（第117図）

位置　調査Ｃ区のＤ６d1区，標高約29mの平坦部に位置している。

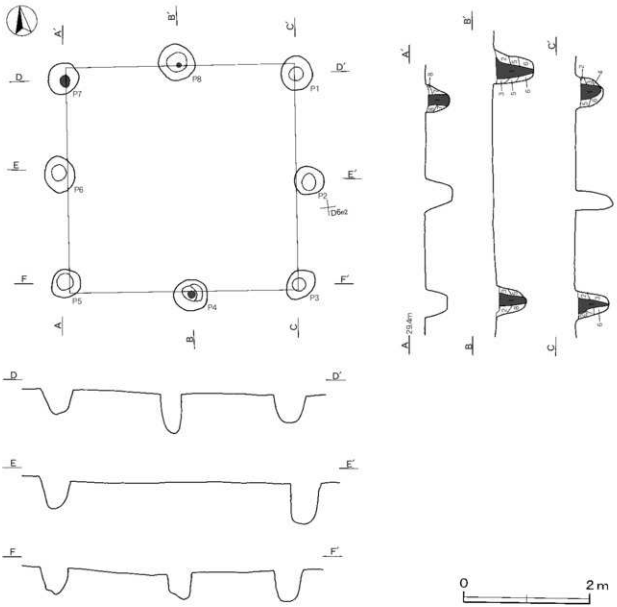
規模と構造　桁行２間，梁行２間の側柱建物跡である。桁行方向はN－８°－Eの南北棟であり，桁行，梁行とも3.60mで，面積は12.96m²である。柱間寸法は桁行，梁行とも1.80mを基調としており，柱筋はおおむね通っている。

柱穴　８か所。平面形は円形もしくは楕円形で，深さは38～68cmである。第１層が柱痕跡で，比較的締まりの弱い黒褐色土である。第２～８層は掘り方の埋土で，ローム土を含んだ褐色・暗褐色土が強く突き固められている。

土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子少量
2　暗　褐　色　ローム粒子少量
3　暗　褐　色　ロームブロック中量
4　暗　褐　色　ローム粒子微量
5　極暗褐色　ローム粒子少量
6　極暗褐色　ロームブロック少量
7　褐　　色　ローム粒子多量
8　褐　　色　ロームブロック中量

所見　時期は，本跡の桁行方向が第34号住居跡の主軸方向とほぼ同方向であることから，９世紀中葉と考えられる。



第117図　第７号掘立柱建物跡実測図

３　中・近世の遺構と遺物

中・近世の溝跡１条を確認した。以下，遺構の特徴と遺物について記述する。

第２号溝跡（第118・127図）

位置　調査Ｃ区のＤ５b4区～Ｄ５g6区，標高約29mの平坦部に位置している。

重複関係　第31号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　Ｄ５d4区を中心に南北方向（N－５°－W）に延び，北部は調査区域外に延びている。確認された長さは20.90mで，規模は上幅0.63～1.58m，下幅0.15～0.30m，深さは57～70cmで，断面形は逆台形状である。底面は皿状で，北方向に緩やかな高低差が確認できる。

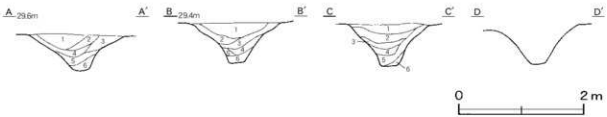
覆土　６層に分層される。周囲からの土の流入を示した自然堆積である。

土層解説

1	黒	褐	色	ローム粒子微量	4	暗	褐	色	ローム粒子少量
2	黒		色	ローム粒子中量	5	黒	褐	色	ローム粒子中量
3	黒	褐	色	ローム粒子少量	6	暗	褐	色	ローム粒子多量

遺物出土状況　陶器片２点（常滑系甕）が出土している。また，混入した土師器片，須恵器片も出土している。

所見　時期を明確に示す遺物が出土していないが，覆土中から出土した常滑系甕体部の細片から中世以降と考えられる。性格については不明である。



第118図　第２号溝跡実測図

4　その他の遺構と遺物

今回の調査で柵跡１列，土坑５基を確認した。以下，遺構の特徴について記述する。

(1) 柵跡

第３号柵跡（第119図）

位置　調査C区のＤ６c1区～Ｄ６c3区，標高約29mの平坦部に位置している。

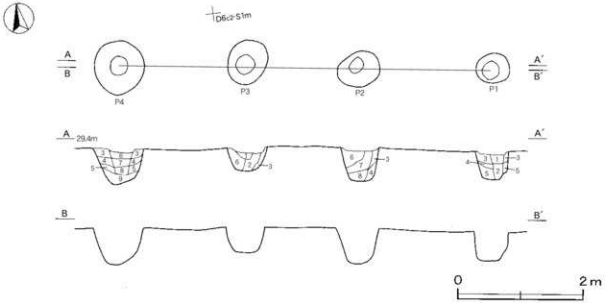
規模と構造　４か所の柱穴が直線的に確認された。主軸方向はN－83°－Wで，柱間寸法は西から2.10m，1.80m，2.10mである。

柱穴　平面形は円形もしくは楕円形で，深さは39～57cmである。第３～５・９層はローム土を含む褐色・暗褐色の埋土であり，第１・２・６～８層は柱抜き取り後の埋め戻しの土と考えられる。

土層解説

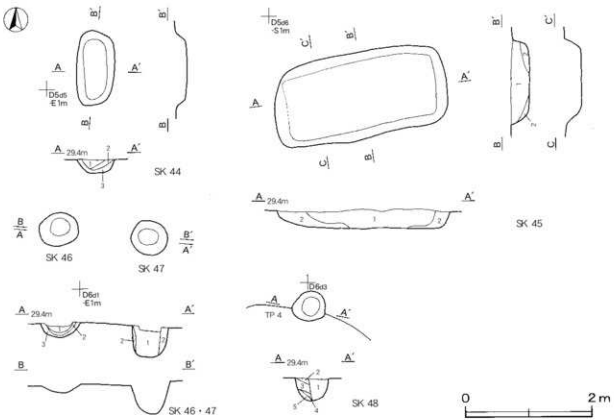
1	黒	褐	色	ロームブロック少量	6	暗	褐	色	ロームブロック少量
2	黒	褐	色	ローム粒子少量	7	暗	褐	色	ローム粒子少量
3	暗	褐	色	ロームブロック中量	8	極	暗	褐	色	ローム粒子少量
4	褐		色	ローム粒子多量	9	暗	褐	色	ローム粒子少量（しまりが強い）
5	褐		色	ロームブロック多量					

所見　時期は，遺物が出土していないため不明である。また，性格についても不明である。



第119図　第３号柵跡実測図

(2) 土坑（第120図）



第120図　土坑実測図

第44号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子少量
2　黒　褐　色　ローム粒子中量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量

第45号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック中量
2　黒　褐　色　ロームブロック少量

第46号土坑土層解説
1　黒　　色　ローム粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量
3　褐　　色　ロームブロック中量

第47号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック微量
2　褐　　色　ロームブロック中量

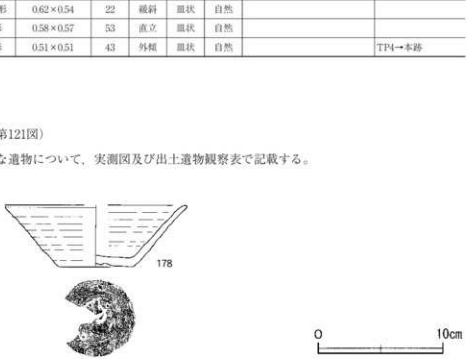
第48号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック微量
2　暗　褐　色　ローム粒子少量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量
4　暗　褐　色　ロームブロック少量
5　褐　　色　ロームブロック中量

表13　その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模（m）（長径×短径）	深さ（cm）	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係（旧→新）
44	D5c5	N－2°－E	隅丸長方形	1.18×0.60	18	緩斜	平坦	自然		
45	D5d6	N－80°－E	長方形	2.74×1.34	26	外傾	平坦	自然		
46	D6c1	N－58°－E	楕円形	0.62×0.54	22	緩斜	皿状	自然		
47	D6c1	－	円形	0.58×0.57	53	直立	皿状	自然		
48	D6d3	－	円形	0.51×0.51	43	外傾	皿状	自然		TP4→本跡

（3）遺構外出土遺物（第121図）

遺構に伴わない主な遺物について，実測図及び出土遺物観察表で記載する。



第121図　遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表（第121図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
178	須恵器	坏	[14.2]	4.9	6.0	長石・石英	褐灰	普通	体部内・外面ロクロナデ　底部回転ヘラ切り後回転ヘラ削り	ＳＤ２	35%　PL31

第5章　ま　と　め

1　はじめに

羽黒山遺跡・大戸富士山遺跡は，調査の結果旧石器時代から近代にわたる複合遺跡であることが明らかになり，中でも羽黒山遺跡調査G区の，縄文時代早期の土器や石器等を中心とした遺物包含層が特筆される。ここでは，時代ごとに調査成果を概観し，若干の考察を加え，まとめとしたい。

2　旧石器時代

平成18年度報告では，羽黒山遺跡で３か所，大戸富士山遺跡で４か所の石器集中地点が報告され，いずれも谷部から台地に上がった標高28.5 ～ 29.0mの地点に確認されたが，平成18・19年度調査区からは石器集中地点は確認されず，剥片石器（珪質頁岩）が羽黒山遺跡調査H区の表土中より１点出土しただけである。今回の調査区は，石器集中地点が確認された部分よりより平坦な部分で，該期の居住領域から外れていたものと考えられる。

3　縄文時代

小橋川流域の縄文時代の遺跡（桜の郷遺跡群）を概観すると，早期から前期にかけての活動の痕跡は，羽黒山遺跡とわずかに大戸下郷遺跡や宮後遺跡で確認されている。前期の痕跡は小橋川流域より，溷沼川流域が活発で，南小割遺跡では住居跡20軒が確認されており，該期の中心であったと考えられる。中期は，前葉の痕跡が羽黒山遺跡や大戸富士山遺跡でも見られるが，拠点は中葉の宮後遺跡で集落としてのピークを迎える。後期前葉から晩期前葉の痕跡は，羽黒山遺跡や大戸下郷遺跡で確認され，活動拠点が小規模化して，溷沼や溷沼川周辺に移動したものと考えられる。茨城町内の時期ごとの遺跡分布状況をみても，小橋川流域と同様で，早期から前期に増加し，中期にピークを迎えている。

このような縄文時代の流れの中，両遺跡で確認された遺構は，集石遺構１か所，炉穴跡２基，陥し穴７基，遺物包含層１か所である。特に羽黒山遺跡調査G区で確認された遺物包含層では，早期前半（田戸下層式）の土器が多量に出土したことが特筆される。早期前半の遺構や遺物は，溷沼川流域，溷沼前川流域の遺跡を概観すると出土例が少なく，今後羽黒山遺跡出土の土器が標本的な資料になる。ここでは，早期前半土器群の文様構成等について観察・所見を加えながら分類してみたい。

(1) 羽黒山遺跡出土の早期前半（田戸下層式）の土器について

近年，特に1980年代以降，早期の土器研究は文様構成を中心に論じられている。羽黒山遺跡の遺物包含層からは，早期の土器片が952点出土している。その内の626点は，直線的な細沈線文あるいは太沈線文で器面を区画し，余白に貝殻腹縁文や半截竹管，ヘラ状工具で刺突文を充填する施文方法から，田戸下層式土器と考えられる。また，わずかではあるが，早期前葉と考えられる三戸式の土器も含まれている。

このような遺物出土状況は，ひたちなか市武田石高遺跡の遺物出土状況と類似しており，鈴木素行氏は同遺跡出土の田戸下層式土器について文様構成の復元を目的とした個体別資料の識別を行っている[1]。当遺跡からは，武田石高遺跡のような個体別にできる資料が出土していないが，鈴木素行氏の識別方法に準

拠し土器片から読み取れる文様要素や文様構成について概略を述べ，掲載資料の所見を記述する。

ア　器形

器種は，砲弾形と称される深鉢土器で，取り上げた土器片の口径から最大32.0cm前後，最小12.0cm前後のものが確認できる。土器片が小片であることから，大・中・小を明確に分類することができないが，大形のものから小形のものまで確認することができる。また，口縁部は平縁と波状口縁，段状口縁があり，口唇部は角頭状，丸頭状，外削ぎ状が認められ，外反，もしくは直立している器形と考えられる。底部は，平底のものは出土しておらず，口縁部から底部にかけての形状から尖底である。

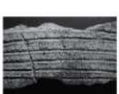
イ　文様要素

文様要素を大別すると，沈線文・刺突文・貝殻文・無文に分けられ，鈴木素行氏の文様要素の分類に当てはめることができるが，当遺跡で見られる文様要素については，さらに細分を加える。

沈　線　文	
①　太沈線文	半截竹管状工具の外側を器面に当て，押しながら器肉を削り取るように施文したもの
②　細沈線文A	ヘラ状工具を引くことにより施文され，沈線断面が丸く浅いもの
③　細沈線文B	ヘラ状工具を引くことにより施文され，沈線断面が鋭く深いもの
④　細沈線文C	ヘラ状工具を引くことにより施文され，沈線断面が浅く，細沈線文Bより細いもの
刺　突　文	
①　刺突文A	半截竹管状工具を器面に対して垂直に刺突したもの
②　刺突文B	半截竹管状工具の内側を器面に向けて約30度の鋭角に刺突したもの
③　刺突文C	ヘラ状工具の彎曲外側が器面に対し鋭角に刺突したもの
④　刺突文D	半截竹管状工具の外側が器面に対し鋭角に当てられ，これを押し付けるように刺突したもの
⑤　刺突文E	半截竹管状工具の内側が器面に対し鋭角に当てられ，工具の先端部両側で刺突したもの
⑥　刺突文F	半截竹管状工具の外側を器面に対して斜めに押しあて，器肉をやや長めに削いだもの
貝殻腹縁文	
①　貝殻腹縁文A	貝殻の腹縁を器面に対して垂直に押し当てたもの
②　貝殻腹縁文B	貝殻の背を内側にして，器面に対して，斜めから腹縁を押し当てたもの

太沈線文

細沈線文A


細沈線文B

細沈線文C

刺突文A

刺突文B

刺突文C

刺突文D

文様要素（1）

刺突文E

刺突文F

貝殻腹縁文A

貝殻腹縁文B

文様要素（2）

ウ　**文様構成**

文様は，沈線文・刺突文・貝殻文の組み合わせによって構成されている。胴部上半には横位の細沈線文，もしくは縦位，斜位で区画し，余白の部分に刺突文，貝殻腹縁文を充填している。また，細沈線文を斜位に施文し，「くの字状文」・「菱形状文」を描写しているものもある。胴部上半と下半の区画には横位に細沈線文，太沈線文を施文し，底部は太沈線を横位，斜位に施文しているものが見られる。胴部下半から底部の文様要素に刺突文や貝殻腹縁文は認められない。また，わずかではあるが無文の土器がみられる。

エ　**文様要素の検討**

資料については，沈線文類・刺突文類・貝殻腹縁文類に分類し，文様構成を検討した。また，文様要素が2つ以上みられる資料については，着目する要素に合わせて掲載する。

①　**太沈線文**（第122図）

資料1（TP34）

胴部下半片である。胎土に，長石・石英・雲母が含まれ，特に石英の含有量が多い。色調は浅黄橙色である。文様要素は太沈線文で，中心に横位の沈線文1条で区画し，その上下に斜位の沈線文が下方向から施されており，これらの沈線が全周していると考える。

資料2（TP43）

胴部下半片である。胎土に，長石・石英・雲母・砂粒・赤色粒子が含まれ，特に細かい長石の含有量が多い。色調は橙色で，文様要素は太沈線文で，横位，または斜位の沈線文が施文されている。

資料3（TP56）

胴部下半片である。胎土に，長石・石英・雲母・砂粒が含まれ，特に雲母の含有量が多い。色調は，明赤褐色である。文様要素は太沈線文であり，横位の沈線文が施され，一部斜位の沈線と交差しており，これらの沈線が全周していると考えられる。

資料4（TP61）

胴部下半片である。胎土に，細かい長石・石英・雲母が含まれる。色調は橙色である。文様要素は太沈線文で，横位の沈線文が1条ずつ規則的に施文され，交差する部分はないと考えられる。

資料5（TP84）

口縁部片で，外反している。胎土に，細かい長石・石英・雲母が含まれる。色調は，にぶい黄橙色である。文様要素は太沈線文で，上から下方向に一度短沈線文を施文し，その後上方向に施文し「V字状」文様区を作り出している。口唇部は外削ぎで，波状口縁と考えられる。

資料6（TP86）

口縁部片で，直立している。胎土に，細かい長石・石英・雲母・角閃石が含まれる。色調は，にぶ

い橙色である。文様要素は太沈線文で，始め垂直に上から下方向へ施文し，その後，斜位に施文している。口唇部は角頭状で，平縁と考えられる。

資料7（TP89）

口縁部片で，ほぼ直立している。胎土に，細かい長石・石英・雲母・角閃石が含まれる。色調は，明赤褐色である。残存する口縁部から，かなり小形の深鉢と考えることができ，文様要素は細沈線文Aで，始めに右傾の短沈線文を施文し，余白部分に左傾・右傾の沈線文を3条ずつ施文しながら縦長の菱形状文を作り出している。口唇部は丸頭状で，僅かな傾きが認められるが，平縁と考える。

資料8（TP98）

口縁部片で，外反している。胎土に，細かい長石・石英・雲母・赤色粒子が含まれる。色調は，にぶい橙色である。文様要素は太沈線文で，右傾の沈線文が施文されている。口唇部は外削ぎ状で，波状口縁と考えられる。

資料9（TP100）

口縁部片で，直立している。胎土に，細かい長石・石英・角閃石が含まれ，特に長石の含有量が多い。色調は，にぶい褐色である。文様要素は太沈線文で，右傾の沈線が施文されている。口唇部は角頭外状で，波状口縁と考えられる。

資料10（TP104）

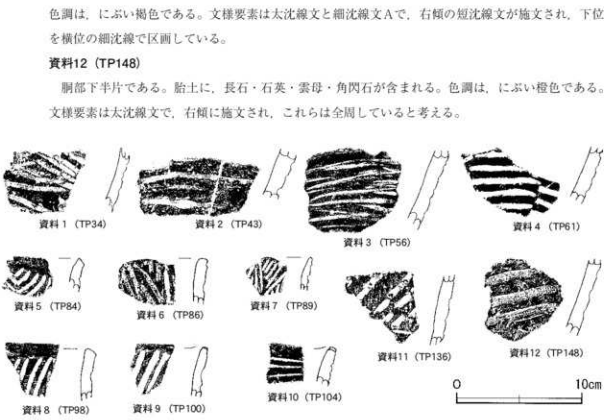
口縁部片で，ほぼ直立している。胎土に，長石・石英・雲母が含まれる。色調は，橙色である。文様要素は細沈線文Aで，横位に施文されている。口唇部は角頭状で，波状口縁と考えられる。

資料11（TP136）

胴部下半片である。胎土に，細かい長石・石英・雲母・角閃石が含まれ，特に長石の含有量が多い。色調は，にぶい褐色である。文様要素は太沈線文と細沈線文Aで，右傾の短沈線文が施文され，下位を横位の細沈線で区画している。

資料12（TP148）

胴部下半片である。胎土に，長石・石英・雲母・角閃石が含まれる。色調は，にぶい橙色である。文様要素は太沈線文で，右傾に施文され，これらは全周していると考える。



第122図　太沈線文実測図

② **細沈線文**（第123図）

資料13（TP59）

胴部下半片である。胎土に，長石・石英・雲母・角閃石が含まれ，特に長石の含有量が多い。色調は，にぶい褐色である。文様要素は細沈線文Bで，横位に施文され，全周していると考えられる。

資料14（TP85）

口縁部片で，直立している。胎土に，細かい長石・石英・雲母が含まれる。色調は，にぶい橙色である。文様要素は細沈線文Bと貝殻腹縁文Aで，上位に横位の沈線文が6条施文され，下位に貝殻腹縁文が充填されている。口唇部は丸頭状で，平縁と考えられる。

資料15（TP87）

口縁部片で，ほぼ直立している。胎土に，細かい長石・石英・雲母が含まれる。色調は，橙色である。文様要素は細沈線文Bで，右傾に施文されている。口唇部は角頭状で，段状口縁である。

資料16（TP88）

口縁部片で，ほぼ直立している。胎土に，細かい長石・石英・雲母が含まれる。色調は，橙色である。文様要素は細沈線文Bで，右傾と口縁部に対して垂直に施文されている。口唇部は角頭状で，平縁と考えられる。

資料17（TP90）

口縁部片で，外反している。胎土に，長石・石英・角閃石が含まれる。色調は，明赤褐色である。文様要素は細沈線文Bで，左傾・右傾に3条から4条施文し，横長の菱形状文様区を作り出しており，口唇部は丸頭状で，波状口縁と考えられる。

資料18（TP93）

口縁部片で，直立している。胎土に，細かい長石・石英・雲母が含まれる。色調は，にぶい赤褐色である。文様要素は細沈線文Bで，口縁部下半に横位に施文後，左傾に施文され，口唇部は角頭状で平縁と考えられる。

資料19（TP94）

口縁部片で，やや外反している。胎土に，細かい長石・石英・雲母が含まれ，特に長石の含有量が多い。色調は，にぶい黄橙色である。文様要素は細沈線文Aで，口辺部に余白を作り，下位を横位に施文している。口唇部は角頭状で平縁と考えられる。

資料20（TP95）

口縁部片で，直立している。胎土に，細かい長石・石英・雲母が含まれる。色調は，にぶい黄橙色である。文様要素は細沈線文Bで，横位に施文し，口唇部は外削ぎで平縁と考える。

資料21（TP101）

口縁部片で，外反している。胎土に，長石・石英・雲母・赤色粒子が含まれる。色調は，にぶい橙色である。文様要素は細沈線文Aで，口辺部には横位に4単位を施文している。口唇部は丸みのある外削ぎで，波状口縁と考えられる。

資料22（TP102）

口縁部片で，やや外反している。胎土に，長石・雲母・角閃石が含まれる。色調は，にぶい黄橙色である。文様要素は細沈線文Aと細沈線文Bで，口縁部下位には横位に細沈線文Bが4条施文され上下を区画し，口辺部上位には右傾・左傾の細沈線文Aで「く」の字状文様区を作り出している。口唇

部は角頭状で，波状口縁である。

資料23（TP141）

胴部片である。胎土に，長石・石英・雲母・赤色粒子が含まれる。色調はにぶい浅黄色である。文様要素は太沈線文と細沈線文Bで，右傾の太沈線文での区画に４条の細沈線文が施文されている。貼り瘤状に見える楕円状の塊は，ヘラ状工具による沈線施文の際に器面の粘土が隆起し，指頭により押さえられたものである。

資料24（TP70）

口縁部片で，外傾している。胎土に，細かい長石・石英・雲母・角閃石が含まれる。色調は，にぶい黄褐色である。文様要素は細沈線文Aと細沈線文C，貝殻腹縁文Aで，角頭状の口唇部に細沈線文Aと同じ工具で刻みを施し，口縁部上位に細沈線文Aで横位の沈線文を３条施文して，上下を区画し，下位には細沈線文Cを右傾に施文し，余白に貝殻腹縁文を充填している。

資料25（TP76）

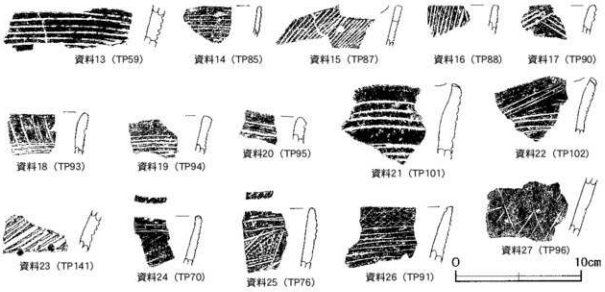
口縁部片で，やや内彎している。胎土に，細かい長石・石英・雲母・角閃石が含まれる。色調は，にぶい橙色である。文様要素は細沈線文Aと貝殻腹縁文Aで，角頭状の口唇部に細沈線文Aと同じ工具で刻み，口縁部上位に細沈線文Aで横位の沈線文を２条施文し，下位と区画している。下位は，細沈線文Aを右傾に１条施文して，菱形状文を作り出し，余白に斜位と横位の貝殻腹縁文を充填している。

資料26（TP91）

口縁部片で，外傾している。胎土に，細かい長石・石英・雲母・角閃石が含まれる。色調は，にぶい橙色である。文様要素は細沈線文Aで口縁部の上位に斜格子文様を作り，下位には横位の沈線文を施文し，口唇部は角頭状で平縁と考えられる。

資料27（TP96）

胴部下半片である。胎土に，細かい長石・石英・雲母が含まれる。色調は，にぶい黄橙色である。文様要素は細沈線文Cで，斜格子文を作り出している。



第123図　細沈線文実測図

③ **刺突文**（第124図）

資料28（TP39）

口縁部片で，やや内彎している。胎土に，細かい長石・石英・雲母・角閃石・赤色粒子が含まれる。色調は，にぶい橙色である。文様要素は細沈線文Bと刺突文Aで，口縁部上位に横位の沈線文4条と刺突文で下位と区画し，口唇部はやや外削ぎの角頭状で，平縁と考えられる。

資料29（TP66）

口縁部片で，直立している。胎土に，長石・角閃石が含まれる。色調は，にぶい褐色である。文様要素は刺突文Aと刺突文Dで，口縁部から垂直に刺突文Dと斜位の刺突文Aが充填され，口唇部は先細りの丸頭状で，平縁と考えられる。

資料30（TP69）

口縁部片で，ほぼ直立している。胎土に，長石・雲母が含まれる。色調は，にぶい黄褐色である。文様要素は刺突文A，刺突文Cと細沈線文Bで，口縁部上位から刺突文C，細沈線文B，刺突文Aの順で施文され，文様が構成されている。口唇部は先細りで内面に丸みを持つ平縁である。

資料31（TP116）

胴部片である。胎土に，長石・雲母が含まれる。色調は，にぶい黄橙色である。文様要素は刺突文Aで，器面に不規則に充填されている。

資料32（TP127）

胴部片である。胎土に，長石・石英・角閃石・赤色粒子が含まれる。色調は，橙色で，文様要素は刺突文A，細沈線文Aである。上位から細沈線文，刺突文，細沈線文の順で施文されている。

資料33（TP31）

胴部片である。胎土に，長石・石英・雲母が含まれ，特に粒の大きい長石の含有量が多い。色調は，浅黄橙色である。文様要素は刺突文D，細沈線文B，貝殻腹縁文Bである。上位に2条の沈線文で「く」の字状文様区を作り出し，間に2単位の刺突文を充填している。また，「く」の字状文様区の内側余白部分に貝殻腹縁文を充填している。下位には斜位，または横位の細沈線文が施文され，上位と区画をしている。

資料34（TP36）

口縁部片で，直立している。胎土に，長石・石英・雲母が含まれ，長石と石英の粒子が比較的大きい。色調は，にぶい橙色である。文様要素は刺突文Bと細沈線文Aで，口縁部から横位の細沈線文を2条施文し，その下位に沈線と平行に半截竹管の外側を右側に向け，刺突文を施文する文様を繰り返している。口唇部は角頭状で，平縁と考えられる。

資料35（TP63）

口縁部片で，直立している。胎土に，細かい長石・石英・雲母が含まれる。色調は，にぶい橙色である。文様要素は刺突文Aと細沈線文Aで，口縁部から横位の細沈線文を2条施文し，その下位に沈線と平行に半截竹管の外側を左側に向けた，刺突文を施文している。口唇部は角頭状で，波状口縁と考えられる。

資料36（TP65）

口縁部片で，直立している。胎土に，細かい長石・石英・雲母が含まれる。色調は，にぶい橙色である。残存する口縁部から，かなり小形の深鉢と考えられる。文様要素は刺突文Eと細沈線文Aで，

口縁部から横位の細沈線文を３条施文し，その下位に沈線と平行に細い半截竹管状の工具を併用した刺突文を鋭角に施文している。口唇部は丸頭状で，平縁と考えられる。

資料37（TP68）

口縁部片で，ほぼ直立している。胎土に，長石・石英・雲母・角閃石が含まれる。色調は，にぶい橙色である。文様要素は刺突文Ｄと細沈線文Ａで，口縁部から垂直に半截竹管を刺突し，横位の細沈線文を２条施文している。口唇部は角頭状で，平縁と考えられる。

資料38（TP64）

口縁部片で，ほぼ直立している。胎土に，長石・石英・角閃石が含まれ，特に長石の含有量が多い。色調は，にぶい赤褐色である。文様要素は刺突文Ｆで，不規則に施文されている。口唇部は角頭状で，平縁と考えられる。

資料39（TP44）

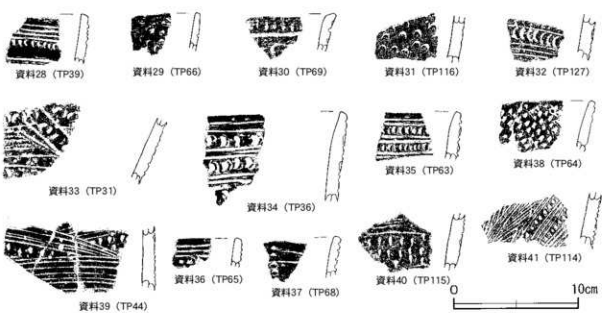
胴部下半片である。胎土に，細かい長石・石英・雲母・赤色粒子が含まれる。色調は，橙色である。文様要素は刺突文Ｃ，細沈線文Ｂである。上位に右傾・左傾の細沈線文を５条交差させながら，横位の菱形状文様区を作り出し，区画内に刺突文を施文している。下位は，横位の細沈線文が施文され，上位と区画している。

資料40（TP115）

胴部片である。胎土に，細かい長石・石英・雲母・赤色粒子が含まれる。色調は，にぶい橙色である。文様要素は刺突文Ｃ，細沈線文Ｂである。細沈線文で上・下位に区画し，下位に刺突文を２段から３段施文している。

資料41（TP114）

胴部片である。胎土に，細かい長石・石英・角閃石が含まれる。色調は，にぶい褐色である。文様要素は刺突文Ｃ，細沈線文Ｂである。文様帯区画に横位の細沈線文を充填し，それぞれの間に右傾・左傾の細沈線文と刺突文を施文している。横位と斜位の施文工具は同じものである。



第124図　刺突文実測図

④ **貝殻腹縁文**（第125図）

資料42（TP50）

口縁部片で，外傾している。胎土に，長石・石英が含まれ，特に長石の含有量が多い。色調は，赤褐色である。文様要素は細沈線文A，貝殻腹縁文Aである。口唇部の下位に沈線文で菱形状文様区を作り出し，中に貝殻腹縁文を充填している。口唇部は角頭状で，ヘラ状工具を斜めに押し当てて刻みをつけており，平縁である。

資料43（TP72）

口縁部片で，ほぼ直立している。胎土に，長石・角閃石が含まれる。色調は，にぶい褐色である。文様要素は細沈線文A，貝殻腹縁文Aである。口唇部の下位に２条の沈線文を横位に施文し，下位の沈線区画内に横位の貝殻腹縁文を充填している。口唇部は丸頭状で，細沈線文と同じ施文工具で刻みを施し，平縁である。

資料44（TP73）

口縁部片で，直立している。胎土に，長石・雲母が含まれる。色調は，明赤褐色である。文様要素は細沈線文B，貝殻腹縁文Aである。口唇部の下位に左傾の沈線文を施文し，斜位の貝殻腹縁文を充填している。口唇部は丸頭状で，平縁である。

資料45（TP75）

口縁部片で，ほぼ直立している。胎土に，長石・石英・雲母・角閃石が含まれる。色調は，にぶい黄橙色である。文様要素は細沈線文A，貝殻腹縁文Aである。口縁部の上位に２条の沈線文様帯を横位に区画し，区画内外に貝殻腹縁文を充填している。下位は右傾の沈線文を施文し，余白部分に貝殻腹縁文を充填している。口唇部は丸頭状で，細沈線文と同じ工具で刻みを施し，平縁である。

資料46（TP81）

口縁部片で，外傾している。胎土に，長石・石英・雲母・角閃石が含まれる。色調は，にぶい黄橙色で，器面に黒斑が認められる。文様要素は細沈線文A，貝殻腹縁文Aである。口縁部の上位に２条の横位の沈線文様帯を区画し，下位に貝殻腹縁文を充填している。口唇部は角頭状で，平縁である。

資料47（TP45）

胴部片である。胎土に，長石・石英・雲母が含まれ，特に大粒の長石が含まれる。色調は，にぶい橙色である。文様要素は細沈線文B，貝殻腹縁文Bである。３条の細沈線文で菱形区画文様帯を作り出し，区画内に貝殻腹縁文を充填している。下位には，横位の細沈線文が上位と区画するように施文されている。

資料48（TP46）

口縁部片で，やや内彎している。胎土に，長石・石英・雲母が含まれ，特に長石の含有量が多い。色調は，褐灰色である。文様要素は細沈線文A，貝殻腹縁文Bである。口縁部の上位に横位の沈線文，下位に貝殻腹縁文を施文している。口唇部は角頭状で，ヘラ状工具を斜めに押し当てて，刻みをつけており，平縁である。

資料49（TP80）

口縁部片で，直立している。胎土に，長石・石英・雲母・赤色粒子が含まれ，特に石英の含有量が多い。色調は，明赤褐色である。文様要素は細沈線文B，貝殻腹縁文Bである。口縁部の上位に右傾の沈線文を施文し，下位に３条の細沈線文様で上下を区画し，下位に貝殻腹縁文を施文している。口

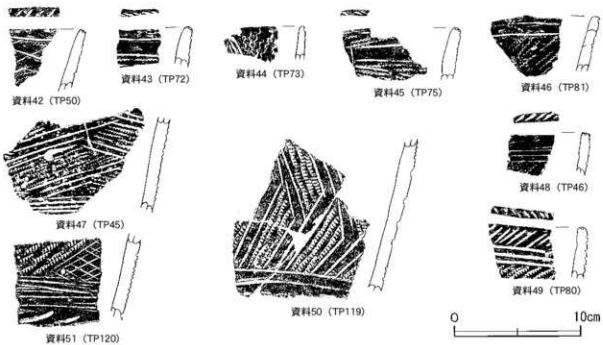
唇部は角頭状で，細沈線文Bの刻みつけ，平縁である。

資料50（TP119）

胴部上半片である。胎土に，長石・石英・雲母が含まれ，特に大粒の石英が含まれる。色調は，にぶい褐色である。文様要素は細沈線文B，貝殻腹縁文Bである。２条から３条の細沈線文で鋸歯状区画文を作り出し，区画内に貝殻腹縁文を充填している。下位に横位の細沈線文が上位と区画するために施文されている。

資料51（TP120）

胴部片である。胎土に，細かい石英・雲母・赤色粒子が含まれる。色調は，にぶい橙色である。文様要素は太沈線文，細沈線文A，貝殻腹縁文Bである。横位の細沈線文で上下を区画し，上位には貝殻腹縁文と斜格子文，下位には右傾の太沈線文を施文している。



第125図　貝殻腹縁文実測図

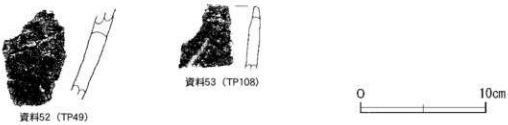
⑤　**無文**（第126図）

資料52（TP49）

胴部下半片で無文である。胎土に，長石・石英・雲母が含まれ，長石と石英は比較的大粒である。色調は，褐灰色である。

資料53（TP108）

口縁部片で，やや内彎している。胎土に，長石・石英・角閃石が含まれる。色調は，にぶい黄橙色である。無文であるが，器面に斜位の整形痕が認められる。口唇部は，先細りの角頭状である。



第126図　無文実測図

以上，早期前半の土器について，文様要素ごとに観察を述べてきた。これらの資料からは，文様要素である沈線文・刺突文・貝殻腹縁文が一つの要素として器面に描かれているものと，そうでないものがあり，沈線文と刺突文，沈線文と貝殻腹縁文，沈線文と刺突文・貝殻腹縁文の組み合わせによって文様が構成されていることが理解される。しかし，刺突文と貝殻腹縁による文様構成はみられない。また，取り上げた遺物が小破片のため，文様全体を観察することができず，掲載した資料から文様構成を特定することはできなかった。さらに，土器の法量や器形，胎土からも特定の数値を見い出すことはできなかった。

3　弥生時代

弥生土器片（広口壺）３点が，羽黒山遺跡の遺物包含層から出土しているが，遺構は確認されていない。周辺遺跡を概観すると，小橋川を挟んだ対岸には弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の集落が確認されている宮後遺跡，石原遺跡，大塚遺跡，綱山遺跡，木戸遺跡，南部には大戸下郷遺跡が位置している。当遺跡において，該期の遺構は確認されていないが，周辺部の様相から当遺跡も該期の生活領域であったと考えられる。

4　古墳時代

羽黒山遺跡の古墳時代の遺構は，前期の竪穴住居跡が2軒で，いずれも台地の平坦部に位置している。平成18年度報告分[3]を加えると16軒であり，同時期の住居跡を概観すると，東部の小支谷を囲むように集落が形成されている。当遺跡の集落は，前期前後の遺構が確認されていないことから「前期前半に形成され始め，前期後半には終焉を迎えている」という平成18年度報告[3]を追認することができる。また，遺物の出土量が少量で，炉や床面に残される生活の痕跡が希薄であることは，集落の形成期間が短期間であったことを示していると考えられる。桜の郷遺跡群においても古墳時代中期以降の集落が確認されていないことは，周辺部も前期後半で集落の形成が終焉を迎えており，前期集落の拠点と考えられる石原遺跡や綱山遺跡，当遺跡を含めた該期の集団は，生活拠点を移したものと推察できる。また，大戸富士山遺跡からは，該期の遺構は確認されていない。

5　奈良・平安時代

羽黒山遺跡，大戸富士山遺跡の中心となる時代である。羽黒山遺跡からは，竪穴住居跡19軒，掘立柱建物跡１棟，土坑１基，大戸富士山遺跡からは，竪穴住居跡５軒，掘立柱建物跡１棟が確認されている。平成18年度報告[3]では，土器様相から集落の変遷を１期から５期に分類している。ここでは，集落変遷を６期とし，今回の報告分を追加しながら若干の考察を加えてみたい。また，詳細な時期を示すことができなかった羽黒

山遺跡の第79～81・87・88号住居跡，大戸富士山遺跡の第30・33号住居跡は，集落変遷の考察に含めていない。

(1) 羽黒山遺跡の集落変遷

1期（8世紀前葉）

住居跡は1軒（第71B号住居跡）で，第71A号住居に掘り込まれているが両住居跡に時期差はないと考えられる。覆土中より刀子が出土し，前回の報告分を加えると4軒となる。

2期（8世紀中葉）

住居跡は2軒（第69・71A号住居跡）で，前回報告分を加えると17軒となる。2期の集落は第8・59・65号住居跡が小集団の核となる住居とされ，今回，報告した第69・71A号住居跡は確認された位置から，第65号住居跡の集団に属していたと考えられる。また，第69号住居跡からは鉄製品2点（鎌・鉄滓）が出土している。

3期（8世紀後葉）

住居跡は3軒（第70・78・82号住居跡）で，前回報告分を加えると15軒となる。3期の集落は第11・38号住居跡が小集団の核とされており，第70号住居跡は確認された位置から第38号住居跡の集団に属していたと考えられる。第78・82号住居跡は当遺跡の東部に存在する集団に属していたと考えられ，調査の結果，東部からは該期の住居跡が2軒以外に確認されておらず，詳細は不明である。また，第70・82号住居跡から刀子が1点ずつ出土し，第78号住居跡からも不明鉄製品が出土している。このことは，「該期に鉄製品の普及が急速に進んだ」とする前回の報告を追認するものである。

4期（9世紀前葉）

住居跡は6軒（第75～77・84～86号住居跡）で，前回報告分を加えると15軒となる。4期の集落は，平成17年度調査区の南部を中心に形成されていたと考えられる。第84～86号住居跡は，中心部の北側の西側小支谷を囲むように位置しており，第20号掘立柱建物跡も同じ集団に属していたと考えられる。第75～77号住居跡は当遺跡の東部に位置し，主軸方向は南部とほぼ同軸であるが，同一集落については，東部から同期の住居跡が3軒以外確認されていないため，明確でない。また，第77号住居跡から鎌と「林家」と書かれた墨書土器，第85号住居跡から刀子と砥石，第86号住居跡からは砥石2点が出土し，鉄製品の普及がさらに進んだことを示している。

5期（9世紀中葉）

住居跡は1軒（第74号住居跡）で，前回報告分を加えると9軒となる。集落の中心は9世紀前葉と変わらず南部であるが，第74号住居跡の位置が東部に位置して，1軒だけ確認されているが，同一集団かどうかは明確でない。覆土中層から釘と判読不明の墨書土器が出土している。

6期（9世紀後葉）

住居跡は1軒（第83号住居跡）で，前回報告分を加えると2軒となる。調査区のほぼ中央部に位置し，8世紀後半の住居跡を掘り込み，9世紀代と考えられる住居跡が3軒周辺に存在する。覆土中から「真家ヵ」と書かれた墨書土器が1点出土している。

(2) 大戸富士山遺跡の集落変遷

今回の調査区からは，1・2・4期に該当する遺構は確認されていない。

3期（8世紀後葉）

住居跡は2軒（第31・32号住居跡）で，前回報告分を加えると12軒で当遺跡において，集落の規模が最も大きくなる時期である。第32号住居跡の覆土中層から刀子が出土している。

5期（9世紀中葉）

住居跡は1軒（第34号住居跡）で，前回報告分を加えると10軒となる。第7号掘立柱建物跡も第34号住居跡と同じ集団に属していたと考えられる。

羽黒山遺跡と大戸富士山遺跡は，遺跡名の違いはあるが，小橋川左岸の同じ台地上に位置し，住居跡の分布状況からひとつの集落と捉えることができる。両遺跡の集落の変遷を6期に分けて観察してきたが，時期ごとの住居跡数や，その分布状況から見て，各時期の集落は律令期における戸主を中心とした小単位の集落と考えられる。また，8世紀前葉に集落が形成され始め，9世紀後葉には集落の規模を縮小し，終焉を迎えていることは，隣接する宮後遺跡や大塚遺跡と連動していると考えられる。

遺跡名＼時期	8C前	8C中	8C後	8C代	主な遺物	9C前	9C中	9C後	9C代	主な遺物
宮後遺跡	14	10	13		円面硯，腰帯具	21	33	10		緑釉・灰釉陶器，円面硯，馬具
大塚遺跡	11	9	17	2		28	15	7	2	灰釉陶器，円面硯，腰帯具
石原遺跡	5	14	9	2	灰釉陶器，双耳瓶	6	3	1	1	円面硯，丸鞆
綱山遺跡	10	2	8	8	円面硯	15	8	5	6	灰釉陶器，円面硯
木戸遺跡						1	3			
羽黒山遺跡	4	17	15			15	9	2		腰帯具
大戸富士山遺跡			12		馬具		10			

「桜の郷遺跡群」奈良・平安時代の住居跡数

6　中・近世

中世の茨城町地方の動向は，律令期の郡・郷が解体し，在地領主を中心とする新しい体制の郡（条・保）－郷・村へと変化する時期である。9世紀後葉以降，集落としての機能を失っていった桜の郷遺跡群（大戸地区）は，10世紀以降吉田郡に組み入れられ，13世紀以降は常陸大掾系吉田幹清を祖とする大戸氏に支配されている[6]が，桜の郷遺跡群内において中世の動きがみられるのは14世紀代に入ってからである。各遺跡から大戸氏に関係する遺構や遺物は確認されていないが，宮後遺跡1区で，土師質土器（内耳鍋），常滑系陶器が出土している長さ199.0m，上幅2.55～4.25m，下幅0.78～1.10mの箱薬研状の堀跡や15世紀後半から16世紀前半に位置づけられる茶臼などから，有力者層，もしくは在地領主の存在をうかがうことができる。羽黒山遺跡と大戸富士山遺跡からは，中世と考えられる掘立柱建物跡2棟，溝3条，道路跡1条，土坑2基が確認され，調査H区の表土中からは中世後半と考えられる陶器片（白天目茶碗・おろし皿）が出土している。これらの遺構や遺物から大戸地区における14世紀から15世紀後半の様子を僅かに見ることができるが，宮後遺跡との関係は明確でない。

大戸地区の16世紀後半は佐竹氏の領域，近世になると水戸藩領に組み込まれる。この時期に形成された集落名は現在でも奥谷，小鶴，長岡，近藤などが残され，集落形態を継承しながら現在に至っている。この時

期の羽黒山遺跡と大戸富士山遺跡からは，溝跡４条，井戸跡１基が確認されている。特に第16号溝跡は，出土した陶器片から遺跡内では近世における最も古い遺構と考えられる。また，平成18年度報告では土坑墓も確認されており，台地の平坦部に位置する両遺跡は，墓域や畑地として利用されていたと思われる。

7　近代

確認された遺構は，炭焼窯跡１基，井戸跡１基，土坑３基で，これらの遺構はいずれも羽黒山遺跡から確認されている。井戸跡や土坑から出土した遺物は廃棄された雑器であり，近代前半の生活様式をうかがうことのできる資料である。この時期の羽黒山遺跡と大戸富士山遺跡は，近世とほとんど変わらない様子と想定されるが，炭焼窯跡は前年度報告と合わせて羽黒山遺跡２基，大戸富士山遺跡５基が確認され，生活に密接した平地林の存在を想定することができる。茨城町地方で薪炭の生産がさかんに行われるようになったのは19世紀後半で，商品経済の発展と荒廃した農村復興を目的として始められている[7]。近世後半から再開された薪炭生産業は，近代に入っても行われ続けた。その理由は，農村部の安定した収入の一端をなしていたからと考えられる。

8　おわりに

当遺跡は，空白期があるものの旧石器時代から近代まで，小橋川左岸に形成された複合遺跡であることが明らかになった。特に羽黒山遺跡の縄文時代早期の遺物包含層は，県域における該期の土器様式を理解する上で良好な資料になると考えられる。

平成10年に開始された「桜の郷遺跡群」の調査も10年の歳月を経た。宮後遺跡の調査を最初に，今回報告する羽黒山遺跡２及び大戸富士山遺跡２の報告で終焉となる。これまでの発掘・整理でさまざまな課題が提示され，それらをひとつひとつ解決しながら作業を進めてきた。しかし，残された課題も多く，今後も「大戸遺跡群」や「桜の郷遺跡群」の歴史的な意義究明を進めていかなければならない。今回の報告が，その歴史解明の一助となれば幸いである。

註

1）鈴木素行「武田Ⅲ－1989年度武田遺跡群発掘調査の成果－」「(財) ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告」第３集　1990年３月
2）石川義信・小室弘毅「羽黒山遺跡 大戸富士山遺跡　やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅶ」「茨城県教育財団文化財調査報告」第279集　2007年３月
3）前掲２）に同じ
4）前掲２）に同じ
5）茨城町史編さん委員会「茨城町史 通史編」茨城町教育委員会　1995年２月
6）前掲５）に同じ

参考文献
・川崎純徳・鴨志田篤二「原山地内文化財報告書」ひたちなか市教育委員会　1979年５月
・川崎純徳・鴨志田篤二「遠原貝塚調査報告」ひたちなか市教育委員会　1980年３月
・鯉渕和彦「奥谷遺跡 小鶏遺跡　一般国道６号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書」「茨城県教育財団文化財調査報告」第50集　1989年３月
・原祐一　他「東京都新宿区 細工町遺跡　（仮称）新宿区立高齢者在宅サービスセンター建設に伴う緊急発掘調査報告書」新宿区厚生部遺跡調査会　1992年３月
・廣岡敏・鈴木隆康「東北横断自動車道関連遺跡Ⅱ 差塩Ｃ遺跡 東北横断自動車道遺跡調査報告 30」「いわき市埋蔵文化財調査報告」第40冊　1995年１月
・茨城町史編さん委員会「茨城町史 通史編」茨城町教育委員会　1995年２月
・小川和博・片平雅俊「十王町風早遺跡発掘調査報告書 」「多賀郡十王町文化財報告書」十王町風早遺跡調査会　1995年３月
・中野拓大「三戸式土器の成立と展開をめぐる試論」「みちのく発掘　菅原文也先生還暦記念論集」菅原文也先生還暦記念論集

刊行会1995年９月
・谷川章雄「東京都新宿区 南山伏遺跡　警視庁牛込警察署改築に伴う緊急発掘調査報告書」新宿区 南山伏遺跡調査団　1997年３月
・鈴木素行「武田石高遺跡旧石器・縄文・弥生時代編」「(財) ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告」第15集　1998年３月
・谷川章雄・高橋紀子・東山尚貴・宮尾順・荻野美晴「東京都新宿区市谷薬王寺町遺跡Ⅱ　東京都住宅供給公社「トミンハイム薬王寺」建設に伴う緊急発掘調査報告書」新宿区市谷薬王寺町遺跡調査団　1998年10月
・九州近世陶磁学会「九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念」九州近世陶磁学会　2000年２月
・白石真理・窪田恵一・稲田健一「船窪Ⅱ－1999年度船窪遺跡群発掘調査の成果－」「(財) ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告」第20集　2000年３月
・村上和彦「やさしさのまち「桜の郷」整備事業埋蔵文化財調査報告書　石原遺跡」「茨城県教育財団文化財調査報告」第163集　2000年３月
・鈴木素行「武田西高遺跡旧石器・縄文・弥生時代編」「(財) ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告」第21集　2001年３月
・舘野和己　他「駅家と在地社会」独立行政法人 奈良文化財研究所　2004年12月
・川又清明「宮後遺跡」「古代地方官衙周辺における集落の様相－常陸国河内郡を中心として－」茨城県考古学協会シンポジウム実行委員会　2005年２月
・領塚正浩「東北・北海道地方における早期中葉の土器片年」「第18回 縄文セミナー早期中葉の再検討」2005年２月
・金子直行「沈線文系土器群から条痕文系土器群への構造的変換と系統性」「縄文時代 16」縄文時代文化研究会　2005年５月
・近藤恒重「大戸下郷遺跡　主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」「茨城県教育財団文化財調査報告」第216集　2004年３月
・川又清明・茂野和入「宮後遺跡３　やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」「茨城県教育財団文化財調査報告」第241集　2005年３月
・長谷川聡・田中幸夫・小野克敏「大塚遺跡１　やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」「茨城県教育財団文化財調査報告」第242集　2005年３月
・田中幸夫・荒蒔克一郎「綱山遺跡　やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅵ」「茨城県教育財団文化財調査報告」第243集　2005年３月
・井上琢也・小林健太郎「大塚遺跡２・木戸遺跡　主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」「茨城県教育財団文化財調査報告」第258集　2006年３月
・綿引英樹・松本直人「大戸下郷遺跡２　主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」「茨城県教育財団文化財調査報告」第257集　2006年３月
・斎藤弘道「茨城県の縄文土器」「茨城県立歴史館叢書９」茨城県立歴史館　2006年３月
・桜井準也「ガラス瓶の考古学」六一書房　2006年５月
・近江俊秀「古代国家と道路 考古学からの検証」青木書店　2006年６月
・石川義信・小室弘毅「羽黒山遺跡 大戸富士山遺跡　やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅶ」「茨城県教育財団文化財調査報告」第279集　2007年３月
・斎藤弘道「茨城県における縄文時代の異系統土器」「茨城県立歴史館報34」茨城県立歴史館　2007年３月

付　　章

羽黒山遺跡の放射性炭素年代測定について

㈱吉田生物研究所

1．はじめに

茨城県羽黒山遺跡より検出された炭化材２点について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2．試料と方法

測定試料の情報、調整データは表１のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計（コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた14C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、14C年代、暦年代を算出した。

表１　測定試料及び処理

測定番号	品名	試料データ	前処理	測定
1	羽黒山遺跡－18 １区包含層 炉穴１ 炭化材X 18.7.24	試料の種類：炭化材 試料の性状：最外以外部位不明 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N）	NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
2	羽黒山遺跡－18 １区包含層 H269区 No.1666 炭化材 （炉穴１の周辺出土） 18.7.24	試料の種類：炭化材 試料の性状：最外以外部位不明 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N）	NEC製コンパクトAMS・1.5SDH

3．結果

表２に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行った^{14}C年代、^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲、暦年較正に用いた年代値を、図１に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（$\pm 1\sigma$）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

表2　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	δ^{13}C (‰)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲		暦年較正用年代 (yrBP±1σ)
			1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲	
1	−27.06±0.19	1200±20	775AD(11.6%)795AD 800AD(56.6%)870AD	770AD(95.4%)890AD	1200±20
2	−26.34±0.18	2125±20	200BC(45.1%)145BC 140BC(23.1%)110BC	350BC(4.2%)320BC 210BC(91.2%)50BC	2127±22

4．考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

参考文献

Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program, Radiocarbon, 37, 425−430.

Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43, 355−363.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代，3−20.

Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmele, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer. (2004) IntCal04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration, 0 26 cal kyr BP, Radiocarbon, 46, 1029−1058.

羽黒山遺跡出土木製品の樹種調査結果について

（株）吉田生物研究所

1．試料

試料は茨城県羽黒山遺跡から出土した炭化材３点である。

2．観察方法

炭化材の数mm立方の試料をエポキシ樹脂に包埋し研磨して、木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）面の薄片プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3．結果

樹種同定結果（広葉樹２種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1）ブナ科クリ属クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）

（遺物No. 1, 3）

（写真No. 1, 3）

環孔材である。木口では円形ないし楕円形で大体単独の大道管（～500μm）が年輪にそって幅のかなり広い孔圏部を形成している。孔圏外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは２～３個集まって火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり（ストランド）、軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。クリは北海道（西南部）、本州、四国、九州に分布する。

2）ニレ科ケヤキ属ケヤキ（*Zelkova serrata* Makino）

（遺物No. 2）

（写真No. 2）

環孔材である。木口ではおおむね円形で単独の大道管（～270μm）が1列で孔圏部を形成している。孔圏外では急に大きさを減じ、多角形の小道管が多数集まって円形、接線状あるいは斜線状の集団管孔を形成している。軸方向柔細胞は孔圏部では道管を鞘状に取り囲み、さらに接線方向に連続している（イニシアル柔組織）。放射組織は１～数列で多数の筋として見られる。柾目では大道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織は平伏細胞と上下縁辺の方形細胞からなり異性である。方形細胞はしばしば大型のものがある。板目では放射組織は少数の１～３列のものと大部分を占める６～７細胞列のほぼ大きさの一様な紡錘形放射組織がある。紡錘形放射組織の上下端の細胞は、他の部分に比べ大型である。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。

◆参考文献◆
島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）

島地 謙・伊東隆夫「図説木材組織」地球社（1982）

伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所（1999）

北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社（1979）

深澤和三「樹体の解剖」海青社（1997）

奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）

奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）

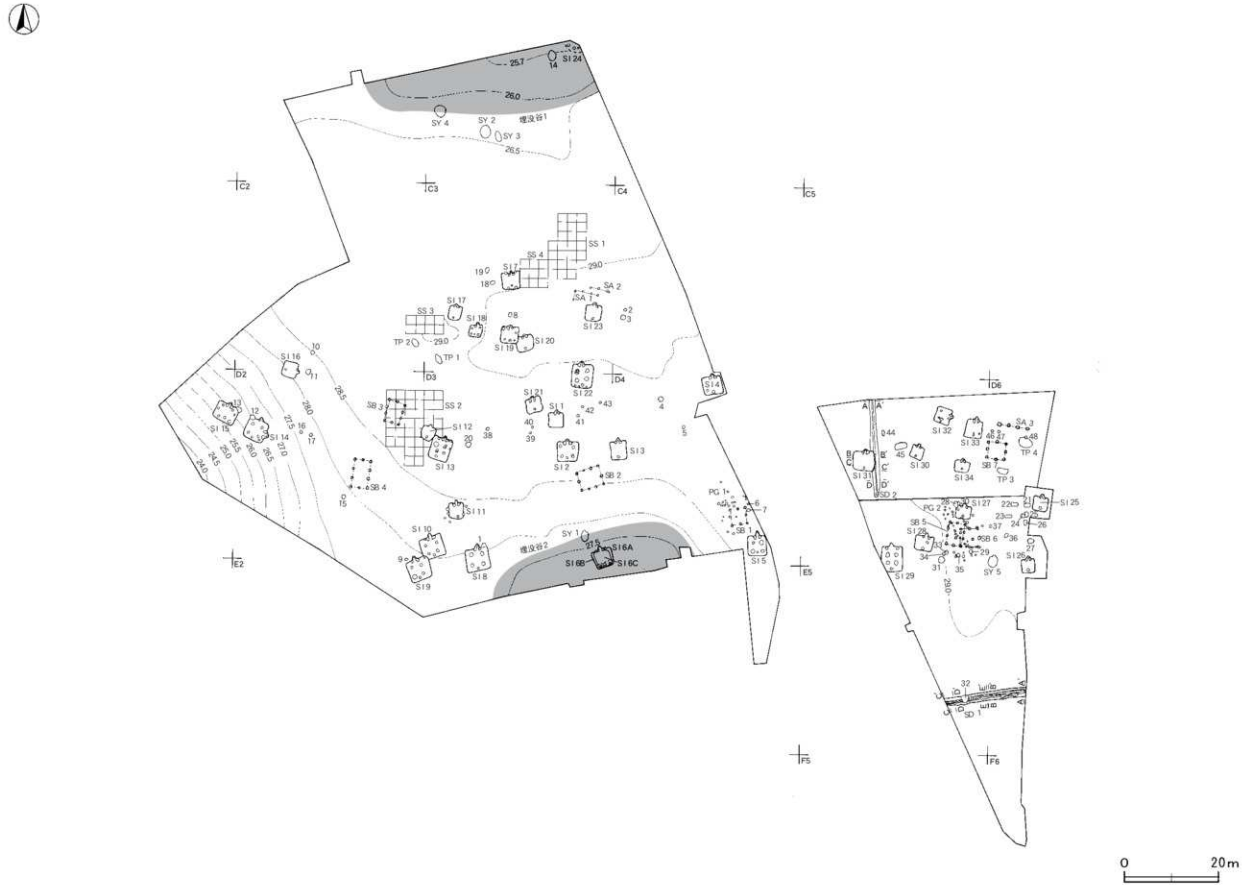
◆使用顕微鏡◆

Nikon

MICROFLEX UFX－DX Type 115

茨城県羽黒山遺跡出土木製品同定表

No.	品名	樹種
1	羽黒山遺跡－18 1区包含層　炉穴1　炭化材X 18. 7. 24	ブナ科クリ属クリ
2	羽黒山遺跡－18 1区包含層　H269区　No. 1666　炭化材（炉穴1の周辺出土）18. 7. 24	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
3	羽黒山遺跡－18 SI－69　炭化材（角材）No.106　18. 7. 24	



第127図　大戸富士山遺跡遺構全体図

写　真　図　版

羽黒山遺跡２
大戸富士山遺跡２

遺物包含層
遺物出土状況

第1号集石遺構
確認状況

第1号集石遺構
1次面

PL 2　羽黒山遺跡

第１号集石遺構
２　次　面

第１号集石遺構
２次面断面

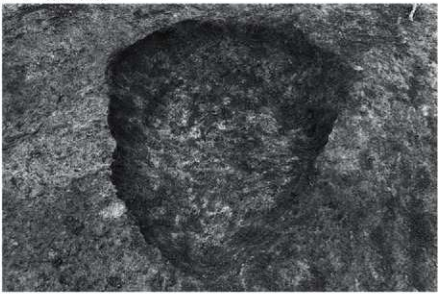
第１号集石遺構
３　次　面

第１号集石遺構
４　次　面

第１号集石遺構
５　次　面

第１号集石遺構
６　次　面

PL 4　羽黒山遺跡



第１号集石遺構
完　掘　状　況

第12号陥し穴
完　掘　状　況

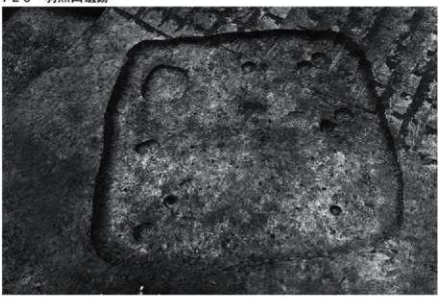
第13号陥し穴
完　掘　状　況

第14号陥し穴
完　掘　状　況

第15号陥し穴
完　掘　状　況

第16号陥し穴
完　掘　状　況

PL 6　羽黒山遺跡



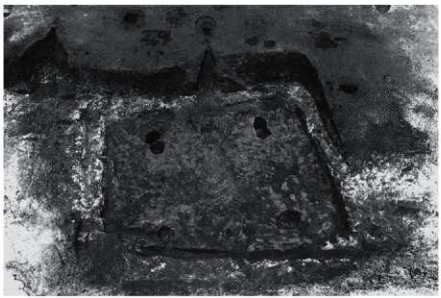
第68号住居跡
完　掘　状　況

第72号住居跡
完　掘　状　況

第62号住居跡
完　掘　状　況

第69号住居跡
完　掘　状　況

第70・71A号住居跡
完　掘　状　況



第71B号住居跡
完　掘　状　況

PL 8　羽黒山遺跡

第71A号住居跡
遺物出土状況

第74号住居跡
完掘状況

第77号住居跡
完掘状況

第78号住居跡
完　掘　状　況

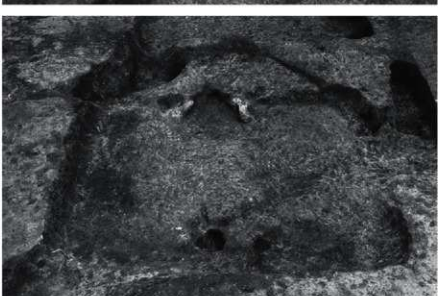
第80・81号住居跡
完　掘　状　況

第82・83号住居跡
完　掘　状　況

PL 10　羽黒山遺跡

第84号住居跡
完　掘　状　況

第85号住居跡
完　掘　状　況



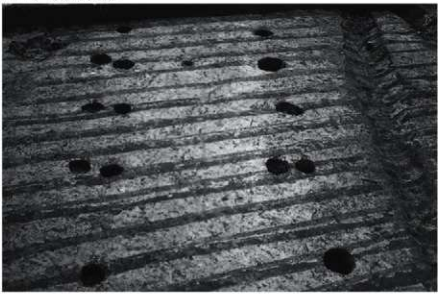
第86号住居跡
完　掘　状　況

第86号住居跡
遺物出土状況

第87・88号住居跡
完掘状況

第20号掘立柱建物跡
完掘状況

PL 12　羽黒山遺跡



第18・19号掘立柱建物跡
完　掘　状　況

第 6 号 溝 跡
完　掘　状　況

第 14 号 溝 跡
完　掘　状　況

第 15 号 溝 跡
完 掘 状 況

第 16 号 溝 跡
完 掘 状 況

第 17 号 溝 跡
完 掘 状 況

PL 14　羽黒山遺跡

第 19 号 溝 跡
完 掘 状 況

第 301 号 土 坑
完 掘 状 況

第 302 号 土 坑
完 掘 状 況

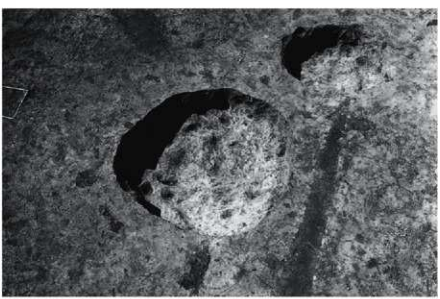
第２号井戸跡
完　掘　状　況

第３号井戸跡
完　掘　状　況

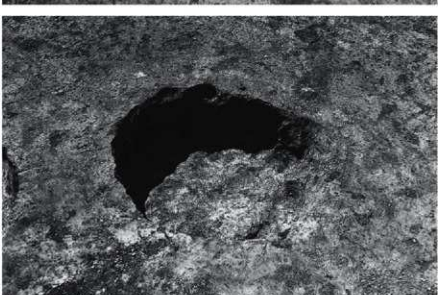
第２号道路跡
確　認　状　況

PL 16　羽黒山遺跡

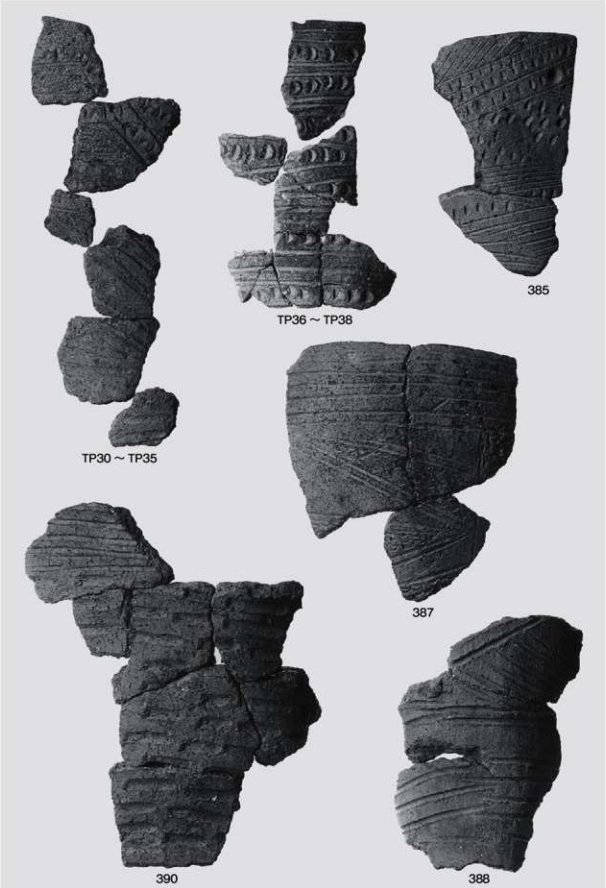
第 18 号 溝 跡
完 掘 状 況



第 317 号 土 坑
完 掘 状 況

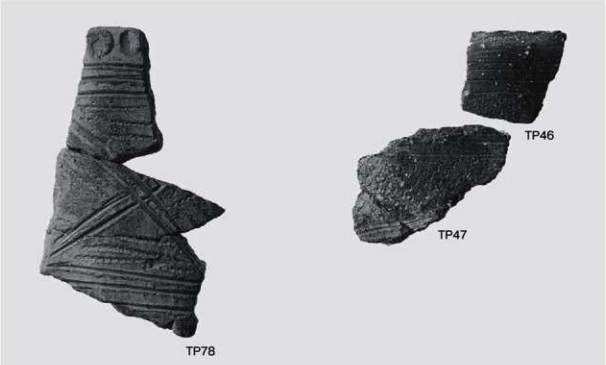


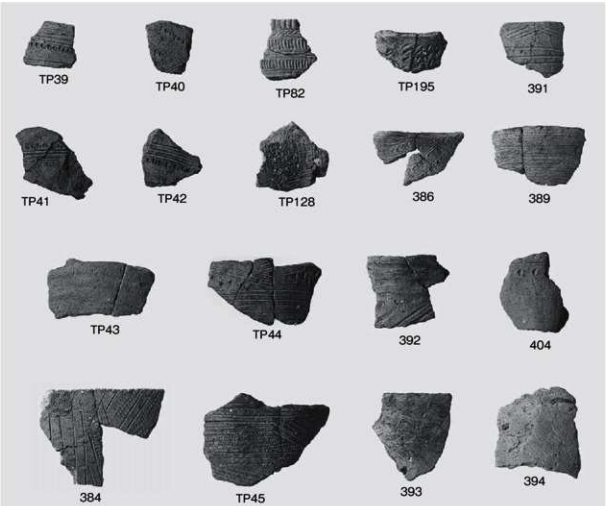
第 320 号 土 坑
完 掘 状 況



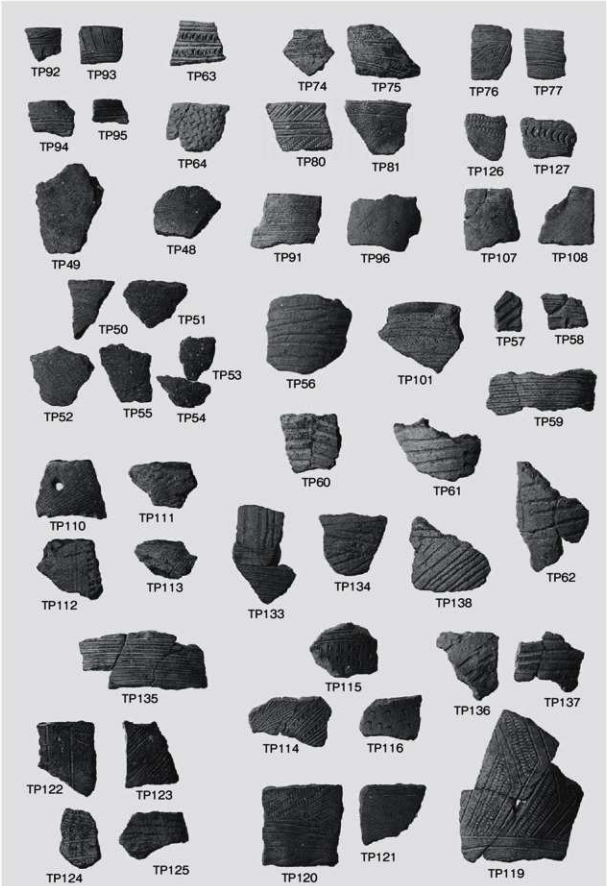
遺物包含層出土土器

PL 18　羽黒山遺跡



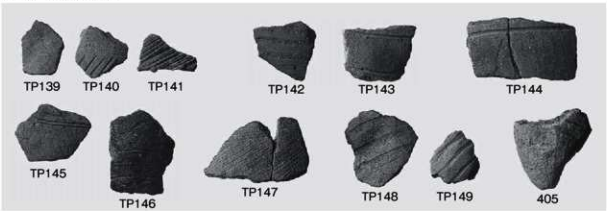


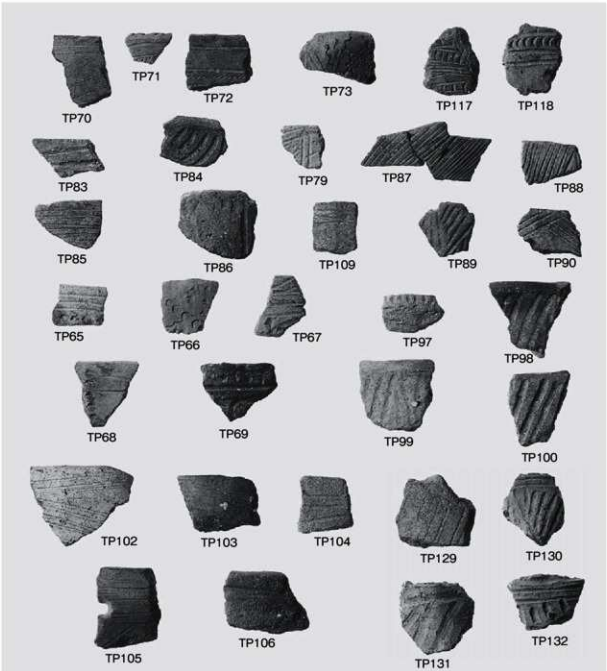
遺物包含層出土土器


TP92
TP93
TP63
TP74
TP75
TP76
TP77
TP94
TP95
TP64
TP80
TP81
TP126
TP127
TP49
TP48
TP91
TP96
TP107
TP108
TP50
TP51
TP57
TP58
TP53
TP56
TP101
TP52
TP55
TP54
TP59
TP60
TP61
TP110
TP111
TP62
TP112
TP113
TP133
TP134
TP138
TP135
TP115
TP136
TP137
TP114
TP116
TP122
TP123
TP124
TP125
TP120
TP121
TP119

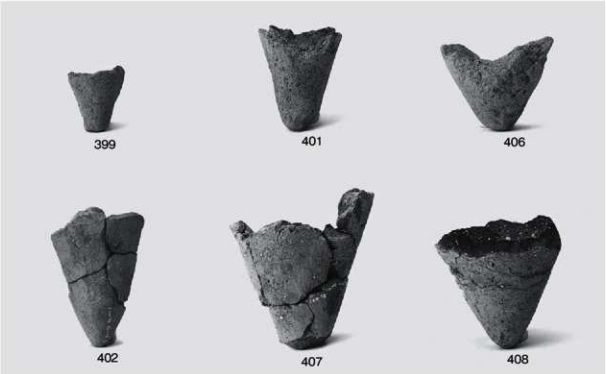
遺物包含層出土土器

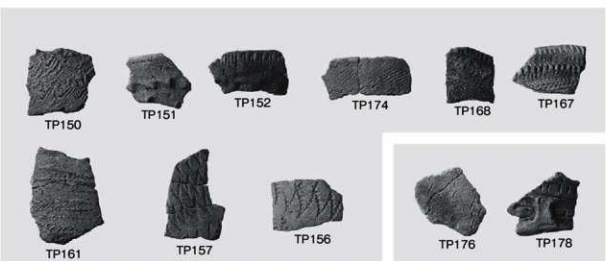
PL 20　羽黒山遺跡

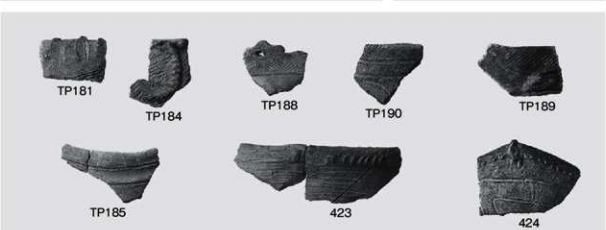




遺物包含層出土土器


399
401
406
402
407
408


TP150
TP151
TP152
TP174
TP168
TP167
TP161
TP157
TP156
TP176
TP178


TP181
TP184
TP188
TP190
TP189
TP185
423
424

遺物包含層出土土器

SI75-444

SI69-427

SD14-484

遺構外-496

SI74-440

SI82-462

SI71A-434

SI77-450

SI74-441

SI72-438

SD6-483

SD19-490

第69・71A・72・74・75・77・82号住居跡，第６・14・19号溝跡，遺構外出土土器

SI82-464

SI71A-436

SI75-445

SI69-430

SI83-465

SI77-448

SI74-440

第69・71A・74・75・77・82・83号住居跡出土土器

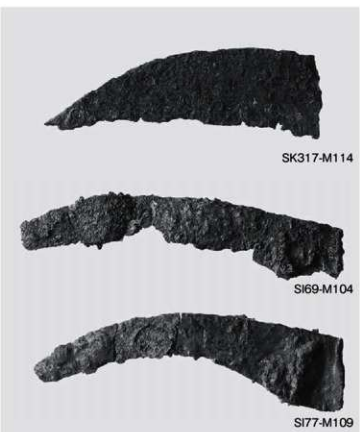
SE2-492

SE2-491

SY2-炭焼窯部材

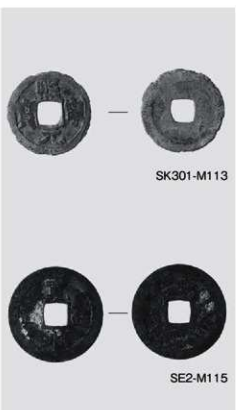
SI70-M106

SI74-M108


SK317-M114

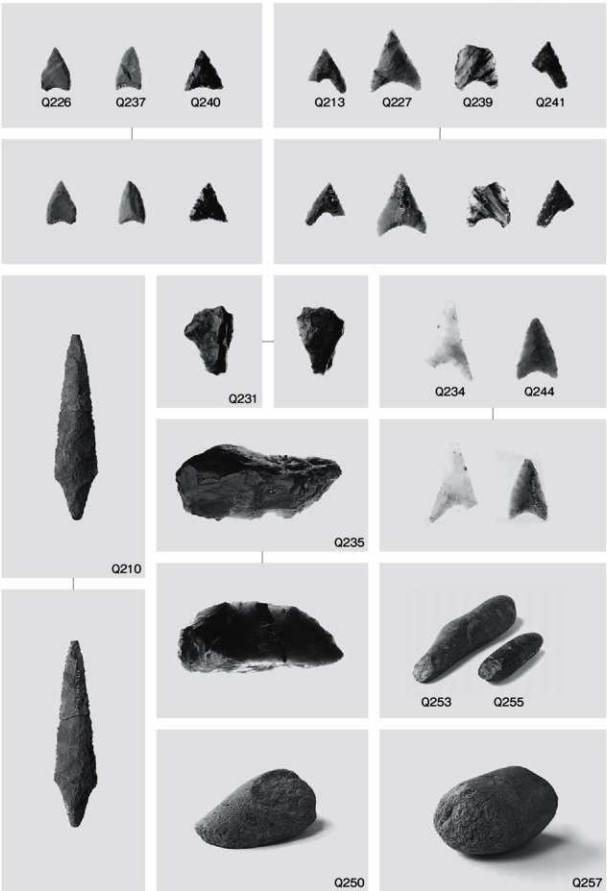
SI69-M104

SI77-M109


SK301-M113

SE2-M115

第69・70・74・77号住居跡，第２号井戸跡，第301・317号土坑，第２号炭焼窯跡出土遺物


Q226
Q237
Q240
Q213
Q227
Q239
Q241
Q231
Q234
Q244
Q210
Q235
Q253
Q255
Q250
Q257

遺物包含層出土石器

PL 26　羽黒山遺跡

遺物包含層，H区，遺構外出土石器

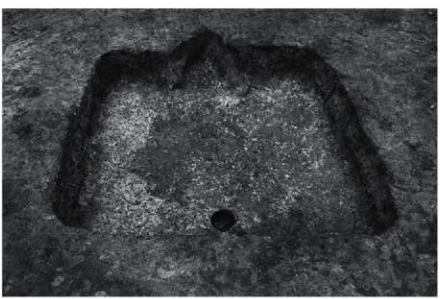
大戸富士山遺跡
完掘状況（東から）

大戸富士山遺跡
完掘状況（南から）

第３号陥し穴
完掘状況

PL 28　大戸富士山遺跡

第 4 号陥し穴
完　掘　状　況



第 30 号住居跡
完　掘　状　況

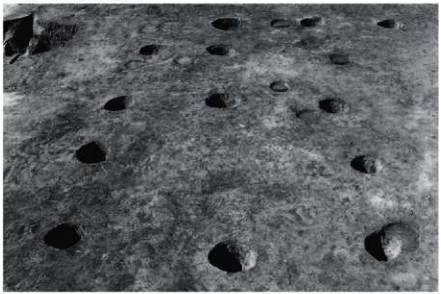
第 31 号住居跡
完　掘　状　況

第31号住居跡
遺物出土状況

第33号住居跡
完掘状況

第34号住居跡
完掘状況

PL 30　大戸富士山遺跡



第７号掘立柱建物跡
完　掘　状　況

第　２　号　溝　跡
完　掘　状　況

第　３　号　柵　跡
完　掘　状　況

SI32-169

SI31-164

SI31-165

遺構外-178

SI34-177

SI31-166

SI31-179

SI32-M18

第31・32・34号住居跡，遺構外出土遺物

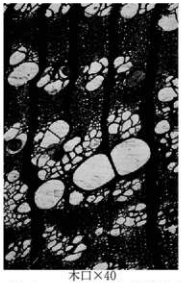
PL 32　大戸富士山遺跡

木口×40

柾目×40

板目×40

No-1　　ブナ科クリ属クリ


木口×40

柾目×40

板目×40

No-2　　ニレ科ケヤキ属ケヤキ

木口×40

柾目×40

板目×40

No-3　　ブナ科クリ属クリ

茨城県教育財団文化財調査報告第293集

羽 黒 山 遺 跡２

大戸富士山遺跡２

やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う
埋 蔵 文 化 財 報 告 書 Ⅷ

平成20(2008)年３月19日　印刷
平成20(2008)年３月24日　発行

発行　財団法人　茨城県教育財団
〒310-0911　水戸市見和１丁目356番地の２
茨城県水戸生涯学習センター分館内
ＴＥＬ　029－225－6587

印刷　株式会社　イセブ
〒305-0005　茨城県つくば市天久保２丁目11-20
ＴＥＬ　029－851－2515

付図　羽黒山遺跡遺構全体図
茨城県教育財団文化財調査報告第293集